

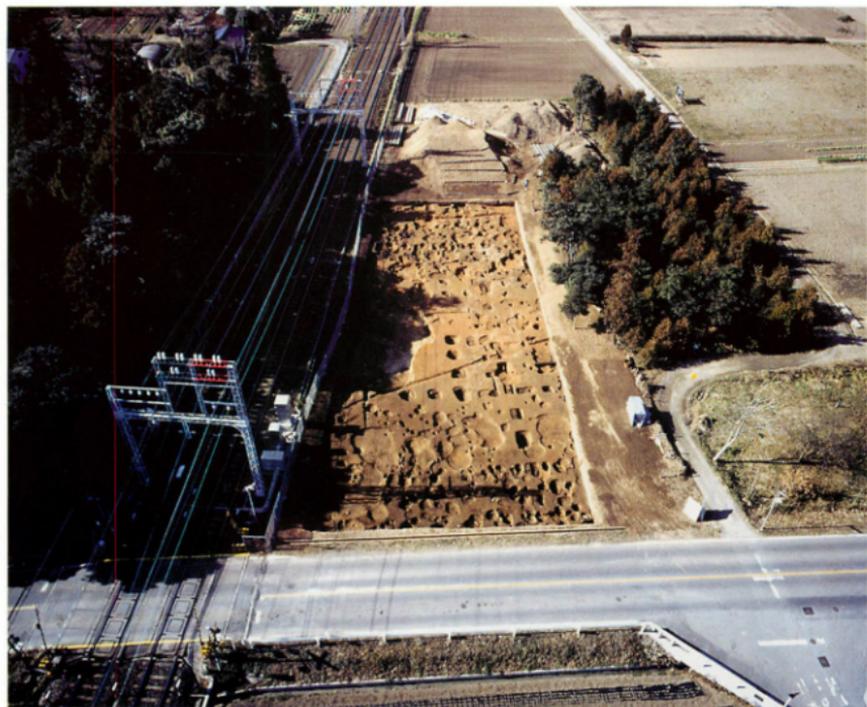
# 史跡 齋宮跡

平成8年度発掘調査概報



1997

齋宮歴史博物館



# 史跡斎宮跡



第1図 平成8年度発掘調査位置図 (1 : 10,000)

## はじめに

齋宮跡は、律令制下において太政官と並ぶ神祇官のもとに設置された齋王の宮殿及び齋宮寮の役所の跡であります。齋宮跡の保護顕彰は江戸時代に遡りますが、昭和45年の団地造成計画に端を発した発掘調査により、宮殿の解明と保存対策が問題となりました。地元との協議を経て、昭和54年3月に国の史跡の指定を受け、発掘調査をはじめ、土地の公有化、整備事業等の保護活用事業を国の補助金等を受け、三重県及び明和町で積極的に取り組んでいます。

発掘調査は、既に四半世紀を過ぎ、史跡の東部において藤原京、平城京、長岡京、平安京の都城制に通じる方格地割が確認されています。近年は、その中枢部の調査を精力的に実施しており、今年度調査を行った第114次調査では、これまでの調査で明らかにされてきた方形区画内を取り囲む平安時代初期の柵列の全容を明らかにするとともに、この区画では、その前身となる奈良時代後期の大型掘立柱建物、あるいは後続する平安時代後期の規則的建物配置をもつ建物群が造営されていることが確認されました。

また、東西7列×南北4列の方格地割北西隅部については、史跡東部とは趣きを異にする方形区画が確認され、方格地割について再検討の必要があるなどの課題が明らかになってきています。

一方、整備・活用の面では昨年度策定した『史跡齋宮跡「遺構の活用・演出的整備ゾーン」整備基本計画』に基づき、近鉄齋宮駅北側の上園・宮ノ前地区において『齋宮跡古代ロマン再生事業』として、文化庁の史跡等活用特別事業の採択を受け、整備事業に着手しました。今年度は、事前の発掘調査及び保存対策調査と方格地割外周部の道路・溝の復元及びシダレヤナギ・マツによる植栽を行いました。

この度刊行させていただく本概報は、平成8年度に実施いたしました齋宮跡の計画調査及び整備事業に伴う事前調査成果の概要をまとめたものであり、これまでの膨大な調査成果の蓄積と相まって齋宮跡の実態解明にとって貴重な資料となるものと信じております。

齋宮跡の保存と調査研究・整備にあたりましては、文化庁をはじめ齋宮跡調査研究指導委員会の先生方の御指導や地元明和町をはじめとする関係機関・各位の御協力の賜物と感謝申し上げます。

平成9年3月

齋宮歴史博物館

館長 奥村敏夫

# 例 言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館が平成8年度に国庫補助金の交付を受けて実施した「史跡斎宮跡発掘調査」及び「史跡等活用特別事業」に伴う事前調査の概要をまとめたものである。
- 2 明和町教育委員会が、国庫補助金の交付を受け調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の報告書は、別途明和町教育委員会が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては、国土調査法による第VI座標系を基準とし、方位は座標北を用いた。
- 4 遺構の時期区分は、「斎宮の土師器（三重県斎宮跡調査事務所年報1984）」による。
- 5 遺構表示記号は次の通りである。  
SB；建物 SA；櫓列 SE；井戸 SK；土坑 SD；溝 SF；道路 SX；その他
- 6 方格地割における各区画の名称は第29図に示した。
- 7 特に標示がない限り遺物実測図は実物の4分の1、遺物写真は約3分の1である。
- 8 用語は、「墓に関わる穴」には廣、「その他の穴」には坑を用いた。また、「わん」は椀、「つき」は杯を用いた。
- 9 第114次調査の遺構実測は、写真測量によるデジタル図化測量を実施した。
- 10 斎宮跡の調査全般については、次の先生方の指導を得た。

京都橘女子大学学長	門脇 禎二
千葉大学教授	北原 理雄
聖心女子大学助教授	佐々木恵介
前奈良国立文化財研究所 所長	鈴木 嘉吉
財大阪文化財調査研究センター理事長	坪井 清足
聖徳学園岐阜教育大学教授	所 京子
愛知県陶磁資料館総長	楢崎 彰一
三重大学教授	八賀 晋
皇学館大学教授	渡辺 寛
- 11 現地での発掘調査及び本概報の編集・執筆は斎宮歴史博物館調査研究課の駒田利治、野原宏司、上村安生、赤岩 操があたり、田所美里、田中里佳がこれを補助した。また、遺物整理には島村紀久子、角谷和代、奥田康子、鈴木美智子の協力を得た他、熊崎 司（京都府立大学々生）の参加を得た。

## 目 次

I 調査の経過と概要	1
II 第113次調査	3
III 第114次調査	13
IV 第115次調査	38
V 第116次調査	48
付圖 花粉・植物建群体分析	71
発掘調査報告抄録	110

## 表・挿図目次

[表]	1 平成8年度発掘調査一覧	2
	2 第113次調査時期別遺構分類表	4
	3 第114次調査時期別遺構分類表	14
	4 第115-1次調査時期別遺構分類表	39
	5 第115-2次調査時期別遺構分類表	44
	6 第116-1次調査時期別遺構分類表	51
	7 第116-2次調査時期別遺構分類表	56
	8 第116-3次調査時期別遺構分類表	59
	9 第116-4次調査時期別遺構分類表	61
	10 第116-5次調査時期別遺構分類表	64
	11 方格地割北西隅区画 西辺外周道路及び側溝一覧	67
	12 方格地割北西隅区画 北辺外周道路及び側溝一覧	68
	13 掘立柱建物・楨列一覧表	91
	14 竪穴住居一覧表	92
	15 遺物(土器)観察表	93
	16 斎宮跡発掘調査次数一覧表	104
[図]	1 平成8年度発掘調査区位置図(1:10,000)	1
	2 第113次調査 調査区位置図(1:2,000)	3
	3 〃 遺構実測図(1:200)	5
	4 〃 SE7600土層断面図(1:50)	7
	5 〃 遺物実測図(1:4)	11
	6 第114次調査 調査区位置図(1:2,000)	13
	7 〃 遺構実測図・断面図(1:200)	15
	8 〃 SA7000柱掘形断面図(1:40)	17
	9 〃 遺物実測図(1:4)	25
	10 〃 遺物実測図(1:4)	27
	11 〃 遺物実測図(1:4)	29
	12 〃 相列SA7000以前の時期・SA7000の時期の遺構配置図(1:2,000)	33
	13 第115次調査 調査区位置図(1:2,000)	38
	14 〃 遺構実測図(1:200)	41
	15 第115-1次調査 遺物実測図(1:4)	43
	16 第115-2次調査 遺物実測図(1:4)	46
	17 第116次調査 調査区位置図(1:2,000)	48
	18 第116-1次調査 遺構実測図(1:200)	49
	19 〃 遺物実測図(1:4)	54
	20 第116-2次調査 遺構実測図(1:200)	57
	21 〃 遺物実測図(1:4)	58
	22 第116-3次調査 遺構・遺物実測図(1:200・1:4)	60
	23 第116-4次調査 遺構実測図(1:200)	62
	24 〃 遺物実測図(1:4)	63
	25 第116-5次調査 遺構実測図(1:200)	65
	26 〃 遺物実測図(1:4)	66
	27 第116次調査 周辺遺構図(1:1,500)	69
	28 斎宮跡地区表示	108
	29 斎宮跡方格地割区画名称	109

## 写 真 図 版

巻 頭	第114次調査区遠景 (東から)		
P L 1	上: 第113次調査区全景 (北から)	下: 調査区全景 (南から)	
P L 2	上: SB7601・7602 (東から)	下: SB7603・7604 (東から)	
P L 3	上: SB7604・7605・7606 (南から)	下: SB7607・7608 (南から)	
P L 4	上: SE7600 (北から)	下: SE7600 (西から)	
P L 5	上: SD7610・7611・7612 (南から)	下: SD0181 (西から)	
P L 6	上: 第114次調査区全景 (北上空から)	下: 調査区全景 (西上空から)	
P L 7	上: 調査区中央付近 (北上空から)	下: 調査区西付近 (北上空から)	
P L 8	上: 調査区全景 (西から)	下: SA7000・SB7658~7660 (西から)	
P L 9	上: SB7315・7644・7645・7649 (東から)	下: SB7646~7648 (北から)	
P L 10	上: SB7310・7653 (東から)	下: SB7658~7660 (北から)	
P L 11	上: SB7654~7656 (東から)	下: SB7656・SK7650 (北から)	
P L 12	上: SB7641など調査区西端独立建物群 (東から)	下: SB0575・7677~7681 (北から)	
P L 13	上: SK7650 (南から)	下: SK7651・7652 (西から)	
P L 14	上: SK7664~7669・7676 (西から)	下: SB7682・7683・SK7670~7672・7684 (北から)	
P L 15	上: SB7648柱掘形土器出土状況 (北上から)	下: SK7632土器出土状況 (北から)	
P L 16	上: SK7651土器出土状況 (南から)	下: SK7685土器出土状況 (東から)	
P L 17	上: SK7666土器出土状況 (北から)	下: SK7670土器出土状況 (南から)	
P L 18	上: SA7000柱掘形半載状況 (H21-P4 北から)	下: SA7000柱掘形半載状況 (H21-P24 北から)	
P L 19	上: SA7000柱掘形半載状況 (H26-P4 北から)	下: SA7000柱掘形半載状況 (H28-P22 北から)	
P L 20	上: 第115次調査Kトレンチ 全景 (東から)	下: Kトレンチ SB7719・7720 (北から)	
P L 21	上: Kトレンチ SD7470 (西から)	下: Lトレンチ 全景 (東から)	
P L 22	上: Lトレンチ SB7465 (西から)	下: Lトレンチ SB7730 (南から)	
P L 23	上: 第116次調査Mトレンチ 全景 (北から)	下: Mトレンチ SB0158・7745 (南から)	
P L 24	上: Mトレンチ SB7755 (西から)	下: Mトレンチ SK7750土器出土状況 (東から)	
P L 25	上: Mトレンチ SD7761・SF7760・SD7762 (東から)	下: Mトレンチ SD7762・SF7760・SD7761 (北東から)	
P L 26	上: Nトレンチ 全景 (北から)	下: Nトレンチ SK7770下層土器出土状況 (北から)	
P L 27	上: Nトレンチ SK7770下層土器出土状況・SD7775 (北から)	下: Nトレンチ SD7775南壁面 (北から)	
P L 28	上: Oトレンチ 全景 (北から)	下: Oトレンチ SD7776~7779 (西から)	
P L 29	上: Oトレンチ SK7786 (東から)	下: Pトレンチ 全景 (南から)	
P L 30	上: Pトレンチ SB7790 (北から)	下: Pトレンチ SE7794 (西から)	
P L 31	上: Pトレンチ SK7795土器出土状況 (南から)	下: Pトレンチ SB7790・SK7795 (西から)	
P L 32	上: Pトレンチ SD7791~7793 (東から)	下: Pトレンチ SD7791~7793 (西から)	
P L 33	上: Qトレンチ 全景 (南から)	下: Qトレンチ SD7804 (西から)	
P L 34	上: Qトレンチ SD7805・7806 (西から)	下: Qトレンチ SD7800・7792・7793 (西から)	
P L 35	第113次調査出土遺物		
P L 36	第113次調査出土遺物		
P L 37	第114次調査出土遺物		
P L 38	第114次調査出土遺物		
P L 39	第114次調査出土遺物		
P L 40	第114次調査出土遺物		
P L 41	第114次調査出土遺物		
P L 42	第115次調査出土遺物		
P L 43	第116次調査出土遺物		
P L 44	第116次調査出土遺物		

## 付 編 図・表・写真

第1表	第113-1次調査分析試料
第2表	第115次調査分析試料
第3表	第113-1・115次調査花粉分析結果
第4表	第114次調査分析試料
第5表	第114次調査植物珪酸体分析結果
第6表	第116次調査分析試料
第7表	第116次調査花粉分析結果 (1)
第8表	第116次調査花粉分析結果 (2)
第9表	第116次調査植物珪酸体分析結果
第10表	当時の植生

第1図	第115-2次調査T-13区南壁セクションの 、 花粉化石群集
第2図	第114次調査植物珪酸体組成
第3図	第116次調査花粉化石組成
第4図	第116次調査植物珪酸体組成と組織片の産状
図版1	第113-1・115次調査花粉化石
図版2	第114次調査花粉化石プレパレート内の状況写真 ・植物珪酸体
図版3	第116次調査花粉化石
図版4	第116次調査植物珪酸体

# I 調査の経過と概要

## 経過

古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に始まる齋宮跡の発掘調査は、文化庁の補助事業として、同年から着手した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に国の史跡に指定され、同年以降史跡解明の計画調査を継続して実施している。

これまでの発掘調査成果の蓄積から平安時代初期を中心に展開を想定している方格地割において、方形区画内をめぐる櫓列や大型掘立柱建物の規則的な配置、祭祀を想起させる土坑の存在等から、当該期齋宮寮の中枢部の可能性が強い西加座・牛業・鍛冶山地区における構造解明に重点をおいて調査を進めている。

また、史跡指定以降、管理団体である明和町が文化庁及び県の補助を得て実施している史跡の買い上げの進捗により、公有地の管理と史跡の活用が課題となり、平成5年度には、県単事業として『史跡齋宮跡 整備基本構想検討調査報告書』を刊行し、平成8年3月に『史跡齋宮跡 整備基本構想』を三重県及び明和町教育委員会で関係機関との協議を経て公にした。整備基本構想に基づき、平成7年度には、文化庁の指導を得ながら『史跡齋宮跡「遺構の活用・演出的整備ゾーン」整備基本計画』を策定し、国の補助事業として採択される準備を行った。

整備計画地は、齋宮駅北側の方格地割北西隅部に想定される地区であり、公有化が最も進捗した地区であるとともに、齋宮跡及び齋宮歴史博物館への窓口の一つであり、また、近代の瓦粘土採掘によって遺構の保存状況が必ずしも良くない地区であることにより『史跡齋宮跡 整備基本構想』の「遺構の活用・演出的整備ゾーン」として、137.1haの広大な広がりをもつ齋宮跡の理解を体験的に深めるため1/10模型を核とした体験学習を実施できる整備ゾーンとして位置づけた。

## 第113次調査

この上園・宮ノ前地区でのこれまでの調査を補完し、方格地割西辺の区画状況を確認するため、5月7日から8月31日（第113-1次）及び9月11日～10月23日（第113-2次）の二期に分けて調査を行った。調査の結果、南北に走る町道齋宮北12号線のほぼ東西両側において、平行する2条の浅い溝を確認した。溝の埋没時期は鎌倉時代前半であり、東西方向のS D0181との重複関係から溝の開削時期は、平安時代後期を遡らないことが判明した。

調査期間中の6月1日には、恒例となっている「齋王まつり」に協賛して発掘調査現地的一般公開を行い、458名の方に発掘調査の方法等現場をみていただいた。

## 第1回調査研究指導委員会

第113-1次調査が完了した6月28日には、齋宮跡調査研究指導委員会を開催して、第113-1次及び上園・宮ノ前整備ゾーンにかかる調査について指導をうけるとともに、今年度以降の整備事業について助言を得た。

## 第115次調査

整備計画地内における一辺約120mの方形区画の存在については、平成7年度までの調査で、史跡東部とは異なり区画施設の存在については、否定的であった。このため平成7年度の南北方向のトレンチに直交する2本のトレンチを設定し区画施設の有無を確認するための第115次調査を、5月29日～7月24日まで行った。調査の結果は、想定していたようにこの区域においては、120mを基準とする区画施設は存在しないことが明白となった。

**第2回調査研究指導委員会** 第116次の事前調査が開始された直後の9月26日に、整備を中心に調査研究指導委員会を開催し、1/10模型の建物模型にかかる建物構造や復元材質について、指導・助言をいただいた。

**第116次調査** 整備の実施計画を策定するため、区画外郭の状況について、第116次として北辺でOトレンチ（3次）及びPトレンチ（4次）、西辺でNトレンチ（2次）、北西隅部でMトレンチ（1次）の4か所の調査区を設定し、8月5日から調査に着手した。調査の進展に伴い、北辺区画施設の再確認を行うため、4次調査の西隣で農道の下を中心としたQトレンチ（5次）追加して実施した。調査は、11月20日に完了した。

調査の結果、これまでの想定と異なり当該区画においては、現在の農道・町道とはほぼ同じ線形で両側に側溝が並走する遺構が確認された。この結果、方格地割北西隅部の区画は、平安時代中期以降に道路と溝に区画されたものであったことが明らかとなった。ただ、奈良時代後期における史跡東部の方格地割設置時での区画の有無あるいはその状況については、今後課題を残した。

**第114次調査** 平安時代初期を中心とする斎宮跡の中核部として機能した牛業・鍛冶山地区については、方形区画内を区画する柵列を確認するとともに、柵列が設置される以前にも大型掘立柱建物の存在が確認され、また柵列廃絶後の平安時代後期についても規則的な建物配置が継続して認められることが確認された。

**第3回調査研究指導委員会** 第114次調査が最終段階に入った12月5日には、現地指導を含めた調査研究指導委員会を開催し、建物等について具体的な指導を得た。また、今年度の整備の最終案についても指導を得た。

**現状変更調査** その他、史跡現状変更に伴い管理団体である地元明和町教育委員会が調査主体となり、斎宮歴史博物館が担当している事前の緊急発掘調査は、本年度は6件実施し、工事立会い調査を38件実施した。第117-5次調査では、史跡の北部で認められる鎌倉時代の大溝を確認した。（駒田 利治）

調査次数	地区名	面積	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	区分
113	6ACI	902	H8. 5. 7～H8.10.23	斎宮字広額3359他	明和町	計画調査	1
114	6ABQ-EF	987	H8.10.25～H9. 1.10	斎宮字柳原2779-2	明和町	計画調査	1
115	6ADK-DL	612	H8. 5.29～H8. 7.24	斎宮字宮ノ前3115他	明和町	計画調査	1
116	6ADG	765	H8. 8. 5～H8.11.20	斎宮字上園・宮ノ前	明和町	事前調査	1
調査面積	合計	3,266					

調査次数	地区名	面積	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	区分
117-1	6AEF	80	H8. 9. 6～H8.10. 3	斎宮字楽殿2894-4	中川聡樹	個人住宅	3
117-2	6ADF	54	H8.10.21～H8.10.31	斎宮字3155他	伊藤廉也	個人住宅	3
117-3	6ABJ	48	H8.12.20～H9. 1. 9	竹川字中垣内地内	明和町	道路改修	2
117-4	6ADP	48	H9. 1.27～H9. 1.31	斎宮字牛業地内	明和町	水路改修	3
117-5	6AFC-M	465	H9. 2. 5～H9. 3.17	斎宮字北野3553-1他	射和二郎	宅建建設	3
117-6	6ACM-B	14	H9. 3. 5～H9. 3. 7	斎宮字東裏266-6	高木若素	個人車庫	3
調査面積	合計	709					

第1表 平成8年度発掘調査一覧（期間は、表土除去から実測完了までとした。）

## Ⅱ 第113次調査

(6ACI 広頭地区)

### 1 はじめに

#### 経過

平成8年度第1回目の計画調査は、今年度から開始された斎宮駅北側一帯約6.5haを対象とした史跡整備のために、上園芝生公園西辺部を南北に通過する町道斎宮北12号線を含む広頭地区で実施した。

史跡東部では、奈良時代後期に造営が開始された方格地制（一辺約120mを基準とした方形区画で構成される）が東西5列、南北4列想定されたが、平成4年度第96-5次調査で八脚門と櫓列（板塀）を発見し、さらに西側へ2列延長し、東西7列、南北4列が想定されることになった。方格地制の方位は北に対し4°西へ振っており、地割は道路と側溝で区画され、一辺約120mを基準とする方形区画で構成される。（第29図 斎宮跡方格地割区画名称参照）

今回の整備計画地となる上園・宮ノ前地区は、方格地制北西4区画分に相当するが、外周施設や方形に区画する道路及び側溝は不明瞭な点が多く、しかもこの地域では調査事例が少ないため、確認調査の必要性が指摘されてきた。

方格地制の西限となる外周施設は区画道路及び区画溝が想定されるが、今までの調査で考えられる外周施設では南北溝1条がある。この溝の推定線は、方格地制南西



第2図 第113次調査 調査区位置図（1：2,000）

隅の木葉山西ブロックで八脚門に取り付く西辺欄列 S A5110 (第70-3次調査) の西側 6.3m (21尺) で平行する南北溝を N 4° W の方向で北へ直線的に延長したものである。北隣の内山西ブロックでは S D0226・0227 (第8-8次調査) が相当するものと考えられるが、それ以北の上園北・南ブロックでは該当する溝は確認されていない。また、この溝を両側に溝を伴う道路の東側溝とした場合、西側溝に相当するものは検出されていない。さらに、方格地割北西隅部で、道路 S F6983 (第101次調査) と接続するならば、溝の推定線は北に対して東寄りとなるため、方格地割中枢部の区画道路に比べて幅の狭い道路が予想される。

## 目 的

今回の調査はこれまでの調査成果を踏まえ、方格地割西限の実態を解明する目的で、上園北・南ブロック西辺部に調査区を設定した。西辺と考える南北溝の推定線は、現町道と重複することが予想されるため迂回路が必要となり、2次に分けて調査を実施した。本調査区東辺には史跡範囲確認のため、昭和49年度に実施した第8-4次調査区 (I トレンチ) が幅約4mで南北に走っており、平安時代後期～末期の井戸・土坑・溝等が検出されている。

## 期間・面積

調査期間として、第1次は東西14m、南北51mの範囲を対象に平成8年5月7日から8月31日にかけて行った。第2次は東西11m、南北16mの範囲で東側へ拡張し、9月11日から10月23日まで実施した。最終的な調査面積としては902m<sup>2</sup>である。

## 現 況

調査区の現況は、標高11.3m～11.8mで全体的には北が高い公有地と砂利敷の道路である。基本的層序としては、上層から表土及び床土 (にぶい黄橙色砂質土)、遺物包含層 (黒褐色粘質土)、地山 (黄褐色粘土及び砂礫土) となる。地山面までの深さは40cm～50cmだが、標高では北端11.3m～11.4m、南端10.7m～10.8mと南が低くなる。また、西端から東端に向けて緩やかに傾斜しており、その比高差は約40cmである。

## 2 遺構

奈良時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物10棟、井戸3基、土坑6基、溝13条等を検出したが、大半は平安時代後期～末期のものである。しかし、各遺構からの出土遺物が微量かつ小片であるため、詳細な時期を決定しにくい状況である。

なお、第8-4次調査で確認された遺構としては、S B0177、S E0178、S K0179、S D0180、S D0181、S D0182、S D0183がある。

		遺 構 の 種 別			
		S B	S E	S K	S D
奈良	後 期			7590 7591 7592 7593	
	後 I 期				0181
平安	後 II 期	7601 7602 7603	7600		
	末 期	7604 7605 7606 0177	7595		0180 7615
鎌倉	前 期	7607 7608 7609	0178	7594 0179	7610 7611
時 期 不 明					0182 0183 7612 7613 7614 7616 7617 7618

第2表 第113次調査 時期別遺構分類表



### (1) 奈良時代後期の遺構

- S K 7590 調査区南部で検出した概ね円形的大型土坑である。径約4.5m、深さは20cm前後と浅い。黒褐色土の埋土から土師器杯・皿・甕片、須恵器杯片が出土した。
- S K 7591 S K 7590の北東部で重複し、新旧関係では新しい楕円形土坑で、径約2.4m、深さ約15cmである。土師器杯・甕の破片が出土したのみである。
- S K 7592 後出するS E 7600やS D 0180と重複するため、全体規模は明らかでないが、平面が長楕円形の径約3m、深さ20cmの土坑と考えられる。出土遺物は少ないが、奈良時代後期の土師器杯・甕の破片が出土する。
- S K 7593 調査区北部で検出した概ね円形の土坑で、径1.5m～1.7m、深さ10cm～15cmである。暗茶褐色土の埋土からは完形で近い土師器皿・杯・甕片が出土した。

### (2) 平安時代後Ⅰ期の遺構

- S D 0181 調査区中央部で検出した東西溝で、幅約2.0m、深さ20cm～40cm、断面形は浅い逆台形である。溝方向は東西正方位に対して南側へやや偏ったE 5° Sである。溝底の標高は西端で約11.0m、東端で約10.5mとなり、西から東へ傾流する。黒褐色粘質土の埋土からは土師器甕の破片が多く出土したが、杯・皿片は極少量である。

### (3) 平安時代後Ⅱ期の遺構

- S B 7601 調査区北辺で検出した東西棟の3間×2間と考える掘立柱建物である。桁行の柱間は不揃いで南西隅から2.2m、2.1m、2.2mであるが、梁行の柱間は2.1m等間で、棟方向はE 13° Sである。確認できた柱掘形は一辺50cm～60cmの方形で深さは60cm前後、柱痕跡は径約20cmである。柱穴底面の標高は10.7m前後でほぼ一定である。柱穴埋土からは土師器甕片が比較的多く出土するが、土師器杯・皿片はわずかである。
- S B 7602 南北棟の3間×2間で柱穴の切り合いからS B 7601より新しい。柱間は、桁行2.1m等間、梁行も2.1m等間で棟方向はN 13° Eである。柱掘形は一辺40cm～60cmの方形、深さは約20cmと浅く、柱痕跡を確認することはできなかった。柱穴埋土から土師器甕片が多く、杯・皿の破片も出土する。
- S B 7603 調査区北部西辺で桁行3間×梁行1間分を検出した掘立柱建物である。柱間は2.1m等間、棟方向がN 13° Eで南北棟の3間×2間が想定される。柱掘形は、一辺40cm～50cmの方形で深さは25cm～40cm、柱痕跡は径約20cmである。北東隅から西側2番目の妻柱の柱穴から土師器台付皿等がほぼ完形で出土し、平安時代後Ⅱ期と考える。
- S E 7600 調査区中央部の井戸で北半は東西溝S D 7615に切られるが、遺構検出面では平面が略円形の径4m～4.5mである。黄橙色砂礫土の地山をくり抜かれているため壁面の崩落が著しく、南北畦畔を残して深さ約1.8mまで掘削したところ、埋土の断面観察から底面の北、南で異なる堆積層が認められた。そのため畦畔を除去し、平面プランの検出を主眼として約60cm掘り下げたが、黒褐色粘質土と黄橙色砂礫土の互層が続き明確にできなかった。そこで西側を半載して約2m掘り下げ、検出面からは下へ深さ約4.4mのところまで、湧水層に達したため井戸底までの調査を断念した。井戸枠等の木製遺物は確認されなかったが、断面観察から底面のやや南寄り、埋土が暗褐色粘質土である柱状の堆積層が確認され、径60cm程度の木製井筒等の可能性もうかがわれる。上層では平安時代後Ⅱ期の土師器・山茶碗・灰釉陶器碗等の完形品が一括出土するが、下層では土師器・須恵器甕片等が少量認められるだけである。

#### (4) 平安時代末期の遺構

**S B 7604** 重複する柱穴の新旧関係から S B 7603より新しい東西棟建物で、桁行1間以上×梁行2間を検出した。柱間は桁行2.4m、梁行2.1m等間で、棟方向がE 7° Sの3間×2間が考えられる。柱掘形は一辺60cm~80cmとやや大型の方形で深さは30cm前後、柱痕跡は径20cm~25cmである。柱穴底面の標高は11.1m前後ではほぼ一定する。柱穴埋土からは土師器壺・皿片が出土し、わずかながら山茶碗片も認められる。

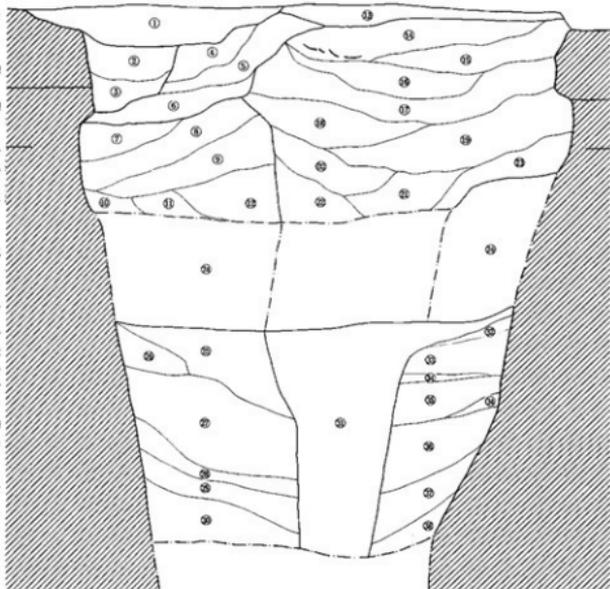
**S B 7605** 調査区北部中央で検出した東西棟の3間×3間の総柱建物である。柱間は桁行2.4m等間、梁行2.1m等間で、棟方向はE 7° Sである。柱穴は径30cm~40cm、深さは15cm~25cmである。柱穴からは土師器・山茶碗片が出土するが少量である。

**S B 7606** S B 7605と重複する南北棟の3間×2間であるが、新旧関係は明確にできなかった。棟方向はN 7° Eで、柱間は2.1m等間である。柱穴は径30cm~40cm、深さは10cm~20cmである。出土遺物としては、微量の土師器・山茶碗片がある。

**S B 0177** 調査区北東部、第8-4次調査で検出した桁行1間以上×梁行2間の建物だが、今回の調査で西側へ広がる可能性はないと判断される。西梁行筋はS B 7605の東梁行筋の延長線上に位置し、調査区外の東へ展開する3間×2間の東西棟が想定される。棟方向はE 7° Sで柱間は桁行2.1m、梁行2.4m等間が考えられる。柱穴は径約40cm、深さは約15cmである。

**S E 7595** 調査区東端で西半を検出し、直径約3mの井戸と考えられる。調査区外に広がるため調査の深さは約50cmにとどまった。平安時代末期と考える土師器皿、山茶碗の破片が少量出土した。

- ① 灰黄色粘質土 10YR4/2 2~3cm大の角礫を多量含む (S D 7616層土)
- ② 暗褐色粘質土 10YR4/1 (土坑下層土)
- ③ 暗褐色粘質土 10YR4/1 黄褐色粘土ブロックを多量含む (土坑下層土)
- ④ 黄褐色粘質土 10YR5/2
- ⑤ 黄褐色粘質土 10YR5/2 3~5cm大の礫を多量含む
- ⑥ 黄褐色粘質土 10YR4/4 2~6cm大の礫や含む
- ⑦ 黄褐色粘質土 10YR4/6 1~3cm大の礫を多量含む
- ⑧ 黄褐色粘質土 10YR5/4 3~5cm大の礫を多量含む
- ⑨ 黄褐色粘質土 10YR5/4
- ⑩ 黄褐色粘質土 (⑩)に多いがやや粘質
- ⑪ 黄褐色粘質土 10YR3/2 (⑩)に多いがやや粘質
- ⑫ 黄褐色粘質土 10YR3/2 1~2cm大の礫を多量含む
- ⑬ 黄褐色粘質土 10YR5/6 1~2cm大の礫を多量含む
- ⑭ 黄褐色粘質土 10YR5/2
- ⑮ 黄褐色粘質土 7.5YR4/4 3~5cm大の礫を多量含む
- ⑯ 黄褐色粘質土 7.5YR4/3
- ⑰ 黄褐色粘質土 7.5YR4/3
- ⑱ 黄褐色粘質土 7.5YR3/2 3cm大の礫や含む
- ⑲ 黄褐色粘質土 7.5YR3/2 (⑲)に多いがやや粘質
- ⑳ 土師器片の埋積層
- ㉑ 黄褐色粘質土 7.5YR2/2 (⑲より更に粘質気味)
- ㉒ 黄褐色粘質土 7.5YR4/3 黄褐色砂 10YR5/6と10~20cm大の角礫を多量含む
- ㉓ 黄褐色粘質土 7.5YR4/2 黄褐色粘土ブロックを多量含む
- ㉔ 黄褐色粘質土 7.5YR5/4 1~3cm大の礫を多量含む
- ㉕ 黄褐色粘質土 7.5YR5/6 黄褐色粘土塊小を含む
- ㉖ 黄褐色粘質土 7.5YR2/1 地山黄褐色砂混みややや粘質
- ㉗ 黄褐色粘質土 10YR7/8 やや粘質、5~10cm大の礫を多量含む (地山混入)
- ㉘ 黄褐色粘質土 10YR3/1 2~3cm大の角礫や含む
- ㉙ 黄褐色粘質土 10YR4/1 黄褐色粘質土ブロック (地山) やや粘質
- ㉚ 黄褐色粘質土 10YR3/2 5cm大の礫や含む (黄褐色粘質土 10YR7/8との互層と互層)
- ㉛ 黄褐色粘質土 10YR7/8
- ㉜ 黄褐色粘質土 10YR5/4 3~6cm大の礫を多量含む
- ㉝ 黄褐色粘質土 10YR4/3 2~3cm大の角礫を多量含む
- ㉞ 灰白 10YR7/1 に多い黄褐色粘質土 10YR3/2、5cm大の角礫を多量含む (⑬に似て、こより10~15cmで硬水)
- ㉟ 黄褐色粘質土 10YR4/4 3~10cm大の礫を多量含む
- ㊱ 黄褐色粘質土 10YR7/8 (地山混入)
- ㊲ 黄褐色粘質土 10YR2/2 2~5cm大の小礫を多量含む
- ㊳ 黄褐色粘質土 10YR2/2 やや粘質
- ㊴ 黄褐色粘質土 10YR3/3 黄褐色粘土ブロックを多量含む
- ㊵ 黄褐色粘質土 10YR2/1 に多大の礫を多量含む
- ㊶ 黄褐色粘質土 10YR3/3 黄褐色粘土ブロックを多量含む
- ㊷ 黄褐色粘質土 10YR2/1 に多大の礫を多量含む



第4図 S E 7600土層断面図 (1 : 50)

- S D 7615 幅1.5m～2.0m、深さ10cm前後の浅い溝で、調査区中央のS E 7600より新しい。概ねE10°Sの方向で東へ延びるが、東端では南流する幅50cm～70cm、深さ約10cmの浅い数条の溝と重複する。暗茶褐色土から土師器・山茶碗小片が出土する。
- S D 0180 概ねE15°Sの方向で東へ延び、東端で南へ曲がる溝でS D 0181より新しい。西端は後世の攪乱のため不明だが、幅約1.0m、深さ約10cm、断面浅いU字形であり、東方に向かって幅は狭くなり約50cm、深さ約5cmとなる。埋土は茶褐色土で、出土遺物としては、土師器杯・須恵器甕の破片が数点みられるだけである。

#### (5) 鎌倉時代の遺構

- S B 7607 調査区南半中央で検出した東面に庇が付く南北棟建物で身舎は2間×2間、棟方向はN2°Wである。柱間は桁行2.1m等間、梁行2.3m等間で庇出は2.7mである。柱穴は径30cm～40cm、深さ25cm～35cm、出土遺物は皆無に等しく、土師器細片が数点ある。
- S B 7608 S B 7607の西寄りに重複する同規模の南北棟建物だが、北面、西面に庇が付く。柱穴の新旧関係では新しくなり、身舎は2間×2間、棟方向はN2°Wと同じである。柱間は桁行2.1m等間、梁行2.3m等間で西庇出2.7m、北庇出2.1mである。柱穴は径30cm～40cm、深さ20cm～30cm、出土遺物は土師器の破片が少量認められる。
- S B 7609 調査区南端東寄りで検出した3間×2間の東西棟建物でS D 0183より古い。棟方向はE2°N、桁行の柱間は不揃いで西から2.6m、2.3m、2.3mとなるが、梁行の柱間は2.2m等間である。柱穴の径は25cm～40cm、深さは20cm～40cmである。出土遺物は皆無に等しく、土師器小片が数点のみである。
- S E 0178 調査区北東隅、径約2mの素掘り井戸で、第8-4次調査では約2.2m掘り下げていた。今回さらに下へ約1.8m掘り下げたが、地山層が砂礫土で崩落の危険があるため底には達しなかった。埋土は砂礫混りの茶褐色土である。出土遺物としては、土師器甕の細片が多いが、鎌倉時代前期の山茶碗・瓦器片も確認された。
- S K 7594 第8-4次調査検出の土坑S K 0179をはじめ数基の土坑と重複しており、形状は明確にできなかったが、長径約6m、短径約2m、深さ約10cmの平面長方形の土坑と考えられる。埋土は褐色土で平安時代末期～鎌倉時代前期の土師器、山茶碗片が出土した。
- S D 7610・7611 いずれも南北正方位に近い方向で平行しており、平安時代後I期の東西溝S D 0181より新しい。溝幅は0.8m～1.2m、深さは10cm～30cm、断面が逆台形である。これらの溝は心々間では平均約3.0m、肩々間では調査区南端で約1.5m、中央ではやや狭まって約1.2m、北端ではやや拡がって約2.0mである。溝底の標高は、S D 7610の北端で約10.8m、南端で約10.5m、S D 7611の北端で約10.9m、南端で約10.5mとなり、いずれも南流する。暗褐色粘質土の埋土からは鎌倉時代前期の土師器杯・皿、山茶碗片が出土しており、埋没時期と考えられる。

#### (6) 時期不明の遺構

- S D 0182 第8-4次調査で検出したS D 0181に先行する南北溝で今回再度調査したが、前回以上の成果は得られず、南端には風倒木とみられる痕跡がある。
- S D 0183 調査区南辺で検出した幅約1m、深さ30cm～40cm、断面が逆台形の溝で、新旧関係からS B 7609より新しく、溝方向はE15°Sで東流する。出土遺物は磨耗した土師器破片のみみられるだけである。
- S D 7612 S D 7611の東側約1mの間隔をおいて平行する南北溝だが、大半が後世の攪乱のた

め全体は明確にできず、出土遺物がないため時期不明とした。溝幅は約80cm、深さは15cm～20cm、断面は逆台形である。

- S D 7613 調査区北端で検出し、E 5° Sの方向で東流する溝で、幅60cm～70cm、深さ30cm、断面逆台形である。東端でS D 7614を切っている。埋土は砂礫混りの褐色土である。
- S D 7614 北東端で西半を検出した南北溝で、深さ10cm程と浅く、溝幅は推定80cmに及ぶものと考えられる。土師器甕破片が数点出土した。
- S D 7616 調査区中央で確認した幅20cm～30cm、深さ5cm～20cmの東西溝でE 12° Sの方向をとるが、東方に向かって浅くなり消える。出土遺物は細片だが、奈良時代の土師器片と平安時代末期の土師器、山茶碗片が混在する。
- S D 7617 幅約50cm、深さ10cm程の浅い溝で、S D 7618に先行する。出土遺物は土師器、山茶碗の細片のみである。
- S D 7618 新旧関係ではS D 7615に先行し、E 15° Sの方向で東方へ延びる幅約80cm、深さ10cm～20cmの溝である。土師器、山茶碗の破片が数点出土する。
- S D 7619 E 15° Nの方向で北東へ延びる溝であり、S D 7615に先行する。溝幅は約50cm、深さは5cm～15cmで土師器甕の破片が数点出土する。

### 3 遺物

今回の調査では平安時代後期～鎌倉時代を中心とした遺物が出土し、整理箱約80箱分ある。ここでは完形品が多いS E 7600を中心に土坑・溝の一括遺物を概述する。

#### (1) 平安時代後期の遺物

- S K 0181土師器 杯(1)は口径14.4cm、器高3.7cm、口縁部はほぼ上方に立ち上がる。碗(2)は口径15.0cm、器高4.7cm、口縁部は外方へ開き、端部はやや内弯気味となる。口縁部をヨコナデする範囲は狭くなり、平安時代後I期と考えられる。小皿(3)とロクロ土師器小皿(4)はほぼ同じ法量で、口径10cm前後、器高2cm前後である。
- S B 7603土師器 柱穴から出土した小皿・台付小皿はほぼ完形で平安時代後II期と考えられる。小皿(5・6)は口径9cm前後、器高1.3cmで口縁端部のみヨコナデする。台付小皿(7・8)は小皿とほぼ同じ法量で高台が雑に貼付され、砂粒を多く含み胎土は粗く、灰白色である。ロクロ土師器台付小皿(9～12)は口径8.5cm前後(9・10)と口径10cm前後(11・12)の皿部に擬高台が付き、底部外面に糸切痕が残る。胎土は砂粒をわずかに含むが密で浅黄・橙色である。
- S E 7600土師器 共伴する遺物としては灰釉陶器碗・広口瓶、山茶碗、土師器碗・杯・皿・台付皿等があり、灰釉陶器は鑊投窯編年の百代寺窯式に相当し、平安時代後II期にあたる。小皿(13～15)は口径10cm前後で、器高2.2cm(13・14)と器高1.1cm(15)がある。ロクロ土師器小皿(16～18)は口径10cm前後で、器高2cm(16・17)と器高2.7cm(18)がある。杯(19・20)は口径14cm～15cm、器高3.0cm前後、口縁部をヨコナデし、体部にはオサエ・ナデを施す。ロクロ土師器杯(21～23)は口径14cm～15.5cm、器高5.5cm～7.0cm、調整はロクロナデ、底部は糸切り未調整である。台付碗(24～27)は口径15cm前後、器高6cm前後、高台径7.5cm前後である。内弯気味に立ち上がり、「八」字状の高台が貼付される。口縁部をヨコナデ、体部にオサエ・ナデを施すが、(27)は体部内面に丁寧なナデ・ミガキを施す。ロクロ土師碗(28～31)は灰釉陶器碗を模倣したと考えられ、口径15.5cm前後、器高6cm前後、高台径7.5cm前後である。体部の形状はやや丸みをもって立ち

上り、口縁端部が外反しない(28)と外反する(29~31)がある。高台の断面は「八」字形(28~30)と三ヶ月形(31)があり、糸切り未調整である。胎土は細砂を含むが密で浅黄褐色である。

**甕** 甕(44~46)は球形の体部に「く」字状に曲がる口縁部がつき、端部は内側に折り曲げられやや肥厚する。体部上半にタテハケ、下半にヘラケズリが施される。

**灰釉陶器碗** 碗(32~39)は口径16cm前後の(32~36・39)と口径17cm前後の(37・38)があるが、器高6cm前後、高台径7cm~8cmである。体部の形状は直線的で口縁端部の外反がみられない(32)と下半に丸みをもち口縁部が外反気味に立ち上がる(33~39)があるが、高台はいずれも断面三角形である。(35~39)は口縁部を指ではさみナデあげる輪花碗である。(32~34)は口縁周辺に灰釉が潰け掛けられるが、(35~39)は明瞭な施釉痕が認められない。山茶碗(40~43)は無釉で、口径15cm前後の(40・42)と口径17cmの(41)があり、(43)は口径10.2cmの小碗である。

**広口瓶** 広口瓶(47)は頸部から口縁部にかけてやや開きながら外反し、端部は上方に引き出される。調整はロクロナデ、口縁部内面から体部外面まで灰釉が施される。

#### (2) 鎌倉時代前期の遺物

**S K 7610土師器** 小皿(48~51)は口径8cm前後、器高1.2cm前後、皿(52~55)は口径13cm前後、器高3cm前後である。内湾する口縁部は底部に比べやや厚く、口縁端部をわずかにヨコナデし、**山茶碗** 底部は指オサエで凹凸がある。山茶碗(56)は口径15.2cm、器高4.6cm、口縁部がわずかに外反し、やや厚い底部には偏平で粗雑な高台が付く。

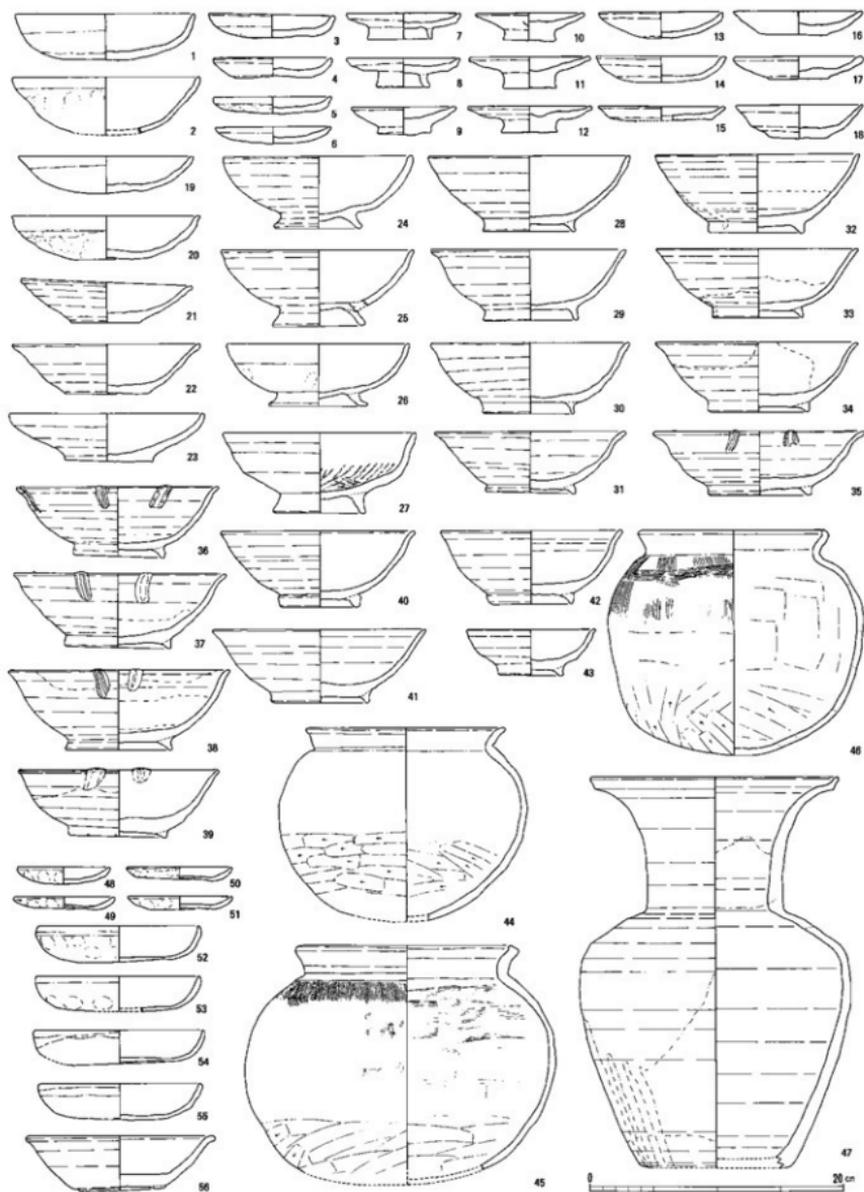
#### (3) 特殊な遺物

**円面硯・緑釉陶器** 円面硯はいずれも破片で4点、緑釉陶器は大半が碗・皿の破片で50点出土した。墨書土器は15点出土するが、判読できたもので須臾器杯蓋「麻」や灰釉陶器皿「八」等がある。その他では、製塩土器片50点、土錘26点、鉄釘10点、砥石2点がある。

## 4 まとめ

### (1) 方格地割西辺の外周施設

今回の調査では方格地割西辺を区画する外周施設の確認を目的としたが、1次調査区では東西溝だけで、当初推定したN4°Wの方位に規制された南北区画溝は検出されず、東側へ拡張した第2次調査区で初めて南北正方位に近い方向で平行する溝S D 7610~7612の3条が確認された。S D 7612は出土遺物もなく時期が不明だが、S D 7610・7611はほぼ同じ埋土で埋没時期も同じと考えられる。このことから外周施設を両側溝を伴う道路として想定した場合、S D 7610が西側溝、S D 7611が東側溝となってこの間を道路幅とするが、やや蛇行するため溝心々間では平均約3m、道路幅は1.2m~2.0mで、溝断面が逆台形であることからさらに狭まった築堤状の形態も考えられる。また、調査区北・南壁の断面観察からはこれらの溝の切り合いを含め明確にはできなかったが、単独で存在した区画溝の可能性も残る。この場合では各溝の両側を道路(通路)としての利用も想定できるが、積極的な根拠は得られない。いずれにせよS D 7610とS D 7611は方格地割西辺に相当する区画溝と考えられ、溝方向が現道の道筋とよく似た形状を示すことから、調査区北側で過去実施された第8~7次(Lトレンチ)調査や第49次調査で検出した南北溝S D 0220とS D 0221にそれぞれ続くものと思われる。奈良時代後期に造営が開始される方格地割中枢部では、地割がN4°Wに規



第5図 第113次調査 遺物実測図(1:4)

SD0181:1~4 SB7602:5~12 SE7600:13~47 SD7610:48~56

制されるが、北西隅4区画の西辺においてはこの規制が緩やかであることがうかがえる。また、方格地割西辺の区画溝S D7610・7611の存続期間は東西溝S D0181より新しいことから平安時代後期を上限として鎌倉時代前期まで及ぶが、中枢部の方形区画とは異なり、平安時代後期に西辺の外周施設が造営されたものといえる。したがって、方格地割全体の規模を東西7列、南北4列を想定したが、北西隅4区画については地割の規制が緩やかでその存在は認められるものの、出現する時期と区画内の性格については不明な点も多く今後の検討課題としておきたい。

## (2) 掘立柱建物と溝の方向性について

方格地割西辺の区画溝としては、南北溝S D7610～7612が考えられたが、この西側では東西方位に対して南にやや偏った方向の溝が確認された。このうちS D0181を除き、出土遺物が微量なため明確な時期区分ができにくいものが多かったが、溝方向から概ねE 5°SとE 15°Sに近似する方向性で2つに大別される。E 5°Sに属するものとしては、S D0181・7613があり、溝の規模に違いはあるものの、断面逆台形の形状でほぼ直線的に続く。S D0181はS D7610・7611に先行することから平安時代後期においては方格地割西辺は意識されていないことがうかがわれる。次にE 15°Sに属するものとしてはS D0180・0183・7615・7616・7618があるが、S D0183を除き方向性や規模・形状にややばらつきがみられる。S D7615の東端では数条の溝と重複するが北方へ、S D0180は東端で南方へ、いずれもS D7610の手前で緩やかにカーブする。平安時代末期から鎌倉時代前期においては、方格地割西辺の境界を意識した様相がうかがわれ、西と東では異なる地割の規制が考えられる。

一方、掘立柱建物では、棟方向からE 13°SやE 7°Sの建物と、N 2°Wの方向をとる建物の3つに分けられる。E 13°Sに属するものとしてS B7601～7603の3棟が、E 7°Sに属するものとしてはS B7604～7606・0177の4棟があり、N 2°Wに属するものとしてはS B7607～7609の3棟が確認された。これらの時期については、柱穴の新旧関係や出土遺物が少ないために全体では平安時代後期～鎌倉時代前期に及びやや幅の広い期間を設定せざるを得ないが、古い方からE 13°S→E 7°S→N 2°Wの変遷が想定される。掘立柱建物と溝の方向性を併せて考えると、E 13°Sの建物はE 15°Sの溝に、E 7°Sの建物はE 5°Sの溝にそれぞれ近い方位をとり、N 2°Wの建物は方格地割西辺の区画溝の南北方位に概ね相当するものといえる。しかし、建物と溝の時期のうえで必ずしも相互の対応は一致していない状況であり、方向性の変遷は、E 5°S→E 13°S→E 7°S→E 15°S及びN 2°Wとなることが想定される。方格地割北西部ではこれまで実施した周辺地域の調査結果から、E 15°Sの方位による地割の規制と、方格地割が形成された後の平安時代末期～鎌倉時代に再度この方位による規制が出現することがうかがわれた。今回の調査では方格地割西辺に相当する南北溝が平安時代後期～鎌倉時代に及び、しかもこの溝が形成される前後では複数回にわたる地割の規制がみられた。したがって、方格地割西辺部においては、この区画溝の内外で構成される溝・掘立柱建物等を含めて検討する必要もあり、今後の調査の進展が期待される。

(野原宏司)

### Ⅲ 第114次調査

(6AEQ-E・F 柳原地区)

#### 1 はじめに

#### 経 過

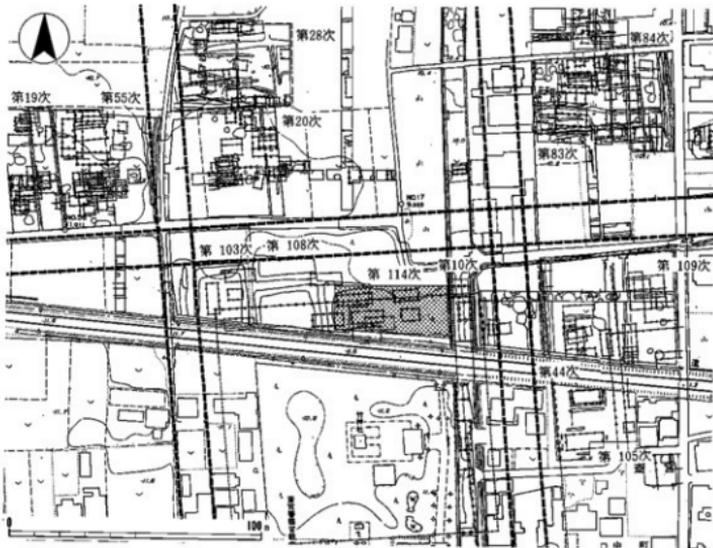
第114次調査は、平成6年度に行った第108次調査の東側で引き続き実施した。一部第108次調査と重複して調査区を設定し、約1,000㎡を対象とした。この牛業東ブロック周辺では、これまでの調査の成果から東西約107m×南北約95mの柵列が現在の竹神社の社殿地を囲むように巡っていることが推定されている。これは西隣の鍛冶山西ブロックで推定されている東西約165m×南北推定規模約118mに及ぶ大規模な柵列に次ぐ規模のものであり、奈良時代の終わりから平安時代前期の齋宮を考えるうえで極めて重要である。

#### 調査目的・期間

今回の調査は、第108次調査区から第10次調査区へと続く柵列S A 7000の実態とその関連の建物などを調査し、この一画の実態と性格をさらに解明しようすることを目的として行った。調査は平成8年10月25日から開始し、平成9年1月13日迄で現地調査を終了した。また、1月10日に航空写真測量を実施し、2月13日・14日に現地補測並びに校正を行い、最終的に埋め戻しが終了したのは3月4日となった。

#### 現 況

現況の表土から遺構面までの深さは、調査区の中央で30cm～40cm、西端と東端がやや深く70cm～80cm、中央の北端では20cm前後と特に浅かった。遺構面は、赤褐色粘質土で覆えた。一部、調査区の中央付近では上層に黄褐色粘質土がみられ、この面で遺構が確認されることより、ある時期の整地土の可能性のある箇所もあった。遺構検出面の標高は北で10.2m、南で10.5m前後で北東に向かって緩やかに傾斜する。



第6図 第114次調査 調査区位置図(1:2,000)

## 2 遺 構

### (1) 奈良時代後期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物7棟、櫓列1条、溝1条がある。

S B 0575・7654  
7310

北側の桁行筋を揃える建物である。このうち、S B 0575・7310の妻柱の柱掘形が櫓列S A 7000の柱掘形と重なっており、その前後関係から櫓列に先行する建物群と判断した。

S B 0575は今回の調査では西側の梁行筋を調査区北東隅でわずかに検出しただけであるが、すぐ東側では第10次調査が実施されており、これに続く桁行筋を検出してゐる。その際には東側の妻柱は確認されていないので、S B 0575は第10次調査区よりさらに東へ続き、桁行は4間ないしは5間が想定される。柱間は桁行2.4m等間、梁行は2.1m等間、東西棟建物で棟方向はE 5°Nである。

S B 7654は調査区中央の北側で検出された桁行4間、梁行2間の東西棟建物で、柱間は桁行、梁行ともに2.4m等間である。柱掘形は一辺0.8m～1.0mの方形で、柱痕跡は径約30cmである。棟方向はE 5°Nである。

S B 7310は既に第108次調査で検出されている東西棟建物である。その際には東側の妻柱が検出されていないために規模は不明となっていたが、今回の調査で、桁行は6間であることを確認した。梁行は2間である。柱間は桁行、梁行ともに2.4m等間である。柱掘形は一辺約0.8mの方形、柱痕跡は径約30cmである。棟方向はE 5°Nである。なお、今回の調査で検出した東側妻柱ならびに前回の調査で検出されている西

		遺 構 の 種 別			
		S B	S A	S K	S D
奈良	後 期	0575 7310 7644 7645 7646 7654 7658	7000		7643
平安	初 期	7647 7648 7659 7660	7000	7630	
	前Ⅰ期	7649 7655 7656	7000	7650	
	前Ⅱ期	7653		7631 7632 7633 7634	
	中 期	7315 7682 7683		7635	
	後Ⅱ期	7313 7638 7639 7640 7641 7642 7677 7678 7679 7680 7681		7651 7652 7661 7675	
	末 期			7636 7662 7663 7664 7665 7666 7671 7672 7673 7674 7676 7685	
鎌倉			7637 7667 7668 7669 7670 7684		
時期不明			7691	7657 7686 7687 7688 7689 7690	

第3表 第114次調査 時期別遺構分類表



第7図 第114次調査 遺構実測図・断面図 (1:200)



側妻柱の柱掘形はどちらも櫛列 S A 7000 の柱掘形と重なっており、S B 7310 の方が古いことを確認した。平成 6 年度発掘調査概報では、S B 7310 の時期を平安時代中期と報告しているが、奈良時代後期に訂正したい。

S B 7644・7645 この他、櫛列 S A 7000 に先行する掘立柱建物には、S B 7644・7645 がある。調査区の南西部で北側桁行筋のみを検出したものであるが、東西棟建物と想定される。柱掘形の重複から S B 7644 の方が古く、桁行 3 間、柱間は 2.4m 等間である。一方 S B 7645 は桁行 4 間、柱間は 2.7m 等間である。棟方向はどちらも E 4°N である。

S A 7000 これらの建物の廃絶後に奈良時代後期でも後出の遺構として、櫛列 S A 7000 が設けられ、平安時代前 I 期まで継続される。今回の調査で東西約 107m の櫛列のはほぼ全容が明らかになり、以下のようなことが確認できた。柱穴の重複はなく、建て替えられた痕跡は認められない。また、約 107m の間に櫛列の切れ目はなく、門の遺構は考え難い。柱掘形は一辺約 0.9m～1.6m までの間でややばらつきがあるものの、東西方向に長方形になる傾向がうかがえる。柱痕跡は径約 30cm で、同時期の掘立柱建物の柱痕跡も約 30cm であるが、櫛列の方がやや大きい。柱痕の底部の標高は、第 103 次調査や第 108 次調査では 9.7m～10.1m の間でばらつきがみられたが、今回の調査区では 9.6m 前後で安定している。なお、柱間の平均は 2.97m で 10 尺等間である。

この S A 7000 に伴う掘立柱建物には、調査区の中央と南西部の 2 か所で建て替えが繰り返されている S B 7646・7647・7648、S B 7658・7659・7660 の二群がある。いずれも東西棟建物で棟方向は E 4°N である。また、前者の一群の北側桁行と後者の一群の棟通りとが概ね柱筋を揃えている。建物の規模はいずれも 3 間×2 間が想定される。ただ、前者の一群については北側の桁行で 2 間を検出しているのみである。その東への続きについて、3 間目にあたる柱穴は S K 7634 と重複するため確認されず、4 間目にあたる柱穴については柱間を測り、柱穴の想定される箇所を検出を試みたが、柱穴は確認できなかった。このことから 4 間以上は考えがたく 3 間と想定した。

S B 7658・7659・7660 は、この区画の中では一番北に位置する建物で、言い方を換えれば一番奥にある建物である。そして桁行 3 間×梁行 2 間と規模が小さいわりには柱掘形が一辺 1.0m～1.5m 前後、柱痕跡が径約 30cm と立派な建物であることから、日常生活空間としての建物よりは何か特殊な用途の建物であると想定される。そして、おそらく斎王が交代する度に建て替えが行われたものと考えられる。S B 7646・7647・7648 も、同じ場所と同じ規模で建て替えが行われていることから、これらの建て替えは相互に連動するものと考えられる。

S B 7646・7658 これらのうち、それぞれ最初に建てられた S B 7646・7658 が奈良時代後期のものである。S B 7646 は、桁行、梁行ともに柱間は 2.4m の等間で、桁行は 2 間を確認しているが、東側の続きは前 II 期の土坑 S K 7634 と近世以降の攪乱土坑 S K 7691 のため不明である。梁行は 2 間である。柱掘形は一辺約 1.0m～1.2m の方で柱痕跡は径約 30cm である。S B 7658 は桁行 3 間×梁行 2 間の規模で、南側桁行の大半は S K 7691 に攪乱されている。柱間は桁行、梁行とも 2.4m 等間である。柱掘形の重複のため、この建物の柱痕跡は不明である。

S D 7643 S B 7644・7645 の柱掘形と重複し、これらの建物より古い溝であるので奈良時代後期とした。埋土は黒色土で遺物は出土していない。

## (2) 平安時代初期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物4棟、櫓列1条、土坑1基がある。

S B 7647・7648 奈良時代後期から建て替えの続く掘立柱建物群である。まず、S B 7646がS B 7647  
7659・7660 に建て替えられ、この時S B 7658がS B 7659に建て替えられる。その後、S B 7647が  
S B 7648に建て替えられる時にはS B 7659がS B 7660に建て替えられる。

S B 7647は、北側桁行筋2間分と西側妻柱を検出したのみである。柱掘形は0.8m前後の方形で柱痕跡は径約30cmである。柱間は桁行2.4m等間、梁行は3.0m等間である。柱掘形の重複からS B 7646より新しくS B 7648より古い建物である。S B 7648は、3棟の建て替えのうち最も東による建物である。西側梁行と北側桁行3間分を検出したが、東への続きは土坑S K 7634と土坑S K 7691のため不明である。柱間は桁行と梁行とも2.7m等間である。柱掘形は0.8m～1.0mの方形で柱痕跡は径約30cmである。柱掘形から完形あるいはほぼ完形の土師器杯・碗・皿・杯蓋、須恵器杯・杯蓋が出土しており、建物の廃棄に伴う、何らかの祭祀が行われたようである。

S B 7659は、S B 7658を建て替えたもので柱間など建物の規模は変わらない。やはり、S B 7660の柱掘形のために柱痕跡は不明である。S B 7660は3棟の中で最も新しい建物で柱間は桁行2.5m等間、梁行2.4m等間である。柱掘形は0.8m～1.0mのほぼ正方形で、柱痕跡は径30cm～40cm、検出面からの深さは0.7m前後である。柱掘形から、土師器杯・皿・高杯、須恵器杯の破片が出土しており、9世紀初めの建物と考えた。

S K 7630 調査区北辺の西よりにある土坑で、規模は確定しないが東西方向で1.8m、南北方向は現存で1.7m、遺構検出面からの深さは約30cmである。北側の一部は第108次調査のS D 7309と重なり、前後関係は土坑の方が古い。出土遺物には、土師器杯・皿、須恵器杯蓋・盤がある。埋土は黄褐色土と黄灰色土の混入土である。

## (3) 平安時代前I期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物3棟、櫓列1条、土坑1基がある。

S B 7649 奈良時代後期から平安時代初期にかけて東西棟建物が建て替え続けられた調査区南西部にある建物で、棟方向はE 4°Nである。桁行5間×梁行2間である。柱間は桁行、梁行ともに2.4m等間である。この建物の梁行筋は、南北とも第108次調査で検出したS B 7300の桁行筋と揃える。S B 7649の西側妻柱とS B 7300の東側妻柱の間の距離は3.9m(13尺)であるが、ある時期、両方の建物が並んでいた可能性がある。

S B 7655・7656 調査区北辺中央にある掘立柱建物で、土坑S K 7650と重複し、土坑よりも古い建物である。両者の建物の前後関係は不明である。S B 7655は、南側桁行筋3間分のみを検出した。奈良時代後期の掘立柱建物S B 7654の柱掘形と重複しており、調査の過程では柱抜き取り痕跡かとも思われたが、別個に柱痕跡がみられることから、別の建物であると判断した。柱間は2.4m等間、棟方向はE 4°Nである。S B 7656は、南側梁行と桁行1間分を検出した。柱間は梁行が1.8m等間、桁行は2.1m等間である。棟方向はN 2°Wである。柱間は建物の柱掘形からの遺物は少なく、S K 7650との重複関係から建物の時期を判断した。

S K 7650 調査区北辺の中央にある土坑で、さらに北に続くため、全容は不明であるが、現存で東西約4m、南北約2mである。遺構検出面からの深さは、30cm～50cmである。埋土は上層から黒褐色土→にぶい黄褐色土である。最下層にみられる黒褐色土、あるいは

は黒色土に橙色ブロックが混入する土は、重複する柱穴あるいは小土坑の埋土であると考えられる。出土遺物には、土師器杯・皿、須恵器蓋がある。

#### (4) 平安時代前Ⅱ期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物1棟、土坑4基がある。

S B 7653 調査区のはほぼ中央にある桁行3間×梁行2間の南北棟建物である。柱間は不揃いで桁行は北から2.4m+1.8m+1.8m、梁行は東から1.8m+2.2mである。柱掘形は0.5m～0.6mと小さくなり方形がくずれ円形に近いものとなっている。柱痕跡も20cm前後と小さくなる。棟方向は正方位である。

S K 7631 調査区の西よりには平安時代後Ⅱ期に何度も建て替えが繰り返されている南北棟の掘立柱建物があるが、そのすぐ東に前Ⅱ期から末期の土坑群がある。S K 7631は、柵列S A 7000の柱掘形と重複するもので、南北約3.8m、東西約3.7mの不整形な楕円形の土坑で、深さは30cm～60cmである。埋土は上層では、暗灰茶褐色土、橙褐色土と黄茶褐色土の混入土などがみられたが、下層では暗褐色土であった。いずれの層からも土師器杯・皿、須恵器甕、灰釉陶器碗の破片が出土しており、遺物に時期差はないことから短期間に埋没したものと考えられる。

S K 7632 S K 7631と重複する現存で南北3.0m、東西1.3mの長楕円形の土坑である。遺構検出面からの深さは約20cmである。埋土は暗灰褐色土で、炭化物を含んでいる。P L 15下に出土状況で示すように土師器杯・皿、須恵器杯・甕、灰釉陶器碗が出土している。

S K 7633 S K 7632の南にある南北3.0m、東西3.2mの不整形な楕円形の土坑である。遺構検出面からの深さは約20cmである。埋土は橙褐色土に淡黄茶色土と灰茶褐色土が混入する土である。土師器杯・皿、須恵器杯蓋が出土している。S B 7646～7649の4棟の掘立柱建物と重複しており、建物より新しい土坑である。

S K 7634 S K 7633の東にある南北2.6m、東西2.4mのはほぼ円形に近い土坑である。遺構検出面からの深さは約60cmである。埋土は橙褐色土に淡黄茶色土が混入する土である。土師器杯・皿が出土している。

#### (5) 平安時代中期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物3棟、土坑1基がある。

S B 7682・7683 調査区の南東隅で北側の桁行のみを検出したもので、柱掘形が重複しており、その前後関係からS B 7683の方が新しい。S B 7682は、今回の調査では4間分を検出しており、柱間は2.8m等間である。さらにこの建物は東の第10次調査区へもう1間分延び、東側妻柱を1間分であるが検出している。柱掘形は一辺0.6m～0.7mの方形で柱痕跡は径約25cmである。前代よりやや小さくなるようである。S B 7683も今回の調査では4間分を検出している。さらに西へ続いていた可能性があるが、土坑S K 7691のために不明である。柱間は2.0m等間である。柱掘形や柱痕跡の大きさはS B 7682と大差ない。いずれも、柱掘形から出土したわずかな土師器杯・皿からこの時期と判断した。棟方向はどちらもE 4°Nである。

S B 7315 今回の調査区の南西隅にある掘立柱建物である。第108次調査の際にその一部が検出されており、今回の調査で桁行は3間であることが確定した。柱間は2.7m等間である。おそらく、南側へ続く東西棟建物が想定される。第108次調査では、この建物の時期を平安時代初期としている。その根拠として、S A 7000から36尺の距離にある

こと、東西4間の建物と想定した場合SA7000の東西正中線と同軸になる可能性が高いこと、柱掘形は一辺0.8m~1.2mと大型であることなどがあげられているが、今回の調査では、桁行は3間であり、柱間は2.7m等間であることを確認しており、また、SA7000の東西正中線と同軸にはならないことも確認された。さらに、後述するように今回の調査では、柱掘形が大きい建物が平安時代後Ⅱ期まで継続していることも確認されており、柱掘形の規模のみから、建物の時期決定の根拠には成りえないことを確認している。このような状況から、この建物の時期決定について柱掘形の埋土中の遺物をもとに平安時代初期や前期に遡るものは一切みられず、積極的に時期を古くする根拠もみられないため、柱掘形の遺物からの推定ではあるが中期の建物と判断した。

S K 7635

前Ⅱ期の土坑S K 7631と一部重複しながら西へ続く南北1.8m、東西2.2mの楕円形の土坑である。重複の前後関係はS K 7635の方が新しい。埋土は暗褐色土である。土師器杯・皿、須恵器甕、灰釉陶器碗が出土している。

#### (6) 平安時代後Ⅱ期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物11棟、土坑4基がある。

掘立柱建物は、調査区の西端と東端の2か所でそれぞれ建て替えが繰り返される。

S B 7313・7638  
~7642

西端の一群は古い順にS B 7313→7638→7639→7640→7641→7642であり、6棟が重複する。いずれも南北棟建物で、S B 7639・7641が桁行4間×梁行2間の他は桁行5間×梁行2間である。棟方向は、S B 7641がN 3°Wである他は全てN 4°Wである。S B 7313は第108次調査で西側桁行と北側妻、東側桁行の一部が検出された建物である。今回の調査で規模が確定し、桁行、梁行とも2.4m等間となった。柱掘形は一辺0.7m~0.8mの方形、柱痕跡は径25cm前後である。第108次調査の報告では建物の時期を後Ⅰ期としているが、今回、第108次調査で出土した遺物を含めて改めて検討した結果、後Ⅱ期と変更した。S B 7638の柱掘形は0.5m~0.7mの円形である。桁行、梁行ともに2.1m等間である。他の建物も概ね柱掘形は0.5m~0.7m前後の円形あるいは楕円形とやや丸くなる傾向がみられるが、今まで斎宮跡で検出されているこの時期の建物の柱掘形としては大きいものである。柱間もS B 7639が桁行と梁行ともに2.4m等間で、S B 7640が桁行と梁行ともに2.1m等間、S B 7641が桁行2.1m等間、梁行2.8m等間、S B 7642が桁行2.1m等間、梁行1.8m等間といずれもしっかりしている。

S B 7677~7681

東端の一群は古い順にS B 7677→7678→7679→7680→7681であり、S B 7680が東西棟建物である他は南北棟建物である。S B 7677の桁行は5間で柱間が2.4m等間、梁行は2間で柱間が2.1m等間である。棟方向はN 4°Wである。柱掘形は0.7m前後の楕円形、柱痕跡は径25cm~30cmである。S B 7678の桁行は5間で柱間が2.1m等間、梁行は2間で柱間が2.2m等間である。棟方向はN 5°Wである。柱掘形は0.7m~0.9mの方形あるいは楕円形である。柱痕跡は重複により不明なものが多いが、確認できるものでは径25cm~30cmである。S B 7679は規模が小さくなり、桁行が3間となる。柱間は桁行、梁行ともに2.1m等間、柱掘形は径0.7m前後の円形で、柱痕跡は径約20cmである。S B 7680は西側妻と南北の桁行を1間分検出したのみである。第10次調査区へ続くものと思われるが、溝や土坑と重複しているために第10次調査区では柱掘形を確認できなかった。柱間は桁行、梁行ともに2.1m等間と想定される。柱掘形は径0.7m前後の円形で、柱痕跡は径20cm前後である。S B 7681は桁行5間×梁行2間の南北棟

建物で棟方向はN2°Wである。柱掘形は一辺0.8m～1.1mの隅丸方形で、柱痕跡は径30cm前後である。柱間は桁行が2.4m等間、梁行が2.1m等間である。この一群の中では最もしっかりとした建物である。

S K 7652 調査区の北辺西よりで検出した土坑である。南北4.2m、東西1.2mと細長く、遺構検出面からの深さは13cmと浅い。埋土は、にぶい黄褐色土である。土師器杯・皿・鍋と灰釉陶器碗が出土している。

S K 7651 S K 7652を掘り下げた北辺で検出した土坑である。さらに調査区の北へ続くものと思われる。灰黄褐色土の埋土から、土師器杯・皿・甕が出土している。

S K 7661 調査区の北辺東よりで検出した土坑である。南北3.0m、東西2.8mの楕円形で遺構検出面からの深さは15cm前後と浅い。埋土は灰黄褐色土である。土師器杯・皿、灰釉陶器碗が出土している。

S K 7675 調査区の南東隅にあり、さらに東へ続く土坑である。遺構検出面からの深さは30cm前後である。埋土は暗灰黄色土である。土師器杯・皿、鉄製品が出土している。

#### (7) 平安時代末期の遺構

この時期の遺構には土坑12基があるのみで掘立柱建物はみられない。

S K 7636 調査区の西にある掘立柱建物群の東にある土坑で、すぐ北には中期の土坑 S K 7635がある。南北1.7m、東西1.9mの楕円形の土坑で遺構検出面からの深さは40cm前後である。埋土は暗灰褐色土である。土師器皿、ロクロ土師器皿が出土している。

S K 7662～7666 S K 7662～7666、7671～7676、7685は調査区東にある掘立柱建物群を取り囲むかの  
7671～7676 ように建物の周囲にある。これらの土坑の規模・形態は概ね2m～4mの楕円形で、  
7685 遺構検出面からの深さは30cm～40cmである。埋土は茶灰褐色土あるいは黄灰褐色土である。いずれも土師器杯・皿、ロクロ土師器皿などが出土している。

#### (8) 鎌倉時代の遺構

この時期の遺構には土坑6基があるのみで前代同様その他の遺構はみられない。

S K 7637 調査区の南辺にあり、奈良時代後期から初期の掘立柱建物群と重複する土坑で、さらに南へ続く。現状では南北1.7m、東西3.6m、遺構検出面からの深さは30cmである。埋土はにぶい黄褐色土である。土師器小皿が出土している。

S K 7667～7670 S K 7667～7670、7684は調査区の東で平安時代末期の土坑群に重複して検出したもの  
7684 である。規模や形態に変化はなく比較的浅い土坑である。埋土は茶灰褐色土あるいは黄灰褐色土である。いずれも土師器皿・小皿が出土している。特に S K 7670から出土した小皿には、鳥の絵が墨で描かれており注目される。

#### (9) その他の遺構

その他時期不明の遺構として土坑1基、溝6条がある。

S K 7691 調査区の南辺中央にある東西約16m、南北は現状で約8m、遺構検出面からの深さ1.6m～1.8mの不整形な大きな土坑である。南はさらに調査区の外へ続く。埋土の状況から近世以降に土取りのために掘られたもので、すぐに他の土を入れて埋め戻したというより、凹んだ状況のところへ何回にもわたって土が堆積した様子がうかがえる。

S D 7657・7688 いずれも黒褐色土の埋土の溝で、溝の壁はほぼ垂直に掘られており、遺構検出面からの深さは20cm～30cmである。土師器の細片がわずかに出土しているが時期は不明である。掘立柱建物の周囲にみられる柴垣のような施設に伴うものかもしれない。

S D 7686・7687 調査区の中央を斜めに横切る溝である。深さは約10cmで非常に浅い。本来は2条の溝が並んでいたと思われるが、東側のS D 7687はほとんど削平されている。埋土は、にぶい黄橙色である。

### 3 遺物

今回の調査では、調査区の東辺で平安時代後期から鎌倉時代初めにかけての土器が大量に出土しており、遺物整理箱で約130箱分ある。その他、土坑から出土している遺物を含めると約230箱分ある。遺物は平安時代初期から鎌倉時代初めにかけてのもので、今回の調査では甕などの煮炊具が少ないのが特徴的である。また、第103次・第108次調査で方格地割内部では異例と思われる量の土鍾や製塩土器が出土していたが、今回の調査では土鍾が3点、製塩土器が8点と少なく、同じ区画の中でも機能の違いを反映していると思われる。ここでは土坑を中心として各時期の一括遺物を中心に特殊な遺物について概述する。

#### (1) 平安時代初期の遺物

S B 7648 (14)は北西隅の柱掘形から垂直に立つような状況で出土しているが、その他は南西隅の柱掘形から重なるような状況で出土した一括遺物である。

土師器 杯(4・5)は外反する口縁をもち、口縁端部のみやや内弯気味になる。(4)の口径はややゆがみがあり13cm～14cm、器高は3.6cmである。(5)は口径12.2cm、器高3.5cmである。いずれも口縁部はヨコナデ、底部はオサエの後ナデを施すe手法で調整する。(4)の内面には螺旋暗文が施される。いずれも口径のわりには器高の深い杯で、器壁も厚く、後述するS K 7630の杯に比べて古い様相を示し、奈良時代的なものから平安時代的なものへの移行期にあたる特徴をもつ。

杯(6)は口径17.4cm、器高5.0cmの深い杯である。底部はオサエの後ナデを施し、口縁部下半はヘラケズリ、上半はヨコナデ調整する。

蓋(1～3)は、外面を丁寧にヘラミガキ調整し、内面には螺旋暗文と放射暗文を施している。しかし、(3)以外は器面が磨減しているため残りが悪い。(1)は口径11.2cm、器高2.3cm、(2)は口径14.8cm、器高3.3cm、(3)は口径14.0cm、器高3.5cm、(1)と(2・3)の大小2つの法量に分かれる。

皿には口縁部が内弯気味に立ち上がる皿(7)と底部は平坦で口縁部が外反する(8)がある。(7)は口径18.4cm、器高2.5cm、(8)は口径17.6cm、器高2.4cmである。いずれも口縁部ヨコナデ、底部はオサエの後ナデを施すe手法で調整される。

須恵器 杯蓋(9～13)は口径19.2cm～19.6cm、器高3.6cm前後である。天井部は陣笠状になり、口縁端部はほぼ垂直あるいはやや内側に折り返されるが、(9・10)のように端部が厚くなるものもある。天井部は頂部を中心にほぼ回転ヘラケズリ調整される<sup>(1)</sup>。(14)は口径18.4cm、器高4.1cmで天井部は陣笠状であるが、他に比べ中央部が盛り上がる。回転ヘラケズリの範囲は1/2である。径高指数(器高÷口径×100)は18～19である。

杯には高台の付かない杯A(15)と高台の付く杯B(16～22)がある。(15)は口径15.0cm、器高4.7cmで底部外面は全面回転ヘラケズリを行う。杯Bの法量は口径18.4cm、器高4.0cm、径高指数が28の(16)、口径19.0cm～20.4cm、器高4.4cm、径高指数が21～23の(17～21)、口径23.2cm、器高4.2cm、径高指数18の(22)と3つに分かれる。いずれも底部と口縁部の境は明確に屈曲し、稜をなすものである。口縁部は直線的にやや開いて

立ち上がる。高台は「八」字状に外に開き、(22)は外端のみで接地するが、他は下端全体で接地する。高台と底部の接合部分は内外とも丁寧にナデられている。また、(17・22)の底部は高台よりも突出し、古い様相を残す。

#### S K 7630土師器

杯には底径が小さく口縁部がまっすぐのびる(23~26)、口縁部の外反が弱く立ち上がり部分も丸く明瞭ではなく端部は内湾する(27)、口縁部の外反が強く、立ち上がり部分にも強いナデがみられ端部が内湾する(28)がある。(23~26)の杯はこの平安時代初期から出現する椀形のもので、口径は(23)が10.8cm、(24)が12.2cm、(25)が12.6cmと小型のもので、(26)は口径15.2cmで大型のものである。この他、口径13cm前後の中型のものもある。いずれも、口縁部をヨコナデし、底部をオサエ後ナデを施すe手法で調整する。

皿は杯の変化に対応して底部が平坦で口縁部が内湾気味に立ち上がるものから、口縁部が外反するものや口縁部と底部の境が明瞭でなく断面弓状になる(29・30)が出現する。いずれも杯同様e手法で調整する。

#### 須恵器

杯蓋(31)は口径17.0cm、器高4.7cmで天井部は陣笠状で頂部を中心に $\frac{1}{2}$ ほど回転ヘラケズりする。(32)は口径24.4cmの大型品である。

盤(33)は無台盤で口径19.6cm、器高2.0cmと浅いものである。中央部は欠けているものの中心から $\frac{1}{2}$ ほど回転ヘラケズりする。

#### (2) 平安時代前I期の遺物

#### S K 7650土師器

この時期から口縁部の外反が弱く内湾気味に立ち上がる杯がなくなり、底径が小さく口縁部がまっすぐのびる杯(34~37)と底部が平坦で口縁部が外反する杯の2種類になる。いずれもe手法で調整する。

皿は杯同様口縁部が内湾気味に立ち上がるものがなくなる。口縁部と底部の境が明瞭でなく断面弓状になる(38)、ほぼ平坦な底部から口縁部が外反する(41)、両者の中間的な(39・40)がある。いずれも杯同様e手法で調整する。

#### 須恵器

蓋(42)の口径は11.6cmと小さく、壺の蓋でおそらくつまみが欠落しているものと思われる。中心部から $\frac{1}{2}$ ほど回転ヘラケズりを施す。口縁部は、内傾した後外反する。

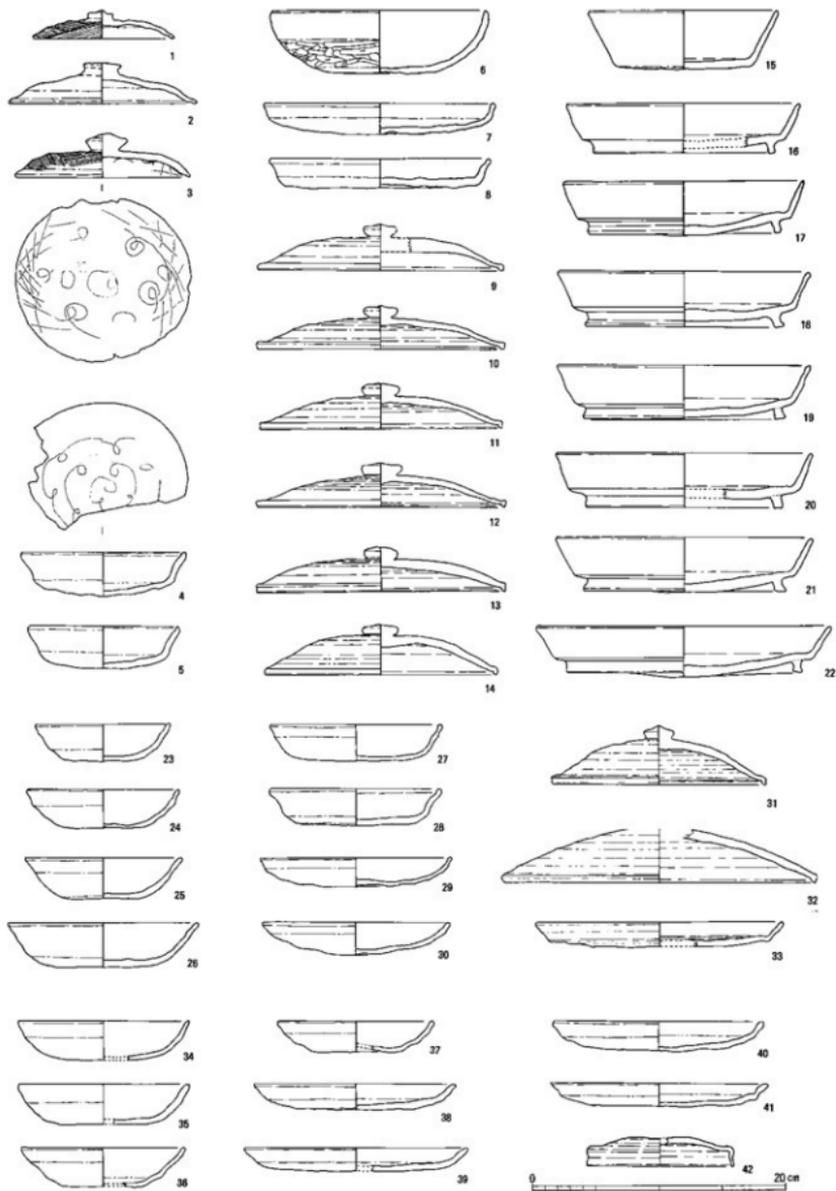
#### (3) 平安時代前II期の遺物

#### S K 7632~7634

#### 土師器

杯は前代までのものに比べて器壁が薄くなる。口縁部の形態により、外反するもの(43~45)、外反するが端部のみやや内湾する前代までの様相をわずかに残すもの(46・56)、底部との境があまり明瞭でなく断面が弓状にまっすぐのびるもの(47・48・54・58)、ほぼ平坦な底部からまっすぐのびるもの(56・57)がある。いずれもe手法で調整する。法量は(56)が口径15.0cm、器高3.6cm、(57)が口径17.0cm、器高3.6cmと大きい。他は口径13cm~15cm前後、器高3.0cm~3.2cmである。なお、口縁部のヨコナデの範囲は器高の $\frac{1}{2}$ のものと同様のものがある。

皿は杯と同様、口縁部と底部の境が明瞭でなく断面弓状のもの(49・61・62)、口縁部が外反するもの(50~52・55・59・60)がある。法量は3種類に分かれ、口径13.6cm~14.0cm、器高1.6cm前後のもの、口径15cm前後、器高1.7cm前後のもの、口径16cm~17cm、器高1.7cm~2.6cmのものがある。S K 7634出土の(49~52)は比較的器壁も厚手で法量も大きいものが多い。また、S K 7633出土の(61・62)は口縁端部に面を持つもので、この時期一定量存在するものである。いずれもe手法で調整する。



第9図 第114次調査 遺物実測図 SB7648:1~22、SK7630:23~33、SK7650:34~42

須恵器 蓋(63)は口径17.0cm、器高2.4cmで天井部は陣笠状で頂部を中心に $\frac{1}{2}$ ほど回転ヘラケズリを施す。つまみの欠落したような痕跡はなく、もともとついていなかったものと思われる。S K 7633から出土している。

#### (4) 平安時代中期の遺物

S K 7635土師器 杯は前代までみられた口縁部が外反するもの、まっすぐのびるものの区別が不明瞭となり、量量も縮小化の傾向にある。(64)は口径14.2cm、器高3.1cm、(65)は口径13.2cm、器高2.6cmである。色調も浅黄橙色やにぶい黄褐色のものが目立ち、前代までの橙色をしたものは少ない。

皿は口縁部が外反し、端部が外方へつまみだされる。(66)は口径12.2cm、器高1.3cm、(67)は口径12.0cm、器高1.4cmで小型のものである。皿の色調も杯と同様な傾向を示している。

#### (5) 平安時代後II期の遺物

S K 7651土師器 杯(68~72)は口径13.0cm~13.8cm、器高3.3cm前後、(69)のみ3.9cmとやや深い。底径が小さく口縁部がまっすぐのびるものが多い。器壁も6mm前後で前代までのものに比べて厚手となり、胎土も密ではあるが砂粒が多く混ざっている。e手法で調整されるが、口縁部のヨコナデの範囲は口径の $\frac{1}{2}$ と狭くなる傾向が強い。

小皿は断面弓状である。口径10cm前後、器高は1.7cmから2.3cmである。後I期からみられる小皿である。口縁端部の形態では前代からの系譜を引く(73・74)と末期に特徴的な端部が肥厚し、外側に面をもつ(75)の萌芽がみられる。

甕には球形の体部に「く」字状に曲がる口縁部がつく(76)がある。口縁部はヨコナデ、体部外面はオサエ後ナデ、内面は板状工具によるヨコナデを施す。口径は16.0cmである。

#### (6) 平安時代末期の遺物

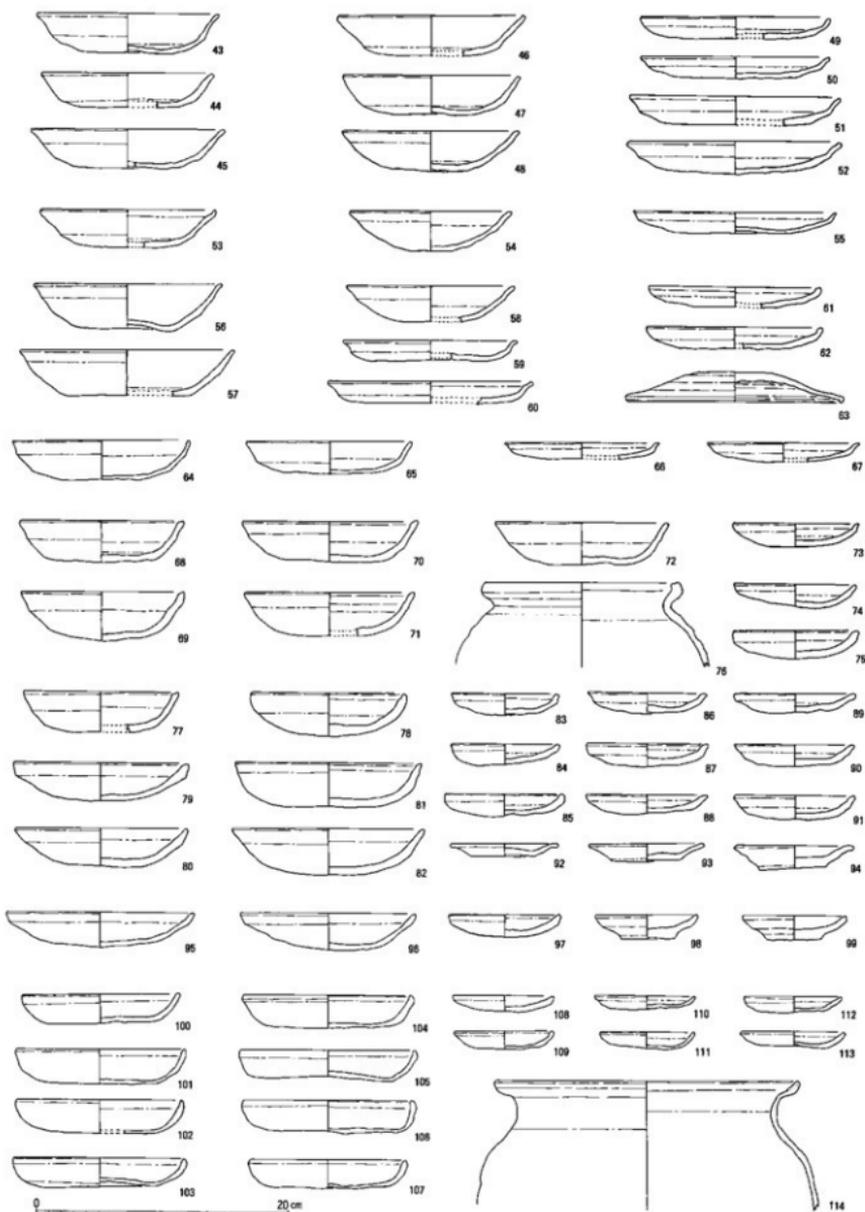
S K 7685・7663土師器 底径が小さく口縁部がまっすぐのびるもの以外に、口縁部と底部の境が明瞭でなく断面弓状の杯が多くなる(小皿に対して皿と呼ぶべきかもしれない)。(77・78)は口径12.4cmで他のものに比べややこぶり、口縁端部が凹むという特徴をもっており、齋宮以外の遺跡も含めてあまり例をみないものである。(79)の口縁端部も肥厚し、強いヨコナデにより外側に面をもっており特徴的である。(77~82)のS K 7685出土のものは前代同様に器壁が厚く、胎土も密ではあるが砂粒が多く混ざっているものである。S K 7663出土の(95・96)は断面弓状で口縁端部のみヨコナデするもので、その範囲も $\frac{1}{2}$ 以下と狭くなる。また、器壁も薄くなる傾向にある。口径は14cm~15cmで器高は2.8cm前後と浅くなり、より皿という感じが強くなる。

小皿は断面が弓状である。口径8.6cm~9.7cm、器高は1.7cm~1.9cmで、口縁端部のみヨコナデする。

口ク口土師器 小皿は器壁が薄く器高の浅い(92・93)とやや厚く器高の深い(94・98・99)がある。いずれも底部は糸切り未調整である。

#### (7) 鎌倉時代の遺物

S K 7668・7670土師器 この時期の皿は、ほぼ平坦な底部から口縁部がやや内湾気味に立ち上がるものが多い。器壁は薄くなり、底部より口縁部の方が厚く、端部は肥厚する。S K 7668出土のものは口縁端部の外面をヨコナデするものが多いのに対して、S K 7670出土のものは



第10図 第114次調査 遺物実測図 SK7634:43~52、SK7632:53~55、SK7633:56~63、  
SK7635:64~67、SK7651:68~76、SK7685:77~94、  
SK7663:95~99、SK7668:100~114

わずかに外面のみをヨコナデするものが多く、S K 7670出土の皿の方が新しい様相を示す。口径を比較するとS K 7668出土のものは14cm前後のものが中心で、S K 7670出土のものは13.0cm～13.5cmのものが圧倒的に多く、縮小化の兆しがうかがえる。S K 7670出土の(127)は、口縁部のヨコナデが2単位みられるもので、胎土も非常に細かい金雲母片を大量に含んでおり、かつ色調にもぶい橙色である。明らかに他の皿と異なるものでその特徴から中勢地域からの搬入品と考えられる。斎宮跡、あるいは南伊勢地域での出土例としても非常に稀なものである<sup>(1)</sup>。

小皿は前代のように器壁の厚い(108・115～117)もわずかに残るが、断面弓状で器壁の薄いものが主体となる。口径は7.5cm～8.4cmのものが多く、皿と同様に縮小化がみられる。

鍋は口縁部の折り返しは幅広く、折り返し部分にはヨコナデが施され、やや凹んだ状態になる。頸部はナデが施され、比較的長い。口縁部・頸部・体部の区別が明瞭なものである。S K 7668から口径24.2cmの(114)が出土している。

#### (8) 遺物包含層出土土器

「て」字状口縁皿  
コースター形皿

(135～137)はいわゆる「て」字状口縁小型皿である。また、(138・139)はコースター形皿で(138)には脚台がつく。これらは京都で出土する土師器皿と類似した資料で、胎土は非常に細かい金雲母片を含んでおり、S K 7670出土の(127)と似ている。色調は淡黄色である。こういったことから、京都産のものではなく、京都から波及した「かたち」をこちらで生産したものと思われる。なお、脚台のつく土師器小皿で一般的にみられるのは(144)のようなものである。

ロクロ土師器

小皿は調査区東端で遺物が集中する包含層出土のものである。様々な形態のものがみられるが、底部はロクロ回転糸切り未調整である。(141)の底部はやや突出する。

#### (9) その他の遺物

第114次調査で出土した遺物には多量の土師器類の他に特殊遺物とされるものが多種多様にある。その内訳は、緑釉陶器19片、貿易陶磁器(147～149など)70片、黒色土器1点、瓦器(145・146など)8点、製塩土器8点、土錘(174～176)3点、ミニチュア土器(152など)3点、円面硯(161・162など)12点、石硯1点、転用硯(163～165など)13点、漆付着土器(166～169など)7点、朱付着土器(166～169など)25点、かな習書土器と墨書土器(155～161など)44点、フイゴ羽口(177など)7点、軒平瓦片1点、石鍋(153)1点、温石(154)1点、サイコロ形土製品(150・151)2点、車輪文のタタキの壺(171～173)3点、鉄釘26本、金属製品(170)2点である。以下、主なものについて概説する。

金属製品

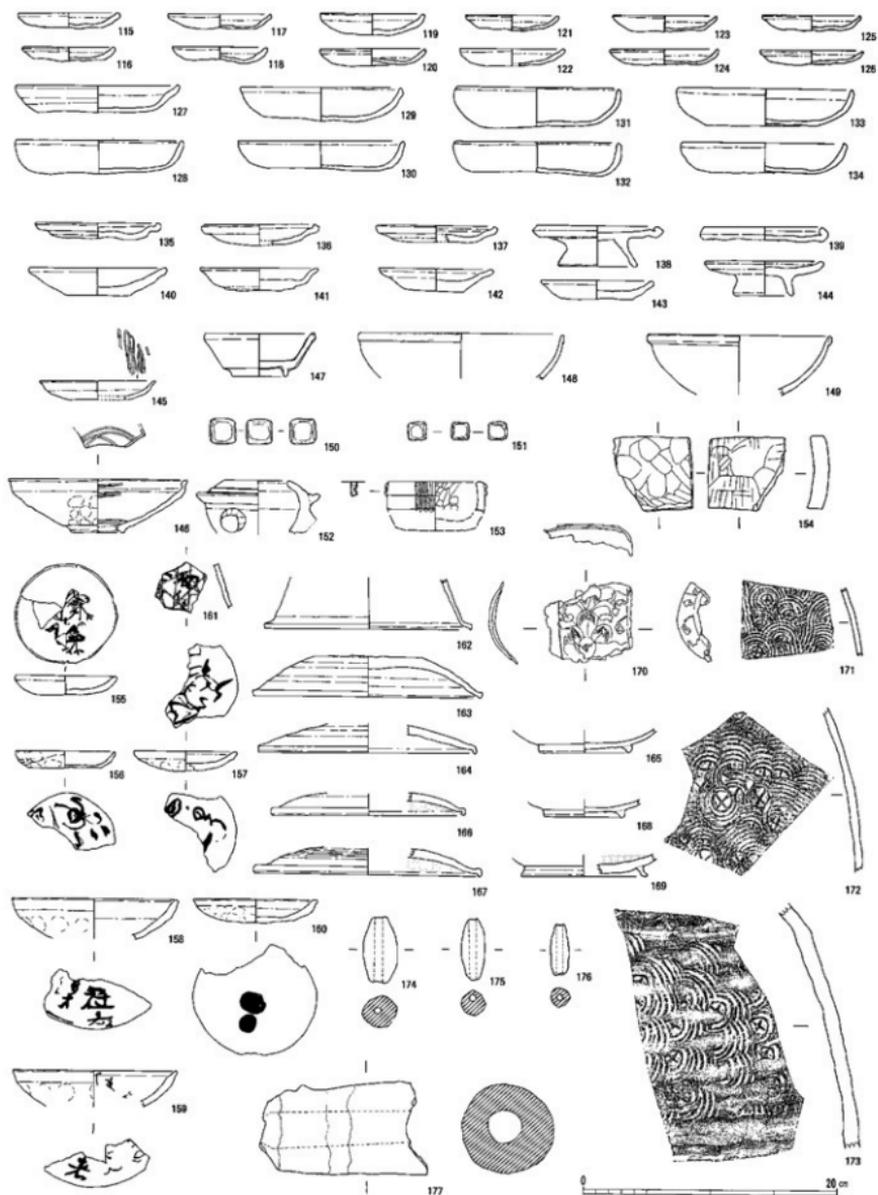
(170)は金属製のもので、毛彫や魚々子といった技法で文様を表現している。調度品に付随するものと思われる。

サイコロ形  
土製品

(150)は一辺2cm、(151)は一辺1.5cmの角がやや丸くなった立方体の土製品である。サイコロの目は表現されていないが、(150)には墨痕がわずかに残っており、墨で書かれていたかもしれない。

墨書土器

平安時代末期から鎌倉時代にかけての土師器杯・小皿の外面あるいは内外面にひらがなを習書したものが大半である。なかには、(155)のように鳥の絵を描いたものや文様や漢字の書かれたものもある。(161)は円面硯の脚の全体にわたって墨書された可能性のあるものの一部で「勅」と読めるかもしれない。



第11図 第114次調査 遺物実測図 SK7670:115~134、遺物包含層出土:135~144、  
特殊遺物:145~177 (170のみ1:2)

- ミニチュア (152)は土師器三足鍋、(153)は滑石製石鍋のミニチュアである。どちらも使用痕が認められる。滑石製石鍋のミニチュアの類別は大宰府の観世音寺出土品がある。<sup>(3)</sup>
- 温石 (154)は滑石製石鍋を転用した温石である。温石の出土例は少ないが、玉城町の岩出遺跡群の他、芸濃町の下川遺跡で滑石製石鍋を転用した温石が出土している。<sup>(4)</sup>

#### 4 まとめ

今回の調査により、方格地割の牛葉東ブロック内における櫛列S A 7000のほぼ全容を明らかにした。また、S A 7000に先行する掘立柱建物がこの区画内に存在することや、S A 7000に伴う特殊な掘立柱建物、平安時代後期の大型掘立柱建物なども確認され、さらには、平成6年度の第108次調査で不確定であった掘立柱建物の時期や規模も確定することができ、この区画内の様相がかなり明らかになってきた。平成7年度の調査概報において、鍛冶山西ブロックの調査成果などをもとに周辺の方格地割について試案がまとめられている<sup>(5)</sup>(以下、H7試案とする)が、今回の調査の知見から事実関係の変更も生じてきているので、改めて検討を行いたい。

##### (1) S B 7648柱掘形出土遺物について

#### S B 7648

##### 出土遺物

S B 7648柱掘形からは第9図にあるように土師器蓋・杯・皿、須恵器蓋・杯が一括で出土している。土師器は奈良時代的な様相を残しつつも平安時代的なものへと移行しており、〇〇時代という表現をするならば、奈良時代末期から平安時代初期ということになるか。須恵器は蓋と杯だけしか出土していない。蓋は天井部から口縁部にかけての屈曲部分外側の稜が明瞭ではなく丸く、屈曲も少ない。杯は高台の接地面が外端のみのものが1点だけであるが、他は下端全体で接地し、平らでやや高くなっている。また、口縁部は外傾し、まっすぐのびる。これらは、猿投窯産の製品ではなく、窯は確認されていないが県内の製品と考えられる。それ故に、当該時期の猿投窯産の製品に比べて口径が大きく、杯の底部が突出するものがあるなど古い様相を残しているであろう。あえて猿投窯の編年に求めるならば井ヶ谷78号窯式の時期に併行するものと思われる。最近の編年では井ヶ谷78号窯式の年代を800年～820年と考えている<sup>(6)</sup>。このような須恵器の年代観と土師器の年代観を合わせて考えるとS B 7648の時期は9世紀初め頃と考えられる。

##### (2) S B 7646～7648、S B 7658～7660について

S B 7658～7660は遺構の概要でも述べたが、建物の規模が桁行3間×梁行2間と小さいわりには柱掘形が一辺1.0m～1.5m前後、柱痕跡が径30cmと立派な建物であることや、櫛列S A 7000まで4.5m(15尺)しかなくこの区画の中で一番奥に位置する建物であることから通常の生活の空間としての建物よりは何か特殊な用途の建物が想定される。また、S B 7646～7648もほぼ同じ場所で3棟が重複する建物でS B 7658～7660と同時に建て替えが行われたと想定される。そのなかではS B 7648が最も新しい建物であり、遺物の出土状況は柱掘形に一括で埋められたような状況を示しており、建物の廃絶に伴う何らかの祭祀が行われたようである。

このS B 7648の時期、つまり、9世紀初め頃に退下した斎王を考えるとS B 7648・7660は平城天皇の斎王大原内親王の時期の建物と考えられる。そして、そこから遡るとS B 7647・7659は桓武天皇の斎王布施内親王、S B 7646・7658は桓武天皇の朝原内親王の時期の建物と考えられる。また、これらの建物の棟方向と櫛列S A 7000の方向

大原内親王  
布施内親王  
朝原内親王

が一致し、それぞれの柱掘形から出土する遺物の時期も一致することから、これらの建物と欄列 S A 7000 は同時期に存在したと考えられる。

さらに、S A 7000 に先行する規格性をもった掘立柱建物もあることも考慮すると、造斎宮長官に任ぜられた<sup>(4)</sup>785年と想定したい。以上のことを踏まえ、周辺区画を含めて考察を行いたい。

### (3) 欄列 S A 7000 に先行する時期

S B 0575・7654 7310 今回の調査では、欄列 S A 7000 に先行する掘立柱建物のうち、直接 S A 7000 と重複関係にあるものとして、S B 0575・7654・7310 がみられる。これらは北側の桁行筋を揃える建物で、建物の規模は異なるものの規格性をもった建物である。また、柱間は S B 0575 の梁行が 2.1m 等間である他はすべて 2.4m 等間である。

S B 7644・7645 さらにこの時期の建物として S B 7646～7648 と重複し、これらより古い掘立柱建物 S B 7644・7645 があげられる。S B 7644 の柱間は 2.4m 等間、S B 7645 の柱間は 2.7m 等間である。

これまでの調査の成果からは、奈良時代後期から平安時代初期にかけて展開される欄列や掘立柱建物、あるいは区画溝の造営尺は概ね 29.4cm～30.0cm/1尺と想定されており、これによれば、今回の掘立柱建物の柱間は 8 尺を中心として 7 尺あるいは 9 尺である。

H 7 試案によれば、牛業東ブロックの欄列区画(S A 7000・6999・2655・0587 からなる)と鍛冶山西ブロックの外郭欄列(S A 6760・6770・1411・南辺未検出)、外郭欄列張出(S A 2800)が造営当初から同時に存在しており(I-①期)、西加座南ブロックの S A 5840 からなる欄列区画は、欄列は 10 尺等間で構成されているが、その中に逆「L」字形に配置される S B 5780・5820 は柱間が 10 尺でないことを理由にやや遅れた時期(I-②期)を想定している。これらの点について検討してみたい。

I-②期という時期差の設定についての根拠は柱間が 10 尺でなく、6 尺～8 尺までのやや規模を縮小したものであるということである。しかし、次の理由により、この設定は成り立たないことが分かる。まず、今回の調査で明らかのように柱掘形の重複から S A 7000 より先行する掘立柱建物の柱間が 8 尺を中心として規模の小さいものであることが何よりもあげられる。次に、I-①期・②期を通じて鍛冶山西ブロックの外郭欄列の内側で内郭欄列の外側に存在したと想定する S B 7155・7160 はそれぞれの建物の四周に隅を接しない幅 70cm、深さ 40cm 前後の溝が巡るという特徴をもつ。そしてこの溝は建物の性格に特殊性を与える区画施設と考えられている。こういった、極めて特殊な溝が、西加座南ブロックの S A 5840 の周囲、S B 5780・5820 の周囲に存在するのである。柱間の規模のみが根拠と成り得ないことが判明したことにより、このような特殊性の共有という事象の方が重大である。よって、鍛冶山西ブロックの外郭欄列と外郭欄列張出さらに西加座南ブロックの S A 5840 からなる欄列区画は造営当初から同時に存在していたと考えられる。ただし、同時存在する区画内での建物の時期差をも否定するものではなく、それは十分に検討しなければならない。

次に、これらの欄列区画と牛業東ブロックの欄列区画が同時に存在したかどうかであるが、鍛冶山西ブロックの外郭欄列と外郭欄列張出さらに西加座南ブロックの S A

5840からなる柵列区画が同時に存在していた時に牛葉東ブロックには柵列区画に先行するS B 0575・7654・7310・7644・7645の建物群があり、同時存在はしないと考えた。また、S B 7644・7645が重複することより、少なくともその時期は2時期を想定できる。H 7 試案のI-①・②期とは違った意味での2時期の設定であり、平成6年度の第105次調査で検出しているS B 7165・7180の重複なども該当するであろう。今後、改めてそのような細かな重複関係の検討作業が必要である。

さて、鍛冶山西ブロックの外郭柵列と外郭柵列張出さらに西加座南ブロックのS A 5840からなる柵列区画と牛葉東ブロックの柵列区画が同時存在しない理由であるが、ひとつには柵列に先行する建物群があること。次に、鍛冶山西ブロックの外郭柵列が方格地割の規格からはずれ東西の一辺が約165mであり、平成3年度の第92次調査では、方格地割の区画道路の西側溝にあたるS D 6520が、柵列S A 2800と重複しており、しかも溝の方が新しいことが確認されていることである。整然とした区画道路による方格地割は先にS A 7000の造営の時期と考えた紀朝臣作良が造斎宮長官に任ぜられた785年に造営され、その規格からはずれず外郭柵列張出は、それに先行する造営であると解釈したい。

では、その鍛冶山西ブロックの外郭柵列並びに外郭柵列張出の造営はいつであろうか。この問題について、かつて平成2年度に第86次調査の結果をまとめた際に、西加座南ブロックにみられる柵列と掘立柱建物をI期からIV期の4時期に分類し、I期にあたるS A 5840からなる柵列区画の造営の時期を771年と考えた。それは、『続日本紀』771(宝亀2)年11月18日の条に「鍛冶正從五位下氣太王を遣して斎宮を造らしむ」とあることからである。これが造斎宮使の初見である。光仁天皇が770年10月1日に即位し、称徳天皇・道鏡による仏教政治を排除しつつある時代であり、斎王の卜定さえなかった称徳天皇の時代から心機一転、斎宮寮を造営し直した可能性は十分考えられるのである。この考え方は鍛冶山西ブロックの外郭柵列並びに外郭柵列張出の造営時期にそのままあてはめることが可能であり、整然とした方格地割に先行する区画として、造営が行われたのである。今のところその時期に西加座南ブロックのS A 5840からなる柵列区画と牛葉東ブロックの柵列に先行する掘立柱建物群が存在するであろうことは確認できる。

なお、鍛冶山西ブロックの外郭柵列並びに外郭柵列張出の造営は、斎王の卜定に先立つものであった。淳仁天皇朝以来暫く斎王は不在であったので、斎宮の地が荒れていたであろうことも考えられるが、もうひとつ大きな理由が考えられる。それは、奈良時代前期に形成されたとみられる古道の存在である。斎宮跡の西北西から東南東にかけて1km以上にわたって直進しており、鈴鹿関と伊勢神宮を結ぶ官道と推定されるこの道は、光仁天皇の斎宮寮造営によって少なくとも史跡東部では廃絶している。

このように光仁天皇の斎宮寮造営は、律令国家の情報・輸送の根幹施設である官道を付け替えるほどの大規模な工事であった。そして、772年11月13日に酒人内親王が卜定され、774年9月3日に群行している<sup>(12)</sup>。よって、工事にはかなりの期間がかけられ、鍛冶山西ブロックの外郭柵列並びに外郭柵列張出以外の周辺部の大部分は出来ていたことが想定される。既にH 7 試案でも指摘されているように、外郭柵列北辺・西辺は区画道路側溝から約24尺(約7m)ずつ均等に距離を隔てて建てられており、外郭

紀朝臣作良  
造斎宮長官

光仁天皇



柵列東辺 S A 6770 も、後に方格地割を確定する区画道路の西側溝 S D 6520 から同じ距離をおいており、鍛冶山西ブロックの外郭柵列並びに外郭柵列張出の造営された際に S A 6770 の東側に S D 6520 はまだ存在しないけれども、その北の西加座南ブロックは同時に存在していることは前述した通りであるが南の中西西ブロックも存在していた可能性がある。さらに周辺部がどのようなようであったかは、今後、当該時期の遺構を再度検討して考えなければならない。

#### (4) 柵列 S A 7000 の時期

今回の調査で柵列 S A 7000 のほぼ全容が明らかになった。そして、先にも述べたようにこの柵列が造られたのは、紀朝臣作良が造斎宮長官に任ぜられた 785 年と想定した。造斎宮長官の任命は 4 月 23 日のことであった。<sup>(13)</sup>既に、782 年に桓武天皇の娘である朝原内親王が齋王に卜定されており、<sup>(14)</sup>785 年 9 月 7 日に群行している。造斎宮長官の任命から群行までの期間は先の氣太王の造斎宮使の任命から酒人内親王の群行の時に比べてはるかに短い。よって、この紀朝臣作良による造営の重点は、鍛冶山西ブロックにおける外郭柵列張出を切り離し、区画道路の西側溝 S D 6520 を造り、整然とした方格地割を完成させたことにある。この時、鍛冶山西ブロックの北辺柵列は S A 6780 に、東辺の柵列は S A 6790 に、西辺の柵列は S A 2675 に変更される。

H 7 試案では、この外郭柵列東側の張出の切り離しの時期を II-①期として、平安時代前 I 期から前 II 期初頭に想定している。

平安時代前 I 期は猿投窯編年の黒笹 14 号窯式の時期に相当すると考えられており、実年代では 820 年～840 年頃、平安時代前 II 期初頭は猿投窯編年の黒笹 90 号窯式の初め頃に相当し、840 年～870 年頃のなかでも早い時期ととらえることができようか。仮に外郭柵列東側の張出の切り離しをこの時期に想定した場合には、大きな問題が生じる。824 年から 839 年の間、齋宮は度会の離宮院に移っており、<sup>(15)</sup>多気の齋宮には空白期間があることになる。839 年 11 月に度会の齋宮が火災により焼失してしまったので、再び多気に宮地を卜定して常の齋宮とした訳であるが、もし、火災がなければ多気へ齋宮が戻ったかどうか確証はない。よって、そのような時期にそれまでの柵列を壊して新たな柵列を設け、整然とした方格地割の齋宮寮を造営し直すということは考え難いのである。

次に、柵列 S A 7000 の存続期間であるが、H 7 試案では II-①期の段階で無くなっている。これは、第 108 次調査の報告を受けてのことであろう。第 108 次調査では、直接、S A 7000 の柱掘形との重複関係は不明としながらも、東西の柵列に対して南北に重なる溝 S D 7273 の存在を指摘し、この溝が前 I 期の後半に S A 7000 の廃絶に伴って掘削されたとしている。この溝は S D 7257・7259・7273 と一連の溝でつながると逆 L 字形になる溝である。これらの溝の出土遺物について再度検討してみた結果では、前 I 期に掘削が行われた事を積極的に実証する遺物はみられない。第 114 次調査では前 II 期の掘立柱建物 S B 7653 が S A 7000 と重複することが確認されており、前 I 期の段階ではまだ S A 7000 は存続しており、齋宮が度会の離宮院に移っている間に廃絶されたと考えることも可能である。

以上の点を考慮するならば、さらに前 II 期の段階で区画そのものを変更するような大規模な工事の想定もしにくく、鍛冶山西ブロックの外郭柵列張出を切り離し、整然

とした方格地割の造営が完成した時期として、紀朝臣作良が造齋宮長官に任ぜられた785年を考えるのが妥当であろう。

そして、奈良時代後期から平安時代初期にかけてS B 7646・7658は桓武天皇の朝原内親王、S B 7647・7659は桓武天皇の齋王布施内親王、S B 7648・7660は平城天皇の齋王大原内親王の時代の建物という変遷を想定したのである。さらに次の齋王としては、嵯峨天皇の仁子内親王が<sup>(19)</sup>811年に群行し、823年に帛京しており、<sup>(20)</sup>柵列S A 7000の存続している時代の齋王とすることができる。今回の調査ではS B 7646～7648に重複する東西棟建物S B 7649がこの頃の建物と考えられる。また、この建物の北梁行筋は第103次調査で検出された掘立柱建物S B 7047、第108次調査で検出された掘立柱建物S B 7300の北桁行筋とほぼ柱筋を揃える。これらの建物も前I期と考えられるので仁子内親王の頃の建物であろう。隣の鍛冶山西ブロックでこの頃の建物として考えられるものにはS B 1430・2680などがある。

なお、西加座南ブロックでは、朝原内親王の時代にS B 5819・6040・6020、布施内親王の時代にS B 5920・6037・6021、大原内親王の時代にS B 5800・6055・6028・6076といった変遷がたどれる。いずれにしろ、方格地割全体における掘立柱建物ををはじめとして遺構の詳細な検討が必要である。

#### (5) 柵列S A 7000廃絶以降の時期

柵列S A 7000廃絶の時期について、遺構の重複から確実にいえるのは前II期の新段階で猿投窯編年の黒笹90号窯式の中でも新しく位置づけられる頃に相当する。実年代では概ね870年～900年の間である。今回の調査ではこの頃の遺構としては、掘立柱建物S B 7653と土坑S K 7631～7634があるだけで、この牛業東ブロックでは西にあたる第103次調査や第108次調査の際の方が遺構が多い。これらの調査の際に多量に出土していた製塩土器や土錘が今回はほとんど出土していない点なども考慮すると区画内における機能の違いが反映されているのであろう。

今回の調査で、特徴的なのは平安時代後II期において、調査区の西端と東端で南北棟建物が幾度も建て直されることである。これらの建物の柱掘形は、0.7m前後の楕円形のものが多く、柱痕跡も25cm～30cmである。今まで齋宮で検出されているこの時代の掘立柱建物としては立派なものである。西端で6棟が重複し、東端で5棟が重複しているが、この時期は、猿投窯の編年では百代寺窯式に相当し、1000年～1060年頃と考えられる。この頃の齋王は、恭子女王から敬子女王まで6人の齋王がある。このことよりこの時代の建物はおそらく齋王が代わる度に建て替えが行われた建物と想定できよう。

#### (6) 遺物について

今回の調査では整理箱で約230箱分という大量の遺物が出土している。その中でも特筆すべき遺物がいくつかある。

(170)は平安時代末期の土坑S K 7663から出土したもので、金属製である。2枚が重なっているようである。文様は花卉が描かれているようで、魚々子地に毛彫で花卉を表現している。何かは限定できないが調度品の飾りの一部ではなかろうか。11世紀後半頃のものである。平成6年度の第108次調査でも調度品の一部と思われる金銅製金具や銅製鈍尾が出土しているが、このような文様をもつ製品は初出である。

仁子内親王

恭子女王から  
敬子女王

毛彫や魚々子

## サイコロ形 土製品

(150・151)はサイコロ形土製品で、平安時代末期の土師器皿を大量に含んでいる遺物包含層から出土している。11世紀後半頃のものともみてよからう。目が表現されていないのでサイコロではなかった可能性もある。サイコロには、土・木・骨・角・牙で作られたものがあるが、正倉院に伝世している聖武天皇ご遺愛品の中にも象牙製の骰子がある。その他、出土品では広島県の草戸千軒町遺跡で鎌倉時代の骨製のもの、鎌倉市の蔵屋敷遺跡や千葉地遺跡でも鎌倉時代の骨製のものが出土している。土製のもの、平安時代末期のものには、大分県宇佐市の宇佐弥勒寺旧境内出土の例がある。

もし、今回の出土品がサイコロであれば、今回の調査地が11世紀後半にはかなり私的な空間であったと想定することも可能であろう。

今回の調査では13世紀代の遺物が土坑から出土している。S K 7668出土のものは口径が13cm後半～14cm前半のものが中心で、重量は100g～110g、S K 7670出土のものは口径が13cm前半のものが圧倒的に多く、縮小化のきざしがうかがえ、重量は90g～100gになる。このような傾向は玉城町の岩出遺跡群出土の南伊勢系土師器皿・小皿の変遷を考察した伊藤氏の分析結果とも一致する<sup>(26)</sup>。なお、S K 7668から土師器鍋(114)が1点出土している以外はすべて皿・小皿である。今回の調査では平安時代初期から鎌倉時代にいたるまで煮炊具はほとんど出土していない。牛業東ブロックの中での機能の違いを反映しているであろう。

S K 7668からは、墨で鳥の絵を描いた小皿が出土している。墨で描かれた鳥の例としては、第86次調査で奈良時代後期の溝から出土したものに次いで2例めである。

## 課 題

なお、本稿における猿投窯の編年ならびに年代観は、齊藤孝正・後藤健一編『須恵器集成図録』第3巻東日本編Ⅰによっている。その結果として、従来の斎宮の編年の年代観とは、奈良時代中期から平安時代前Ⅱ期では10年～20年、平安時代中期から末期では40年～60年古く考えており、1984年に提示された「斎宮の土師器」における編年観とズレが生じている。従来、奈良時代では、後期にあたる遺構が多かったり、平安時代では中期にあたる遺構が少ない傾向にあったが、突き詰めれば編年観のズレの問題が関連しそうである。これらの編年観の問題は、改めて検討しなければならないと考えるが本稿では、ズレがあることを述べるだけにとどめておく。

最後に、今回の第114次調査の概要を報告するにあたって新たな知見からH7試案を再検討する必要が生じた。今回は、主に遺構の重複を重視し、そこから遺構の変遷を考えてみた。また、その遺構の変遷と奈良時代後期から平安時代初期にかけての文献記事との対比を試み、斎宮寮の造営、方格地割の成立の問題をも考察した。しかしながら、まだまだ、方格地割全体について個々の遺構を細かく分析・検討していかなければならないという今後への大きな課題も生じたように思われる。また、その前提となる斎宮の土器の編年の再整理も必要な時期になってきていると思われる。斎宮跡の発掘調査が始まって四半世紀が経過し、資料の蓄積も増えてきており、今、調査研究にあたっている我々の責務は大きいと考える。

(上村安生)

(註)

- 1 従来の発掘調査概報では須恵器杯・杯蓋などの成形技法でヘラケズリを行っているものに対して「ロクロケズリ」という表現を用いてきているが、成形技法に轆轤を用いているとは判断し難く、回転台の回転力を利用したヘラケズリと判断し、「回転ヘラケズリ」という表現を本稿では用いている。
- 2 伊藤裕偉 「中世前期における伊勢の土師器Ⅲ」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論叢』 関西大学 1993
- 3 森田 勉 「滑石製容器——特に石鍋を中心として——」『佛教藝術』148号 毎日新聞社 1983
- 4 伊藤裕偉 「岩出地区内遺跡群発掘調査報告——度会郡玉城町岩出所在、チカノ辻・角垣内・蚊山地区の調査——」三重県埋蔵文化財センター 1996  
下川遺跡の出土例については伊藤裕偉氏にご教示いただき、三重県埋蔵文化財センターにて実見させていただいた。
- 5 赤岩 操 「第109次調査」『史跡斎宮跡平成7年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 1996
- 6 齊藤孝正・後藤健一 「須恵器集成図録」第3巻東日本編1 雄山閣出版 1995  
以下、本文中には註を付さなかったが、猿投窯編年の年代観は本書による。
- 7 『続日本紀』延暦四年九月己亥条。
- 8 『続日本紀』延暦四年四月丁亥条。
- 9 『続日本紀』宝亀二年十一月庚子条。
- 10 『続日本紀』宝亀元年十月己丑条。
- 11 『続日本紀』宝亀三年十一月己丑条。
- 12 『続日本紀』宝亀五年九月己亥条。
- 13 註8に同じ。
- 14 『続日本紀』には記録を欠くが『一代要記』には延暦元年八月一日に卜定の記載がある。
- 15 註7に同じ。
- 16 『類聚国史』神祇部四 伊勢斎宮 天長元年九月乙卯条。
- 17 『続日本後紀』承和六年十一月癸未条
- 18 『続日本後紀』承和六年十二月庚戌条
- 19 『類聚国史』神祇部四 伊勢斎宮 大同五年四月戊子条。
- 20 『類聚国史』神祇部四 伊勢斎宮 弘仁十四年六月丙戌条。
- 21 『日本紀略』、「大神宮諸雜事記」による。
- 22 『東大寺獻物帳』『寧樂遺文』中巻。
- 23 福島政文「第IV章遺物 5骨角製品」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ 北部地域南半部の調査』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1994
- 24 「蔵屋敷遺跡」鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会 1984  
『千葉地遺跡』千葉地遺跡発掘調査団 1982
- 25 『弥勒寺』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989
- 26 註4に同じ。

#### 参考文献

- ① 鎌原正治「草戸千軒町遺跡出土の甕」『草戸千軒』No144 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1985
- ② 田阪仁・泉雄二「国史跡斎宮跡調査の最新成果から—史跡東部の区画造営プランをめぐって—」『古代文化』第43巻第4号 古代学協会 1991
- ③ 榎村寛之「文献より見た斎宮の構造についての覚書—発掘成果との対比の試み」『斎宮歴史博物館研究紀要2』斎宮歴史博物館 1993
- ④ 榎村寛之「遺と蔵—文献より見た斎宮についての覚書2」『斎宮歴史博物館研究紀要6』斎宮歴史博物館 1997  
榎村氏には墨書土器の判別について御教示いただいた。

## Ⅱ 第115次調査

(6ADK 上園地区, 6ADL 宮ノ前地区)

### 1 はじめに

#### 経 過

平成8年度第2回目の計画調査は、近鉄斎宮駅北側一帯の遺構の残存状況を確認するために、昨年度の第111次調査の成果をふまえたうえで、遺構の密度やその分布の状況を把握することを目的として実施した。調査は第111次調査で遺構が残存していることが確認された地点のうち、奈良時代古道と類似した傾きをもつ溝が検出されたEトレンチ南端、さらに奈良時代後期の竪穴住居が検出されたDトレンチ中程を重複させて、第111次調査で行った南北方向のトレンチに対して今年度は、基本的に幅4mの東西方向のトレンチを2か所に設定した。

当該地ではこれまでに史跡範囲確認のための昭和48年度からの第8次・第9次調査、昭和57年度の第47次調査といったトレンチ調査を主として行ってきた。上園地区では昭和58年度の第49次調査、平成元年度の第82次調査、宮ノ前地区では昭和63年度の第78次調査、また内山地区では平成3年度からの第93次・第95次・第99次調査が面的な調査として実施されている。こうしたこれまでの調査成果から当該地は旧水田耕土下から瓦粘土採掘をしたことが知られており、遺構の残存状況は極めて悪い。しかしながらそうした擾乱された中でも部分的に遺構の残存する地区が残っており、昨年度の第111次調査の10か所のトレンチでその分布がかなり明確にされた。

昨年度の南北方向のトレンチ調査でも、方格地割北西隅4区画が一辺約120mを基準とする方形区画に分割する区画道路および両側溝が確認されておらず、この点についても今回の調査において解明されることが期待された。



第13図 第115次調査 調査区位置図 (1:2,000)

## 2 第115-1次調査(Kトレンチ)

第115-1次調査(Kトレンチ)は、昨年度の第111-2次調査Eトレンチで確認した、奈良時代古道と類似した傾きの溝の延長をさらに確認するために、Eトレンチより西へ8m、さらに東へはFトレンチまでの56mにわたり、幅4m×68mのトレンチ約272㎡の調査区を設定した。

遺構検出面は地表面から約30cmで、暗灰褐色粘質土の地山面に達する。この地山面が確認できるのはトレンチ西半と、上園・宮ノ前の字界である畦の下のみで、東半は大規模な粘土採掘による攪乱坑により、深い場所では現地表面から1.75mの深さまで粘土採掘されており、遺構が削平されていた。この調査区内で確認された遺構には、掘立柱建物4棟、井戸1基、土坑4基、溝8条がある。

### (1) 平安時代前期の遺構

掘立柱建物3棟、土坑1基、溝1条がある。

- S B 7719 調査区東半で北妻2間と桁行1間のみを検出した南北棟建物で、柱間は桁行1.3m、梁行1.7m等間である。柱掘形は約40cmの略方形、柱痕跡は径約20cmでN16°Eの棟方向である。
- S B 7720 調査区東半で南北棟建物の北妻2間のみを検出したものである。柱間は2.1m等、柱掘形は約40cmの方形、柱痕跡は径約20cmで棟方向はN2°Eである。
- S B 7722 粘土採掘の攪乱の著しい調査区東半において、上園と宮ノ前の字界となっている畦の下は地山面が残存しており、わずかではあるが遺構が認められる。削平されていなければS B 7722の柱穴も残存していたものと思われるが、北東隅の3柱穴を検出したのみである。柱掘形約50cmの方形、柱痕跡径約20cmで、柱間は2.1m等間、N9°Eの棟方向をもち、北東隅の柱掘形より緑釉陶器碗の高台が出土している。
- S K 7721 調査区東半、北辺近くにある土坑で、東半分を攪乱坑により破壊されている。やや東西に長い楕円形である。遺構検出面からの深さは約30cmで、土師器杯破片が出土している。
- S D 7712 調査区西端で検出した南北溝である。上端幅1.3m、下端幅約40cm、N16°Eの向きで、溝底のレベルはほぼ平坦であり、勾配は認められない。

		遺構の種類						
		S		B	S E		S K	S D
平	前期	7719	7720	7722			7721	7712
	後期	7715					7717	7714
安	末期				7710		7716	7470 7718
鎌倉時代								7468 7469 7471
時期不明							7711	7713

第4表 第115-1次調査 時期別遺構分類表

## (2) 平安時代後期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物1棟、土坑1基、溝1条がある。

S B 7715 調査区西半で検出した南北棟建物である。S B 7719と同じく北妻と桁行1間分を検出したのみで、桁行2.3m、梁行2.1m等間、棟方向はN16° EとS B 7719と同方向を示す。柱掘形は約40cmの略方形で、柱痕跡径は約20cmである。

S K 7717 調査区西半、南端で検出した1.2m×0.5m、遺構検出面からの深さ約23cmの土坑である。土師器、灰釉陶器輪花椀・段皿、山茶椀破片が出土している。

S D 7714 調査区中央で検出した溝で、幅約2.2m、遺構検出面からの深さ約25cm、E20° Sの傾きで緩やかに北へ傾斜する溝である。土師器杯・緑釉陶器破片が出土した。

## (3) 平安時代末期の遺構

この時期の遺構には、井戸1基、土坑1基、溝2条がある。

S E 7710 調査区北西隅で $\frac{1}{4}$ のみを検出した鎌倉時代の井戸である。狭窄なため調査が困難で、遺構検出面で推定規模東西1.5m×南北0.8mの規模を深さ約1.7mまでで掘削を止めている。土師器杯・皿、山茶椀破片が出土している。

S K 7716 調査区中央で、S D 7714と攪乱坑との間でわずかに残存していた土坑で、土師器杯・皿破片が出土している。

S D 7470 昨年度のEトレンチで検出した溝の延長約8mを検出したもので、総長約13.5mとなる。上端幅約1.0m、下端幅約60cm、遺構検出面からの深さ約50cmで、昨年度Eトレンチで検出した4.5mで測った方向よりさらに傾きが強く、E25° Sの向きをとり、緩やかに南へ傾斜している。

S D 7718 調査区東半で検出した、上端幅30cm、下端幅20cm、遺構検出面からの深さ約6cmの細い溝である。南半を攪乱坑により削平されているが、E43° Sの傾きで緩やかに北へ傾斜する溝である。

## (4) 鎌倉時代の遺構

この時期の遺構には、溝3条がある。

S D 7468 昨年度のEトレンチで検出した溝の延長約6.2mを検出したもので、総長約11.5mとなる。上端幅約25cm、下端幅約20cm、遺構検出面からの深さ約10cmで、E21° Sの傾きをとり、緩やかに南へ傾斜する溝である。

S D 7469 同じく昨年度のEトレンチで検出した溝の延長で、S D 7470より新しい溝である。傾きはS D 7470と同じE25° Sである。

S D 7471 この溝は昨年度のEトレンチ内で西進せず止まる溝であることがわかっていたが、今回調査区をさらに西へ拡げてもその延長を検出することはなく、規模、傾き等について新しい成果を得ることはなかった。

## (5) 時期不明の遺構

土坑1基、溝1条が時期不明の遺構であった。

S K 7711 調査区南西隅で検出した土坑で、土師器細片を多く出土するものの、時期決定できる遺物がなく、時期は不明である。遺構検出面からの深さ約35cmである。

S D 7713 昨年度のEトレンチ西壁際で東端を検出していた溝であるが、上端幅60cm、下端幅30cm、遺構検出面からの深さ約50cmで、N39° Wの傾きで南へ傾斜するものである。遺物は出土していない。



## (6) 出土遺物

出土遺物の多くは遺構に伴うものは細片ばかりで、残存状況の良いものほとんどは攪乱坑から出土したものである。以下に特筆される遺物を中心に概述する。

### 須恵器

(1)は杯で、口径14.6cm、器高3.2cmである。内面・口縁部内外面はクロコナデ、口縁立ち上がり部をヘラケズリ、底部はヘラケズリ後ナデ調整する。

### 土師器

(2~4)は杯・椀である。(2)は口径12.6cm、器高2.9cmの杯で、口縁部をヨコナデ、内面はナデ、底部はオサエ後、荒くナデ調整する。(3)は口径15.4cm、器高3.5cm、口縁部内外をヨコナデ、内面をナデ、底部をオサエ後丁寧にナデ調整する。(4)は椀で口径17.4cm、器高4.4cm、口縁端部のみヨコナデ、口縁部外面はオサエである。内面については、器表面の剥離が著しいため調整不明である。

### 灰釉陶器

(5)の輪花皿と(6)の椀はS B 7719の脇の柱掘形から出土した。うつ伏せた(6)の椀の下に上方に向けた(5)輪花皿が口縁を合わせた形で出土したものである。(5)は口径15.0cm、器高2.9cm、高台径6.8cm、口縁部内外面漬け掛けによって施釉される。口縁端部の4か所に輪花表現がみられる。(6)は口径15.8cm、器高4.7cm、高台径が7.2cmの椀で、口縁内外面に漬け掛けによる施釉があり、一部に灰釉の上から自然釉がかかる。高台内面に墨書がみられ、明確ではないものの「高」と判読されるのではなかろうかと思われる。

### 墨書土器

もう1点の墨書土器(7)は、高台径6.6cmの椀の高台内面に文字が見られるが、判読は不可能である。

### 緑釉陶器

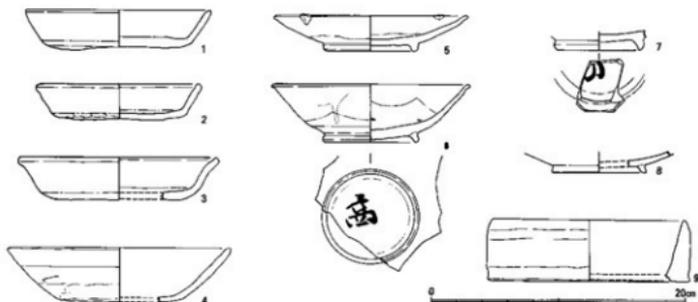
22点出土しているが、いずれも細片ばかりである。(8)はS B 7722の柱掘形から出土したもので、高台径7.4cm、残存高1.8cmの椀類底部である。底部内外面に三叉トチン痕がみられる。

### 製塩土器

(9)は口径15.0cm、器高5.0cm、底径15.4cmである。胎土は粗く、砂粒を多く含んでいる。外面はオサエ、内面はナデ、底部は欠損のため不明である。

### その他の遺物

特筆される遺物としては上記の他に、判読不明の墨書土器1点、黒色土器片4点、製塩土器4点、土錘3点、土製品1点、鉄製品として、釘9点、金錆塊1点の計10点、砥石片1点があげられる。いずれも遺構に伴うものではなく、遺物包含層や粘土採掘坑からの出土によるものであり、より多くの遺構が当該地周辺にも存在したことをうかがわせるものである。



第15図 第115-1次調査 遺物実測図 包含層他：1～7・9、S B 7722：8

### 3 第115-2次調査（Lトレンチ）

第115-2次調査（Lトレンチ）は、先述の第115-1次調査（Kトレンチ）の南方約68mに位置する。昨年度の第111-2次調査（Cトレンチ・Dトレンチ）、昭和50年度の第9-10次（Zトレンチ）に重複させて、周辺に比べて現況レベルが高いこの地点では、遺構の残存度も高いのではないかと推測から、昨年度Dトレンチで確認した奈良時代後期の竪穴住居をさらに拡張して調査するために幅4mのトレンチを畦を挟んで東へ80m、畦より西へはCトレンチで遺構の分布が稀薄であることが判っていたので、トレンチ幅を2mに短縮し、長さ10mの調査区を設定し、面積340㎡を対象に調査を実施した。

遺構検出面は畦より東の幅4mトレンチの西半で現地表面から約50cm、東半は粘土採掘の攪乱坑により遺構は全壊する。畦より西の幅2mのトレンチでは、現地表面から約35cmで遺構検出面となる。地山は暗灰褐色粘質土である。この地山層の下に明黄橙色粘質土が堆積しており、部分的に黒ボク土が厚く堆積していたために、粘土採掘しかけたもののその攪乱坑は浅く、途中で採掘を止めた様子が窺われる。したがって攪乱をまぬがれた調査区中央部・Dトレンチ付近のみ遺構がわずかに残存する。この調査区内では、竪穴住居1棟、掘立柱建物3棟、土坑10基、溝7条が確認された。

#### （1）奈良時代の遺構

S B 7465

昨年度の第111-2次（Dトレンチ）調査で東約½を確認した奈良時代後期の竪穴住居である。今回のトレンチ調査で東西幅が4.0mであることが判明した。床面には竪穴住居以前の土坑S K 7727・7728が検出された。竪穴住居の床面は遺構検出面から約40cmの深さで、焼土は遺構検出面から約30cm下でみられたが、いずれの方向にも偏らず、ほぼ中央で観察された。土師器杯・椀・皿・甕・長胴甕、須恵器甕等が出土する。

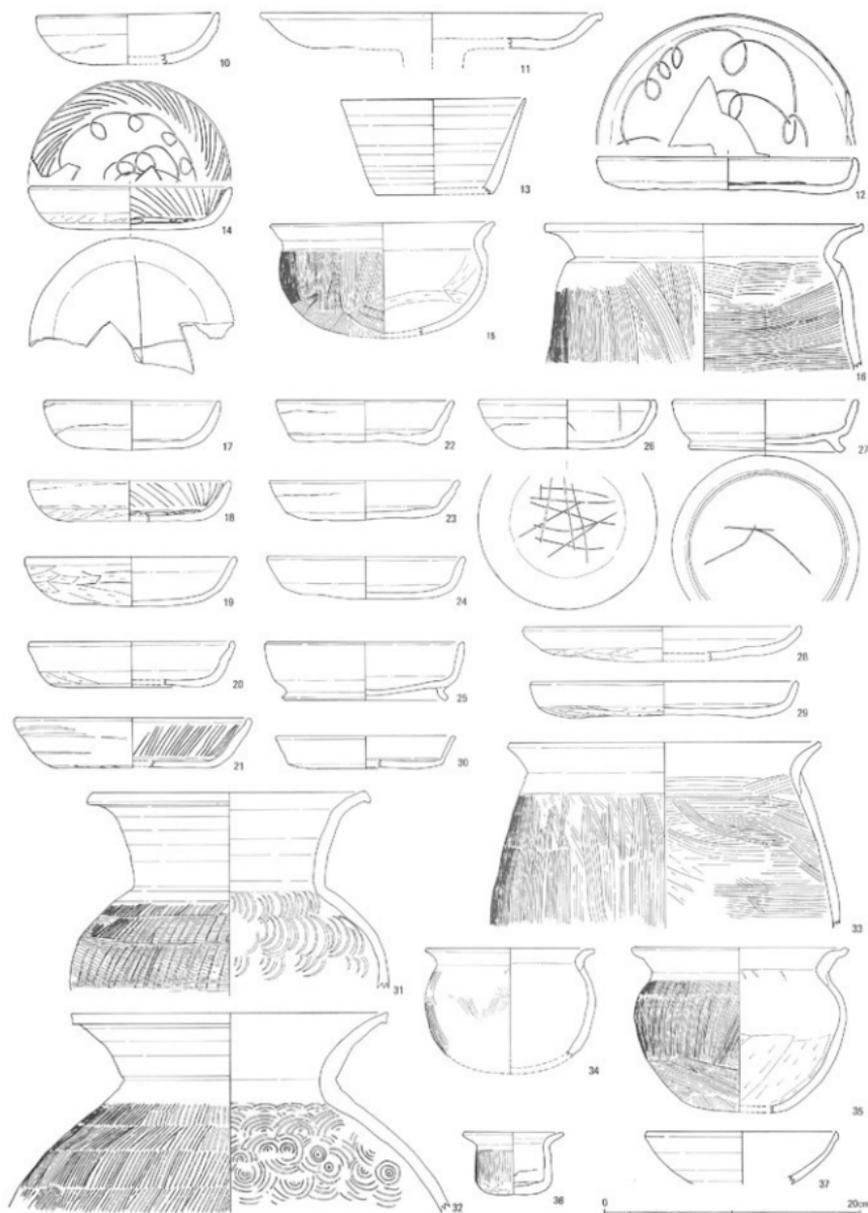
S K 7726

S B 7465の北隣で検出した、東西1.9m×南北0.8mの長楕円形の土坑である。遺構検出面からの深さは約35cmで、土師器杯・皿・甕、須恵器甕の細片が出土している。

		遺 構 の 種 別					
		S	B	S	K	S	D
奈良後期		7465					
奈良時代				7726 7727 7728 7729 7734 7735 7740			
平	前Ⅱ期	7730 7731				7733 7736	
	前期		7466				
安	後期					0392	
鎌倉時代				7732			
時期不明		7725		7738		7737 7739 7741 0393	

第5表 第115-2次調査 時期別遺構分類表

- S K 7727・7728 S B 7465の床面で検出した土坑である。それぞれ径0.9m、1.1mの略円形の土坑である。遺構検出面からの深さ約50cmで、S B 7465の床面から約17cm下がる。黒褐色土に淡黄褐色粘質土の粒が少量混じる。土師器杯・高杯脚部・甕・甕の破片が出土する。
- S K 7734 調査区中央部で検出した土坑で、1.3m×1.0mの略方形の土坑である。上面は攪乱坑により削平されていたが、遺構検出面から約15cmほどが残存していた。土師器甕破片が出土した。
- S K 7735 同じく調査区中央部、第9-10次調査の東隣で検出した土坑で、この付近は粘土採掘の際、掘りかけて掘削を止めているため深い遺構については残存している。S D 7739に切られており、南半分が残存する。土師器杯等の細片が多く出土した。
- S K 7740 調査区中央部北辺で検出した土坑で、上面が著しく削平・攪乱されていたが、遺構検出面からの深さが約50cmと比較的深かったため、底の方から土師器杯・皿、須臾器杯などわずかではあるが良好な状態で遺物が出土した。SK7740から約2m東では攪乱土中より焼土塊が出ており、この付近に堅穴住居が存在した可能性がうかがわれる。
- (2) 平安時代前期の遺構
- S B 7730・7731 調査区西半で検出した掘立柱建物で東西棟建物の南側柱を3間検出したものである。柱間は2.0m等間、棟方向はいずれもE 0°Wである。梁行を検出していないが、梁行2.5m以上をとらない限り南への展開は考えられず、北へ延びる建物と思われる。柱掘形は約60cmの方形、柱痕跡は約径20cmである。SB7730がSB7731に先行して建てられる。
- S K 7466 昨年度の第111-2次(Dトレンチ)で検出した土坑の東延長を検出したものである。今回の掘削で南北約2.8mの土坑であることが判明し、土師器杯細片が出土した。
- S D 7733 調査区西半で約6mを検出したSB7730より後出の溝である。土師器杯片が出土した。
- S D 7736 調査区中央部で検出したSD0392の西側に沿う南北溝である。約3mを検出した。
- (3) 鎌倉時代の遺構
- S K 7732 調査区西半南側壁で検出した土坑で、北へ半径1.2m×東西直径2.2mの略円形の規模である。壁際で上端から下端にむけてすり鉢状に径が狭まっていくため狭窄で調査不可能となり遺構検出面からの深さ約70cmで掘削を止めた。このレベルで土師器小皿、山茶碗、陶器瓶の体部破片等が出土しており、遺構の形状からみると井戸かとも考えられるが、遺物からみると中世墓の可能性も否定できない。
- (4) 時期不明の遺構
- S B 7725 調査区西端で検出した掘立柱建物で、東西柱間2.1m、南北柱間1.3m、約30cm四方の略方形の柱掘形に径10cm強の柱痕跡をもつ。棟方向はN17°Eをとるが、時期決定可能な遺物の出土、他の遺構との切り合いがなかったため時期不明である。
- (5) 出土遺物
- S K 7740土師器 (10)は杯で口径14.0cm、器高4.0cm、口縁部から内面にかけてヨコナデ、オサエ後ナデ調整する。外面に粘土紐巻き上げ痕が残る。(11)は高杯杯部で、口径27.0cm、残存高2.8cm、器表面の剥離が著しく調整が不明瞭であるが、口縁部のみヨコナデ、内面はミガキ、外面は不定方向のケズリを施したものとみられる。(12)は皿で、口径20.4cm、器高2.9cmである。口縁部をヨコナデ、外面はオサエ後不定方向のケズリ、内面は不定方向のナデ後、底部に螺旋暗文を2段施す。
- 須臾器 (13)は杯で、口径14.8cm、器高7.6cm、外面立ち上がりより下ろを回転ケズリ、口縁



第16图 第115-2次調査 遺物実測図 S K 7740 : 10~13, S K 7729 : 14~16  
S B 7465 : 17~35, 包含層 : 36・37

部から内面にかけて回転ナデする。

S K 7729土師器 (14~16)はS B 7465の北辺と重複し、わずかに残った土坑の出土土器である。

(14)は杯で口径15.6cm、器高3.4cm、口縁部をヨコナデ、底部外面はケズリ後ヘラ状工具で「×」らしき記号が施され内面には丁寧なナデ後、左向き放射暗文を1段、底部に螺旋暗文を2段施す。(15)は鍋で口径17.6cm、残存高8.9cm、底部を欠損する。体部は縦方向のハケメ、底部は横方向のハケメ、口縁部はヨコナデ、内面は荒い板ナデを施す。(16)は長胴甕で口径25.0cm、残存高11.1cmである。体部は外面に縦方向、内面は横方向のハケメ、口縁部はヨコナデ調整する。

S B 7465土師器 (17~35)は昨年度検出のS B 7465の西半分を調査して出土したものである。

杯は基本的に口縁部をヨコナデ、底部にケズリを施すb手法で調整される。一部に口縁部をヨコナデ、底部をナデ調整するe手法のものもみられるが大半はb手法によるもので、底部のケズリも口縁部下半に及ぶものが多い。口縁部内面に放射暗文、底部内面に螺旋暗文2段を施すものが多い。(26)の杯底部外面には、ヘラ状工具による記号が、また(27)の杯高台内側にも同じくヘラ状工具による記号が施され、(27)の記号は「大」とも見えるが、線画が文字には不自然であり、三本線による記号と考えられる。皿についてもb手法により調整される。

土師器甕も小型(34)、中型(35)、長胴甕(33)と各種出土する。

#### 須恵器

(30)は杯で口径14.0cm、器高2.6cmである。底部外面はヘラ切り後荒いナデ、口縁部から内面は回転ナデ調整される。また甕の破片も多く出土している。

#### その他の遺物

緑釉陶器片16点、青磁片1点、白磁片(37)3点、ヘラ描き土器計7点、ミニチュア土器(36)、土師器鍋1点、漆附着土器1点、フイゴ羽口1点、釘等の鉄製品10点などが出土した。

#### 4 まとめ

#### 遺構の分布

昨年度の第111次調査の成果から遺構の残存状況を推定し、第115次の調査区を設定したが、第115-1次(Kトレンチ)場所においては、予想した遺構分布密度がさほど高くなく、むしろ攪乱坑による遺構破壊度の方が勝る地点であること、第115-2次(Lトレンチ)場所の現況地表面の高さは遺構面残存のためのものではなく攪乱坑上への盛土・整地によるものであることがわかった。また、黒ボク土の堆積が厚い箇所では粘土探掘を嫌った感がうかがわれる。

#### 区画道路・側溝

今年度の調査は、昨年度の第111次調査による区画東西道路および両側溝の未検出という成果をうけて、区画南北道路および両側溝についてもその有無を確認することが主たる調査目的の一つとされた。その結果、区画道路および両側溝の推定延長線が今回の調査区内で遺構面が残存する地点であったにもかかわらず、方格地割の方位(N4°W)に沿う南北方向の溝は検出されなかった。この方格地割北西隅の4区画については、中央を4分割する区画道路及び両側溝がなく、4区画を一区画としてとらえ、使用されていたのではないかと考えられる。また掘立柱建物の棟方向についても、奈良時代古道より近いKトレンチでは古道の方位に直交する棟方向で、そして古道からも方格地割区画道路からもやや距離をおくLトレンチでは正方位で建てられる掘立柱建物の分布にも注目して、当地域の特殊性・役割についての考察を、今後の調査成果に期待して進めていきたい。

(赤岩 操)

## Ⅳ 第116次調査

(6ADG 篠林, 6ACE-L-N 塚山, 6ADI-A・C 上園, 6ADM-A 内山,  
6ADI-Q 宮ノ前, 6ADI-M・N 上園, 6ADI-L 上園, 6ADH 篠林)

### 1 はじめに

#### 経 過

今年度から開始する近鉄斎宮駅北側における史跡整備（史跡等活用特別事業）工事に伴い、今年度の整備内容である方格地割北西隅の4区画の北辺・西辺外周道路を復元整備するにあたって、この外周道路の実態を発掘調査によって確認することを目的として第116次調査を実施した。

これまで、この近鉄斎宮駅北側では、先の第115次調査のところでも述べたようにトレンチ調査を主体とし、遺構残存が確認された地点においては面的調査を実施してきているが、方格地割の区画道路については、平成4年度に方格地割の東から7列目に相当する木葉山西ブロックでの八脚門の検出により東西7列×南北4列の規模が考えられるようになったが、こうした調査成果から推定延長線のみでしかとらえていなかった当該地区の実態解明のため、北辺道路沿線に3か所、西辺道路沿線に1か所、区画北西隅で1か所の計5か所、面積765㎡の調査区を設定した。



第17図 第116次調査 調査区位置図 (1:2,000)



第18回 第116-1次調査 遺構実測図 (1 : 200)

## 2 第116-1次(Mトレンチ)調査

方格地割の北辺道路側溝の直線延長線と木葉山西ブロックの西辺区画側溝の推定延長線との接点を含み、現在も町道斎宮北12号線と、上園・篠林の字界になる「斎王の森」への道との分岐点周辺の448㎡を調査した。

この周辺ではこれまでに昭和49年度の第8-4次調査(Iトレンチ)をはじめ平成2年度に第87次調査、平成5年度に第101次調査を実施しており、今回の調査区はこれら3か所の既調査区を結ぶものである。今回調査区との接点は持たないが、周辺で実施された調査には第8-5次(Jトレンチ)、第49次、第82次調査等が実施されている。以下、遺構、遺物の順で時期別に概述する。

### (1) 奈良時代の遺構

この時期の遺構は掘立柱建物4棟、櫓列1条、土坑9基を検出した。

S B 6090・6091

第87次調査で検出した掘立柱建物を再掘したもので、規模等に変更はみられない。

S B 7755

調査区中央北辺で検出した掘立柱建物で、桁行1間以上×梁行2間に西面庇を伴うものと考えられる。柱間は桁行2.4m×梁行2.5m、西庇出は2.4m、棟方向はN10°Wと、時期は遡るものの第87次調査のS B 6090・6091にはほぼ直交する方位である。柱掘形より土師器杯・高杯杯部等が出土している。

S B 7745

調査区北西隅で検出した3間×2間の総柱建物である。柱間は桁行・梁行とも不揃いの南北棟建物になるものと思われる。第8-4次(Iトレンチ)で検出した柱穴に加え、今回4つの柱穴を検出したものである。土師器杯・甕・長胴甕の破片が出土した。

S A 6201

第87次調査で建物としたが、延長は確認されず東西2間、4.0mの櫓列と考えられる。

S K 7756・7757

調査区中央北辺近くにある土坑でS K 7756が古くS K 7757に先行する。S K 7756は略円形で0.9m×0.7m、遺構検出面から約40cmの深さ、土師器の小型丸底甕が出土した。S K 7757は長楕円形で1.5m×0.9m、遺構検出面から約15cmの深さで、土師器杯・甕が出土している。

S K 7758

調査区中央やや北寄り検出した1.0m×0.7mの土坑で、遺構検出面からの深さ10cmと浅いものである。底でS B 7755の西側柱(庇)を検出している。黒褐色の埋土中から土師器杯・高杯脚部等が出土した。奈良時代後期の土坑と思われる。

S K 7746・7747

調査区西端中央で検出した土坑で、S K 7746がS K 7747より新しい。S K 7746は西

	遺 構 の 種 別								
	S	B	S A	S	K	S	D	S F	S X
奈 前 期	6090	6091							
良 後 期	7755			7756	7757	7758			
奈良時代	7745		6201	7746	7747	7751			
				7752	7753	7754			
平 安	初 期	0158		7750					
	前Ⅱ期	7765	7766						
	後Ⅱ期	7759							
	後 期	7748					7749		
鎌倉時代				7769	6980	7761	7762	7760	
						7767	6982		
室町時代						0206			
時期不明	7768					7763	7764		0159

第6表 第116-1次調査 時期別遺構分類表

へは調査区外へ延びるため不明で、南北は2.8m、遺構検出面からの深さ約20cmである。SK7747は北はSX0159に、西はSK7746に切られるため規模は不明であるが略方形の土坑で、遺構検出面からの深さは約10cmと浅い。遺物は土師器細片が出土した。

- S K 7751~7754 調査区西半で検出した土坑で切り合いはSK7751→SK7752→SK7753の順で新しくなる。S K 7751・7752については径が2.0m~3.0mの略円形、遺構検出面からの深さ約20cm、S K 7753は2.0m×1.8mの略方形、遺構検出面からの深さ約25cmである。いずれも黒色の埋土で、土師器鍋・甕、須恵器杯片が出土している。この土坑群東南隅のS K 7754については土師器細片しか出土していないが、ほぼ同時期の土坑と思われる。

#### (2) 平安時代前半期の遺構

初期の掘立柱建物1棟、土坑1基、前Ⅱ期の掘立柱建物1棟、櫓列1条がある。

- S B 0158 調査区北西隅で検出した桁行3間以上×梁行2間の東西棟建物で、柱間は桁行・梁行とも2.1m等間、棟方向はE2°N、柱掘形は約60cmの略方形である。第8-4次調査では南側柱1間と今回S B 7745とした総柱建物の南側柱を南面庇の側柱としてS B 158としていたものであるが、周辺の柱穴と照合した結果、S B 0158とS B 7745に分離して考えたものである。柱掘形より土師器杯の墨書土器が出土している。

- S B 7765 調査区東南隅にある、西妻2間のみを検出した掘立柱建物である。柱間は1.4mで棟方向はE12°Nである。柱掘形より土師器杯が出土している。

- S A 7766 同じく調査区東南隅で3間を検出した櫓列で、柱間は1.7m等間である。西へはもう1間延びる可能性があるが東へはその可能性がなく、S B 7765の南側柱筋とはやや柱筋を違えるものの方向もE12°NとS B 7765に揃うことから、この掘立柱建物と櫓列は併存したものと考えられる。

- S K 7750 調査区中央やや西寄りで検出した径約1.2mの略円形の土坑で、遺構検出面からの深さは約20cmである。黒褐色の埋土中に多くの土師器杯・皿・長胴甕、須恵器蓋等が出土した。遺構検出面直下から約15cmの間に特に大きい破片がみられた(PL24参照)。

#### (3) 平安時代後半期の遺構

この時期には、後Ⅱ期の掘立柱建物1棟、後期の掘立柱建物1棟、溝1条がある。

- S B 7759 調査区中央北壁際で南側柱のみを検出した掘立柱建物で、桁行3間、柱間2.4m等間である。柱掘形は60cm×50cmの略方形あるいは径40cmの略円形であり、径20cmの柱痕跡を確認した。棟方向はE2°Nで、柱掘形から山茶輪杭花筒が出土している。平安時代後Ⅱ期の建物と思われる。

- S B 7748 調査区北西隅でS B 7745・0158に重複して建てられる桁行3間以上×梁行2間の南北棟建物である。柱掘形は径約35cm、柱間は桁行・梁行とも2.15m等間で、棟方向はN6°Wである。柱穴のほとんどが第8-4次(Iトレンチ)で調査されており、今回の調査で少量の土師器片等が出土したのみで、平安時代後期に属する建物と思われる。

- S D 7749 調査区中央から緩やかなクランク状に蛇行し、西壁際以西へと続く東西溝である。上端で幅40cm~80cm、下端は幅25cm~30cmで、東から西へ向けて傾斜する溝である。

#### (4) 鎌倉時代の遺構

この時期の遺構には、土坑2基、溝4条、道路1条を検出した。

- S K 7769 調査区北壁際で東西2.3m×南北1.7mを検出した、遺構検出面からの深さ約7cmの浅い土坑である。暗灰褐色土の埋土中より土師器杯片が多く出土した。

S F 7760 現道の町道斎宮北12号線と斎王の森へ向かう東西道の分岐点直下で検出した道路跡  
S D 7761・7762 とその両側溝である。北側溝の S D 7761は S F 7760路面より約0.6mの深さで砂礫層の底に達し、この底の標高は9.5m～9.6mである。また南側溝の S D 7762は S F 7760の路面より約0.65mの深さでやや粘質の砂質土の底に達し、溝底の標高は9.3m～9.45mである。北・南それぞれの側溝は何度か掘り返されている様子が断面からうかがえるが、基本的に逆台形の断面形状である。この両側溝に挟まれた幅約2.8m～3.0mの地山面が道路として利用されていたと考えられる。路面上には基本的に他の遺構はみられず、暗褐色粘質土でその地山面上に3cm～5cm大の円礫が薄く敷かれていた。

一方、北側溝である S D 7761は、調査区北東隅で重複する第101次調査で検出した S D 6981と同レベルであるが、S D 6981はすぐ南で一段深く掘削された S D 6982により寸断される。また S D 6981はそのまま北に続く溝であることから、S D 7761はこの分岐点より南進する溝としてとらえた。さらに第87次調査検出の南北溝 S D 0207では、今回検出の S D 7761と S D 7763を合わせて一本の溝としているが、S D 7763で明確に時期決定できる遺物を検出し得ていないが S D 7763は S D 7761に先行することがわかっており、新旧関係にある2本の溝として分けた。南側溝の S D 7762と S D 7764についても同じで、それぞれ先行する溝が後出の溝の北側にある。南側溝の延長についても、南へは第8-5次（Jトレンチ）の S D 0208に、東へは第82次の S D 5602へと続くものと推定されるが、直接調査区を接していないことから、今回安易に遺構番号を踏襲することを避けた。

S D 7767・6982 とともに S D 7761の底付近で検出した溝である。S D 7761の底より一段低い溝が断続的に掘削されており、S D 6982はその一つで、第101次調査検出の溝の延長で底の標高は9.2m～9.4mと S D 6981・7761から20cm～30cm下がる。S D 7767についても同様で、S D 6981から分流して S D 6984で標高9.1m～9.3mと S D 6981から45cm～55cm下がり、一度切れて標高9.45mと上がり、S D 7767として再び標高9.3m～9.5mと掘り下げられる。この S D 7767と S D 6982では、S D 7767の方が先行する。

#### (5) 室町時代の遺構

この時期の遺構には、溝1条がある。

S D 0206 この溝は第8-4次調査（Iトレンチ）で確認されたときに S D 160とされ、第8-5次調査（Jトレンチ）で検出された S D 0206と別の溝として認識されたものであるが、第87次調査時に屋敷地を巡る一連の溝とされており、S D 0206の遺構番号を踏襲し、S D 0206とする。この溝の今回調査で新しく掘削した溝法面から溝底にかけて、石組みが確認された。遺構検出面からの深さ約25cmの溝であるが、護岸施設であろうか。

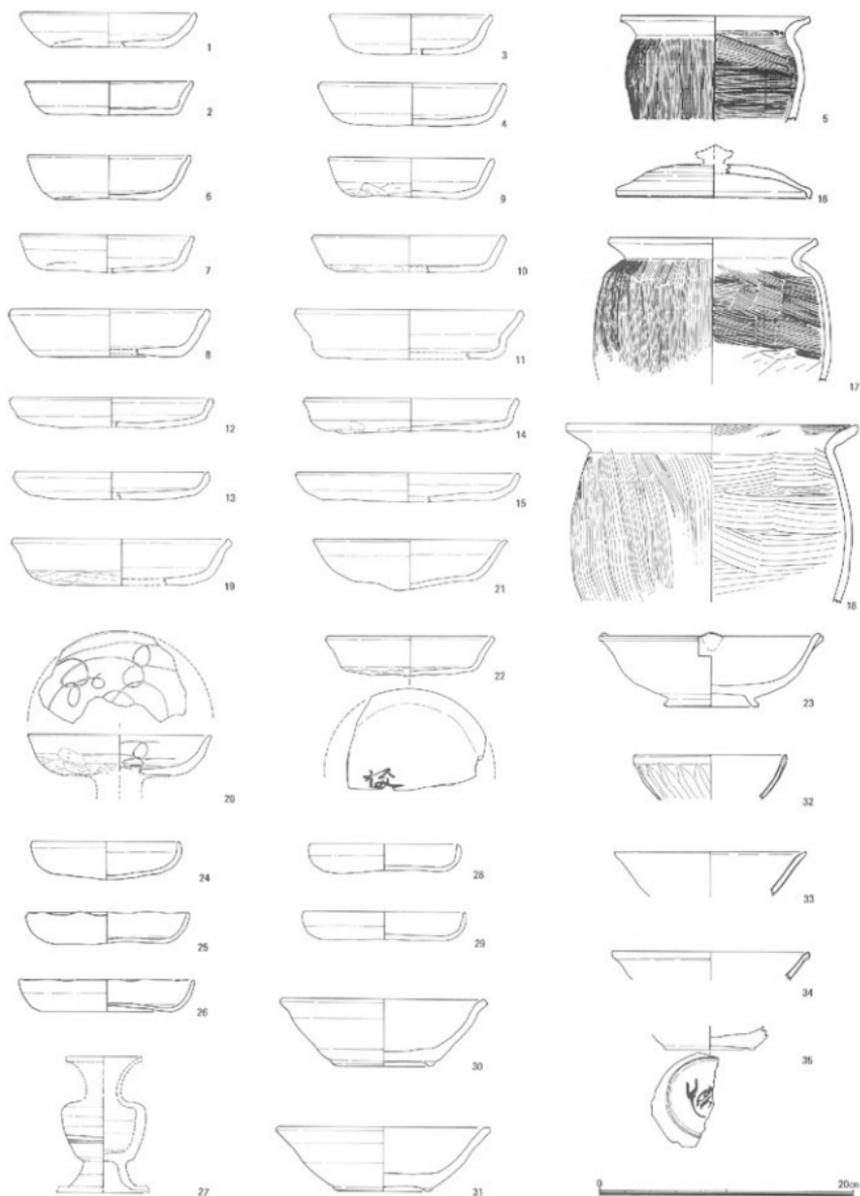
#### (6) 時期不明の遺構

時期不明の遺構として、掘立柱建物1棟、溝2条、不明遺構1基がある。

S B 7768 調査区はほぼ中央で、S D 6982・7763に柱穴を切られる掘立柱建物であるが、上端で約40cm四方の略方形の柱掘形が底部へ向けて径30cmの略円形になり、底に長さ約20cm前後の扁平な石が据えられていたものである。柱間は不揃いで桁行3間×梁行2間で、それぞれ4.8m×3.0mの規模、棟方向はE12°Nである。

S D 7763・7764 先述の S D 7761・7762に先行する溝である。

S D 7763は北側溝 S D 7761に先行する溝で、上端で幅0.7m、下端の幅0.4m、遺構検



第19図 第116-1次調査 遺物実測図 S K 7757 : 1~5, S K 7750 : 6~18, S K 7755 : 19・20  
 S K 7765 : 21, S B 0158 : 22, S B 7759 : 23  
 S D 7761 : 24~27, S D 7762 : 28~34, 包含層 : 35

出面からの深さ約27cmとS D7761に比べると浅いが、北へ向けて傾斜する。

S D7764は北側溝S D7762に先行する溝で、上端で幅0.5m、下端の幅0.4m、遺構検出面から約16cm～22cmと浅く、傾斜は東端・南端から中央へ向けてやや下がる。

埋土はいずれも黒褐色で、遺物は土師器細片のみである。

#### (7) 出土遺物

- S K 7757土師器 (1～4)は杯で口径12.8cm～14.8cmで器高2.8cm～3.5cm、(1・2)は口縁をヨコナデ、底部をケズリ調整するb手法で、(3・4)は口縁部をヨコナデ、底部をオサエ後ナデ調整するe手法である。(5)は甕で口径14.8cm、8.4cm、体部外面はタテハケメ、内面はヨコハケメ、口縁部をヨコナデ調整する。
- S K 7750土師器 (6～11)は杯で器高12.8cm～18.0cm、器高3.0cm～4.0cm、(8・9)のみb手法(6・7・10・11)はe手法による調整である。(12～15)は皿で口径15.2cm～17.6cm、器高2.2cm～2.9cm、すべてe手法による調整である。
- 須恵器 (16)は蓋で口径14.0cm、残存高2.7cm、ツマミを欠損する。内面から天井部半ばまで回転ナデ、天井部上半は回転ケズリ調整する。(17・18)は甕である。(17)の甕は口径16.2cm、残存高11.5cm、体部外面はタテハケメ、内面はヨコハケメ、口縁部はヨコナデ調整である。(18)は口径22.6cm、残存高14.5cm、体部外面はタテハケメ、内面は口縁部も含めてヨコハケメ、口縁部外面はヨコナデ調整する。
- S B 7755土師器 (19・20)はS B 7755柱掘形から出土した土器である。
- (19)は杯で口径17.0cm、器高3.8cmでb手法で調整される。(20)は高杯杯部で脚部は剥離して残存しない。口径14.4cm、残存高3.3cm、底部から口縁部外面中位までケズリ、口縁部をヨコナデ、内面はナデの後螺旋暗文を少なくとも3段施す。
- S B 7765土師器 (21)は調査区東南隅のS B 7765の柱掘形から出土した杯で、口径14.8cm、器高4.1cm、e手法で調整される。
- S B 0158墨書土器 (22)は調査区北西隅のS B 0158の柱掘形から出土した土師器杯で、口径13.2cm、器高3.2cm、e手法で調整される。底部外面に薄く「祇」と判読可能な墨書が残存する。
- S B 7759灰釉陶器 (23)は調査区北辺のS B 7759柱掘形で出土した輪花椀で、口径17.0cm、器高5.9cm、高台径7.0cmである。体部をロクロナデし、輪花を施すが一か所しか残存していない。内面に自然釉が多くかぶる。
- S D 7761土師器 (24～26)が皿で口径11.6cm～13.8cm、器高2.6cm～3.1cm、e手法で調整される薄手の土器である。
- 灰釉陶器 (27)は花瓶である。口頸部は欠損、脚部も端部のみ欠損するが、胴部最大径6.7cm、残存高7.7cm、体部はロクロ水挽きで脚部は貼り付けによるものである。灰釉が掛かるが全体的にむらが見られる。体部中位やや下に3本の棒状工具による沈線が見られる。S D 7761のかなり上層で出土した。
- S D 7762土師器 (28・29)が皿である。口径12.0cm～12.8cm、器高2.3cm～2.4cm、いずれも薄手でe手法により調整する。
- 山茶椀 (30・31)は、口径16.0cm～17.0cm、器高5.2cm～5.5cmである。
- 青磁 (32)は口径12.0cm、残存高3.6cmの椀である。
- 白磁 (33)は口径15.2cm、残存高3.6cmの椀で、口縁端部のみ軸が掛からない。
- (34)は口径15.4cm、残存高2.3cmの椀で、玉縁口縁端部のみ残存する。

### 3 第116-2次(Nトレンチ)調査

第116-1次調査(Mトレンチ)から約190m南へ下った、町道斎宮北12号線と農道とのT字路分岐点において、南北4m×東西12mのトレンチを設定したが、調査区西端で区画溝が検出されたため、溝の規模を確認するために南へ2.0m、東西幅4.5mにわたって調査区を拡張して、計57㎡を調査した。

周辺ではこれまでに昭和49年度の第8-4次調査、第8-8次調査、昭和60年度の第59次調査、そして第116-1次調査との中間地点で先稿の第113次調査が実施されている。

当該地は公有地で、表土が25cm～40cm、暗褐色土の遺物包含層が30cm～40cm堆積している。

以下、遺構、遺物の順に概述する。

#### (1) 平安時代後期の遺構

この時期の遺構には、土坑2基と、溝2条がある。

S K 7770

調査区南西隅で検出した東西5.0m、南北6.0mの略円形の土坑で、遺構検出面からの深さ約66cmである。暗褐色の埋土中に主に灰釉陶器の瓶類を中心とした土器類が、折り重なった状態で見つかった土坑である。灰釉陶器瓶類の他に灰釉陶器碗類、須恵器壺、土師器杯・台付杯が出土しており、特に注目されるのは町道斎宮北12号線を挟んで北西に隣接する第59次調査のS D 3890で出土した緑釉陶器大壺の体部破片が多く出土したことである。この遺構相互間は約25mの距離があるにもかかわらず、第59次調査緑釉陶器大壺の肩部・体部の破片がこの土坑から出土している。この緑釉陶器大壺は二次焼成を受けており、釉薬が茶色く変色しているが、大壺の他の緑釉陶器碗類破片もそのほとんどが二次焼成を受けて赤変している。これは第59次調査で平安時代後期の掘立柱建物柱掘形内に焼土がかなり多く混入していたことから焼失建物の建て替えがあったものとしているが、そうした時の二次焼成を受けた陶器類がS D 3890や今回のS K 7770へ投棄された可能性が考えられる。緑釉陶器大壺だけでなく、緑釉陶器の大型の鉢の破片も第59次S D 3890出土の大鉢と接合した。

なお、この土坑には平安時代中期～後I期の遺物が含まれており、後述の平安時代後I期の溝S D 7775に切られている。

S K 7771

調査区の北東隅で南東隅¼を検出した土坑である。全体の規模は不明であるが、遺構検出面からの深さは約40cmである。黒褐色の埋土中から土師器杯・皿、灰釉陶器碗・瓶類破片が出土した。

S D 7775

先述の土坑S K 7770より新しく、調査区西端を南北に延びる平安時代後I期の溝である。溝底の幅約35cm、推定される溝肩幅の割に溝底幅が狭く、底から緩やかな傾斜で肩まで上がる法面をもつ。溝の勾配は、溝底の標高が調査区南端で10.03m、調査

		遺 構 の 種 別			
		S	K	S	D
平 安	後I期	7770		7775	
	後期	7771		7774	
時期不明		7745		7772	7773

第7表 第116-2次調査 時期別遺構分類表

区北端で9.96mと北へ向かって傾斜している。褐灰色粘質土の埋土中から土師器杯・皿、灰釉陶器碗・瓶類が出土する。

S D 7774 先述の S K 7770 上面で検出した南北溝で、上端幅60cm、下端幅52cm、遺構検出面からの深さ9cm～11cmで南に向かって傾斜する。

### (3) 時期不明の遺構

時期不明の遺構には、溝2条がある。

S D 7772 調査区北辺壁際沿いで検出した東西溝である。検出幅20cm、長さ約5mにわたって検出したが、土師器杯・甕の破片しか出土しておらず、平安時代後期以降の溝と推定されるが、明確に時期決定ができる遺物を検出し得なかった。埋土は黄橙色粘質土のブロックが混入した黒褐色土で、遺構検出面からの深さ約10cm前後の浅い溝であった。

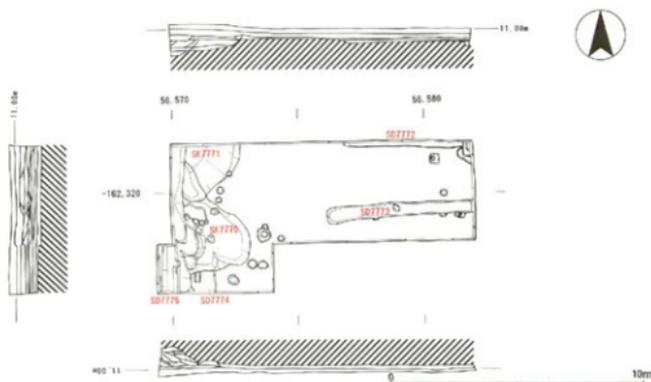
S D 7773 調査区東半で検出した、先述の S D 7772 にほぼ並走する東西溝である。幅約50cm、遺構検出面からの深さ約17cmで、断面は逆台形である。灰褐色の埋土中から土師器杯の破片が出土したのみで、この溝も時期決定可能な遺物を検出し得なかった。

### (4) 出土遺物

S K 7770 土師器 (36～38)が杯で、口径10.8cm～11.4cm、器高2.2cm～2.4cmである。いずれも e 手法で調整される。(39・40)は台付皿である。口径11.0cm～11.7cm、器高2.4cm～2.5cm、高台径5.8cm～7.0cmで、いずれも e 手法で調整され、高台を貼り付けている。(41・42)は台付杯で口径14.6cm～15.0cm、器高4.2cm～5.4cm、高台径7.0cm～8.2cmである。e 手法で調整され、高い貼り付け高台が付く。

灰釉陶器 (43・44)は皿である。口径11.2cm～11.6cm、器高2.3cm～2.4cm、高台径5.8cm～6.0cmで、口縁部に灰釉を漬け掛ける。ロクロ回転は時計回りである。(45・46)は碗である。(45)は口径14.6cm、器高5.2cm、高台径6.8cm、施釉は不明瞭である。(46)は口径15.0cm、器高6.9cm、高台径7.2cmで、灰釉は刷毛塗りされる。

この土坑からは灰釉陶器瓶類の破片が多量に出土したが、接合・復元可能なものは少なく、推定復元すると器高40cm前後の瓶になると思われる。(47・48)はその中でも



第20図 第116-2次調査 遺構実測図 (1:200)

比較的大きい破片に復元できたものである。(47)は口頸部破片で、口径20.0cm、残存高13.4cm、口頸部中位以下から薄く施釉されている。残存部直下で肩部との接合点になるものと思われる。(48)は同じく瓶の頸部から肩部へかけての破片である。肩部最大径22.3cm、残存高17.0cm、口頸部中位以下全面に施釉される。

**緑釉陶器**

(49)は鉢で、口径40.6cm、器高14.8cm、高台径18.4cmと大型のもので、第59次調査S D3890出土の大鉢(R64・60)と今回出土のものが接合し、同一個体と判明した。素地は灰白色で土師質、釉は濃い緑色をしており、口縁部直下に平行タタキメ文がごく一部に残存する。

**朱附着土器**

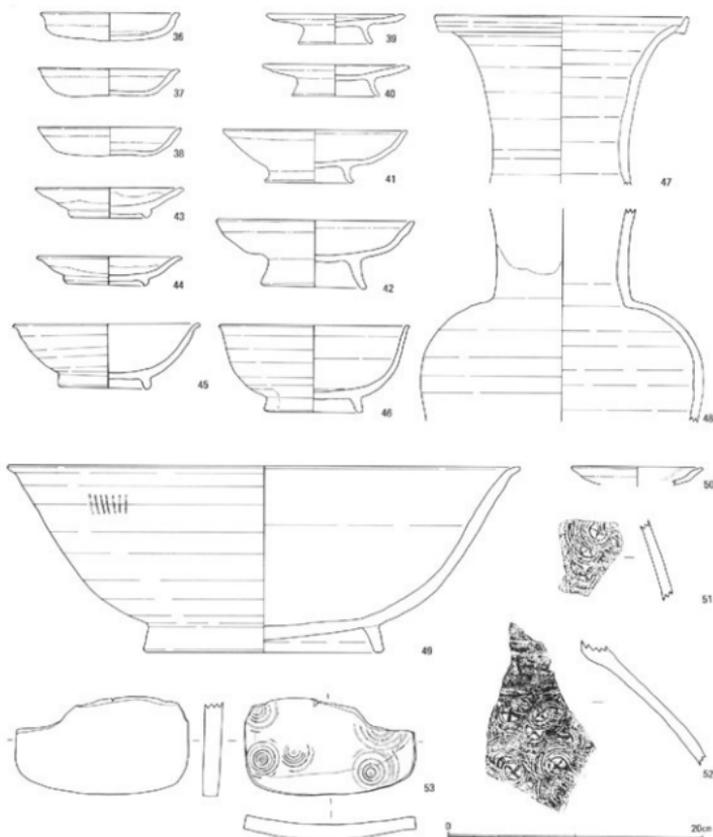
(50)は朱附着土器で、土師器皿に筆で描いた線が残る。擦痕はみられない。

**車輪文**

(51・52)は須恵器甕の内面にいわゆる車輪文のタタキメがみられるものである。

**猿面硯**

(53)は須恵器猿面硯で、墨の擦痕を残す。



第21図 第116-2次調査 遺物実測図 S K 7770:36~53

#### 4 第116-3次（Oトレンチ）調査

上園芝生広場の北東隅付近で設定した調査で、昨年度実施した第111-3次調査（Fトレンチ）の北方約20mに位置する。調査区は幅4m×長さ14m、約56㎡の面積を調査した。方格地帯北辺の東西道路および側溝の実態解明のためのトレンチである。

周辺では昭和49年度第8-1次（Fトレンチ）、第8-2次（Gトレンチ）、昭和57年度第47次調査（6ADJ-D-G）、先述の第111-3次調査（Fトレンチ）が実施されている。

当該地は、平成4年度に上園芝生広場の拡充のために盛土・芝張りした地点で、調査対象地の芝を剥ぎ、また盛土した山土を周辺公有地において仮置き・仮植えて養生を行った上で調査を実施した。その芝・盛土の厚さが約20cm～40cm、その下の旧表土は整備工事の際転圧されており均厚でない。旧表土・包含層合わせて南端で20cm、北端で40cm、遺構検出面まで60cm～70cmである。

以下、遺構、遺物の順に概述する。

##### （1）平安時代末期の遺構

この時期の遺構には、掘立柱建物1棟がある。

S B 7785 調査区南端で検出した掘立柱建物である。東西棟建物の西妻2間を検出し、柱間は2.0m等間、棟方向はE 1°Nである。柱掘形は40cm前後の略方形である。

##### （2）鎌倉時代の遺構

この時期の遺構には、土坑2基、溝6条がある。

S K 7783 調査区中央部にある、1.7m四方の略方形の土坑である。S D 7782・7784よりも新しく、遺構検出面からの深さ約30cmである。土師器杯・鍋の破片が出土している。

S K 7787 調査区東南隅で検出した土坑で、東半は調査区外のため規模は不明である。遺構検出面からの深さは約22cmで、暗褐色の埋土中から土師器皿の細片を多く出土した。

S D 7777 調査区北端で検出した東西溝で、検出幅50cm、遺構検出面からの深さ約35cmで、トレンチ幅内での勾配はやや西へ向かって低くなる。溝の方向はE 3°Nで、溝底は暗橙色粘質土で砂礫層はみられなかった。

S D 7776 調査区北端付近、S D 7777の南側に位置する東西溝で、S D 7777との間に幅約50cmの地山面を残す。溝幅約1.0m、遺構検出面からの深さ約40cmで、トレンチ内での勾配はほとんどなく平坦で、溝の方向はE 1°Nである。黒褐色の埋土中から土師器皿、山茶碗の破片が出土した。

S D 7778 先述のS D 7776との間に幅約30cmの地山面を残して並走する東西溝で、溝幅約60cm、遺構検出面からの深さ約40cmで、東へ向かって低く下がる勾配である。溝はE 6°Nの方向を示し、黒褐色土にわずかに橙色粘質土粒が混じる埋土であった。

	遺 構 の 種 別					
	S	B	S	K	S	D
平安末期	7785					
鎌倉時代			7783	7787	7776	7777 7778 7779 7780 7784
室町時代						
時期不明			7786		7781	7782

第8表 第116-3次調査 時期別遺構分類表

S D 7779 S D 7778の南側に並走する東西溝で、溝幅約90cm、遺構検出面からの深さ25cm前後である。溝の方向はE 9° N、溝の勾配はやや西が低く下がる。黒褐色の埋土中から土師器皿、山茶碗の破片が出土した。

S D 7784 先述のS K 7783に先行する東西溝で、やや北へ弯曲する幅70cm、遺構検出面からの深さ約20cm前後の溝である。溝の方向はE 17° Sと北側にある4条の溝の向きとは異なり、南下がりの向きをとる。溝底の勾配は西へ向かって下がっている。

S D 7780 今回検出した中で唯一の南北溝で、溝のなかでは切り合いから最も新しい溝である。S D 7778とS D 7779の間で東へ向けて折れ曲がる。勾配は北へ向けて低くなる。

### (3) 時期不明の遺構

時期不明の遺構には、土坑1基、溝2条がある。

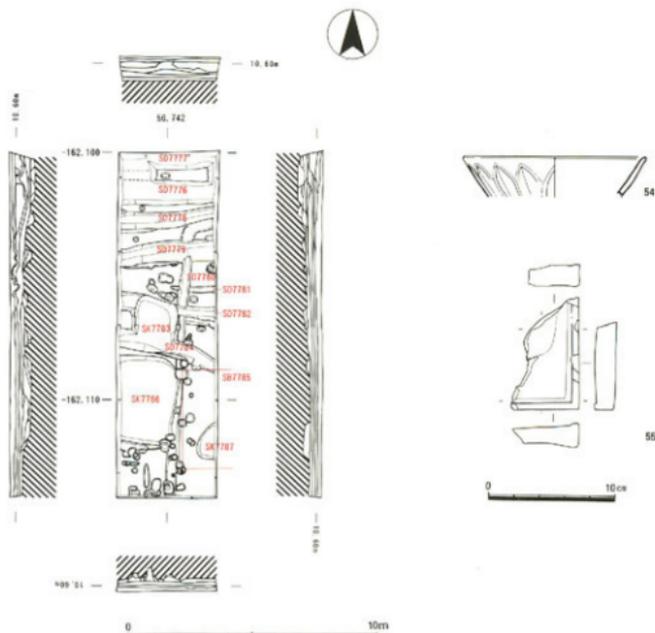
S K 7786 調査区南半にある土坑である。南北3.6m、東西検出幅2.2m、遺構検出面からの深さ約30cmで、灰褐色の埋土中から土師器皿・銅破片が出土した。

S D 7781・7782 調査区中央を流れる東西溝で、S D 7781はトレンチ幅中程でとまる狭小な溝で、出土遺物はみられなかった。S D 7782は溝幅80cm、遺構検出面からの深さ約15cm前後、溝の勾配は東下がりである。溝の方向はE 8° SとS D 7784のように南下がりである。

### (4) 出土遺物

青磁 (54)は包含層から出土した碗である。口径14.4cm、残存高3.3cmである。

石硯 (55)は石製の硯の破片で、幅5.4cm、長さ9.0cmが残存する。中央は墨の擦痕が残る。



第22図 第116-3次調査 遺構実測図(1:200)、遺物実測図 包含層:54・55

## 5 第116-4次（Pトレンチ）調査

前項の第116-3次調査（Oトレンチ）の西方約45mに位置する、上岡芝生広場での調査で、同じく方格地割北辺東西道路・側溝の実態解明のための調査である。調査区は東西・南北とも12m四方の、面積約144㎡を対象に調査を実施した。

当該地周辺では、昭和49年度第8-1次（Fトレンチ）、第8-2次（Gトレンチ）、平成元年度の第82次調査を実施しており、北接する現道に沿う方向の溝が重複して検出されることが知られている。この調査区も第116-3次調査（Oトレンチ）と同じく、整備された芝生面を剥いで養生し、盛土を除去した後に旧表土・包含層20cm～30cmを掘削し、芝生面から約50cm～60cm下で遺構を検出した。

以下、遺構、遺物の順に概述する。

### （1）奈良時代の遺構

この時期の遺構には掘立柱建物1棟、土坑2基がある。

S B 7790 調査区西南隅で検出した掘立柱建物で、桁行3間以上×梁行2間の規模、柱間は桁行で1.7m、梁行で2.1m、棟方向E7°Nの東西棟建物である。柱掘形は約70cm×50cmの略長方形で、柱痕跡は径20cm前後である。東妻柱はS K 7795に切られており、土坑の底で柱掘形を検出した。

S K 7795 調査区南辺近くで検出した土坑で、東西約2.5m×南北約1.5mの長楕円形である。遺構検出面からの深さ約28cmで、黒色土の埋土中より散在的ではあるが土師器杯・皿・甕・鍋・鉢、須恵器壺などが見られた（PL31参照）。奈良時代後期の土坑と思われる。

S K 7799 調査区東南隅で検出した土坑で、径1.7mの略円形である。遺構検出面からの深さ約10cm、灰褐色土の埋土中から土師器杯・長胴甕の破片等が出土している。

### （2）平安時代の遺構

この時期の遺構には、初期の土坑1基、末期の井戸1基、溝1条がある。

S E 7794 調査区中央やや北寄りにある、2.0m×1.5mの長楕円形の井戸である。井戸の周りには東西4.2m×南北3.0m、暗灰褐色の埋土による遺構検出面からの深さ約10cm前後の浅い段がつくもので、北半は東西溝SD7793以北の溝群に切られる。井戸は崩落の危険があったため遺構検出面より約2.5mで調査を止めた。黒褐色の埋土中から土師器鍋、ロクロ土師器台付皿、山茶椀が出土し、平安時代後期から埋没し始めたこととみられる。

S K 7797 先述のS K 7795の北に接して掘られる径1.2mの略円形の土坑で、遺構検出面からの深さ約25cmである。暗灰褐色の埋土中から土師器杯・鍋・長胴甕等の破片が出土した。S K 7795より新しい平安時代初期の土坑であると考えられる。

	遺 構 の 種 別			
	S	B	S E	S K D
奈良後期	7790			7795
奈良時代				7799
平安初期				7797
平安末期			7794	7792
鎌倉時代				7798 5746 7796
時期不明				7791 7793

第9表 第116-4次調査 時期別遺構分類表

S D 7792 調査区北部に3条並走して流れる東西溝のうち真ん中を流れる溝で、この3条の溝上面には厚さ約20cmの灰褐色で礫混じりの土が覆っており、これを20cm下げたところで3条を検出したものである。溝幅60cm～80cm、遺構検出面からの深さ約25cm、方向はE 5° Nをとり、勾配は西下がり、溝底は径10cm程の円礫が混じる砂礫層である。

### (3) 鎌倉時代の遺構

この時期の遺構には、土坑1基、溝2条がある。

S K 7798 調査区東南隅で3.5m四方を検出した方形の土坑で、遺構検出面からの深さ約10cmである。黒褐色に橙色粘質土のブロック層が混じる埋土から土師器甕、土鉢、山茶碗が出土した。この土坑の底でS K 7799を検出した。

S D 5746 第82-2次調査で検出した南北溝の延長9mを検出した。溝幅80cm、遺構検出面からの深さ約10cm～20cm、勾配はやや南へ向かって下がる。

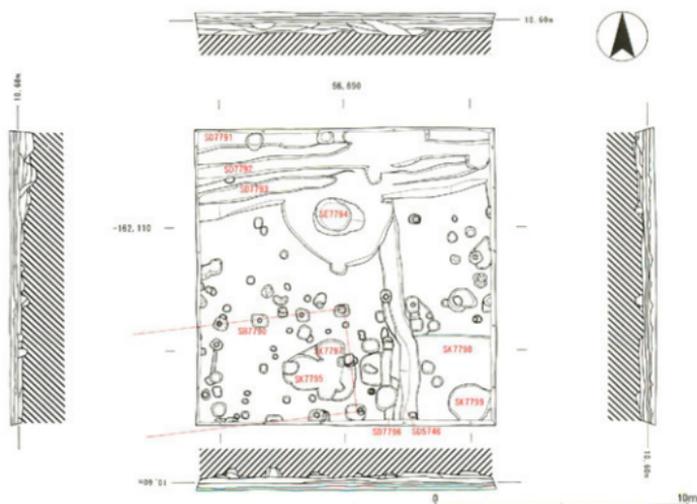
S D 7796 調査区南辺中央で検出したS D 5746の西隣の南北溝である。当初その位置関係から、第82-2次調査で検出されているS D 5744の延長かと考えられたが、S D 5744は平安時代前期の溝かとされているもので、今回のS D 7796では灰黄褐色土の埋土中から土師器杯、山茶碗の破片が出土したのみで平安時代前期の遺物を検出し得なかったため、S D 5744とは別の溝としたものである。

### (4) 時期不明の遺構

時期決定可能な遺物の出土がないため、時期が不明な遺構として、溝2条がある。

S D 7791 調査区北部の3条の溝のうち、最も北側の東西溝で、検出した溝幅65cm、長さ6m、方向はE 3° N、溝底は径10cmの円礫が混じる砂礫層で、西下がりの溝である。

S D 7793 調査区北部の3条の溝のうち、いちばん南側の東西溝で、検出した溝幅60cm、方向はE 5° N、溝底は円礫が混じる砂礫層で、勾配は平坦である。



第23図 第116-4次調査 遺構実測図 (1 : 200)

(5) 出土遺物

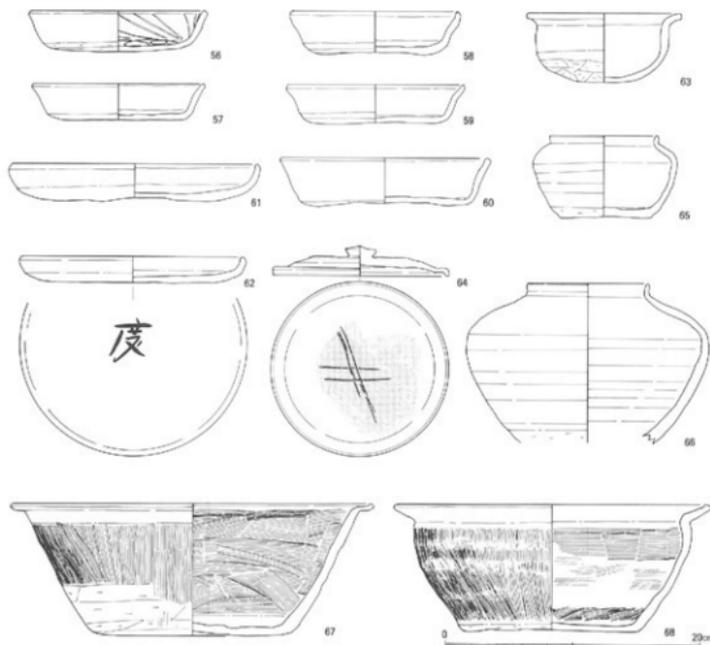
S K 7795土師器 (56～60)は杯で、口径13.0cm～16.4cm、器高3.0cm～4.0cmのものである。

(59)はb手法で、他はe手法で調整される。(59)は口縁部内面に左向きの放射暗文を1段、底部内面に螺旋暗文を2段施すものである。(61・62)は土師器皿で、(61)は口径19.4cm、器高3.0cm、e手法で調整される。(62)は口径17.4cm、器高2.1cmで、b手法で調整される。(62)の底部外面には墨書がみられ、「度」と判読される。(63)は鍋で、口径12.0cm、器高5.6cm、口縁端部はヨコナデ、内面はナデ、体部外面は不定方向のケズリで調整され、体部外面下半には煤付着痕がある。通常の鍋の大きさと比較するとかなり小型ではあるが、ミニチュア土器としてはやや大きめのものであり、使用痕が認められることから、小型の実用品であったものと考えられる。(67・68)は鉢で、口径24.0cm～28.4cm、器高10.5cm～10.9cm、底径は14.0cm～15.8cmである。(67)は口縁部はヨコナデ、体部上半はタテハケメ、下半は横方向のケズリ、体部内面は全面密に幅広のヨコハケメ、底部はナデ調整する。(68)も基本的に同じ調整であるが、体部外面全面タテハケメであり、底部からの立ち上がり部分のみ横方向のケズリが入る。内面は口縁部より下の体部内面に幅広のヨコハケメが入るが、中位部分はハケメが粗く、明確にハケメ単位を読み取ることができない。底部内面はオサエ後ナデ調整する。

墨書土器

須恵器

(65・66)は壺で、(65)は口径8.4cm、器高6.7cm、底径7.2cmと小型で、(66)は口径9.4cm、残存高13.0cm、底部を欠損するが(65)と同型のやや大型のものと推測される。い



第24図 第116-4次調査 遺物実測図 S K 7795 : 56～63, 65～68, S K 7797 : 64

ずれも体部はロクロ水挽きされ、(65)の底部はヘラ切り後荒いナデ、体部への立ち上がり部分をロクロヘラケズリ調整する。ロクロはいずれも時計回りである。

S K 7797須恵器  
ヘラ描き土器  
朱墨転用硯

(64)は蓋で、口径14.0cm、器高2.4cm、天井部1/3を回転ヘラケズリ、他を回転ナデ調整し、回転方向は時計回りである。この蓋の内面には「ㄨ」という焼成前に施されたと思われるヘラ記号がある。さらに(64)の内面にはヘラ記号の周辺に朱墨の擦痕が薄く残存する。朱墨の転用硯として使用されたものと考えられる。

その他の遺物

上記以外に、注目される遺物として、緑釉陶器片23点(うち陰刻花文を1点含む)、青磁片4点、白磁片4点、墨書土器1点、黒色土器2点、朱付着土器2点、製塩土器7点、転用硯4点、土錘8点、鉄滓2点、砥石1点が出土している。

## 6 第116-5次調査(Qトレンチ)

前項の第116-4次調査(Pトレンチ)との距離、約8mを隔てた西に設けた調査区で、第116-3次調査(Oトレンチ)・第116-4次調査(Pトレンチ)が現道より南側でしか調査区を設定しなかったことを受けて、現道下の状況を確認するため、現道を断ち割る状態の幅4m×長さ15m、調査対象面積約60㎡として調査を実施した。

当該地周辺では前項の第116-4次調査と同じく、昭和49年度の第8-1次(Fトレンチ)調査・第8-2次(Gトレンチ)調査、平成元年度の第82次調査を実施しているが、現道下の実態解明をした調査はこれまでに行われていなかった。北半および現道下については約10cmの表土、約25cmの遺物包含層を除去後、芝生面については芝生・盛土を除去・養生後、旧表土・包含層を除去し、現地表下約45cm～60cmで遺構を検出した。

以下、遺構、遺物の順に概述する。

### (1) 平安時代の遺構

この時期の遺構には、後Ⅱ期の土坑3基、溝1条、末期の溝3条がある。

S K 7801

調査区北端で東西1.5m、南北1.3mを検出した略方形の土坑で、遺構検出面からの深さ約20cmである。埋土は黒色土で、土師器杯・皿・台付杯・台付皿、ロクロ土師器皿が多く出土した。後述のSK7802に先行し、平安時代後Ⅱ期に属する土坑とみられる。

S K 7802

同じく調査区北端で、先述のSK7801に後出する土坑である。東西推定幅約1.1m、南北約70cmを検出した。土師器杯・甕、山茶碗の破片が出土した。同じく平安時代後Ⅱ期の土坑と思われる。

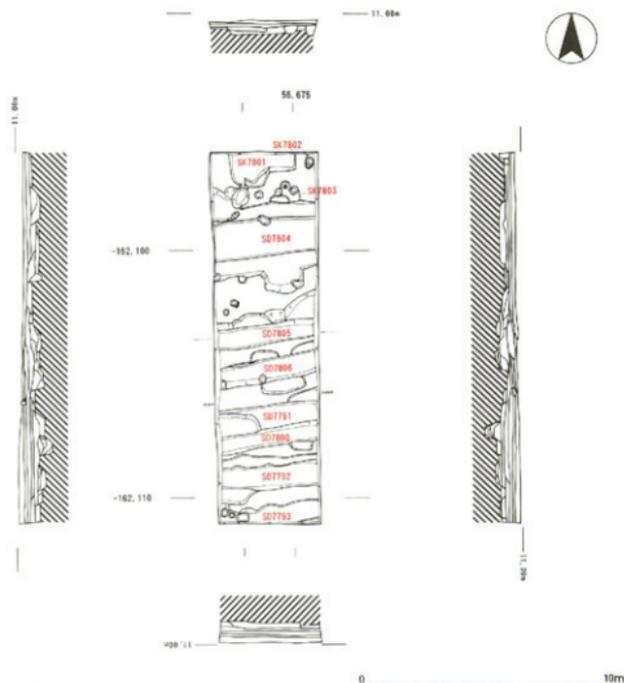
S K 7803

先述のSK7802の南に位置し、後述のSD7804に先行する土坑で、東西80cm×南北60cm、遺構検出面からの深さ約10cmの浅い土坑である。暗褐色の埋土から土師器杯、ロクロ土師器破片が出土した。平安時代後Ⅱ期の土坑と思われる。

		遺 構 の 種 別			
		S K			S D
平 安	後Ⅱ期	7801	7802	7803	7806
	末 期	7792 7800 7804			
鎌倉時代		7805			
時期不明		7791 7793			

第10表 第116-5次調査 時期別遺構分類表

- S D 7804 調査区内で検出した最も北寄りにある東西溝である。上段の溝幅2.8m、下段の溝幅1.3m、下段の溝底は遺構検出面からの深さ約25cm、溝方向はE 5° N、勾配はやや西下がりである。溝底は円礫を含む砂礫層である。
- S D 7806 現道下で確認された東西溝で、現道下の礫層を除去した後、上層の溝を掘削した面でS D 7805とS D 7806を検出した。溝幅約1.0m、遺構検出面からの深さ約30cm、溝方向はE 11° Nで、勾配はみられずほぼ平坦な溝である。溝底は5cm～10cm大の円礫を含む砂礫層である。S D 7805との直接的な切り合いはみられない。
- S D 7800 調査区南半分で現道の南端際で検出した東西溝で、上層に遺構検出面からの深さ20cmの浅い溝を有し、その底面からさらに深さ70cm、溝幅80cm、断面長方形の箱掘り状の溝である。溝底は円礫を含む砂礫層である。S D 7806とS D 7800の間にある地山面は3cm大の円礫が敷きつめられた締まった地山面を確認することができた。
- S D 7792 調査区南半分で検出した、先述のS D 7800の南に並走する東西溝である。溝幅約1.0m、遺構検出面からの深さ約10cm、断面弓状の浅い溝で、溝の方向はE 5° N、勾配は西下がりである。溝底は同じく円礫を含む砂礫層である。この溝は第116-4次調査検出のS D 7792の延長と考えられる。



第25図 第116-5次調査 遺構実測図 (1 : 200)

### (3) 鎌倉時代の遺構

この時代の遺構として、溝1条がある。

- S D 7805 調査区中央の現道北端直下で検出した東西溝で、現道下の礫層を除去した後に、上層の溝を掘削した底面でS D 7805とS D 7806に分かれた。この付近一帯は開墾される以前は松林で、開墾時の根の掘り取り穴に礫を入れ込んだということで、攪乱の穴が多く、このS D 7805の北側の溝肩にも攪乱坑がかかっており、明確に溝肩を検出し得ていないが、溝幅約0.9m、遺構検出面からの深さ約30cm、溝の方向はE 7° N、溝の勾配はやや東下がりである。溝底はS D 7806と同じく円礫の混じる砂礫層である。

### (4) 時期不明の遺構

時期決定のできない遺構として、溝2条がある。

- S D 7791 S D 7800の上層の溝で、溝幅約2.1m、遺構検出面からの深さ約20cm、南側の溝肩は直線的でなく、東側への延長が第116-4次調査で検出されたS D 7791にあたるものと考えられる。時期決定可能な遺物の出土がなく、時期は不明である。
- S D 7793 調査区南端で検出した東西溝であるが、溝幅約75cm、遺構検出面からの深さ約10cm、勾配はなく平坦で、溝底は円礫を含む砂礫層である。この溝は第116-4次調査検出のS D 7793の延長にあたるものと思われる。この溝からも時期決定可能な遺物の出土がなく、時期不明である。

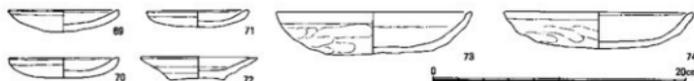
### (5) 出土遺物

- S K 7801土師器 (69~71)は小皿で、口径8.0cm~8.6cm、器高1.4cm~1.8cmである。口縁端部のみをヨコナデ、底部外面をオサエ後ナデ、内面をナデ調整するものである。
- (72)はロクロ土師器小皿で、口径9.0cm、器高1.9cmである。底部外面に糸切り痕が残り、糸切り後に荒くナデ調整する。口縁部はロクロナデ、底部内面はナデ調整する。
- (73)は皿で、口径15.6cm、器高3.5cmでe手法で調整される。この土坑からは(69~72)の土師器がかなり多く出土している。
- S K 7802土師器 (74)は皿で、口径15.0cm、器高3.0cm、e手法で調整される。
- その他の遺物 上記以外の出土遺物の中で、特に注目される遺物として、青磁片6点、白磁片5点、墨書土器4点、転用硯1点がある。また寛永通寶10枚が重なった状態で、S D 7806とS D 7791の間の調査区西壁際の地山面直上から出土している。

## 7 まとめ

方格地割北西隅4区画の実態解明のために5か所の調査区を設定し、それぞれの調査区における調査成果を概述してきたが、これらの調査成果をもとに、これまで推定線上でしか想定されていなかったこの区画の実態についての考察を試みたい。

従来の区画道路の推定延長線 平成4年度の八脚門の発見に至るまでの間は、方格地割は東西5列×南北4列と想定されていたものが、八脚門の検出位置、その両脇に取りつく板塀と考えられる柵列の規模から、方格地割は東西幅7列目まで想定可能であるということが判明した。この時東西7列×南北4列の28区画と想定していたが、北西隅4区画については東方よ



第26図 第116-5次調査 遺物実測図 S K 7801 : 69~73, S K 7802 : 74

りの延長線、木葉山西ブロックからの延長線で北辺あるいは西辺の区画道路及び区画側溝を想定していたものであるが、今年度から斎宮駅北側の史跡整備事業で区画道路・側溝の復元をするにあたり、区画道路の線形確認が必要となったものである。また前項の第115次調査の成果により、一辺約120mを基準とする方形区画により構成された北西隅4区画ではなく、4区画を一区画として構成されていたことが推測された。

**北西隅4区画の外周区画道路** 今回の第116次調査の結果、方格地割北西隅区画において、従来方格地割東方の区画から直線的に延長してきた区画外周道路推定延長線上に、方格地割のN4°Wの方位をとる直線的な溝・道路遺構はいずれの調査区においても検出されなかった。推定線を含み、東西・南北ともに余地をみて調査区設定を行ったにもかかわらず、想定位置に直線的な区画道路・区画溝は検出し得なかった。北辺・西辺とも現道にみるようなやや蛇行した、あるいは弯曲して延びる側溝しか検出しておらず、その線形は現道の蛇行・弯曲した線形に沿うもので、当時の道路・側溝の線形が側溝のみ埋もれた状態で現在まで踏襲されてきたことが、今年度の調査結果から明らかとなった。

**区画道路：西辺** 方格地割北西隅4区画の西辺外周道路および側溝を検出した、周辺調査区の該当遺構をあげると下記の表ようになる。過去の調査では今年度の調査のように現道を断割って調査を行っていないため現道際までが当時の調査区であり、その調査区際でいずれの南北側溝も検出されていることからわかるように、西辺道路の線形もこの地域が区画された時の線形をそのまま踏襲していると考えられる。この西辺区画道路の道幅は、北西隅で2.8m、以南へは2.8mから2.2mとやや狭小になる。溝の底幅は、底のレベルが一定でないため、30cm～70cmの間で変動する。現地表面の勾配は第11表のとおりで、C→Aへ、またC→Dへ、F→E・Dへと、C点を最高地点として北あるいは南へ振り分けられる。これに対して溝底の標高の推移を第11表でみると、同じくC地点を最高点に、現道の勾配の推移と同じ変化をみせる。A地点はこの路線において最も標高の下がる地点で、C地点以北の水がA地点へ集水されたものと考えられる。C地点以南についてはE地点で集水されたことがうかがえる。

**区画道路：北辺** 方格地割北西隅4区画北辺外周道路および側溝を検出した、周辺調査の該当遺構をあげると第12表ようになる。西辺と同じく、過去の調査で現道下の実態をつかめておらず、西辺道路が極めて厳密に遺構道路を踏襲していたのに対して、北辺道路は、現道はわずかに弯曲が強かった遺構道路の線形を緩い曲線に変化させたものと考えら

次数	西側溝	標高	道路跡	標高	現道標高	東側溝	標高
116-1	7 7 6 1	9.5m	7 7 6 0	10.2m	A 11.0 m	7 7 6 2	9.4m
8-5	0 2 0 7	9.9m				0 2 0 8	10.0m
87	0 2 0 7	10.0m			B 11.29m		
8-7	0 2 2 0	10.6m				0 2 2 1	10.5m
49					C 11.7 m	0 2 2 1	10.8m
113-2	7 6 1 0	10.8m 10.5m	Noなし	11.0m 10.7m		7 6 1 1	10.9m 10.5m
59	Noなし	10.6m			D 11.35m		
116-2						E 11.44m	7 7 7 5
8-8					F 11.57m	0 2 2 5	10.2m

第11表 方格地割北西隅区画 西辺外周道路及び側溝一覧

れる。北辺道路の道幅は、北西隅で3.0m、以東へもほぼ同じかやや拡張していく様子がかがえる。溝底の幅は55cm～60cmで平均される。現地表面の勾配は西辺ほど変化はなく、わずかに東下りの勾配をとる。これに対して溝底の標高は西下りの勾配をとっており、現道の勾配とは逆行するものである。

区画道路・  
側溝の機能

上記のことから、流水は西辺・東辺とも北西隅に集水すべく勾配がとられており、この北西隅地点においても集水された流水を片勾配ですべて北へ排水するのではなく、断続的に溝底を約20cmほど掘り下げた凹地をつくり、余剰分のみ排水したものと考えられるが、こうした排水機能よりも区画のための施設であった可能性が高い。

北西隅区画の  
構成時期

史跡東方でみるような、N4°Wという方向で構成される方格地割の規制が、この北西隅4区画内では極めて痕跡が薄く、平安時代初期の遺構が部分的ではあるが残存するにもかかわらず、地割の規制にとらわれていない理由の一つには、北西隅4区画をほぼ南北に二分して通る奈良時代古道が関連するものと推測される。しかしこれまでの調査で奈良時代古道の埋没時期を確認した箇所が一か所のみであること、また今回の調査で確認した現道とおりの線形をもつ区画道路・側溝が平安時代後期以前に遡って埋没した痕跡を明確に検出し得ていないことから、平安時代初期に方格地割を東から7列目まで整備したと想定できるのは南西隅4区画のみで、北西隅4区画は同時期に整備されたと想定するのは難しく、平安時代後期に付加された可能性が高い。

今後の課題

これまで推定延長線上でし想定していなかった北西隅区画の区画道路線形の実態を今回の調査で明らかにすることができたが、直線的な直交する区画道路によって構成されている「斎王の森」前の区画道路と北西隅4区画の弯曲した線形の北辺道路との接点、奈良時代古道と区画道路の関係、またそれぞれが建物の棟方向に与えた規制等、この区画を考える上で未確認の検討事項が多々あり、今年度以降年次的に進められる斎宮駅北側の史跡整備事業に向けて、実態解明を急がねばならない。（赤岩 操）

次数	西側溝	標高	道路跡	標高	現道標高	東側溝	標高
101	6 9 8 6	9.1m			G 10.9m		
106-1			7 7 6 0	10.1m		7 7 6 2	9.3m
8-3						0 1 3 6	9.3m
82-1						0 1 3 6	9.3m
116-5	7 8 0 5	10.0m	Noなし	10.4m	H 10.88m	7 8 0 0	9.5m
8-2						0 1 1 6	9.8m
8-1	0 1 0 5	10.4m					
116-3					I 10.84m	7 7 7 7	9.9m
42-2						1 5 8 0	9.0m
42-1	2 6 2 5	9.2m	0 2 9 0	9.8m	J 10.57m		

第12表 方格地割北西隅区画 北辺外周道路及び側溝一覧



第27図 第116次調査 周辺建構図 (1 : 1,500)

## 付編 花粉・植物珪酸体分析

### 1 はじめに

方格地割北西隅部にあたる上園・宮ノ前地区で実施した第113次、第115次、第116次調査は、当該地区の区画施設の様相やその性格を解明する目的の調査であったが、平安時代前半期の状況については、粘土探掘による遺構の保存状況の悪さ等にも起因して必ずしも明確でない。このため、当該地区の性格を解明するため自然科学の方法を導入し、第113次及び第115次調査で花粉分析調査を行い、第116次調査では花粉分析調査に加え、植物珪酸体の分析調査をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

以下に第113・115次調査と第114次調査及び第116次調査に分けてその結果について報告する。

### 2 第113・115次調査

#### 試料

花粉分析試料は、齋宮が置かれていた奈良時代～平安時代を中心として近世～現代までの堆積物10点である。分析試料を第1表及び第2表に示す。

番号	試料名	遺構	時代
10	SE7600 No1	井戸	平安時代後Ⅱ期（11世紀）
11	SE7600 No2	井戸	平安時代後Ⅱ期（11世紀）
12	SE7600 No3	井戸	平安時代後Ⅱ期（11世紀）

第1表 第113-1次調査分析試料

番号	試料名	遺構	時代
1	SB7465 No1	竪穴住居	奈良時代（8世紀）
2	SB7465 No2	竪穴住居	奈良時代（8世紀）
3	SB7465 No3	竪穴住居	奈良時代（8世紀）
4	SK7732 No1	中世墓	鎌倉時代
5	SK7732 No2	中世墓	鎌倉時代
6	南壁(T13) No1	基本層序	近世～現代
7	南壁(T13) No2	基本層序	中世以降
8	SB7730 P 1	掘立柱建物	平安時代前Ⅱ期（9世紀）
9	SB7730 P 3	掘立柱建物	平安時代前Ⅱ期（9世紀）

第2表 第115次調査分析試料

#### 花粉分析の方法

試料約10gについて、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛；比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、出現個体数の一覧表に表示し、木本花粉が100個体以上検出された試料については、花粉化石組成図を作成する。図中の出現率は、木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数として、百分率で算出する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

## 結 果

結果を第3表、第1図に示す。試料番号6以外の試料では、花粉・孢子化石の保存状態が悪く、統計的に扱えるほどの花粉化石は検出されなかった。

試料番号6の花粉化石組成は、木本花粉ではマツ属が優占し、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などを伴う。草本花粉では、アリノトウグサ属とイネ科が多産する。栽培植物のソバ属が検出される。

## 古植生について

花粉分析で古植生に関する情報が得られたのは、近世～現代に相当する試料番号6だけであった。この試料からはマツ属が優占して検出され、近世以降周辺で分布拡大が示唆される。このような傾向は全国の花粉分析結果に共通するが、その原因は人間の植生干渉が活発になかったためとされている（辻ほか 1986）。草本類で多産するアリノトウグサ属やイネ科は、試料採取地点の周辺に生育されていたと考えられる。また、ソバ属の検出から周辺での栽培が示唆される。

今回の分析調査の主要な課題であった奈良時代～平安時代の古植生については、花粉化石が良好に得られなかったため、今回の結果からは推定することが難しい。花粉化石は、好気的な環境下では風化作用により分解されやすいことから、本遺跡のような微高地上の遺跡では、花粉化石が分解されてしまったと考えられる。現在の周辺植生から考えれば、当時もカシ類やシイ類などの照葉樹が山地を中心に分布していたと推定されるが、植栽や栽培などの情報については、花粉化石をはじめとする植物化石に頼らなければならない。花粉化石は広域的な植生を反映するため、周辺の湿地などに分布する同時代の堆積物を対象にすれば、齋宮周辺の当時の植生の情報を得ることが可能である。また、井戸や溝・池などの底付近で水成堆積した覆土では、花粉をはじめ材や種実などの植物化石も保存されていることがあり、当時の植物利用に関して有効な情報を得られることが期待される。奈良県の箸尾遺跡では上記のような方法によって、当時の古植生や植物利用が詳細に復元されている（金原 1994）。今後、本遺跡でも遺跡の立地や堆積物の状況を考慮しながら、植物化石の抽出、同定を行い、総合的な検討を行っていきたい。

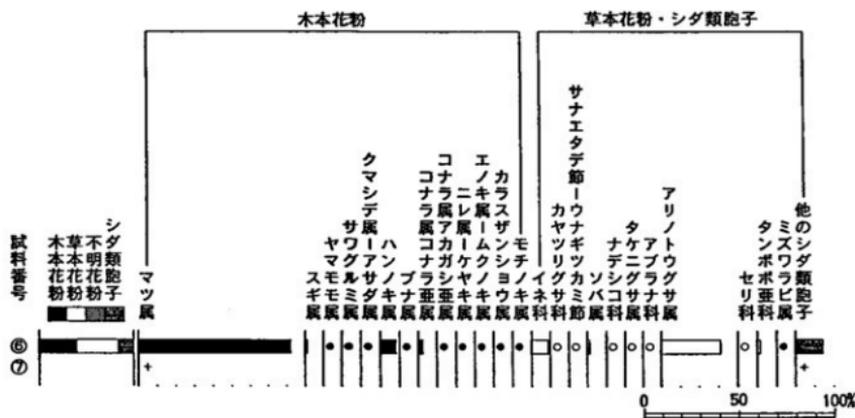
### 【引用文献】

金原正明(1994)植物遺体による農耕の復元について、日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集, p51-52

辻 誠一郎・南木睦彦・小杉正人(1986)茂林寺沼及び低地溼原調査報告書 第2集「館林の池沼群と環境の変遷史」, p1-110, 館林市教育委員会

第3表 第113-1・115次調査 花粉分析結果

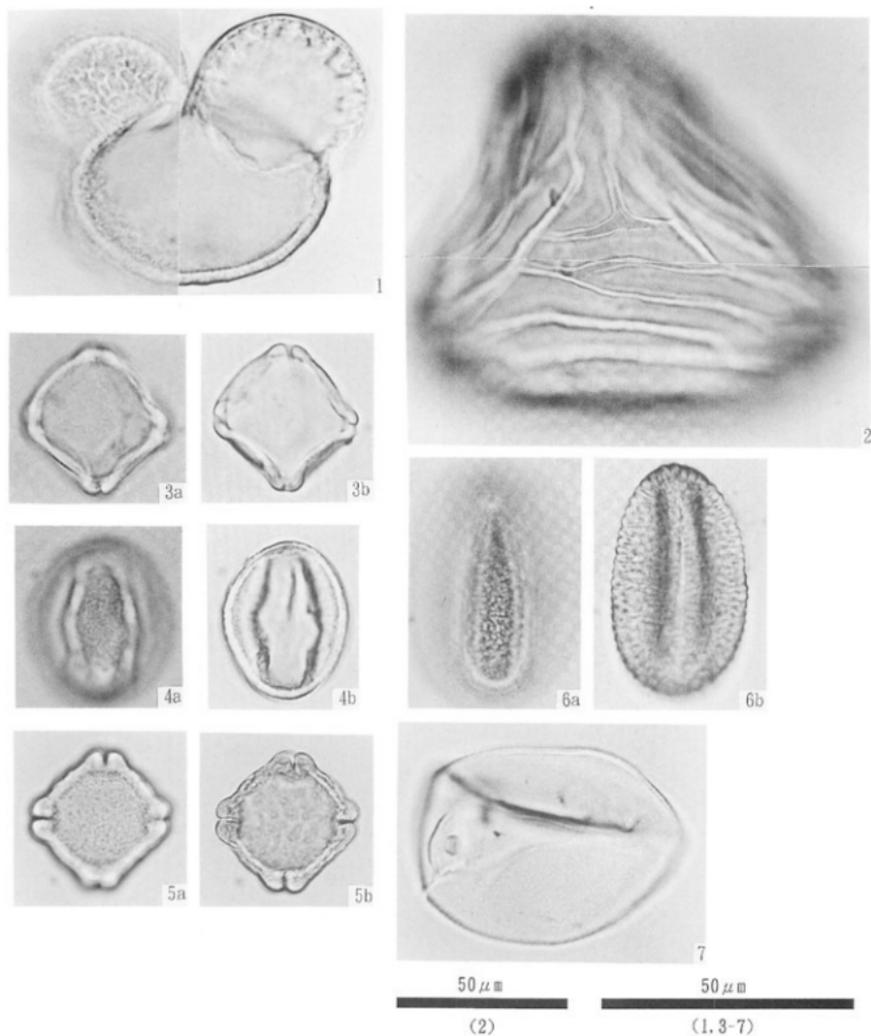
種類	試料番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
木本花粉							200	1		1			1
マン属							3						
スギ属							2						
ヤマモミ属							1						
サウグルミ属							1						
クマシデ属-アサダ属							2						
ハンノキ属							20						
ブナ属							1						
コナラ属コナラ亜属							6						
コナラ属アカガシ亜属							1						
ニレ属-ケヤキ属							2						
エノキ属-ムクノキ属							2						
カラスザンショウ属							1						
モチノキ属							2						
草本花粉													
イネ科							53						
カヤツリグサ科							1						
サナエタデ節-ウナギツカミ節					1		2						
ソバ属							7						
ナデシコ科							1						
タケニグサ属							1						
アブナ科							1						
アリノトウグサ属							186				1		1
セリ科							4						
タンポポ草科							9						
不明花粉							3						
シダ類胞子													
ミスワラビ属		1					4						
他のシダ類胞子			5	12	5	47	86	7	12		7	20	9
合計		1	5	12	6	47	598	8	12	9	20	10	23
木本花粉		0	0	0	0	0	243	1	0	1	0	0	1
草本花粉		0	0	0	1	0	265	0	0	1	0	0	0
不明花粉		0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子		1	5	12	5	47	90	7	12	7	20	9	23
総計(不明を除く)		1	5	12	6	47	598	8	12	9	20	10	24



第1図 第115-2次調査T-13区南壁セクションの花化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○●は1%未満の試料について検出した種類、+は木本花粉が100個体未満の試料についての出現を示す。

図版 1 第113-1次・115次調査花粉化石



- |                     |                        |
|---------------------|------------------------|
| 1. マツ属 (試料番号 6)     | 2. ミズワラビ属 (試料番号 6)     |
| 3. ハンノキ属 (試料番号 6)   | 4. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号 6) |
| 5. アリノトウサ属 (試料番号 6) | 6. ソバ属 (試料番号 6)        |
| 7. イネ科 (試料番号 6)     |                        |

### 3 第114次調査

#### 試料

平安時代初頭の棚列を中心に、採取された7点の試料について、花粉分析と植物珪酸体分析をそれぞれに行う。同一の試料を二分して両分析に用いた。試料の詳細は、第4表に示す。

番号	試料名	遺構	標高	時期
1	SA7000 H-21 P5	棚列	9.50m	平安時代初期
2	SA7000 H-21 P4	棚列	10.08m	平安時代初期
3	SA7000 H-21 P5	棚列	9.74m	平安時代初期
4	SA7000 H-21 P1	棚列	10.02m	平安時代初期
5	SA7000 H-21 P24	棚列	9.90m	平安時代初期
6	SD7643 K-19	溝	10.31m	奈良時代後期
7	SD7689 L-28	溝	10.22m	不明

第4表 第114次分析試料

#### 花粉分析

花粉分析方法は、前述の第113・115次調査の項で示した方法によって実施した。

#### 植物珪酸体分析

試料約5gについて、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理(80W, 250KHz, 1分間)による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタンステン酸ナトリウム(比重2.5)による重液分離を順に行い、物理・化学処理で植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。その後、プレパラットで封入してプレパラットを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラット全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部(葉身と葉鞘)の短細胞に由来する植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)及び葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を同定・計数する。なお、同定には、近藤・佐瀬(1986)の分類を参考にした。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。

#### 花粉分析結果

図版に示すように、全体に保存状況が悪く、ほとんど検出されない。各試料ともシタ類胞子が数個検出されるのみであり、その他微細な植物遺体片が少量みられる程度である。

#### 植物珪酸体分析

検出された植物珪酸体の種類と検出個数を第5表に、第2図に示す。植物珪酸体は

## 結 果

試料番号1, 3, 6, 7で検出されるが、いずれも保存状態が悪い。また、他の試料は検出数が少ない。個数が多い試料の出現傾向は、短細胞、機動細胞、ともにタケ亜科の産出が目立ち、ウシクサ族が少量認められる。

## 考 察

今回花粉分析の保存状況が悪く、ほとんど検出されなかった。花粉化石は、水成層など嫌気的な状況下では分解されにくい、好気的な状況下では分解されやすい。おそらく、今回対象とした堆積物は、好気的な状況下で堆積が進んだものと考えられる。なお、後述する第116次調査区では、比較的花粉化石が多く検出されたが、これは、水の存在した痕跡のある溝などを中心に調査を行ったためと考えられる。

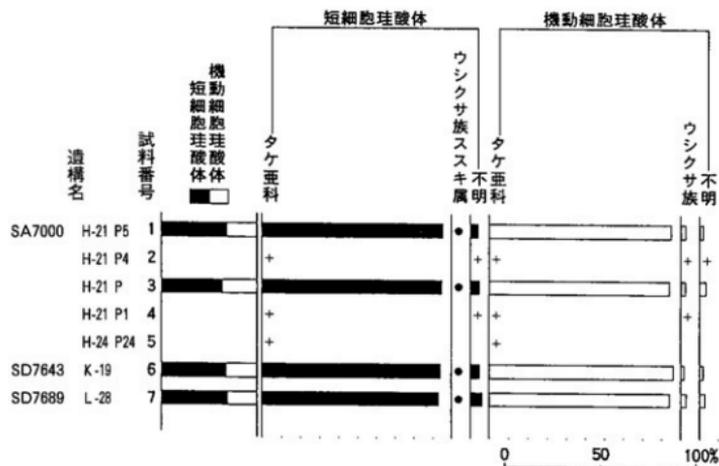
今回の植物珪酸体分析結果をみると、タケ亜科が非常に多い。第116次調査区でもタケ亜は多産するが、それよりも出現率が高く、また他の種類がほとんど検出されない。タケ亜科珪酸体は、他の珪酸体と比較して生産量が多く、しかも風化に強いとされている(近藤, 1982; 杉山・藤原, 1986)。したがって、実際の植生より過大に評価されている可能性があるものの、今回の値は非常に高い。このような産状から、今回得られた組成は局地性高く、本地点周辺にはタケ亜科が自生あるいは植栽されていた可能性がある。今日、暖温带林域竹藪としてよくみられるマダケやモウソウダケは、近世に入って中国から導入され、日本に広く栽培されるようになったといわれている(星川, 1987)。一方で、正倉院御物や長岡京跡出土品にマダケがあることや、当時の書物などから、奈良・平安時代には貴族や宮廷の中で珍重され、小規模ながら栽培・利用されていたことが指摘されている(齊藤, 1977)。斎宮の性格から考えると、仮に植栽されていたとすれば、後者の説を支持することになり興味深い結果ではある。ただし、低地の微高地などでは、メダケやネザサ類などのササ類が生育しやすいことを考えると、必ずしも栽培であるとはいえない。今後堆積中の植物珪酸体分析を実施するなかで、保存が良い場合には杉山・藤原(1986)に記載されているタケ亜科の細分を試みるなどして、継続的に考えていきたい課題の一つである。

## 《文 献》

- 星川清親(1987) 栽培植物の起源と伝播. 311P., 二宮書店  
齊藤正二(1977) 日本古典文学にみる竹, 世界の植物, 85, p2141, 朝日新聞社  
近藤鍊三(1982) Plant Opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究. 昭和56年度科学研究費(一般C) 研究成果報告書, 32p.  
近藤鍊三・佐瀬 隆(1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.  
杉山真二・藤原宏志(1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—. 考古学と自然科学, 19, p.69-84

第5表 第114次調査植物珪酸体分析結果

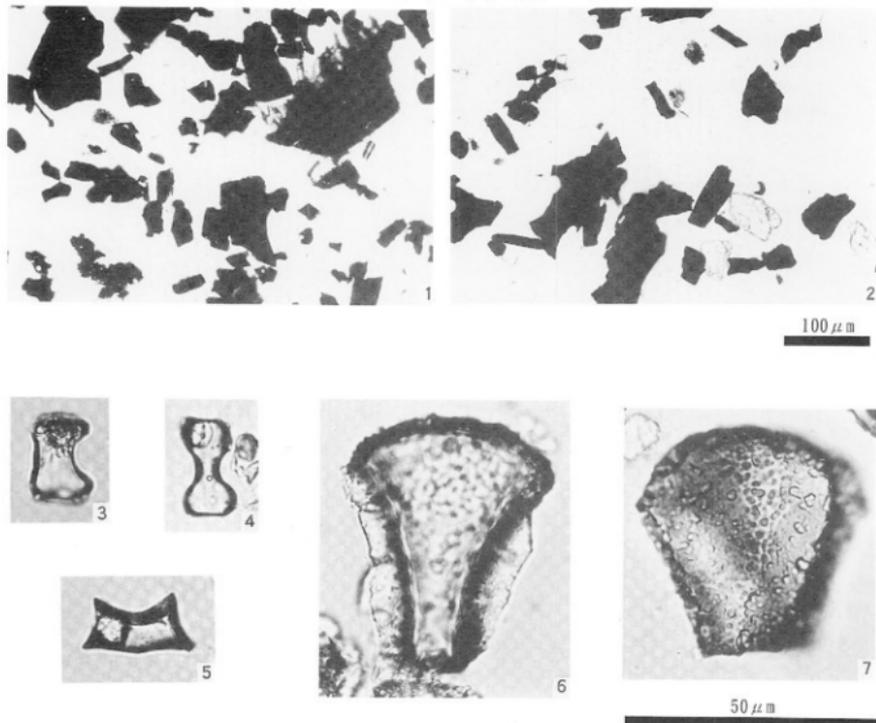
種 類	試料番号	SA7000					SD7643	SD7689
		1	2	3	4	5	6	7
イネ科葉部短細胞珪酸体								
タケ亜科		206	15	196	3	12	204	208
ウシクサ族ススキ属		1	—	1	—	—	2	1
不明キビ型		2	—	3	1	—	4	8
不明ヒゲシバ型		5	3	1	—	—	6	4
不明ダンチク型		2	—	6	—	—	1	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
タケ亜科		98	6	113	5	8	104	96
ウシクサ族		3	1	3	1	—	2	3
不明		2	2	4	—	—	2	3
合 計								
イネ科葉部短細胞珪酸体		216	18	207	4	12	217	223
イネ科葉身機動細胞珪酸体		103	9	120	6	8	108	102
総 計		319	27	327	10	20	325	325



第2図 第114次調査植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の種類を示す。

図版2 第114次調査 花粉化石プレパラート内の状況写真・植物珪酸体



1. 状況写真 (試料番号3)
2. 状況写真 (試料番号4)
3. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号1)
4. ススキ属短細胞珪酸体 (試料番号6)
5. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号6)
6. タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料番号1)
7. タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料番号6)

#### 4 第116次調査

##### 試料

平安時代の側溝を中心に採取された19点の試料について、花粉分析と植物珪酸体分析を行う。同一の試料を二分して両分析に用いた。試料の詳細は、第6表に示す。

##### 花粉分析結果

結果を第7・8表・第3図に示す。今回は、全体的に草本花粉が多く、またソバ属やツタ属など虫媒花花粉も多産することから、局地性を反映していると考えられる。そこで、金原(1990)など局地的な植生を検討した例と比較しやすいように、これらの研究例に従い、木本花粉と草本花粉の総数を基数として百分率で計算する。全体的にシダ類孢子の割合が高い。

・第116-1次 S D7761,6982,7767

花粉化石は、試料番号3と4で多く検出される。草本類の割合が多く、特にイネ科とソバ属が顕著である。

・第116-1次 S D7762

試料番号3をのぞく試料で多く検出される。多産する種類が試料によって変化する。試料番号1では、ツタ属、イネ科、ソバ属、試料番号2ではマツ属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属、スイカズラ属、イネ科、試料番号4では、マツ属、エノキ属-ムクノキ属、イネ科が目立つが、際だって多い種類は認められない。

・第116-2次 S K7770

試料番号2で、イネ科とヨモギ属が多く検出されるが、試料番号1では花粉化石が少ない。

・第116-1次 S D7762

全体的に花粉化石の量が少ない。他の地点で多かった種類が検出される傾向にある。

・第116-3次・第116-4次の溝群 (S D7776,7778,7779, S D7791~7793)

試料番号4と2で検出される。マツ属が優占するのが特徴である。

##### 植物珪酸体結果

検出された植物珪酸体の種類と検出個数を第9表、第4図に示す。植物珪酸体は各試料から検出されるが、保存状態の悪い試料が多い。

・第116-1次 S D7761,6982,7767

いずれの試料も、タケ亜科の産出が目立つ。また、イネ属やウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども認められる。また、イネ属では短細胞列や初殻に形成される顆粒珪酸体などの組織片も認められる。

・第116-1次 S D7762

S D7761,6982,7767と同様に、タケ亜科の産出が目立ち、イネ属やウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども認められる。また、イネ属の短細胞列も認められる。

・第116-2次 S K7770

試料番号1・2ともに、イネ属が多産する。この中には、組織片として認められるものも多い。また、タケ亜科やウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども認められる。

・第116-2次 S D7775

タケ亜科の産出が目立つが、イネ属の割合も高い。イネ属の中には、組織片として認められるものもある。また、ウシクサ族やイチゴツナギ亜科なども認められる。

・第116-3次・第116-4次の溝群

S D7761,6982,7767 (第116-1次)やS D7762 (第116-1次)と同様に、タケ亜科の産出が目立つが、イネ属の割合も高い。イネ属の中には、組織片として認められるものもある。また、ウシクサ族やイチゴツナギ亜科なども認められる。

## 考 察

今回検出された microfossil の出現傾向をみると、

- ①ほとんどの試料から検出されるが低率であるもの
- ②ほとんどの試料から低率で検出され、なおかつ特定の遺構で多産するもの
- ③有る特定の遺構では多産するが他の遺構からは検出されないもの
- ④数も少なく、遺構も限られているもの
- ⑤常に多産するもの

におおよそ分けられる。

①に該当するものとして、花粉化石では、ツガ属、アカガシ亜属などの木本類や、サナエタ節-ウナギツカミ節、カヤツリグサ科などの草本類、植物珪酸体ではウシクサ族、ヨシ属、イチゴツナギ亜科があげられる。これらは、周辺の植生に由来すると思われる、背後の山地や周辺の草地を作っていたいたものと思われる。また④に該当するものうち、ミズワラビ属やオオバコ属は、木本類と比べて花粉や胞子生産量が少なく、拡散能力にも乏しい。そのため、化石では過少に評価されている可能性があり、実際には、周囲に多く生育していたものと考えられる。

②に該当するものとして、花粉化石ではマツ属、ニレ属-ケヤキ属などの木本類、ソバ属やヨモギ属の草本類、植物珪酸体ではイネ属があげられる。このうち、ソバ属とイネ属は渡来した植物であり、当時周辺で栽培されていた可能性がある。特に、本来ソバ属は虫媒花で花粉生産量が低いが、第116-1次 S D7761-6982・7767、S D7762で多産することから、遺構付近での栽培が示唆される。一方イネ属は第116-2次 S K7770で多産し、併せて初に由来する珪酸体や、葉の一部に珪酸体が配列している組織片も多産する。このことから、土坑内には稲藁、稲藁製品、稲穂などが投棄あるいは保存されていた可能性がある。また、マツ属やニレ属-ケヤキ属は、周辺の山地、丘陵などにも生育していたと思われるが、特定の遺構で多産することから、近隣にも生育していたことが考えられる。これらは植栽されることも多い種類であることから、遺跡周囲に植えられていた可能性がある。ヨモギ属も人里など生育する種類であることから、周辺に生育していたと考えられるが、特に第116-2次 S K7770で多く、近くに生育していた可能性がある。

③に該当するものは、エノキ属-ムクノキ属、ツタ属、スイカズラ属があげられる。これらは、虫媒花であり、飛散能力も小さいと思われることから、周囲に生育していたと考えられる。これらの種類のなかには、エノキ、ムクノキ、スイカズラなど庭木などとして植栽される種類も含まれる。一方、ツタは、自然発生的に生育していたと思われる。

④に該当する希に検出されるものは、再堆積や遠方から流下した可能性もあるので、周囲に生育していたか否か不明な種類も多い。ただし、先に述べたミズワラビ属などにみられるように飛散量や生産量が低いものも多く、過少評価されている可能性も高い。これらについては、今後の資料蓄積をはかっていきたい。

⑤に該当するものは、植物珪酸体のタケ亜科である。タケ亜科珪酸体は、他の珪酸体と比較して生産量が多く、しかも風化にも強いとされている（近藤，1982：杉山・藤原，1986）。したがって、実際の植生より過大に評価されている可能性が高く、周辺の草地や山地に生育している量は、植物珪酸体の割合ほど多くなかったと思われる。

今回対象とした遺構は、平安時代後期のものと、平安時代末～鎌倉時代初頭にあたるものに分けられる。平安時代後期の試料は、微化石の保存が悪いものが多いので一概には比較できないが、平安時代後期の試料の方がマツ属が少ない傾向にある。周辺の開発が進んで、マツの二次林や植林が増加したとも考えられるが、今回の花粉化石群集は局地性を反映していると考えられることから、一概にはいえない。地域的な変遷をとらえるためには、ボーリング等によって採取した連続試料の分析調査も必要であろう。

上記したような微化石の出現傾向を考慮して、当時の植物景観について第10表にまとめた。代表的な植物は、遺跡周辺が暖温帯に属すことや地形などを考慮したが、あくまでも現段階では推定の域を出ない。今後さらに資料の蓄積をはかりたい。

#### <引用文献>

黒崎 直・松井 章・金原正明・金原正子（1994）トイレの考古学．日本考古学協会第60回総会 研究発表要旨，p.49-51．

近藤錬三（1982）Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究．昭和56年度科学研究費（一般C）研究成果報告書，32p．

近藤錬三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31-64．

バリノ・サーヴェイ株式会社（1991）平安京右京五条二坊九町・十六町発掘調査花粉・植物珪酸体分析報告．京都文化博物館調査研究報告，第7集，p.108-116．

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—．考古学と自然科学，19，p.69-84．

第6表 第116次調査分析試料

試料No.	調査次数・遺構名		レベル	時 期
1	第116-1次・SD7761	40	9.84m	平安時代末～鎌倉時代初頭
2	第116-1次・◇	42,43	9.74m	平安時代末～鎌倉時代初頭
3	第116-1次・SD6982	15	9.46m	平安時代末～鎌倉時代初頭
4	第116-1次・SD7767	20	9.44m	平安時代末～鎌倉時代初頭
5	第116-1次・SD7762	71	9.56m	平安時代末～鎌倉時代初頭
6	第116-1次・◇	72	9.42m	平安時代末～鎌倉時代初頭
7	第116-1次・◇	52	9.78m	平安時代末～鎌倉時代初頭
8	第116-1次・◇	53	9.54m	平安時代末～鎌倉時代初頭
9	第116-2次・SK7770	2	10.18m	平安時代後期
10	第116-2次・◇	5	10.42m	平安時代後期
11	第116-2次・SD7775	13	10.42m	平安時代後期～
12	第116-2次・◇	15	10.29m	平安時代後期～
13	第116-2次・◇	16	10.13m	平安時代後期～
14	第116-3次・SD7776	9	9.92m	平安時代末～鎌倉時代初頭
15	第116-3次・SD7778	12	9.96m	平安時代末～鎌倉時代初頭
16	第116-3次・SD7779	16	10.04m	平安時代末～鎌倉時代初頭
17	第116-4次・SD7793	13	10.10m	平安時代末～鎌倉時代初頭
18	第116-4次・SD7792	10	9.90m	平安時代末～鎌倉時代初頭
19	第116-4次・SD7791	5	10.00m	平安時代末～鎌倉時代初頭

第7表 第116次調査 花粉分析結果(1)

種類	遺構名		SD7761	SD6982	SD7767	SD7762				SK7770		
	試料番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
木本花粉												
マキ属	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
モミ属	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
ツグ属	1	1	1	1	1	3	4	1	2	-	-	6
マツ属	3	3	4	124	7	15	6	31	2	11		
コウヤマキ属	-	4	5	3	5	-	1	3	-	4		
スギ属	-	-	-	18	-	-	-	3	-	-		
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
ヤマモモ属	-	-	2	3	2	-	2	-	-	-	2	
サワグルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	-	-	1	1	-	4	-	1	-	-	-	-
ハンノキ属	-	-	-	3	2	-	-	1	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	1	-	-	1	3	1	-	2	1	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	1	1	6	-	8	-	5	12	-	8		
ニレ属-ケヤキ属	1	2	6	8	7	21	2	13	-	-		
エノキ属-ムクノキ属	-	1	29	32	17	9	10	30	-	-		
カラスギンショウ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-		
キハダ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
ミカン科	-	-	-	-	7	-	-	5	-	-		
モチノキ属	-	-	2	1	3	-	-	-	-	-		
ツタ属	-	-	1	23	68	-	-	-	-	-		
ウコキ科	-	1	2	2	6	-	-	4	-	4		
ツツジ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
イボタノキ属	-	-	-	-	6	-	-	4	-	4		
スイカズラ属	-	-	-	-	-	8	-	-	-	-		
草本花粉												
イネ科	19	37	164	116	164	24	29	69	3	79		
カヤツリグサ科	-	-	2	1	1	-	-	1	-	1		
ツユクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
クワ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	1	3	5	18	2	1	2	-	3		
タデ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-		
ソバ属	2	5	35	80	202	3	17	14	-	11		
アカザ科	1	-	-	-	1	1	-	5	-	3		
ナデシコ科	-	2	8	11	29	2	5	4	-	13		
キンボウゲ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
アブラナ科	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-		
バラ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
フウロツウ属	-	-	-	1	2	-	-	-	-	1		
アリノトウグサ属	-	-	4	13	10	1	-	6	-	1		
セリ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-		
キツネノマゴ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-		
オオバコ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-		
ヨモギ属	1	3	8	3	4	3	3	9	1	46		
オナモミ属	-	1	1	5	-	-	-	-	-	2		
他のキク亜科	-	-	3	7	6	1	2	3	-	-		
タンポポ科	-	-	-	-	1	2	-	-	-	2		
不明花粉	-	1	10	12	17	-	-	3	-	1		
シダ類胞子												
ミズワラビ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-		
他のシダ類胞子	58	269	216	210	527	171	310	146	47	153		
合計												
木本花粉	8	14	61	223	145	62	27	113	3	40		
草本花粉	23	49	234	245	439	39	57	113	4	162		
不明花粉	0	1	10	12	17	0	0	3	0	1		
シダ類胞子	58	270	216	210	527	171	310	146	47	153		
総計(不明を除く)	89	333	511	678	1111	272	394	372	54355			

第8表 第116次調査 花粉分析結果(2)

種 類	SD7775									SD7776	SD7778	SD7779	SD7793	SD7792	SD7791	
	試料番号		11	12	13	14	15	16	17	18	19					
木本花粉																
マキ属	-	-	2	2	-	-	-	-	3	-						
モミ属	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-						
ツグ属	1	4	4	3	1	-	-	-	2	-						
マツ属	5	4	4	182	41	1	5	251	-	-						
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
スギ属	-	-	1	26	-	-	-	-	7	-						
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
ヤマモモ属	-	3	2	-	-	-	-	-	-	-						
サワグルミ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-						
クマシデ属-アサダ属	-	2	-	1	-	-	-	-	1	-						
ハンノキ属	1	3	3	-	-	-	-	-	4	-						
コナラ属コナラ亜属	-	-	3	9	-	1	-	-	-	-						
コナラ属アカガシ亜属	1	2	2	3	-	1	-	-	1	-						
ニレ属-ケヤキ属	-	2	1	1	-	-	-	-	2	-						
エノキ属-ムクノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-						
カラスザンショウ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-						
キハダ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						1
ミカン科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
モチノキ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-						
ツタ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-						
ウコギ科	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-						
ツツジ科	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-						
イボタノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-						
スイカズラ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-						
草本花粉																
イネ科	-	11	15	74	1	1	1	14	-	-						
カヤツリグサ科	-	-	-	10	-	-	-	3	-	-						
ツクサ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-						
クワ科	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-						
サナエタデ節-ウナギツカミ節	2	26	8	2	-	-	-	1	-	-						
タデ属	-	2	-	1	-	1	1	-	-	-						
ソバ属	-	10	16	2	2	2	1	6	-	-						
アカザ科	-	-	1	2	-	-	-	2	-	-						
ナアシコ科	-	3	5	3	-	-	1	1	-	-						
キンボウゲ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-						
アブラナ科	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-						
バラ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-						
フウロソウ属	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-						
アリノトウグサ属	-	1	-	2	1	-	1	1	-	-						
セリ科	-	-	-	10	-	-	-	2	-	-						
キツネノマゴ属	-	-	-	8	-	-	-	1	-	-						
オオバコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
ヨモギ属	1	2	2	2	-	-	-	-	-	-						
オナモミ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-						
他のキク亜科	1	1	-	2	-	2	2	-	-	-						
タンポポ科	-	-	-	2	-	1	-	4	-	-						
不明花粉	-	-	3	2	-	-	-	1	-	-						
シダ類孢子																
ミズワラビ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-						
他のシダ類孢子	439	740	259	305	202	96	80	103	11	-						
合計																
木本花粉	8	18	30	230	43	4	5	272	1	-						
草本花粉	4	58	52	122	4	8	7	35	0	-						
不明花粉	0	0	3	2	0	0	0	1	0	-						
シダ類孢子	439	740	259	306	202	96	80	103	11	-						
総計(不明を除く)	451	816	341	658	249	108	92	41012								



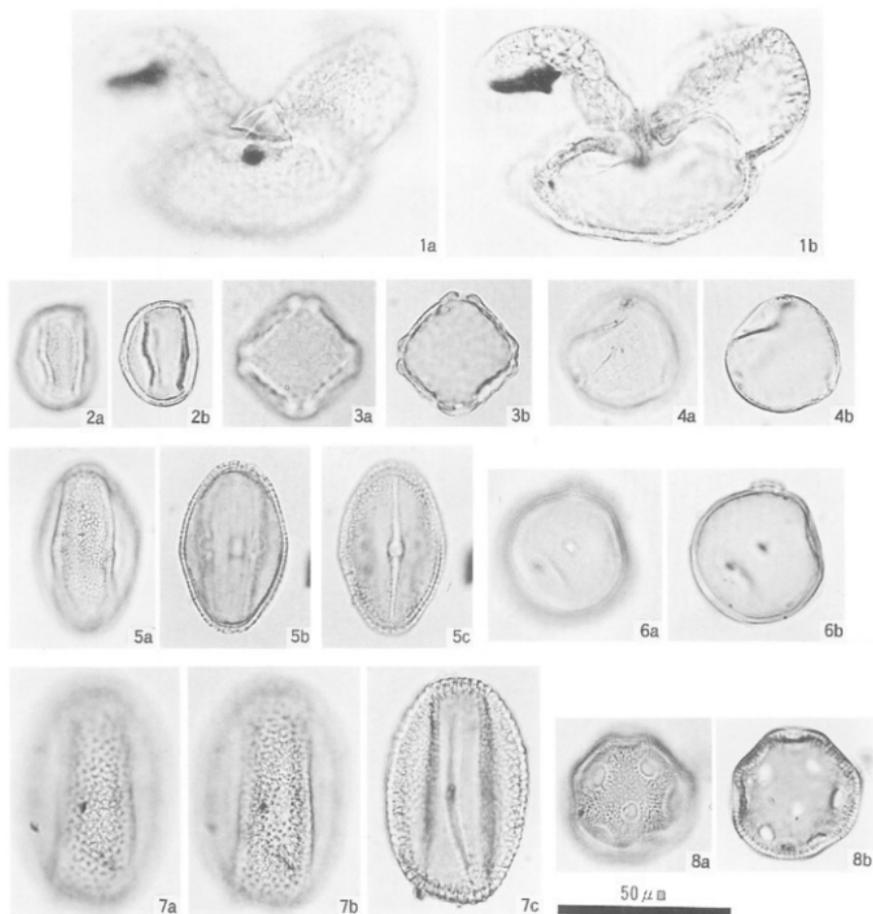
第9表 第116次調査 植物組織体分析結果

種 類	遺 構 名	SD7761	SD6882	SD7767	SD7762	SK7770	SD7775	SD7776	SD7778	SD7779	SD7783	SD7782	SD7791							
	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
イネ科葉部短細胞珪酸体																				
イネ属イネ属		31	26	30	46	65	33	28	23	96	585	43	30	31	116	25	28	72	110	64
キビ族		4	3	2	1	1	3	1	3	1	5	6	-	-	5	1	2	1	3	-
タケ亜科ネザサ節		2	4	1	1	3	3	2	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
タケ亜科		191	179	207	204	204	174	173	205	82	98	212	173	148	135	125	195	136	224	268
ウシクサ族コブナグサ属		-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	1	1	1	2	2	4	-
ウシクサ族ススキ属		6	4	1	2	2	3	2	7	3	3	2	6	5	3	22	-	3	3	2
イチゴツナグサ亜科		17	11	22	16	50	18	20	22	2	3	18	13	9	41	4	14	20	33	22
不明キビ型		18	16	29	22	20	15	9	15	27	16	25	15	14	22	23	12	4	38	26
不明ヒゲシハ型		8	11	14	7	16	8	6	22	23	8	14	13	10	7	14	18	5	22	13
不明ダンチク型		3	4	5	6	3	5	4	18	9	12	7	4	10	6	13	7	6	23	15
イネ科葉身機動細胞珪酸体																				
イネ属イネ属		15	11	14	6	18	6	10	11	50	54	15	16	12	23	21	12	16	24	13
タケ亜科ネザサ節		1	3	1	1	2	1	1	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	3	-
タケ亜科		78	83	78	72	85	95	95	73	51	49	84	86	94	72	92	84	85	71	94
ヨシ属		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族		12	8	7	12	13	2	3	11	13	7	8	8	7	8	12	12	9	7	10
シハ属		3	3	6	3	1	1	-	2	1	-	-	1	2	3	4	-	1	2	1
不明		2	5	6	11	4	3	2	10	2	4	5	3	8	4	10	11	6	11	2
合 計		280	258	311	306	364	260	247	314	249	733	321	255	228	336	228	278	249	461	411
イネ科葉部短細胞珪酸体		113	113	112	105	123	108	111	108	117	115	112	115	123	110	139	119	117	118	120
イネ科葉身機動細胞珪酸体		393	371	423	411	487	368	358	422	366	848	433	370	351	446	367	397	366	579	531
組 織 片																				
イネ属短細胞		3	10	7	3	-	-	-	5	20	19	4	3	5	7	7	5	9	18	6
イネ属短細胞列		6	7	8	6	16	3	7	3	30	182	2	1	7	10	1	4	21	8	5
イネ属機動細胞列		-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
イネ属葉部組織片		-	-	-	-	-	-	-	-	51	71	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科短細胞列		-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-
不明組織片		19	3	3	2	3	4	-	2	50	58	1	-	6	3	4	4	10	10	4



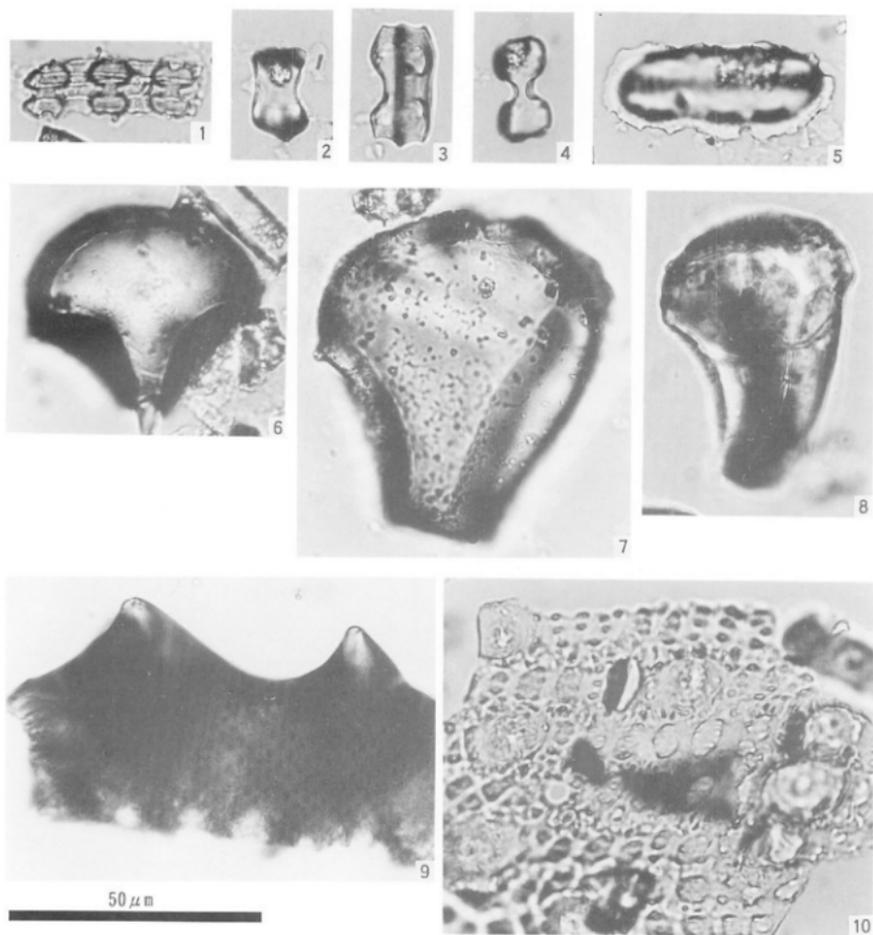
第10表 当時の植生

生育環境	花粉化石	植物群	推測される代表的な植物	顕著に見られる遺構	備考	
・山地、丘陵などの森林植生	ツガ属	ツガ				
	スギ属	スギ				
	コウヤマキ属	コウヤマキ				
	コナラ亜属	コナラ、クヌギなど			二次林など	
	アカガシ亜属	アカガシ、アラカシなど				
	クマシデ属-アサダ属	クマシデ、イヌシデなど				
	ミカン科	タチバナなど				
	ウコギ科	タラノキ、ヤツデなど				
		マダケ、ヤダケなど				
		タケ亜科	タケ			
		イネ科	イネ			
		イネ科	イネ			
	・遺跡周辺の草本植生	イネ科	イネ			
イネ科		イネ				
カヤツリグサ科		カヤツリグサなど				
アカザ科		アカザ、コアカザなど				
ナデシコ科		ハコベ、ノミノアスマなど				
フウソウ属		ゲンノシヨウコなど				
アリノトウグサ属		アリノトウグサなど				
セリ科		セリ、ウド、チドメグサなど				
キツネノマゴ属		キツネノマゴなど				
オオバコ属		オオバコなど				
ヨモギ属		ヨモギなど				
オナモミ属		オナモミなど				
タンポポコ亜科		タンポポコ類、オニタビラコなど				
ソバ属	ソバ				第116-2次 SK7770	
イネ科	イネ				第116-1次 SD7761・6982・7767・7762	
イネ科	イネ				第116-2次 SK7770	
ミズワラビ属	ミズワラビ					
イネ科	ヨシ					
マツ属	アカマツ、クロマツ				第116-3次・第116-4次の隣群 山地にも生育	
ケヤキ属	ケヤキなど				第116-1次 SD7762 山地にも生育	
エノキ属-ムクノキ属	エノキ、ムクノキ				第116-1次 SD7761・6982・7767・7762	
ツタ属	ツタ				第116-1次 SD7761・6982・7767・7762 自然に生育	
スイカズラ属	スイカズラなど				第116-1次 SD7762	



- |                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| 1. マツ属 (試料番号4)      | 2. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号5) |
| 3. ニレ属-ケヤキ属 (試料番号4) | 4. エノキ属-ムクノキ属 (試料番号5) |
| 5. ツタ属 (試料番号5)      | 6. イネ科 (試料番号4)        |
| 7. ソバ属 (試料番号5)      | 8. ナデシコ科 (試料番号5)      |

図版4 第116次調査 植物珪酸体



1. イネ属短細胞列 (試料番号1)
2. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号15)
3. コブナグサ属短細胞珪酸体 (試料番号15)
4. ススキ属短細胞珪酸体 (試料番号15)
5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (試料番号15)
6. イネ属機動細胞珪酸体 (試料番号1)
7. タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料番号9)
8. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (試料番号9)
9. イネ属顆粒珪酸体 (試料番号1)
10. イネ族葉部組織片 (試料番号9)

掘立柱建物・柵列一覧表

遺構番号	規模	棟方向	桁行 (m)	梁行 (m)	柱間寸法 (m)		時期	備考
					桁行	梁行		

## 第113次調査 (6 A C I)

SB7601	3×2	E13° S	6.5	4.2	不揃	2.1	平安後Ⅱ期 ◇ ◇	桁行2.2m+2.1m+2.2m SB7601より新
SB7602	3×2	N13° E	6.3	4.8	2.1	2.4		
SB7603	3×(1)	N13° E	6.3	(2.1)	2.1	2.1		
SB7604	(1)×2	E7° S	(2.4)	4.2	2.4	2.1	平安末期 ◇ ◇ ◇	SB7603より新  第8-4次調査検出
SB7605	3×3	N7° S	7.2	6.3	2.4	2.1		
SB7606	3×2	N7° E	6.3	4.2	2.1	2.1		
SB0177	(1)×2	E7° S	(2.1)	4.2	2.1	2.1		
SB7607	2×2	N2° W	4.2	4.6	2.1	2.3	鎌倉前期 ◇ ◇	東庇出2.7m SB7608より古 西庇出2.7m、北庇出2.1m 桁行2.6m+2.3m+2.3m
SB7608	2×2	N2° W	4.2	4.6	2.1	2.3		
SB7609	3×2	E2° N	7.2	4.4	不揃	2.2		

## 第114次調査 (6 A E Q-E・F)

SB0575	(3)×2	E5° N	(7.2)	4.2	2.4	2.1	奈良後期 ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇	第10次調査検出 第108次調査検出 SB7315・7645より古 SB7315より古 SB7647・7648より古 SB7655より古 SB7659・7660より古
SB7310	6×2	E5° N	14.4	4.8	2.4	2.4		
SB7644	3×-	E4° N	7.2	-	2.4	-		
SB7645	4×-	E4° N	10.8	-	2.7	-		
SB7646	(2)×2	E4° N	(4.8)	4.8	2.4	2.4		
SB7654	4×2	E5° N	9.6	4.8	2.4	2.4		
SB7658	3×2	E4° N	7.2	4.8	2.4	2.4		
SA7000	(16)	E4° N	(47.36)		(2.96)			
SB7647	(2)×(1)	E4° N	(4.8)	(3.0)	2.4	3.0	平安初期 ◇ ◇ ◇	SB7648より古  SB7660より古
SB7648	(3)×(2)	E4° N	(8.1)	5.4	2.7	2.7		
SB7659	3×2	E4° N	7.2	4.8	2.4	2.4		
SB7660	3×2	E4° N	7.5	4.8	2.5	2.4		
SB7649	5×2	E4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	平安前Ⅰ期 ◇ ◇	
SB7655	3×-	E4° N	7.2	-	2.4	-		
SB7656	(1)×2	N2° W	(2.1)	3.6	2.1	1.8		
SB7653	3×2	N0° S	6.0	4.0	不揃	不揃	平安前Ⅱ期	桁行2.4m+1.8m+1.8m 梁行1.8m+2.2m
SB7315	3×-	E3° N	8.1	-	2.7	-	平安中期 ◇ ◇	第108次調査検出 SB7683より古
SB7682	5×(1)	E4° N	14.0	(3.0)	2.8	3.0		
SB7683	(4)×-	E4° N	(8.0)	-	2.0	-		
SB7313	5×2	N4° W	12.0	4.8	2.4	2.4	平安後Ⅱ期 ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇	第108次調査検出 SB7639・7642より古 SB7640・7642より古 SB7641・7642より古 SB7642より古 SB7678・7681より古
SB7638	5×2	N4° W	10.5	4.2	2.1	2.1		
SB7639	4×2	N4° W	9.6	4.8	2.4	2.4		
SB7640	5×2	N4° W	10.5	4.2	2.1	2.1		
SB7641	4×2	N3° W	8.4	5.4	2.1	2.7		
SB7642	5×2	N4° W	10.5	3.6	2.1	1.8		
SB7677	5×2	N4° W	12.0	4.2	2.4	2.1		

遺構番号	規模	棟方向	桁行 (m)	梁行 (m)	柱間寸法 (m)		時 期	備 考
					桁行	梁行		
SB7678	5×2	N5° W	10.5	4.4	2.1	2.2	平安後Ⅱ期	SB7679~7681より古 SB7680~7681より古 SB7681より古
SB7679	3×2	N4° W	6.3	4.2	2.1	2.1	◇	
SB7680	(1)×2	E4° N	(2.1)	4.2	2.1	2.1	◇	
SB7681	5×2	N2° W	12.0	4.2	2.1	2.1	◇	

#### 第115-1次調査 (6ADK, 6ADL)

SB7719	(1)×2	N16° E	(1.3)	3.4	1.3	1.7	平安前期	
SB7720	-×2	N2° E	-	4.2	-	2.1	◇	
SB7722	(1)×(1)	N9° E	(2.1)	(2.1)	2.1	2.1	◇	
SB7715	(1)×2	N16° E	(2.3)	4.2	2.3	2.1	平安後期	

#### 第115-2次調査 (6ADK)

SB7730	3×-	E0° W	6.0	-	2.0	-	平安前Ⅱ期	SB7731より古 SB7730の建替え
SB7731	3×-	E0° W	6.0	-	2.0	-	◇	
SB7725	(1)×2	N17° E	(1.3)	4.2	1.3	2.1	時期不明	

#### 第116-1次調査 (6ADG, 6ACE-L・N, 6ADI-A・C)

SB6090	6×3	E9° N	11.5	4.8	1.92	1.6	奈良前期	第87次で検出 第87次で検出
SB6091	4×2	E9° N	8.0	4.0	2.0	2.0	◇	
SB7755	(1)×2	N10° W	(2.4)	5.0	2.4	2.5	奈良後期	西庇出2.4m
SB7745	3×2	N2° W	6.0	4.8	不揃	不揃	奈良時代	総柱建物 桁行1.9m+1.9m+2.2m 梁行2.3m+2.5m
SA6201	2	E18° N	4.0		2.0		◇	SB改めSAとする
SB0158	(3)×2	E2° N	(6.3)	4.2	2.1	2.1	平安初期	第8-4次で検出
SB7765	-×2	E12° N	-	2.8	-	1.4	平安前Ⅱ期	
SA7766	3	E12° N	5.1		1.7		◇	
SB7759	3×-	E2° N	7.2	-	2.4	-	平安後Ⅱ期	
SB7748	(3)×2	N6° W	(6.45)	4.3	2.15	2.15	平安後期	
SB7768	3×2	E12° N	4.8	3.0	不揃	1.5	時期不明	桁行1.4m+2.2m+1.2m

#### 第116-3次調査 (6ADI-Q)

SB7785	-×2	E1° N	-	4.0	-	2.0	平安末期	
--------	-----	-------	---	-----	---	-----	------	--

#### 第116-4次調査 (6ADI-MN)

SB7790	(3)×2	E7° N	(5.1)	4.2	1.7	2.1	奈良後期	
--------	-------	-------	-------	-----	-----	-----	------	--

### 竪穴住居一覽表

遺構番号	規模 (m)	長軸方向	深さ (cm)	柱 穴	カマド	時 期	備 考
SB7465	4.4×4.0	N8° E	30	-		奈良後期	

# 遺物（土器）観察表

## 第113次調査

No.	出土遺物	器種	法量	調査・技法の特徴	胎土	焼成	色	調査	残存度	備考	登録番号
1	S D0181	土部 鉢	(口径) 14.0cm (底径) 3.4cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ	1～2mmの石粒を含みやや粗い	良好	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	10YR8/3 10YR8/3	劣形		R10
2	S D0181	土部 鉢	(口径) 15.0cm (底径) 4.7cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ	1～2mmの石粒を含みやや粗い	良好	内: 灰白 外: 灰白・黄褐色	10YR7/4 10YR7/4	口縁の3/8 残存		R11
3	S D0181	土部 鉢 小皿	(口径) 10.0cm (底径) 2.0cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ	1～2mmの石粒を含みやや粗い	良好	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	10YR8/3 10YR8/3	劣形		R12
4	S D0181	ワラ土部 小皿	(口径) 9.4cm (底径) 6.0cm (脚高) 1.8cm	内外面コナダ, 底部縁部 転糸切痕	陶化した石を含むが粗い	良好	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	10YR8/4 10YR8/4	変形	口右左面破	R13
5	S B 7603 e-12767	土部 鉢 小皿	(口径) 9.4cm (底径) 1.3cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ	1～2mmの石粒を含みやや粗い	良好	内: 灰白 外: 灰白	10YR8/2 10YR8/2	変形		R1
6	S B 7603 e-12767	土部 鉢 小皿	(口径) 9.2cm (底径) 1.3cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ	1～2mmの石粒を含みやや粗い	良好	内: 灰白 外: 灰白	2.5Y8/2 2.5Y8/2	変形		R2
7	S B 7603 e-12767	土部 鉢 台付小皿	(口径) 9.3cm (台径) 4.3cm (脚高) 2.4cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ, 貼付高台	石粒を多く含みやや粗い	良好	内: 灰白 外: 灰白	10YR8/2 10YR8/2	変形		R4
8	S B 7603 e-12767	土部 鉢 台付小皿	(口径) 9.3cm (台径) 5.3cm (脚高) 2.1cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ, 貼付高台	陶化した石を含むが粗い	良好	内: 灰白 外: 浅黄褐色	2.5Y7/1 2.5Y8/3	劣形		R3
9	S B 7603 e-12767	ワラ土部 台付小皿	(口径) 8.4cm (台径) 4.3cm (脚高) 2.8cm	内外面コナダ, 底部縁部 転糸切痕	粗	良好	内: 黄 外: 黄	5YR6/8 5YR6/8	劣形		R9
10	S B 7603 e-12767	ワラ土部 台付小皿	(口径) 8.9cm (台径) 4.3cm (脚高) 2.1cm	内外面コナダ, 底部縁部 転糸切痕	陶化した石を含むが粗い	良好	内: 黄 外: 黄	5YR7/6 5YR7/6	劣形		R8
11	S B 7603 e-12767	ワラ土部 台付小皿	(口径) 9.6cm (台径) 4.3cm (脚高) 2.5cm	内外面コナダ, 底部縁部 転糸切痕	石粒を粗かに含むが粗い	良好	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	2.5Y8/3 2.5Y8/3	劣形		R6
12	S B 7603 e-12767	ワラ土部 台付小皿	(口径) 9.8cm (台径) 4.4cm (脚高) 2.1cm	内外面コナダ, 底部縁部 転糸切痕	石粒を含むが粗い	良好	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	2.5Y8/3 2.5Y8/3	劣形		R5
13	S E 7600	土部 鉢 小皿	(口径) 9.7cm (底径) 2.3cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ	1～2mmの石粒を含みやや粗い	やや悪い	内: 灰白 外: 灰白・黄褐色	7.5YR7/4 7.5YR8/2	ほぼ変形		R48
14	S E 7600	土部 鉢 小皿	(口径) 10.3cm (底径) 2.3cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ	1～2mmの石粒を含みやや粗い	やや悪い	内: 灰黄褐色 外: 灰黄褐色	10YR7/2 10YR8/2	ほぼ変形		R50
15	S E 7600	土部 鉢 小皿	(口径) 10.3cm (底径) 1.3cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ	石粒をやや含むが粗い	良好	内: 黄褐色 外: 黄褐色	7.5YR8/8 7.5YR8/8	口縁の3/4 残存		R31
16	S E 7600	ワラ土部 小皿	(口径) 10.3cm (底径) 4.8cm (脚高) 2.9cm	内外面コナダ, 底部縁部 転糸切痕	陶化した石を含むが粗い	良好	内: 黄 外: 黄	7.5YR7/6 7.5YR7/6	約80%	口右左面破	R34
17	S E 7600	ワラ土部 小皿	(口径) 10.3cm (底径) 4.8cm (脚高) 1.3cm	内外面コナダ, 底部縁部 転糸切痕	陶化した石を含むが粗い	良好	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	7.5YR8/6 7.5YR8/6	約70%	口右左面破	R32
18	S E 7600	ワラ土部 皿	(口径) 10.0cm (底径) 2.3cm	内外面コナダ, 底部縁部 転糸切痕	石粒をやや含むが粗い	やや悪い	内: 淡赤褐色 外: 灰白	2.5YR7/4 10YR8/2	ほぼ変形	口右左面破	R41
19	S E 7600	土部 鉢 鉢	(口径) 14.0cm (底径) 3.0cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ	1～2mmの石粒を含みやや粗い	良好	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	10YR8/4 10YR8/4	ほぼ変形		R24
20	S E 7600	土部 鉢 鉢	(口径) 15.0cm (底径) 3.4cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ	粗	良好	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	10YR8/4 10YR8/4	約40%		R26
21	S E 7600	ワラ土部 鉢	(口径) 13.7cm (底径) 5.4cm (脚高) 3.3cm	内外面コナダ, 底部縁部 転糸切痕	わずかに石粒を含むが粗い	良好	内: 灰白 外: 灰白	10YR8/2 10YR8/2	約70%		R46
22	S E 7600	ワラ土部 鉢	(口径) 15.0cm (底径) 8.4cm (脚高) 4.0cm	内外面コナダ, 底部縁部 転糸切痕	わずかに石粒を含むが粗い	やや悪い	内: 灰白 外: 灰白	10YR8/1 10YR8/1	約50%	口右左面破	R56
23	S E 7600	ワラ土部 鉢	(口径) 15.6cm (底径) 7.2cm (脚高) 3.9cm	内外面コナダ, 底部縁部 転糸切痕	1～2mmの石粒を含みやや粗い	良好	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	10YR8/3 10YR8/3	約70%		R56
24	S E 7600	土部 鉢 鉢	(口径) 14.7cm (台径) 7.0cm (脚高) 6.1cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ, 貼付高台	石粒を多く含みやや粗い	やや悪い	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	7.5YR8/4 7.5YR8/4	ほぼ変形	内面底部に赤目痕?	R44
25	S E 7600	土部 鉢 鉢	(口径) 15.1cm (台径) 7.2cm (脚高) 6.2cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ, 貼付高台	石粒を多く含みやや粗い	やや悪い	内: 灰黄褐色 外: 灰黄褐色	10YR8/2 5YR8/2	約90%		R45
26	S E 7600	土部 鉢 鉢	(口径) 14.6cm (台径) 7.8cm (脚高) 5.1cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ, 貼付高台	わずかに石粒を含むが粗い	良好	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	10YR8/3 10YR8/3	約50%		R38
27	S E 7600	土部 鉢 鉢	(口径) 15.4cm (台径) 7.4cm (脚高) 6.5cm	口縁部コナダ, 底部ナダ・オサエ, 貼付高台	1～2mmの石粒を含みやや粗い	良好	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	10YR8/3 10YR8/4	約50%		R35
28	S E 7600	ワラ土部 鉢	(口径) 16.0cm (台径) 7.4cm (脚高) 6.1cm	内外面コナダ, 底部縁部 転糸切痕, 貼付高台	陶化した石を含むが粗い	良好	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	10YR8/4 10YR8/4	約70%		R54
29	S E 7600	ワラ土部 鉢	(口径) 15.4cm (台径) 7.6cm (脚高) 5.3cm	内外面コナダ, 底部縁部 転糸切痕, 貼付高台	わずかに石粒を含むが粗い	良好	内: 浅黄褐色 外: 浅黄褐色	7.5YR8/3 7.5YR8/3	約70%		R43

No.	出土遺物	図 像	注 意	調査・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残存度	備 考	登録番号	
30	S E 7600	777土師器 碗	(口径) 15.5cm (台径) 7.5cm (器高) 5.7cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	1mm程度の石粒 を多く含むやや 粗い	良好	内：灰青帯 外：灰青帯	10Y7R6/4 10Y7R6/4	約90%		R33
31	S E 7600	777土師器 碗	(口径) 15.1cm (台径) 7.6cm (器高) 6.7cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	わずかに石粒を 含むが密	良好	内：灰青帯 外：灰青帯	7.5Y7R6/3 10Y7R6/3	約90%	口タテ右回転 口縁部につがみ	R32
32	S E 7600	灰釉陶器 碗	(口径) 16.0cm (台径) 6.6cm (器高) 6.5cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	密	良好	内：灰青 外：灰青 釉：灰	2.5Y6/2 2.5Y6/2 2.5Y7/1	約50%	口タテ右回転 灰釉掛け付け 裏面糸切痕	R37
33	S E 7600	灰釉陶器 碗	(口径) 15.5cm (台径) 7.5cm (器高) 5.6cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	磨面糸粒を含む が密	良好	内：灰 外：灰 釉：灰	5Y5/1 2.5Y6/2 2.5Y7/1	約70%	口タテ右回転 灰釉掛け付け	R38
34	S E 7600	灰釉陶器 碗	(口径) 15.5cm (台径) 8.1cm (器高) 6.7cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	密	良好	内：襷足 外：襷足 釉：灰	10Y7R6/1 10Y7R6/1 2.5Y7/1	約90%	口タテ右回転 灰釉掛け付け	R72
35	S E 7600	灰釉陶器 碗	(口径) 16.4cm (台径) 7.9cm (器高) 6.5cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	2～3mmの石粒 を含むやや粗い	良好	内：灰青 外：灰青	2.5Y6/2 2.5Y6/2	約90%	口タテ左回転 輪花4か所	R30
36	S E 7600	灰釉陶器 碗	(口径) 16.0cm (台径) 7.5cm (器高) 5.9cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	磨面糸粒を含む が密	良好	内：灰青 外：灰青	2.5Y6/2 2.5Y7/1	約90%	口タテ左回転 輪花5か所	R79
37	S E 7600	灰釉陶器 碗	(口径) 17.0cm (台径) 8.1cm (器高) 6.1cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	1～4mmの石粒 を含むやや粗い	良好	内：灰青 外：襷足 釉：灰	2.5Y6/2 10Y7R6/1 2.5Y7/1	約70%	口タテ左回転 口縁部につがみ 輪花4か所	R64
38	S E 7600	灰釉陶器 碗	(口径) 17.0cm (台径) 8.6cm (器高) 6.6cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	密	良好	内：襷足 外：襷足 釉：襷足	10Y7R6/1 10Y7R6/1 10Y7R6/1	約60%	輪花4か所	R39
39	S E 7600	灰釉陶器 碗	(口径) 16.0cm (台径) 7.6cm (器高) 5.4cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	磨面糸粒を含む が密	良好	内：灰白 外：灰白	NT/ NT/	約90%	輪花4か所 裏面糸粒 口縁部自然熱	R81
40	S E 7600	陶 器 碗 (山茶碗)	(口径) 16.2cm (台径) 5.9cm (器高) 6.2cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	わずかに石粒を 含むが密	ややま よい	内：灰青帯 外：灰青帯	10Y7R6/2 10Y7R6/2	ほぼ定形	口タテ左回転	R62
41	S E 7600	陶 器 碗 (山茶碗)	(口径) 17.0cm (台径) 7.5cm (器高) 5.8cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	密	良好	内：灰 外：灰	5Y7R6/1 5Y7R6/1	定形	口縁部・底部自然熱	R85
42	S E 7600	陶 器 碗 (山茶碗)	(口径) 14.2cm (台径) 6.0cm (器高) 6.1cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	わずかに石粒を 含むが密	良好	内：灰 外：灰	7.5Y5/1 5Y5/1	ほぼ定形	口タテ左回転 口縁部につがみ	R71
43	S E 7600	陶 器 小瓶 (山茶瓶)	(口径) 10.2cm (底径) 5.5cm (器高) 3.7cm	内外面ロクロナデ、底部周 縁糸切痕、胎付高台	密	良好	内：灰白 外：灰白	10Y7/2 10Y7/1	約90%	口縁・底部自然熱	R61
44	S E 7600	土 師 器 壺	(口径) 15.5cm (体容積) 100.4cm <sup>3</sup> (器高) 15.8cm	口縁部コナデ、底部上半 コナデ、オサエ・ナデ、 下半ヘラナデリ	3mmの砂粒を多 く含むやや粗い	ややま よい	内：灰青帯 外：灰青帯	10Y7R7/3 10Y7R7/3	口径の3/4	体部下外面すす付帯	R86
45	S E 7600	土 師 器 壺	(口径) 18.3cm (体容積) 124.9cm <sup>3</sup> (器高) 18.4cm	口縁部コナデ、底部上半 コナデ、オサエ・ナデ、 下半ヘラナデリ	やや粗い	並	内：灰青帯 外：灰青帯	10Y7R6/2 10Y7R6/2	口径ほぼ定 形、体部の 1/4残存	口縁部及口底部外面に磨 付帯	R88
46	S E 7600	土 師 器 壺	(口径) 15.0cm (体容積) 119.9cm <sup>3</sup> (器高) 18.2cm	口縁部コナデ、底部上半 コナデ、オサエ・ナデ、 下半ヘラナデリ	やや粗い	並	内：灰青帯 外：灰青帯	7.5Y7R/4 7.5Y7R/4	口径の9/10 体部ほぼ定 形	体部・底部外面に磨付帯 ハケム6cm/cm	R87
47	S E 7600	灰釉陶器 広口瓶	(口径) 19.6cm (体容積) 21.4cm <sup>3</sup> (器高) 32.0cm	口縁部・底部ロクロナデ	密	良好	内：灰白 外：灰白 釉：灰	10Y7/2 10Y7/2 NB/～10Y7/2	約90%	口縁部内面・底部外面に 磨付	R91
48	S D 7610	土 師 器 小皿	(口径) 7.5cm (器高) 1.4cm	口縁部輪部コナデ、体部 オサエ・ナデ	やや密	並	内：灰青帯 外：灰青帯	7.5Y7R/4 7.5Y7R/4	ほぼ定形		R16
49	S D 7610	土 師 器 小皿	(口径) 8.6cm (器高) 1.1cm	磨面糸粒を多 く含むやや粗い	密	並	内：灰青帯 外：灰青帯	7.5Y7R/4 7.5Y7R/4	約90%		R17
50	S D 7610	土 師 器 小皿	(口径) 8.2cm (器高) 1.3cm	オサエ・ナデ	やや密	並	内：灰青帯 外：灰青帯	7.5Y7R/4 7.5Y7R/4	ほぼ定形		R18
51	S D 7610	土 師 器 小皿	(口径) 8.3cm (器高) 1.1cm	オサエ・ナデ	やや粗い	並	内：灰青帯 外：灰青帯	10Y7R6/3 10Y7R6/3	約90%		R19
52	S E 7600	土 師 器 皿	(口径) 10.0cm (器高) 2.0cm	口縁部輪部コナデ、体部 オサエ・ナデ	やや密	並	内：灰青 外：灰青	10Y7R6/2 10Y7R6/2	ほぼ定形		R14
53	S D 7610	土 師 器 皿	(口径) 13.5cm (器高) 2.5cm	口縁部輪部コナデ、体部 オサエ・ナデ	やや密	並	内：灰青帯 外：灰青帯	7.5Y7R/4 7.5Y7R/4	約90%		R15
54	S D 7610	土 師 器 皿	(口径) 13.6cm (器高) 2.6cm	口縁部コナデ、体部オサ エ・ナデ	密	良好	内：磨 外：磨	7.5Y7R/6 7.5Y7R/6	約70%	粘土焼色上げ磨跡	R22
55	S D 7610	土 師 器 皿	(口径) 13.6cm (器高) 2.6cm	口縁部コナデ、体部オサ エ・ナデ	密	良好	内：磨 外：磨	5Y7R/8 5Y7R/8	約70%	粘土焼色上げ磨跡	R21
56	S D 7610	陶 器 碗 (山茶碗)	(口径) 18.2cm (台径) 7.5cm (器高) 4.6cm	ロクロナデ、胎付高台	わずかに砂粒を 含むが密	並	内：灰黄 外：灰	2.5Y6/1 5Y6/1	定形	底部外面に磨付帯	R20

## 第114次調査

No.	出土遺物	種類	品名	調査・技法の特徴	胎土	焼成	色	調	残存度	備考	登録番号
1	S B7648 柱 礎 形	土 器 形	(口径) 11.2cm (器高) 2.3cm	口縁部コナテ、外周ヘラ ズリ、内面ナテ	赤	良好	内・赤 外・橙	2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	完全	器底の残存状況悪く糟 文不鮮明	R 3
2	S B7648 柱 礎 形	土 器 形	(口径) 14.6cm (器高) 3.3cm	口縁部コナテ、外周ヘラ ズリ、内面ナテ後放射・ 縦線陶文	赤	良好	内・赤 外・橙	2.5YR 6/8 2.5YR 7/8	90%	器底の残存状況悪く糟 文・ミヤギとも不鮮明	R 1
3	S B7648 柱 礎 形	土 器 形	(口径) 14.0cm (器高) 3.5cm	口縁部コナテ、外周ヘラ ズリ、内面ナテ後放射・ 縦線陶文	赤	良好	内・赤橙 外・赤橙	10YR 6/8 10YR 6/8	90%		R 2
4	S B7648 柱 礎 形	土 器 形	(口径) 13.2cm (器高) 3.6cm	口縁部コナテ、外周オヤエ 後ナテ、内面ナテ後縦線陶 文	赤	良好	内・橙 外・橙	2.5YR 6/8 2.5YR 7/8	90%		R 5
5	S B7648 柱 礎 形	土 器 形	(口径) 12.2cm (器高) 3.5cm	口縁部コナテ、外周オヤエ 後ナテ、内面ナテ	赤	良好	内・橙 外・橙	5YR 6/7 5YR 6/7	30%		R 4
6	S B7648 柱 礎 形	土 器 形	(口径) 17.4cm (器高) 3.0cm	口縁部コナテ、下中はヘ ラズリ、外周オヤエ後ナ テ、内面ナテ	赤	良好	内・橙 外・橙	2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	60%		R 6
7	S B7648 柱 礎 形	土 器 形	(口径) 18.4cm (器高) 2.5cm	口縁部コナテ、外周オヤエ 後ナテ、内面ナテ	赤	良好	内・橙 外・橙	2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	90%		R 8
8	S B7648 柱 礎 形	土 器 形	(口径) 17.6cm (器高) 2.4cm	口縁部コナテ、外周オヤエ 後ナテ、内面ナテ後縦線陶 文	赤	良好	内・橙 外・橙	2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	60%	器底の残存状況悪く糟 文不鮮明	R 7
9	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 15.4cm (器高) —	外周天井部1/3 凹線ヘラ ズリ、1/3 凹線ナテ、内面 凹線ナテ	赤	良好	内・灰白 外・灰白	5Y 8/1 5Y 8/1	20%	凹線方向右廻り	R11
10	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 15.6cm (器高) 3.5cm	外周天井部1/3 凹線ヘラ ズリ、1/3 凹線ナテ、内面 凹線ナテ	赤	やや軟	内・灰白 外・灰白	5Y 7/1 5Y 7/1	50%	凹線方向右廻り 口縁部外周面をかぶ る(灰-N4/G)	R 9
11	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 18.2cm (器高) 3.9cm	外周天井部1/3 凹線ヘラ ズリ、1/3 凹線ナテ、内面 凹線ナテ	赤	やや軟	内・灰白 外・灰白	1.5Y 7/1 1.5Y 7/1	20%	凹線方向右廻り 口縁部外周面をかぶ る(灰-N4/G)	R10
12	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 15.6cm (器高) 3.6cm	外周天井部1/3 凹線ヘラ ズリ、1/3 凹線ナテ、内面 凹線ナテ	赤	やや軟	内・灰白 外・灰白	10Y 7/1 10Y 7/1	70%	凹線方向右廻り 口縁部外周面をかぶ る(灰-N4/G)	R13
13	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 18.8cm (器高) 3.6cm	外周天井部1/3 凹線ヘラ ズリ、1/3 凹線ナテ、内面 凹線ナテ	赤	やや軟	内・灰白 外・灰白	10Y 8/1 10Y 8/1	70%	凹線方向右廻り この1点のみ西側の 柱礎部出土	R14
14	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 18.4cm (器高) 4.4cm	外周天井部1/3 凹線ヘラ ズリ、1/3 凹線ナテ、内面 凹線ナテ	赤	良好	内・灰白 外・灰白	5Y 7/1 5Y 7/1	10%	つまみ部等 口縁部90%	R12
15	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 15.0cm (器高) 4.1cm	底部凹線ヘラズリ、口縁 部内外面凹線ナテ	赤	良好	内・灰白 外・灰白	10Y 8/1 10Y 7/1	20%	凹線方向左廻り	R15
16	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 18.4cm (器高) 4.0cm (高台径)4.2cm	底部凹線ヘラズリ、口縁 部内外面凹線ナテ	赤	良好	内・灰白 外・灰白	1.5Y 7/1 1.5Y 7/1	30%	凹線方向左廻り	R16
17	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 15.0cm (器高) 4.4cm	底部凹線ヘラズリ、口縁 部内外面凹線ナテ	赤	良好	内・灰白 外・灰白	10Y 7/1 N 8/1	1%	口縁部20% 高台 70 %	R23
18	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 20.0cm (器高) 4.5cm (高台径)15.6cm	底部凹線ヘラズリ、口縁 部内外面凹線ナテ	赤	良好	内・灰白 外・灰白	10Y 7/1 10Y 7/1	1%	口縁部30% 高台 100%	R19
19	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 20.0cm (器高) 4.4cm (高台径)15.6cm	底部凹線ヘラズリ、口縁 部内外面凹線ナテ	赤	良好	内・灰白 外・灰白	10Y 7/1 10Y 7/1	1%	口縁部40% 高台90%	R18
20	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 20.4cm (器高) 4.6cm (高台径)15.4cm	底部凹線ヘラズリ、口縁 部内外面凹線ナテ	赤	良好	内・灰白 外・灰白	10Y 7/1 10Y 8/1	1%	口縁部20% 高台90%	R21
21	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 20.4cm (器高) 4.3cm (高台径)15.9cm	底部凹線ヘラズリ、口縁 部内外面凹線ナテ	赤	良好	内・灰白 外・灰白	10Y 8/1 10Y 8/1	1%	口縁部15% 高台 100%	R17
22	S B7648 柱 礎 形	須 恵 形	(口径) 23.2cm (器高) 4.2cm (高台径)18.3cm	底部凹線ヘラズリ、口縁 部内外面凹線ナテ	赤	良好	内・灰白 外・灰白	10Y 8/1 10Y 7/1	1%	口縁部20% 高台70%	R22
23	S K7630 土 器 形	土 器 形	(口径) 10.6cm (器高) 3.0cm	口縁部コナテ、外周オヤエ 後ナテ、内面ナテ	赤	良好	内・橙 外・橙	2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	80%	口縁部りずみあり	R24
24	S K7630 土 器 形	土 器 形	(口径) 11.2cm (器高) 3.2cm	口縁部コナテ、外周オヤエ 後ナテ、内面ナテ	赤	良好	内・橙 外・橙	2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	70%		R27
25	S K7630 土 器 形	土 器 形	(口径) 12.6cm (器高) 3.3cm	口縁部コナテ、外周オヤエ 後ナテ、内面ナテ	赤	良好	内・橙 外・橙	2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	70%		R30
26	S K7630 土 器 形	土 器 形	(口径) 13.2cm (器高) 3.5cm	口縁部コナテ、外周オヤエ 後ナテ、内面ナテ	赤	良好	内・橙 外・橙	2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	90%		R26
27	S K7630 土 器 形	土 器 形	(口径) 13.8cm (器高) 3.5cm	口縁部コナテ、外周オヤエ 後ナテ、内面ナテ	赤	良好	内・橙 外・橙	2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	60%		R31
28	S K7630 土 器 形	土 器 形	(口径) 13.6cm (器高) 3.0cm	口縁部コナテ、外周オヤエ 後ナテ、内面ナテ	赤	良好	内・橙 外・橙	2.5YR 5/8 2.5YR 5/8	70%	口縁部と底部の境は取 壊れ其にたるみナテ	R25
29	S K7630 土 器 形	土 器 形	(口径) 15.2cm (器高) 2.5cm	口縁部コナテ、外周オヤエ 後ナテ、内面ナテ	赤	良好	内・橙 外・橙	5YR 6/6 5YR 6/6	75%	口縁部一帯の色異 常—2.5YR 7/6	R28
30	S K7630 土 器 形	土 器 形	(口径) 15.6cm (器高) 2.6cm	口縁部コナテ、外周オヤエ 後ナテ、内面ナテ	赤	良好	内・橙 外・橙	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	90%	器底面磨き悪い	R29
31	S K7630 須 恵 形	須 恵 形	(口径) 17.6cm (器高) 4.7cm	外周天井部1/3 凹線ヘラ ズリ、1/3 凹線ナテ、内面 凹線ナテ	赤	良好	内・灰 外・灰	5Y 4/1 5Y 4/1	40%	凹線方向右廻り	R34

No.	出立成績	母 系	法 量	調整・検査の概要	胎 土	地 成	色 調	残存度	備 考	登録番号
33	S K7630	栗 重 雄 栗 重 雄	(口徑) 34.6m (蹄高) 2.6m	口蹄大舟部1/3 留輪ヘウケズリ、1/3 留輪ナゲ、内面留輪ナゲ	密	良好	内：灰白 外：灰白 7.5Y 7/1 7.5Y 7/1	40%	ロコロ留輪方向右廻り	R35
33	S K7630	栗 重 雄 栗 重 雄	(口徑) 35.6m (蹄高) 2.5m	口蹄大舟部2/3 留輪ヘウケズリ、1/3 留輪ナゲ、口蹄部内外留輪ナゲ	密	良好	内：灰白 外：灰白 8Y 7/2 7.5Y 7/1	40%	ロコロ留輪方向左廻り 外側に大樽あり	R32
34	S K7630	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 33.6m (蹄高) 3.3m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 5YR 6/8 5YR 6/8	30%		R36
35	S K7630	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 33.6m (蹄高) 3.3m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：明黄緑 7.5YR 6/8 10YR 6/8	30%		R39
36	S K7630	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 33.6m (蹄高) 3.3m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	やや不良	内：明黄緑 外：黄 10YR 6/8 7.5YR 6/8	30%		R43
37	S K7630	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 32.6m (蹄高) 2.6m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	やや不良	内：ぶい黄橙 外：ぶい黄 10YR 7/4 7.5YR 7/4	30%	口蹄部ひびくが強い 蹄底黄緑色著しい	R42
38	S K7630	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 35.2m (蹄高) 3.1m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 2.5YR 6/8 5YR 6/8	30%		R38
38	S K7630	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 35.0m (蹄高) 3.1m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 5YR 6/8 5YR 6/8	30%		R37
40	S K7630	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 36.4m (蹄高) 2.6m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	やや不良	内：黄 外：黄 7.5YR 6/8 5YR 6/8	30%	蹄底黄緑色著しい	R40
41	S K7630	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 37.0m (蹄高) 1.8m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	やや不良	内：黄 外：黄 5YR 6/8 5YR 6/8	30%		R41
42	S K7630	栗 重 雄 栗 重 雄	(口徑) 31.6m (蹄高) 2.6m	外側大舟部2/3 留輪ヘウケズリ、1/3 留輪ナゲ、内面留輪ナゲ	密	良好	内：青灰 外：灰白 10B2 6/1 7.5Y 7/1	40%	留輪方向左廻り つまみ黄緑	R44
43	S K7634	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 34.6m (蹄高) 3.1m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄緑 外：黄緑 7.5YR 6/8 7.5YR 6/8	30%		R45
44	S K7634	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 32.6m (蹄高) 2.7m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	30%		R39
45	S K7634	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 35.6m (蹄高) 3.3m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	30%		R48
46	S K7634	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 35.0m (蹄高) 3.3m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄橙 外：黄橙 7.5YR 7/8 7.5YR 7/8	20%		R49
47	S K7634	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 34.3m (蹄高) 3.1m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄橙 外：黄橙 10YR 6/8 10YR 6/8	30%		R46
48	S K7634	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 34.3m (蹄高) 3.3m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄橙 外：黄橙 7.5YR 7/8 7.5YR 6/8	30%		R47
49	S K7634	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 35.0m (蹄高) 1.7m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 5YR 6/8 5YR 6/8	30%		R53
50	S K7634	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 34.5m (蹄高) 2.3m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	30%		R52
51	S K7634	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 36.8m (蹄高) 2.3m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 5YR 7/6 5YR 7/6	30%		R54
52	S K7634	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 37.0m (蹄高) 2.6m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 2.5YR 7/8 2.5YR 7/8	30%		R51
53	S K7632	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 34.6m (蹄高) 2.6m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄橙 外：黄橙 7.5YR 7/8 7.5YR 7/8	30%		R55
54	S K7632	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 33.0m (蹄高) 3.3m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	30%		R54
55	S K7632	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 36.0m (蹄高) 1.7m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 7.5YR 6/8 7.5YR 6/8	30%		R56
56	S K7632	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 35.0m (蹄高) 2.6m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	30%		R56
57	S K7632	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 37.0m (蹄高) 2.6m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 5YR 7/8 5YR 7/8	30%		R59
58	S K7633	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 33.6m (蹄高) 3.0m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄緑 外：黄緑 10YR 6/4 10YR 6/4	30%		R57
59	S K7633	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 34.0m (蹄高) 1.6m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 5YR 6/8 5YR 6/8	30%		R53
60	S K7633	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 36.4m (蹄高) 1.7m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	20%		R52
61	S K7633	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 32.6m (蹄高) 1.6m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 2.5YR 6/8 2.5YR 6/8	30%		R50
62	S K7633	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 34.0m (蹄高) 1.5m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄 外：黄 2.5YR 7/8 2.5YR 7/8	30%		R51
63	S K7633	栗 重 雄 栗 重 雄	(口徑) 36.8m (蹄高) 2.4m	外側大舟部1/3 留輪ヘウケズリ、1/3 留輪ナゲ、内面留輪ナゲ	密	良好	内：灰白 外：灰白 10Y 7/1 10Y 7/1	30%	留輪方向右廻り 外側留輪のみ黄緑不明 内面留輪あり	R55
64	S K7635	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 34.5m (蹄高) 3.1m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄緑 外：黄緑 10YR 6/4 10YR 6/4	40%		R77
65	S K7635	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 33.3m (蹄高) 2.6m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：ぶい黄橙 外：ぶい黄橙 10YR 7/4 10YR 7/4	30%		R78
66	S K7635	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 32.3m (蹄高) 1.3m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：黄緑 外：黄緑 7.5YR 6/4 7.5YR 6/4	20%		R79
67	S K7635	土 師 勝 三 土 師 勝 三	(口徑) 32.0m (蹄高) 1.4m	口蹄ココナゲ、外側オキエ 後ナゲ、内面ナゲ	密	良好	内：ぶい黄橙 外：ぶい黄橙 10YR 7/3 10YR 7/3	30%		R75

No.	品名	規格	測定	調整・技術の特長	胎土	胎底	色	調	再発度	備考	登録番号
68	S K 7651	土 師 餅 (口徑) 13.0cm (容積) 3.50cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎 1～2mm大 の砂粒含む	良好	内：明黄緑 外：明黄緑	10YR 7/6 10YR 7/4	50%			R87
69	S K 7651	土 師 餅 (口徑) 13.0cm (容積) 3.50cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎 2～5mm大 の砂粒含む	良好	内：にぶい黄緑 外：にぶい黄緑	10YR 7/4 10YR 7/4	変形		口縁部のみが壊しい 口徑13.0cm～14cm	R89
70	S K 7651	土 師 餅 (口徑) 13.0cm (容積) 3.50cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎 2～5mm大 の砂粒含む	良好	内：にぶい黄緑 外：にぶい黄緑	10YR 7/4 10YR 7/4	変形		唇表面磨耗甚しい	R70
71	S K 7651	土 師 餅 (口徑) 13.6cm (容積) 3.50cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎 2～5mm大 の砂粒含む	良好	内：明黄緑 外：明黄緑	10YR 7/6 10YR 7/6	30%			R71
72	S K 7651	土 師 餅 (口徑) 13.6cm (容積) 3.30cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎 1～2mm大 の砂粒含む	良好	内：明黄緑 外：明黄緑	10YR 7/6 10YR 7/6	50%			R68
73	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 10.0cm (容積) 1.30cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎 1～2mm大 の砂粒含む	良好	内：黄緑 外：黄緑	10YR 8/4 10YR 8/4	90%			R73
74	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 9.8cm (容積) 1.30cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：にぶい黄緑 外：にぶい黄緑	10YR 7/4 10YR 7/4	変形			R74
75	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 10.0cm (容積) 2.30cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎 2～3mm大 の砂粒含む	良好	内：淡黄 外：淡黄	2.5Y 8/4 2.5Y 8/4	変形			R72
76	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 10.0cm (容積) 2.30cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎 1～2mm大 の砂粒含む	良好	内：にぶい黄緑 外：にぶい黄緑	10YR 7/3 10YR 7/3	50%			R75
77	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 12.4cm (容積) 3.30cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：灰白 外：灰白	10YR 8/2 10YR 8/2	40%			R86
78	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 12.4cm (容積) 3.30cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎 1～2mm大 の砂粒含む	良好	内：灰白 外：灰白	10YR 8/2 10YR 8/2	70%			R86
79	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 14.0cm (容積) 3.00cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：淡黄 外：淡黄	5YR 8/4 5YR 8/4	90%		重さ160 g	R80
80	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 13.6cm (容積) 3.00cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄緑 外：黄緑	10YR 8/4 10YR 8/4	変形		重さ163 g	R81
81	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 14.8cm (容積) 3.50cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄緑 外：黄緑	2.5YR 8/3 2.5YR 8/3	90%			R83
82	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 15.2cm (容積) 3.60cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄緑 外：黄緑	10YR 8/4 10YR 8/4	90%			R82
83	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 8.6cm (容積) 1.70cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：淡黄 外：にぶい黄	5YR 8/4 7.5YR 7/4	90%			R98
84	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 9.6cm (容積) 1.70cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄緑 外：黄緑	10YR 8/4 10YR 8/4	90%		重さ58 g	R90
85	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 9.6cm (容積) 1.80cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄緑 外：にぶい黄緑	10YR 8/4 7.5YR 7/3	90%			R97
86	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 8.6cm (容積) 1.60cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄 外：黄緑	5YR 7/6 7.5YR 8/4	変形		重さ64 g	R100
87	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 8.7cm (容積) 1.60cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：淡黄 外：黄緑	5YR 8/4 7.5YR 8/6	90%			R101
88	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 8.6cm (容積) 1.80cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄緑 外：にぶい黄緑	2.5Y 7/4 10YR 7/3	90%		重さ69 g	R94
89	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 9.6cm (容積) 1.60cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄緑 外：黄緑	10YR 8/4 10YR 8/3	50%		口縁部のみあり 口徑13.0cm～16cm	R91
90	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 9.6cm (容積) 1.70cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎 1～2mm大 の砂粒含む	良好	内：黄緑 外：にぶい黄	7.5YR 8/4 7.5YR 7/3	変形		重さ71 g	R92
91	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 9.6cm (容積) 1.80cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄緑 外：にぶい黄緑	7.5YR 8/4 10YR 7/4	90%			R93
92	S K 7651	0191土師 小皿 (口徑) 8.6cm (容積) 1.00cc	胎部コナナガ、底部赤き り灰赤調整	胎だが1mm大の 砂粒含む	良好	内：黄 外：黄	5YR 6/8 5YR 7/6	変形		重さ38 g 口口面輪方向左磨り	R95
93	S K 7651	0191土師 小皿 (口徑) 9.1cm (容積) 1.40cc	胎部コナナガ、底部赤き り灰赤調整	胎	良好	内：黄 外：黄	5YR 6/6 5YR 7/6	変形		重さ47 g 口口面輪方向左磨り	R99
94	S K 7651	0191土師 小皿 (口徑) 8.6cm (容積) 2.00cc	胎部コナナガ、底部赤き り灰赤調整	胎	良好	内：にぶい黄 外：にぶい黄	7.5YR 6/4 7.5YR 6/3	変形		重さ38 g 口口面輪方向右磨り	R96
95	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 10.0cm (容積) 2.50cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄 外：黄	5YR 7/8 5YR 7/6	60%			R100
96	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 14.0cm (容積) 2.30cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄 外：黄	5YR 6/8 5YR 8/8	変形		口縁部のみあり 口徑13.0cm～14.6cm 重さ 130 g	R102
97	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 10.0cm (容積) 1.80cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎だが1mm大の 砂粒含む	良好	内：黄緑 外：灰白	10YR 8/3 10YR 8/2	90%			R115
98	S K 7651	0191土師 小皿 (口徑) 8.2cm (容積) 1.50cc	胎部コナナガ、底部赤き り灰赤調整	胎ややね1mm大の 砂粒含む	良好	内：やね黄 外：黄	2.5YR 7/8 2.5YR 7/6	90%			R108
99	S K 7651	0191土師 小皿 (口徑) 8.2cm (容積) 1.90cc	胎部コナナガ、底部赤き り灰赤調整	胎	良好	内：黄 外：淡黄	2.5YR 7/6 5YR 8/4	90%			R107
100	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 12.7cm (容積) 2.40cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎だが1mm大の 砂粒含む	良好	内：黄緑 外：にぶい黄緑	7.5YR 7/6 10YR 7/4	変形		重さ53 g	R127
101	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 13.7cm (容積) 2.70cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄 外：黄	2.5YR 7/8 2.5YR 7/6	90%			R123
102	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 13.4cm (容積) 2.80cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄 外：にぶい黄	5YR 7/8 5YR 7/4	80%		口縁部のみあり 口徑13.4cm～15.6cm	R124
103	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 13.6cm (容積) 2.40cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄緑 外：黄緑	10YR 8/3 10YR 8/4	60%		口縁部のみあり 口徑13.6cm～13.8cm	R125
104	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 13.6cm (容積) 2.60cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎やね1～2mm 大の砂粒含む	良好	内：黄緑 外：黄緑	10YR 8/4 10YR 8/4	11%変形		口縁部のみあり 口徑13.6cm～14.4cm 重さ134g	R128
105	S K 7651	土 師 餅 小皿 (口徑) 14.2cm (容積) 2.10cc	口縁コナナガ、外面オヤエ 残ナガ、内面ナガ	胎	良好	内：黄緑 外：黄緑	10YR 8/4 10YR 8/4	変形		重さ110 g	R129

No.	出土遺構	形 状	法 量	調査・注記の特徴	胎 土	検 査	色 調	残存度	備 考	登録番号	
106	S K7666	土 師 器 皿	(口径) 14.0cm (高さ) 2.5cm	口縁コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色	10YR 6/4 10YR 6/4	完整	重さ111g	R130
107	S K7666	土 師 器 皿	(口径) 12.6cm (高さ) 2.3cm	口縁コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：におい褐色 外：淡黄褐色	7.5YR 7/4 10YR 6/4	90%	口縁部ひずみあり 口径12.6cm-13.6cm	R126
108	S K7666	土 師 器 小皿	(口径) 8.1cm (高さ) 1.3cm	口縁コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色	10YR 6/4 10YR 6/4	ほぼ完整		R136
109	S K7668	土 師 器 小皿	(口径) 7.5cm (高さ) 1.3cm	口縁コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：におい褐色 外：におい褐色	7.5YR 6/3 7.5YR 6/3	80%		R134
110	S K7668	土 師 器 小皿	(口径) 7.5cm (高さ) 1.3cm	口縁コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：におい褐色 外：におい褐色	7.5YR 7/4 7.5YR 7/4	完整		R131
111	S K7668	土 師 器 小皿	(口径) 7.4cm (高さ) 1.4cm	口縁コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：褐色 外：褐色	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	95%		R133
112	S K7668	土 師 器 小皿	(口径) 7.7cm (高さ) 1.3cm	口縁コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：褐色 外：褐色	5YR 6/6 5YR 6/6	80%		R132
113	S K7668	土 師 器 小皿	(口径) 8.3cm (高さ) 1.0cm	口縁コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：褐色 外：褐色	5YR 6/6 5YR 6/6	95%		R120
114	S K7668	土 師 器 鉢	(口径) 24.5cm (高さ) - cm	口縁部コナテ、体部内外面 オサエ残ナテ	青だが1-2cm の砂状食む	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色	10YR 6/4 7.5YR 6/4	30%	体部外面には厚く煤が 付いている	R137
115	S K7670	土 師 器 小皿	(口径) 8.2cm (高さ) 1.3cm	口縁部コナテ、体部内外面 オサエ残ナテ	青	良好	内：におい褐色 外：におい褐色	7.5YR 7/4 7.5YR 7/3	60%		R144
116	S K7670	土 師 器 小皿	(口径) 7.4cm (高さ) 1.1cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：におい褐色 外：におい褐色	7.5YR 6/4 7.5YR 6/3	70%		R143
117	S K7670	土 師 器 小皿	(口径) 8.3cm (高さ) 1.7cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：におい褐色 外：におい褐色	5YR 7/4 7.5YR 7/4	75%		R142
118	S K7670	土 師 器 小皿	(口径) 8.2cm (高さ) 1.5cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：褐色 外：褐色	2.5YR 6/6 2.5YR 6/6	80%	重さ29g	R139
119	S K7670	土 師 器 小皿	(口径) 7.5cm (高さ) 1.3cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：褐色 外：褐色	5YR 6/6 5YR 6/6	80%		R140
120	S K7670	土 師 器 小皿	(口径) 8.5cm (高さ) 1.3cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	やや粗	良好	内：におい黄褐色 外：におい黄褐色	10YR 7/4 10YR 7/4	80%		R149
121	S K7670	土 師 器 小皿	(口径) 7.6cm (高さ) 1.3cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：褐色 外：褐色	5YR 6/6 5YR 6/6	90%	口縁部ひずみあり 口径7.3cm-7.9cm	R140
122	S K7670	土 師 器 小皿	(口径) 8.6cm (高さ) 1.3cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：におい褐色 外：におい褐色	7.5YR 7/4 7.5YR 7/4	90%		R145
123	S K7670	土 師 器 小皿	(口径) 8.2cm (高さ) 1.3cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：におい褐色 外：におい褐色	7.5YR 6/4 7.5YR 6/3	90%		R138
124	S K7670	土 師 器 小皿	(口径) 8.6cm (高さ) 1.3cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：褐色 外：におい褐色	5YR 6/6 7.5YR 6/6	完整	重さ30g	R146
125	S K7670	土 師 器 小皿	(口径) 7.8cm (高さ) 1.3cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：褐色 外：褐色	2.5YR 6/6 5YR 6/6	完整	重さ25g	R141
126	S K7670	土 師 器 小皿	(口径) 8.2cm (高さ) 1.3cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：におい褐色 外：におい褐色	7.5YR 7/4 7.5YR 7/4	70%		R147
127	S K7670	土 師 器 皿	(口径) 13.5cm (高さ) 2.3cm	青 金型母の組 片を多数含む	青	良好	内：におい褐色 外：におい褐色	7.5YR 7/4 7.5YR 7/4	完整	重さ100g	R150
128	S K7670	土 師 器 皿	(口径) 13.6cm (高さ) 2.7cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色	10YR 6/4 10YR 6/4	90%	口縁部ひずみあり 口径13.4cm-13.8cm	R135
129	S K7670	土 師 器 皿	(口径) 12.6cm (高さ) 2.7cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：褐色 外：褐色	5YR 7/6 5YR 7/6	完整	重さ56g	R156
130	S K7670	土 師 器 皿	(口径) 13.3cm (高さ) 2.3cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色	10YR 6/4 10YR 6/4	90%		R137
131	S K7670	土 師 器 皿	(口径) 13.3cm (高さ) 3.2cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：褐色 外：褐色	5YR 7/6 5YR 7/6	90%	口縁部ひずみあり 口径13.0cm-13.6cm	R153
132	S K7670	土 師 器 皿	(口径) 13.3cm (高さ) 2.4cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：褐色 外：褐色	5YR 6/6 5YR 6/6	90%		R154
133	S K7670	土 師 器 皿	(口径) 14.0cm (高さ) 3.0cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：褐色 外：褐色	7.5YR 7/6 7.5YR 7/6	完整	口縁部ひずみあり 口径14.0cm-14.6cm 重さ97g	R151
134	S K7670	土 師 器 皿	(口径) 13.2cm (高さ) 2.4cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青	良好	内：褐色 外：褐色	5YR 7/6 5YR 7/6	完整	重さ97g	R152
G-27	包含層	土 師 器 皿	(口径) 10.1cm (高さ) 1.4cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青 金型母片含む	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色	10YR 6/4 7.5YR 6/4	完整	「て」字状口縁	R158
G-28	包含層	土 師 器 皿	(口径) 9.4cm (高さ) 1.7cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青 金型母片含む	良好	内：淡黄 外：淡黄	2.5Y 7/3 2.5Y 7/3	90%	「て」字状口縁	R159
G-29	包含層	土 師 器 皿	(口径) 9.8cm (高さ) 1.3cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青 金型母片含む	良好	内：淡黄 外：淡黄	2.5Y 6/3 2.5Y 6/3	70%	「て」字状口縁	R160
G-30	包含層	土 師 器 皿	(口径) 10.3cm (高さ) 1.7cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ、脚部コ ナテ	青 金型母片含む	良好	内：淡黄 外：淡黄	2.5Y 7/3 2.5Y 6/3	90%	コースター形皿で面が 付く	R163
H-18	包含層	土 師 器 皿	(口径) 10.2cm (高さ) 1.6cm	口縁部コナテ、外面オサエ 残ナテ、内面ナテ	青 金型母片含む	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色	10YR 6/3 10YR 6/3	完整	コースター形皿	R161
G-28	包含層	フゾ土師器 小皿	(口径) 11.6cm (高さ) 2.2cm	体部口クロナテ、底部赤 り炭末調整	青	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色	7.5YR 6/4 7.5YR 6/4	完整		R165
G-29	包含層	フゾ土師器 小皿	(口径) 9.4cm (高さ) 1.8cm	体部口クロナテ、底部赤 り炭末調整	青	良好	内：褐色 外：褐色	5YR 6/6 5YR 6/6	口縁部30% 剥離完成		R164
H-29	包含層	フゾ土師器 小皿	(口径) 9.2cm (高さ) 1.5cm	体部口クロナテ、底部赤 り炭末調整	青 金型母片含む	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色	10YR 6/4 10YR 6/4	完整		R168
G-29	包含層	フゾ土師器 小皿	(口径) 8.9cm (高さ) 1.5cm	体部口クロナテ、底部赤 り炭末調整	青	良好	内：淡黄褐色 外：淡黄褐色	7.5YR 6/6 7.5YR 6/6	完整		R166

No.	出土遺物	群 種	注 意	調査・検出の特徴	出 土	組成	色 調	残存度	備 考	登録番号
144	H-28 包含層	土 師 器 小 瓦	(口径) 9.3cm (高さ) 2.8cm	口縁はコナガ、外周オヤエ 線ナガ、内周ナガ	密	良好	内：黄褐色 外：黄褐色 10YR 8/6 10YR 8/6	変形		R167
145	S K 7691	瓦 器	(口径) 9.3cm (高さ) 1.5cm	口縁はコナガ、外周オヤエ 線ナガ、内周ナガ	密	良好	内：灰 外：灰 N 4/0 N 4/0	30%	底部内面にはジグザグ 状の彫文を施す	R169
146	S K 7691	瓦 器	(口径) 14.6cm (高さ) 4.3cm (高台径) 14.6cm	口縁はコナガ、外周オヤエ 線ナガ、内周ヘラナガ	密	良好	内：暗灰 外：暗灰 N 3/0 N 3/0	20%	底部内面に二層の彫文 を施す 小片のため形状は推定	R170
147	K-28 包含層	青 銅 小 鏡	(口径) 8.8cm (厚さ) 3.9cm (高台径) 14.6cm	内外ともにクロコナガか 漆き1-2mmの物を全面に 施す、高台部分のみ磨光	磨鏡	磨鏡	軸：オリーブ灰 胎土：灰白 N 7/0	30% 高台完存		R175
148	G-28 包含層	白 銅 小 鏡	(口径) 16.3cm (厚さ) 1.9cm	内外ともにクロコナガか 完全に磨いた物を施す	磨鏡	磨鏡	軸：灰白 胎土：灰白 10Y 8/1 N 7/0	30%	内面のやや他の深い のみ貴人があられる	R177
149	G-29 包含層	白 銅 小 鏡	(口径) 14.6cm (厚さ) 1.9cm	内外ともにクロコナガか 完全に磨いた物を施す	磨鏡	磨鏡	軸：灰白 胎土：灰白 10Y 8/1 N 8/0	30%	全面に彫かへ貴人あり	R176
150	G-29 包含層	土 師 器 テイコト	(一辺) 2.0cm (長さ) 12.8g	ナガにより面を作り、角は ナガにより丸くなる	磨鏡	良好	六面とも：黄 7.5YR 7/6	完形		R179
151	G-29 包含層	土 師 器 テイコト	(一辺) 1.5cm (長さ) 4.8g	ナガにより面を作り、角は ナガにより丸くなる	やや粗	やや不良	六面とも：灰 5Y 4/1	ほぼ完形		R180
152	S K 7684	土 師 器 三 足 瓶	(口径) 5.9cm (胴の径) 9.8cm	口縁はコナガ、内外面とも にナガ	密	良好	内：灰黄 外：灰黄 2.5Y 7/2 2.5Y 7/2	40%	ミニチュア製品、外周 に付帯使用痕あり	R173
153	J-29 柱穴層中	石 器 品 磨石	(口径) 7.4cm (長さ) 1.9cm	内外面とも磨り出し、外面 は細かく磨り出している	磨石製	磨石製	内：灰白 外：オリーブ灰 7.5Y 7/2 2.6GY 6/1	30%	一対か二対の方形の耳 が付く 使用済み	R174
154	S K 7666	石 器 品 磨石	(長さ) 5.9cm (厚さ) 3.9cm	内外面とも磨り出し、三辺 丁字に磨く、一辺は不明	磨石製	磨石製	内：灰白 外：灰白 5Y 7/1 5Y 7/1	不明	押石製跡を認む	R203
155	S K 7670	土 師 器 小 瓦	(口径) 8.2cm (高さ) 1.6cm	口縁はコナガ、外周オヤエ 線ナガ、内周ナガ	密	良好	内：黄褐色 外：黄褐色 7.5YR 8/6 7.5YR 8/6	80%	底部内面に二層の彫文 の跡が認められる	R178
156	K-28 包含層	土 師 器 小 瓦	(口径) 5.2cm (高さ) 3.6cm	外周オヤエ、内周ナガ 軸土は黄褐色磨光	やや粗	やや粗	内：に濃い黄褐色 外：に濃い黄褐色 10YR 7/3 10YR 7/3	40%	底部外面に磨きあり 文字が多少しか読み 取れない	R182
157	I-29 包含層	土 師 器 小 瓦	(口径) 8.2cm (高さ) 1.6cm	口縁はコナガ、外周オヤエ 線ナガ、内周ナガ	やや粗	粗	内：に濃い黄褐色 外：に濃い黄褐色 10YR 7/4 10YR 7/4	40%	内外面にかな磨きあり 「リ」か、「カ」か	R185
158	G-28 包含層	土 師 器 小 瓦	(口径) 13.6cm (高さ) 1.9cm	口縁はコナガ、外周オヤエ 線ナガ、内周ナガ	やや粗	粗	内外：灰黄 胎土：黄褐色 2.5Y 6/2 7.5YR 8/6	30%	外周に磨きあり 「リ」か、ほぼ不明	R194
159	G-28 包含層	土 師 器 三 足 瓶	(口径) 13.2cm (高さ) 1.9cm	口縁はコナガ、外周オヤエ 線ナガ、内周ナガ	やや粗	粗	内外：灰黄 胎土：黄褐色 2.5Y 6/2 7.5YR 8/6	30%	内外面に磨きあり 「リ」か、ほぼ不明	R195
160	G-28 包含層	土 師 器 常 持 杯	(口径) 9.8cm (高さ) 1.9cm	口縁はコナガ、外周オヤエ 線ナガ、内周ナガ	やや粗	粗	内：に濃い黄褐色 外：に濃い黄褐色 10YR 7/3 10YR 7/3	80%	底部内面に高い丸印の 磨きあり	R183
161	S K 7667	模 意 器 円 蓋 鉢	(口径) 11.0cm (高さ) 1.9cm	底部磨光ナガ、外周に磨 きナガにより丸くなる	密	良好	内：灰 外：灰 5Y 6/1 5Y 6/1	灰の一部	底部に磨きあり「磨 」の跡の多少は不明	R184
162	S K 7650	模 意 器 円 蓋 鉢	(口径) 16.6cm (高さ) 14.3cm	底部磨光ナガ	密	良好	内：青灰 外：青灰 5B 6/1 5B 6/1	灰の一部		R171
163	S K 7652	模 意 器 圓 蓋 鉢	(口径) 18.6cm (高さ) 3.3cm	外周中央部中央部を磨き、 1/2部はヘラナガ、1/4 部はナガ、内周は磨光ナガ	密	良好	内：灰白 外：灰白 10Y 7/1 10Y 7/1	95%	転用後、磨きあり	R186
164	K-28 包含層	模 意 器 圓 蓋 鉢	(口径) 15.4cm (高さ) 3.3cm	外周中央部1/2部はヘラナ ガ、1/3部はナガ、内周 は磨光ナガ	密	良好	内：灰白 外：灰白 5Y 8/1 7.5Y 7/1	15%	転用後、磨きあり	R188
165	S K 7631	模 意 器 杯	(高台径) 6cm (高さ) 1.9cm	底部磨光ヘラナガ、内周 は磨光ナガ	密	良好	内：青灰 外：青灰 5B 6/1 5B 6/1	底部80%	転用後、内周使用あり り、磨きあり	R189
166	S B 7653	模 意 器 杯	(口径) 15.5cm (高さ) 1.9cm	外周中央部2/3部はヘラナ ガ、1/3部はナガ、内周 は磨光ナガ	密	良好	内：灰白 外：灰白 2.6GY 6/1	30%	内周使用あり 朱 磨き 7.5R 3/6	R192
167	S K 7650	模 意 器 杯	(口径) 18.2cm (高さ) 1.9cm	外周中央部2/3部はヘラナ ガ、1/3部はナガ、内周 は磨光ナガ	密	良好	内：青灰 外：青灰 5B 6/1 5B 6/1	10%	転用後、内周使用あり り、朱 磨き 7.5R 4/6	R190
168	S K 7631	模 意 器 杯	(高台径) 6cm (高さ) 1.9cm	底部磨光ヘラナガ、内周 は磨光ナガ	密	良好	内：灰白 外：灰白 7.5Y 7/1 7.5Y 7/1	底部30%	転用後、内周使用あり り、朱 磨き 7.5R 3/4	R193
169	J-21 包含層	模 意 器 杯	(高台径) 10.0cm (高さ) 1.9cm	底部磨光ヘラナガ、内周 は磨光ナガ	密	良好	内：灰白 外：灰白 N 7/0 N 7/0	底部30%	転用後、内周使用あり り、朱 磨き 7.5R 4/6	R191
170	S K 7663	金属製品 不明	(長さ) 3.4cm (厚さ) 2.3cm	花弁を磨き魚ノコといっ た形状で表裏	金属製	—	—	不明		R205
171	S K 7630	模 意 器 圓 蓋 鉢	(高台径) 11.0cm (高さ) 1.9cm	底部外周磨光ナガ、内 周は同心円状タキキ輪文	密	良好	内：黄灰 外：黄灰 2.5Y 6/1 2.5Y 6/2	不明		R196
172	S K 7650	模 意 器 圓 蓋 鉢	(高台径) 11.0cm (高さ) 1.9cm	底部外周磨光ナガ、内 周は同心円状タキキ輪文	密	良好	内：黄灰 外：灰 2.5Y 6/2 5Y 6/1	不明		R197
173	S B 7638	模 意 器 圓 蓋 鉢	(高台径) 11.0cm (高さ) 1.9cm	底部外周磨光ナガ、内周 は同心円状タキキ輪文	密	良好	内：灰黄 外：灰黄 2.5Y 7/2 10YR 5/2	不明		R198
No.	出 土 遺 物	群 種	注 意	出 土	組成	色 調	残存度	備 考	登録番号	
174	I-24包含層	土製品 土師	(長) 5.4cm (最大幅) 2.8cm (長さ) 35.1g	密	良好	黄	7.5YR 6/6	完存	孔徑 6mm	R199
175	S K 7620	土製品 土師	(長) 3.0cm (最大幅) 1.9cm (長さ) 13.0g	密	良好	黄灰	2.5Y 6/6	完存	孔徑 6mm	R200
176	H-21包含層	土製品 土師	(長) 4.1cm (最大幅) 1.4cm (長さ) 5.9g	密	良好	灰白	2.5Y 8/2	完存	孔徑 5mm	R201
177	S K 7670	土製品フイロ 口	(厚さ) 13.3cm (外径) 7.4cm (孔径) 2.8cm	密	良好	赤輪から 暗黒灰 5G 3/1 胎土 5Y 8/3 灰白 10YR 7/2	100%	内周使用は不明 色調の差は磨きを反映	R202	

第115次調査

No.	出土遺構	器 種	法 量	調査・状況の特徴	土 質	焼 成	色 調	残存度	備 考	登録番号
1	C30 3777上段	須 恵 形 杯	(口径) 14.6cm (器高) 3.3cm	口縁部脱輪ナデ, 外周ケズリ後ナデ, 内面ナデ	精焼 1.0-2.0mmの 砂粒含む	良好	内: 灰 外: 灰白SY 1/1-灰 5Y 6/1 5Y 6/1	80%		
2	包合器	土 器 杯	(口径) 15.6cm (器高) 2.8cm	口縁部コナデ, 外周オヤエ後ナデ, 内面ナデ	やや粗 タマリ砂2mm 以下の砂粒含む	やや不良	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 5YR7/8	50%		R1
3	C30 3777上段	土 器 杯	(口径) 15.6cm (器高) 3.5cm	口縁部コナデ, 外周オヤエ後ナデ, 内面ナデ	精焼 タマリ砂, 金ウ ンモ片含む	良好	内: 黄 外: 黄 2.5Y 6/8 2.5Y 6/8	80%		R3
4	C30 3777上段	土 器 杯	(口径) 17.6cm (器高) 4.4cm	口縁部コナデ, 外周オヤエ	精焼 0.5-1.0mm の砂粒含む	不良	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 5YR7/8		口縁部のみ 1/8	R3
5	C20 P114	灰輪陶器 輪 花 皿	(口径) 15.0cm (器高) 2.5cm	口縁部コナデ, 高台脱付母ナデ, 内面コナデ	粗焼 黒色砂子を含む	良好	胎土: 灰白 輪: 灰白 5Y 7/1 5Y 6/2		高台は安存 全体の50%	口縁部に輪花4ヶ所 R5
6	C20 P114	灰輪陶器 鍋	(口径) 15.5cm (器高) 4.7cm	口縁部コナデ, 高台脱付母のナデ, 高台内面ケズリ後床調整	粗焼 黒色砂子を含む	良好	胎土: 灰白 輪: 灰白 2.5Y 7/1 5Y 7/2	約50%	高台抜きあり 高台脱付母 調整あり(高)1-7	R6
7	C20 武士	灰輪陶器 鉢	(口径) 6.6cm (器高) 1.5cm	外周高台脱付母のナデ, ヘツ切り後ナデ, 内面コナデ	精焼 1.0mm砂粒含む	良好	内: 灰白 外: 灰白 10YR7/1 10YR7/1		高台のみ 1/8	磨面あり R7
8	SB7722	輪軸陶器 鏡	(口径) 7.4cm (鏡高) 1.3cm	外周コナデ脱ミダキ, 内面コナデ	精焼 金ウンモ片 を含む	良好	胎土: 灰 SY 6/1 輪: 黄褐色 5YR7/6 5-990		高台のみ 1/4	ミエトナシ R8
9	C30 3777上段	製磁土器	(口径) 15.0cm (器高) 5.6cm (底径) 16.6cm	外周オヤエ, 内面ナデ	粗 1.0-1.5mm砂 粒, 焼固ウンモ 片含む	不良	内: 黄 外: 黄褐色 5YR7/8 7.5YR7/8		口縁部のみ 1/12	R9
10	SK7740	土 器 杯	(口径) 14.6cm (器高) 3.5cm	口縁部-内面コナデ, 外周オヤエ後ナデ	粗焼 金ウンモ片 を含む	良好	内: 黄褐色 外: 黄 7.5YR7/6 7.5YR7/6	20%		R10
11	SK7740	土 器 高 杯	(口径) 27.6cm (器高) 22.8cm	口縁部コナデ, 外周ケズリ, 内面ミダキ	粗焼 タマリ砂, 金ウ ンモ片含む	良好	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 5YR7/8		高杯部分のみ 口縁の1/8	内外面とも表磨面 の磨面あり R11
12	SK7740	土 器 皿	(口径) 20.4cm (器高) 2.9cm	口縁部コナデ, 外周オヤエ後ケズリナデ, 内面ナデ後 磨面時ナデ	精焼 タマリ砂多く含む	良好	内: 黄 外: 黄 7.5YR7/6 7.5YR7/6	80%		R12
13	SK7740	須 恵 形 杯	(口径) 14.8cm (器高) 7.5cm	口縁部脱輪ナデ, 外周底部 脱輪ケズリ, 内面脱輪ナデ	精焼 1.0mm砂粒, 黒 色砂子少量含む	良好	内: 灰白 外: 灰白 7.5Y 7/1 7.5Y 7/1	80%		R13
14	SK7729	土 器 杯	(口径) 15.6cm (器高) 3.4cm	口縁部コナデ, 外周ケズリ 後ヘツ記号, 内面放射線 文1段, 磨面時文2段	精焼 焼固ウンモ片 1-2ヶ所を含む	良好	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 5YR7/8	50%		R41
15	SK7729	土 器 鍋	(口径) 17.6cm (器高) 8.9cm	口縁部コナデ, 内面ハツ, 内面ナデ後ナデ	やや粗 1.0mm砂粒含む	良好	内: 黄褐色 10YR8/4 外: 黄褐色 10YR7/4 10YR8/4		口縁1/2次 磨	底部に焼成後の磨孔あり R33
16	SK7729	土 器 高 鉢	(口径) 25.0cm (器高) 11.3cm	口縁部コナデ, 外周タハ リ, 内面コナデ	やや粗 1.0mm砂粒含む	良好	内: 灰白 外: 灰白 10YR7/6-7/4 10YR7/6-7/4		口縁のみ1/4	R34
17	SB7465	土 器 杯	(口径) 13.6cm (器高) 3.5cm	口縁部コナデ, 外周ナデ, 内面コナデ	やや粗 磨面を含む	やや不良	内: 灰白 外: 黄 7.5YR7/4 7.5YR7/4	50%		見込みで磨面あり 付厚輪により不明 R19
18	SB7465	土 器 杯	(口径) 15.6cm (器高) 3.5cm	口縁部コナデ, 外周ケズ リ, 外周底部ナデ, 内面ナ デ	粗焼 焼固ウンモ片, タマリ砂を含む	良好	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 5YR7/8	20%		内面に放射線文と足 輪す R20
19	SB7465	土 器 杯	(口径) 16.6cm (器高) 4.6cm	口縁部コナデ, 外周ケズ リ, 底部ケズリ後ナデ, 内 面ナデ	精焼 タマリ砂を含む	良好	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 5YR7/8 (口縁部SYR6/1)		底部	R17
20	SB7465	土 器 杯	(口径) 16.6cm (器高) 3.6cm	口縁部コナデ, 外周ケズ リ後ナデ, 内面ナデ	精焼 1mmの砂粒, 多 く含む	良好	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 5YR7/8	約1/6		器表面の磨面がみられる R21
21	SB7465	土 器 杯	(口径) 18.6cm (器高) 4.6cm	口縁部コナデ, 外周ナデ 後ミダキ, 内面ナデ	精焼 タマリ砂多く含む	良好	内: 黄褐色 外: 黄 7.5YR7/8 5YR7/8	30%		放射線文部分に残る R24
22	SB7465	土 器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 3.5cm	口縁部コナデ, 外周ケズ リ後ナデ, 内面ナデ	精焼 金ウンモ片含む	良好	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 5YR7/8 (外周一部 黄鉄2.5Y 6/1)	30%		胎土縁上げあり 見込み部分で磨面ある が不明 R14
23	SB7465	土 器 杯	(口径) 15.0cm (器高) 3.3cm	口縁部コナデ, 外周ケズ リ後ナデ, 内面ナデ	精焼 金ウンモ片含む	良好	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 2.5Y 7/8 (口縁部のみ 黄黒 5YR3/1)	80%		見込みの磨面調査所 あり R15
24	SB7465	土 器 杯	(口径) 15.5cm (器高) 3.6cm	口縁部コナデ, 外周オヤ エ後ケズリ, 内面ナデ	精焼 焼固ウンモ片 タマリ砂を含む	良好	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 5YR7/8	80%		内周底部に放射線文と磨 面時文入るが不明 R16
25	SB7465	土 器 杯	(口径) 15.8cm (器高) 4.6cm (底径) 12.6cm	口縁部コナデ, 高台脱付 母ナデ, 底面ナデ, 内面 ナデ後ミダキ	精焼 焼固ウンモ片, タマリ砂を含む	良好	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 5YR7/8	80%		R25
26	SB7465	土 器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 3.5cm	口縁部コナデ, 外周オヤ エ後脱輪ナデ, 内面ナデ	粗 1.0-1.5mm砂粒含む	良好	内: 灰白 外: 黄褐色 10YR7/4 外: 黄褐色 10YR8/6-黒黒 10YR7/2		底部	胎土縁上げあり 底面ヘツ記号あり R20
27	SB7465	土 器 杯	(口径) 14.4cm (器高) 4.6cm	口縁部コナデ後ミダキ, 高台脱付母のナデ, 内面 ナデ後ミダキ	粗焼 黒色砂子, タマ リ砂を含む	良好	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 5YR7/8		口縁一部欠 損するが磨 面あり R40	
28	SB7465	土 器 高 鉢	(口径) 21.6cm (器高) 2.8cm	口縁部コナデ, 外周ケズ リ, 内面ナデ	精焼 タマリ砂を含む	良好	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 5YR7/8	30%		R22
29	SB7465	土 器 高 鉢	(口径) 21.3cm (器高) 2.9cm	口縁部コナデ, 外周オヤ エ後ケズリ, 内面ナデ	精焼 焼固ウンモ片 を含む	良好	内: 黄 外: 黄 5YR7/8 2.5Y 7/8	30%		R18
30	SB7465	須 恵 形 杯	(口径) 14.6cm (器高) 2.6cm	口縁部脱輪ナデ, 底部ヘツ おこし後ケズリ, 内面脱輪 ナデ	精焼	良好	内: 黄灰 外: 黄灰 2.5Y 6/1 2.5Y 6/1	20%		R33

No.	出土遺物	器種	法量	調査・技法の特徴	胎土	構成	色	調査	保存度	備考	登録番号
21	S27465	須恵器 壺	(口径) 21.3cm (器高) 15.2cm	口縁部凹みナシ、外面ヨコ ハテ底平打タケ目、内面 滑石文タケ目	砂粒含むが精微、 黒色粒子多く含む	やや不良	内：灰白 外：灰白 SY 7/1 ~ SY 7/2 2SY 7/1 ~ 2SY 6/2	口縁のみ 1/4			R31
22	S27465	須恵器 壺	(口径) 24.8cm (器高) 16.0cm	口縁部凹みナシ、外面平打 タケ目、内面同心円状タ ケ目	2.0mmの砂粒含 むが精微	良好	内：暗黄緑 外：灰 5B4/1 ~ 灰N 4/ 10Y 6/1 ~ 灰10Y 6/1	口縁のみ 1/8			R32
23	S37465	土師器 長頸壺	(口径) 24.8cm (器高) 14.0cm	口縁部ヨコナテ、外面タテ ハテ、内面ヨコナテ	精微 黒色クワンモ片 含む	良好	内：浅黄緑 外：明黄緑 10Y R 6/4 10Y 6/6	口縁のみ 1/4 体部約半欠損			R30
24	S37465	土師器 壺	(口径) 13.0cm (器高) 8.7cm	口縁部ヨコナテ、外面ハテ、 内面ナテ	精微 タケ目、タケリ 層含む	やや不良	内：浅黄緑 外：にぶい黄緑 10Y R 6/4 10Y 7/3	約50%			R36
25	S27465	土師器 壺	(口径) 16.4cm (器高) 13.3cm	口縁部ヨコナテ、外面タテ ハテ、底面下半部ヨコナテ、 内面ナテ、下半タケリ	新砂粒含む精微 クワンモ片含む	良好	内：にぶい黄緑 外：にぶい黄緑 10Y R 7/4 ~ 黄緑10Y R 4/1 10Y R 7/4 ~ 黄緑10Y R 4/1	75%			R27
26	灰倉塚 イナリ718 壺	土師器 壺	(口径) 7.6cm (器高) 5.0cm	口縁部ヨコナテ、外面タテ ハテ、底面オヤエ、内面オ ヤエ	やや粗 0.5mm以下の砂 粒、タケリ層、微 細なクワンモ片含む	良好	内：浅黄緑 外：明黄緑 10Y R 6/4 10Y 7/6	50%		外面底部にス付付	R44
27	灰倉塚 白陶	土師器 壺	(口径) 13.0cm (器高) 4.0cm	口縁部内面ヨコナテ、 外面タケリ	精微	良好	胎土：黄灰 釉薬：青白緑 2SY 6/1 S-369	口縁のみ 1/6			R43

### 第116次調査

No.	出土遺物	器種	法量	調査・技法の特徴	胎土	構成	色	調査	保存度	備考	登録番号
1	SK7757	土師器 杯	(口径) 13.6cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナテ、外面ナテ、 底部タケリ、内面ナテ	精微 タケリ層多く含む	良好	内：黄 外：黄 5Y R 6/8 5Y R 7/8	20%		粘土継ぎ上げ痕あり	R30
2	SK7757	土師器 杯	(口径) 13.0cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナテ、外面オヤ エタケリ、内面ナテ	精微 タケリ層含む	不良	内：浅黄緑5Y R 6/8 外：浅黄緑5Y R 7/8 ~ 黄緑5Y R 7/8	劣形			R34
3	SK7757	土師器 杯	(口径) 12.8cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナテ、外面ナテ、 内面ナテ	精微	不良	内：黄 外：黄 7.5Y R 7/6 7.5Y R 7/6	20%			R32
4	SK7757	土師器 杯	(口径) 14.4cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナテ、外面オヤ エタケリ、内面ナテ	精微 タケリ層含む	良好	内：黄 外：黄 5Y R 6/8 5Y R 7/8	劣形			R31
5	SK7757	土師器 壺	(口径) 14.0cm (器高) 8.4cm	口縁部ヨコナテ、外面タテ ハテ、内面ヨコナテ	やや粗 1.0~2.0mmの砂 粒含む	良好	内：にぶい黄緑10Y R 7/3 外：浅黄緑 ~ 10Y R 6/3 7.5Y R 6/6	口縁のみ 6/1			R36
6	SK7750	土師器 杯	(口径) 12.6cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナテ、外面オヤ エタケリ、内面ナテ	精微 1.0mm粒、黒 色粒子含む	良好	内：にぶい黄緑 外：浅黄緑 10Y R 7/4 7.5Y R 6/6	劣形			R19
7	SK7750	土師器 杯	(口径) 13.6cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナテ、外面ナテ、 内面ナテ	精微 タケリ層、黒色 粒子含む	やや不良	内：黄 外：黄 5Y R 7/6 7.5Y R 6/4 口縁一部内外：黄灰5Y R 6/1 ~ 5Y R 4/1	50%			R25
8	SK7750	土師器 杯	(口径) 15.4cm (器高) 3.8cm	口縁部ヨコナテ、底部外面 タケリ、内面ナテ	精微 0.5mmの砂粒多 く含む	良好	内：黄 外：黄 5Y R 7/8 5Y R 7/8	80%			R27
9	SK7750	土師器 杯	(口径) 13.0cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナテ、外面オヤ エタケリ、内面ナテ	精微	良好	内：灰黄 外：黄 5Y R 5/2 ~ 5Y R 7/8 5Y R 7/6 ~ 2.5Y R 7/8	劣形			R24
10	SK7750	土師器 杯	(口径) 15.3cm (器高) 3.0cm	口縁部ヨコナテ、外面オヤ エタケリ、内面ナテ	再焼 黒色粒子含む	良好	内：黄 外：黄 7.5Y R 7/6 ~ 5Y R 7/8 5Y R 6/8	25%			R20
11	SK7750	土師器 杯	(口径) 18.0cm (器高) 4.0cm	口縁部ヨコナテ、外面ナテ、 内面ナテ	再焼 黒色粒子、タケリ 層含む	良好	内：黄 外：黄 5Y R 7/6 5Y R 7/8 (口縁部のみ陶質 7.5Y R 6/1)	25%			R21
12	SK7750	土師器 壺	(口径) 18.6cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナテ、外面オヤ エタケリ、内面ナテ	精微 黒色クワンモ片 含む	やや不良	内：黄 外：黄 7.5Y R 6/6 7.5Y R 7/6 ~ にぶい黄 7.5Y R 6/3 ~ にぶい黄 7.5Y R 6/4	20%			R30
13	SK7750	土師器 壺	(口径) 15.2cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナテ、外面ナテ、 内面ナテ	精微 黒色クワンモ片 含む	良好	内：黄 外：黄 2.5Y R 6/8 5Y R 6/8	50%			R28
14	SK7750	土師器 壺	(口径) 17.0cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナテ、外面オヤ エタケリ、内面ナテ	再焼 黒色クワンモ片、 タケリ層含む	良好	内：にぶい黄緑 10Y R 7/4 外：黄緑 5Y R 6/6 外：黄 7.5Y R 7/6 ~ 黄 5Y R 7/8	劣形		粘土継ぎ合わせ部分に焼る	R18
15	SK7750	土師器 壺	(口径) 17.6cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナテ、外面ナテ、 内面ナテ	精微 タケリ層、1.0~ 2.0mmの砂粒、微 細なクワンモ片含む	良好	内：黄 外：黄 5Y R 6/8 2.5Y R 6/8 ~ 5Y R 6/8	50%			R29
16	SK7750	須恵器 壺	(口径) 14.0cm (器高) 2.7cm	口縁部内面凹みナシ、 天井部上半部凹みタケリ	精微 1.0mmの砂粒含 む	やや不良	口縁部部：灰 内面・底部： にぶい黄7.5Y R 7/4	50%			R23
17	SK7750	土師器 壺	(口径) 16.2cm (器高) 11.3cm	口縁部ヨコナテ、外面タテ ハテ、内面ヨコナテ、下半 タケリ	やや粗 1.0~1.5mmの砂 粒含む	良好	内：浅黄緑 外：黄緑 10Y R 6/4 10Y R 6/6	約10%			R26
18	SK7750	土師器 長頸壺	(口径) 22.6cm (器高) 14.3cm	口縁部ヨコナテ、外面タテ ハテ、内面ヨコナテ、下半 タケリ	0.5mmの大砂粒含 む	良好	内：浅黄緑 外：黄緑 10Y R 6/6 外：黄緑 10Y R 6/6 (黒色部：黄灰 10Y R 6/1 ~ 黄緑 10Y R 3/1)	30%		表面部の破片多くあり 口縁の一部、体部にス付付	R22
19	S27750	土師器 杯	(口径) 17.0cm (器高) 3.8cm	口縁部ヨコナテ、外面タケリ、 内面ナテ	精微 微細なクワンモ片 含む	良好	内：黄 外：黄 2.5Y R 6/8 2.5Y R 6/8	16%			R10

No.	用土造作	容 積	法 量	調整・技法の特徴	用 土	成 果	色 調	残存度	備 考	登録番号
20	SB775	土 砂 器 高杯	(口径) 14.4cm (器高) 3.3cm	口縁部コナダ, 外面ケズリ	精煉 細砂粒, タマリ 砂多く含む	良好	内: 黄 外: 灰 5YR 6/8 2.5Y 6/8	高温での 1/3のみ	灰部貼付部から剥離	R9
21	SB785	土 砂 器	(口径) 14.6cm (器高) 4.1cm	口縁部コナダ, 外面オキ ニ後ナダ, 内面オキニ後ナ	やや粗 砂粒, タマリ砂 多量含む	やや不良	内: にぶい黄 外: にぶい黄 7.5YR 7/4 10YR 7/4 ~ 10YR 7/4	95%		R7
22	SB858	土 砂 器 杯	(口径) 13.2cm (器高) 3.2cm	口縁部コナダ, 外面オキ ニ後ナダ, 内面ナダ	精煉 タマリ砂を含む	やや不良	内: 黄 外: 灰 5YR 7/8 5YR 6/6	95%	底面に遺物あり (漆木?)	R1
23	SB779	灰輪陶器 輪花甕	(口径) 17.6cm (器高) 5.5cm	口縁内径口クロコナダ, 高 台貼付時のナダ	精煉	良好	内: 黄灰 外: 黄灰 2.5Y 6/1-灰N/4 2.5Y 6/1-灰N/4	80%	口縁内面に自然釉	R8
24	SD776	土 砂 器 皿	(口径) 11.6cm (器高) 3.1cm	口縁部コナダ, 外面オキ ニ後ナダ, 内面ナダ	やや粗 1.0-3.0mm砂 粒含む	不良	内: 黄 外: 黄 10YR 6/4 10YR 6/3	90%		R11
25	SD778	土 砂 器 皿	(口径) 12.6cm (器高) 2.6cm	口縁部コナダ, 外面オキ ニ後ナダ, 内面ナダ	やや粗	不良	内: 黄 外: 黄 7.5YR 6/6 ~ にぶい黄 7.5YR 7/4	95%		R12
26	SD776	土 砂 器 皿	(口径) 12.6cm (器高) 2.6cm	口縁部コナダ, 外面ナダ, 内面ナダ	やや粗 細砂粒, タマリ砂 微細なワンモ片含む	不良	内: にぶい黄 外: 黄 7.5YR 7/4 7.5YR 6/4	80%		R12
27	SD776	灰輪陶器 花瓶	(胴部最大径) 6.7cm (器高) 7.7cm	唇部・脚部口クロ水後, 脚 部貼付時のナダ	黒色粒子含む	良好	内: 灰白 外: 灰白 5Y 7/1-5Y 7/2 5Y 7/1-5Y 7/2	80%	口部面と脚部面を欠損 体部に3本の沈線ある	R6
28	SD782	土 砂 器 皿	(口径) 12.6cm (器高) 2.4cm	口縁部コナダ, 外面オキ ニ後ナダ, 内面ナダ	精煉 細砂粒多く含む	不良	内: 黄 外: 黄 10YR 6/4 10YR 6/3	90%		R17
29	SD782	土 砂 器 皿	(口径) 12.6cm (器高) 2.3cm	口縁部コナダ, 外面オキ ニ後ナダ, 内面ナダ	精煉 細砂粒, 金ワン モ片含む	不良	内: 黄 外: 黄 10YR 6/4 10YR 6/4	80%		R16
30	SD782	陶 器 山 茶 碗	(口径) 16.6cm (器高) 5.5cm	口縁内径口クロコナダ, 高 台貼付時のナダ	やや粗 細砂粒, 黒色粒 子含む	良好	内: 黄 外: 黄 2.5Y 7/2 2.5Y 7/2	90%	自然釉による	R15
31	SD782	陶 器 山 茶 碗	(口径) 17.6cm (器高) 5.5cm	口縁部ニ内径口クロコナダ, 高台貼付時のナダ	精煉 黒色粒子含む	良好	内: 黄灰 外: 灰白 2.5Y 6/1 2.5Y 7/1	80%		R14
32	SD782	青 磁 碗 花 瓶	(口径) 12.6cm (器高) 3.6cm	口縁部口クロコナダ	精煉	良好	胎土: 灰白 釉: 緑青磁 7.5Y 7/1 3-800	口縁のみ		R3
33	SD782	白 磁	(口径) 15.2cm (器高) 3.6cm	口縁部口クロコナダ	精煉	良好	胎土: 灰白 釉: 黄白 2.5Y 7/1 3-800	口縁1/3のみ		R5
34	SD782	白 磁	(口径) 15.4cm (器高) 3.6cm	口縁部口クロコナダ	やや粗 1.0mmの砂粒, 黒色粒子含む	良好	胎土: 灰白 釉: 乳白 2.5Y 7/1 3-940	口縁1/3のみ	玉縁口縁	R4
35	張巻簾	陶 器 小 盃 山 皿	(高径) 6.8cm (残高) 2.6cm	外唇ノズル, 高台貼付時の ナダ, 糸切後未調整	粗 砂粒多く含む	やや不良	内: 灰ナリーブ 外: 灰黄 5Y 6/2 2.5Y 7/2	底面のみ 30%	底面に遺物(刺繍不可解, 漆木?)より 内面に灰化物付着	R2
36	SK770	土 砂 器 小 皿	(口径) 10.8cm (器高) 2.2cm	口縁部コナダ, 外面オキ ニ後ナダ, 内面ナダ	精煉 タマリ砂多く含む	良好	内: にぶい黄 外: にぶい黄 5YR 7/4 5YR 6/6 灰部 7.5YR 6/6	95%		R47
37	SK770	土 砂 器 小 皿	(口径) 11.2cm (器高) 2.3cm	口縁部コナダ, 外面オキ ニ後ナダ, 内面ナダ	比較的粗粒 タマリ砂・微細 なワンモ片含む	やや不良	内: 黄 外: にぶい黄 7.5YR 7/6 7.5YR 7/6 ~ 黄 7.5YR 7/6	95%		R48
38	SK770	土 砂 器 小 皿	(口径) 11.4cm (器高) 2.4cm	口縁部コナダ, 外面オキ ニ後ナダ, 内面ナダ	比較的粗粒 タマリ砂・微細 なワンモ片含む	やや不良	内: 黄 外: 黄 10YR 6/4 10YR 6/3	95%		R49
39	SK770	土 砂 器 合 付 皿	(口径) 11.9cm (器高) 1.4cm (台径) 5.6cm	口縁部コナダ, 外面ナダ, 高台貼付時のナダ, 内面ナダ	比較的粗粒 タマリ砂を含む	やや不良	内: 黄 外: 黄 10YR 6/3 10YR 6/3	95%		R50
40	SK770	土 砂 器 合 付 皿	(口径) 11.7cm (器高) 2.5cm (台径) 7.5cm	口縁部コナダ, 外面ナダ, 高台貼付時のナダ, 内面ナダ	精煉 ワンモ片・タマリ 砂を含む	やや不良	内: 黄 外: 黄 5YR 7/8 5YR 6/8	95%		R51
41	SK770	土 砂 器 合 付 杯	(口径) 14.6cm (器高) 4.2cm (台径) 7.6cm	口縁部コナダ, 外面オキ ニ後ナダ, 高台貼付時のナダ, 内面ナダ	精煉 金ワンモ片・タマリ 砂を含む	不良	内: 黄 外: 黄 7.5YR 6/6 7.5YR 6/6 ~ にぶい黄 10YR 7/2	90%		R53
42	SK770	土 砂 器 合 付 杯	(口径) 15.2cm (器高) 4.4cm (台径) 8.2cm	口縁部コナダ, 外面オキニ後ナダ, 高台貼付時のナダ, 内面ナダ, 内面ナダ	精煉 金ワンモ片多量 含む	良好	内: 黄 外: 黄 7.5YR 7/6 10YR 6/4-15YR 6/6	95%	口縁一部欠 けがある	R52
43	SK778	灰輪陶器 皿	(口径) 11.6cm (器高) 2.4cm	内径口クロコナダ	精煉 細砂粒・黒色粒 子含む	良好	内: 灰白 外: 灰白 2.5Y 7/1 2.5Y 7/1	90%	遺り掛けにより胎釉	R41
44	SK770	灰輪陶器 皿	(口径) 11.2cm (器高) 2.3cm	内径口クロコナダ, 高台貼 付時のナダ, 底面赤銅後ナ	精煉 黒色粒子・1.0 mmの砂を含む	良好	内: 灰白 外: 灰黄 2.5Y 7/1 2.5Y 7/2	95%	遺り掛けにより胎釉 内面に灰輪不明瞭	R42
45	SK770	灰輪陶器 鉢	(口径) 14.6cm (器高) 3.2cm	内径口クロコナダ, 高台貼 付時のナダ, 底面赤銅	精煉 黒色粒子微量含む	良好	内: 灰黄 外: 灰黄 2.5Y 7/2-灰白 2.5Y 7/1 2.5Y 7/2-灰白 2.5Y 7/1	95%	口縁の一部 欠けあり	R44
46	SK770	灰輪陶器 鉢	(口径) 15.6cm (器高) 6.9cm	内径口クロコナダ, 高台貼 付時のナダ, 底面口クロコナ	精煉 黒色粒子少し含む	良好	内: 黄灰 外: 灰白 2.5Y 6/1 2.5Y 7/1	70%	内外面胎釉不全剥離	R43
47	SK770	灰輪陶器 鉢	(口径) 20.0cm (残高) 13.6cm	内径口クロコナダ	精煉 0.5-0.3mmの 砂粒, 黒色粒子 ・微細なワン モ片含む	良好	内: 灰白 外: 灰白 N 7/2 N 7/2	90%	外面に遺り胎釉有 内径口縁部自然釉か?	R46
48	SK770	灰輪陶器 皿	(残高) 17.0cm	内径口クロコナダ	精煉 黒色粒子・砂粒 を含む	良好	内: 灰白 外: 灰 オリーブ黄 2.5Y 4/1 3Y 6/4 5Y 7/1	骨粉のみ 1/4	内面胎釉, 外面に胎釉	R45
49	SK770	緑輪陶器 鉢	(口径) 40.6cm (器高) 14.8cm (高径) 18.6cm	内外径口クロコナダ, 高台貼 付時のナダ	精煉 黒色粒子含む	やや不良	胎土: 口縁 灰 底面 黄 釉: オリーブ緑 5-800 ~ 黄 色 5-800	全体の30% のみ	部分的に平行タナキ目文 が異なる箇所がある 跡状同様に同一個体	R40

No.	出上名称	容 積	法 量	調整・技術の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残存率	備 考	登録番号
30	SK770 土 師 器 象付土器 小皿	(口径) 10.5cm (底径) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、外面オサ ス、内面ナデ	精緻	やや不良	胎土：にぶい黄緑 灰緑：藍	10Y R7/4 2.5Y R/1	口縁の1/8		R36
31	SK770 瓶 蓋 部 蓋	(縦径) 6.2cm (厚み) 0.8cm	内面黄緑タケナ目、外面 平打タケナ目	精緻	良好	内：青灰 外：灰白	5Y 6/1 7.5Y 8/1			R38
32	SK770 瓶 蓋 部 蓋	(縦径) 10.0cm (厚み) 0.8cm	内面黄緑タケナ目、外面 平打タケナ目	精緻	良好	内：灰 外：灰ネーブル	5Y 6/2 N 6/			R37
33	SK770 瓶 蓋 部 蓋	(口径) 13.7cm (縦径) 17.8cm (厚み) 1.3cm	器底同心円状タケナ目、青 藍平打タケナ目ナデ	精緻 0.2～0.5mmの 砂粒を含む	良好	内面：灰青 2.5Y 7/2～5Y 5/1 背面：黄灰 2.5Y 7/1 2.5Y 6/1	50%			R39
34	包含物 青 磁 瓶 花 杯	(口径) 14.6cm (底径) 3.3cm	口縁部コロロナデ	精緻	良好	胎土：灰白 砂：灰緑 5 - 857	5Y 8/1 ～灰体部 5 - 903	口縁のみ 1/6		R54
35	包含物 石 製 品	(縦径) 9.9cm (厚み) 5.6cm	灰面整形時のケズリ			黄灰：黄灰 3 - 901 灰体部：緑灰	3 - 901 5 - 947		青面に脚部なし	R35
36	SK776 土 師 器 杯	(口径) 13.6cm (底径) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、内面ナデ 線状刻・縦線短文、内面タ ズリナデ	精緻 数部なウクレモ片多 量・タサリ磨を含む	良好	内：明赤黄 外：黄	5Y R5/8 5Y R6/8	90%		R66
37	SK776 土 師 器 杯	(口径) 13.6cm (底径) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面ケズ リナデ、内面ナデ	精緻 数部なウクレモ片 多量含む	良好	内：黄 外：黄	5Y R7/8 5Y R6/8		定形	R42
38	SK776 土 師 器 杯	(口径) 13.0cm (底径) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、外面オサ ス後ナデ、内面ナデ	精緻 数部なウクレモ片 多量含む	良好	内：黄 外：黄	5Y R6/8 5Y R6/8	80%		R43
39	SK776 土 師 器 杯	(口径) 14.0cm (底径) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、外面オサ ス後ナデ、内面ナデ後線刻 短文	精緻 黄色粒子・縦線 なウクレモ片含む	良好	内：黄 外：黄	5Y R6/8 5Y R6/8	90%	器底の状況現存で器底 陶文部分明にしか見えない	R41
40	SK776 土 師 器 杯	(口径) 16.4cm (底径) 4.0cm	口縁部ヨコナデ、外面ケズ リ、内面ナデ	精緻 タサリ磨多く含む	やや不良	内：黄 外：黄	5Y R7/8 5Y R7/8			R44
41	SK776 土 師 器 杯	(口径) 13.6cm (底径) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサ ス後ナデ、内面ナデ	精緻 タサリ磨を含む	良好	内：黄 外：黄	5Y R6/8 5Y R6/8		口縁一部のみ 欠形	R60
42	SK776 土 師 器 皿	(口径) 17.4cm (縦径) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、外面オサ ス後ケズリ、内面ナデ	精緻 タサリ磨・黄色 粒子・縦線なウ クレモ片含む	良好	内：黄 外：黄	2.5Y R7/8 5Y R7/8	60%	「底片？」	R56
43	SK776 土 師 器 小皿	(口径) 12.0cm (底径) 5.6cm	口縁部ヨコナデ、外面ケズ リ、内面ナデ	やや粗 黄色粒子・縦線 なウクレモ片・タ サリ磨を含む	良好	内：浅黄緑 10Y R6/4 外：浅黄緑 10Y R7/4 ～ 黄灰 10Y R4/1	10Y R7/4 10Y R7/4 ～ 10Y R4/1		スズ付金	R66
44	SK777 瓶 蓋 部 蓋	(口径) 14.0cm (底径) 2.4cm	口縁部四角ナデ、又井線土 器調ケズリ、ブラス線打 時のナデ	精緻 0.5mm～1.0mm の砂粒、黒ウクレモ片 多量含む	良好	内：灰白 外：灰	N 7/～灰 N 6/ N 6/～灰 N 6/		定形	R57
45	SK776 瓶 蓋 部 蓋	(口径) 8.6cm (底径) 6.7cm (底径) 7.2cm		精緻 0.2mm～1.0mm の砂粒、黒ウクレモ片 多量含む	良好	内：灰 外：灰 N 5/～オレンジ黄 7.5Y 5/1	N 5/ N 5/～オレンジ黄 7.5Y 5/1		口縁一部欠 損のみ 定形	R58
46	SK776 瓶 蓋 部 蓋	(口径) 9.4cm (底径) 13.0cm		精緻 1.0mm～1.5mm の砂粒を含む	良好	内：暗灰 外：灰	N 6/～暗灰 N 3/ N 6/	30%		R59
47	SK776 土 師 器 鉢	(口径) 28.4cm (底径) 15.8cm (底径) 10.5cm	口縁部ヨコナデ、外面タナ ハケ～ケズリ、内面ヨ コハケ～オサス後ナデ	精緻 タサリ磨・黄色 粒子・黒ウクレ モ片含む	良好	内：黄 外：黄	5Y R6/8 5Y R6/8	50%		R67
48	SK776 土 師 器 鉢	(口径) 24.0cm (底径) 10.5cm (底径) 14.0cm	口縁部ヨコナデ、外面タナ ハケ～ケズリ～オサス後ナ デ、内面ヨコハケ～オサ	精緻 黄色粒子・タサ リ磨を含む	良好	内：黄 外：黄	5Y R6/8～5Y R7/8 5Y R6/8		口縁一部欠 損 ほぼ定形	R68
49	SK780 土 師 器 小皿	(口径) 8.6cm (底径) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、外面オサ ス後ナデ、内面ナデ	やや粗 磁砂粒を含む	やや不良	内：にぶい黄緑 外：にぶい黄緑	10Y R7/4 10Y R7/4		定形	R71
50	SK780 土 師 器 小皿	(口径) 8.6cm (底径) 1.5cm	口縁部ヨコナデ、外面オサ ス後ナデ、内面ナデ	精緻 磁砂粒、赤鉄多 く含む	良好	内：黄 外：黄	7.5Y R7/6 5Y R7/8	80%		R70
51	SK780 土 師 器 小皿	(口径) 8.0cm (底径) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、外面オサ ス後ナデ、内面ナデ	やや粗 0.5mm以下の砂 粒多く含む	良好	内：にぶい黄緑 外：にぶい黄緑	10Y R7/4 10Y R7/4		口縁一部欠 損のみ 90%	R69
52	SK780 土 師 器 小皿	(口径) 8.0cm (底径) 1.9cm	口縁部コロロナデ、外面赤 切後ナデ、内面ナデ	やや粗 金ウクレモ片含む	良好	内：にぶい黄緑 外：にぶい黄緑	10Y R7/4 10Y R7/4		定形	R72
53	SK780 土 師 器 鉢	(口径) 15.6cm (底径) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、外面オサ ス後ナデ、内面ナデ	やや粗 0.5～1.0mmの 砂粒、金ウクレ モ片含む	良好	内：黄 外：黄	7.5Y R6/6 5Y R7/6		一部欠損 90%	R73
54	SK780 土 師 器 皿	(口径) 15.0cm (底径) 3.0cm	口縁部ヨコナデ、外面オサ ス後ナデ、内面ナデ	やや粗 1.0mm前後の砂 粒多く含む	良好	内：浅黄緑 10Y R6/4 ～にぶい黄緑 10Y R7/4 外：浅黄緑 10Y R7/4 10Y R6/3	10Y R7/4 10Y R7/4 10Y R7/4 10Y R6/3	50%		R74

### 斎宮跡発掘調査次数一覧表

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
1	S 45	試掘	13-6	51	中垣内375-1 (南)
2	46	古里A地区	13-7		東 裏328 (小川)
3		◇ B地区	13-8		西加座2771-1 (細井)
4	47	◇ C地区	13-9		◇ 2773 (細井)
5	48	◇ D地区	13-10		東 裏362-1 (児島)
6-1		Aトレンチ	13-11		西加座2681-1 (浮田)
6-2		Bトレンチ	13-12		◇ 2721-3, 2724-2 (森川)
6-3		Cトレンチ	13-13		東前沖2506-2 (宮下)
6-4		Dトレンチ	14-1	52	2 Eトレンチ
6-5		Eトレンチ	14-2		2 Fトレンチ
7	49	古里E地区	14-3		2 Gトレンチ
8-1		Fトレンチ	14-4		2 Hトレンチ
8-2		Gトレンチ	14-5		2 Iトレンチ
8-3		Hトレンチ	15		斎宮小学校
8-4		Iトレンチ	16-1		竹川町道A
8-5		Jトレンチ	16-2		◇ B
8-6		Kトレンチ	16-3		◇ C
8-7		Lトレンチ	16-4		◇ D
8-8		Mトレンチ	16-5		◇ E
8-9		Nトレンチ	16-6		◇ F
8-10		Oトレンチ	17-1		竹神社社務所
8-11		Pトレンチ	17-2		竹神社防火用水
9-1	50	Qトレンチ	17-3		西加座2721-6 (西沢)
9-2		Rトレンチ	17-4		楽 殿2894-1 (中川)
9-3		Sトレンチ	17-5		◇ 2895-1 (西口)
9-4		Tトレンチ	17-6		出在家3237-3 (吉川)
9-5		Uトレンチ	17-7		◇ 3237-1 (里中)
9-6		Vトレンチ	17-8		楽 殿2894-1 (西村)
9-7		Wトレンチ	17-9		東海造機
9-8		Xトレンチ	18	53	6 A E L - E · I (下園)
9-9		Yトレンチ	19		6 A E N - M · N · O (御館)
9-10		Zトレンチ	20		6 A E O - I · J (柳原)
10		広城園道路	21-1		6 A G N - B (鍛冶山、北山)
11-1		西加座2661-1 (山中)	21-2		6 A E I - D (西加座2711-2, 2717-4他、山崎)
11-2		◇ 2681-1 (山名)	21-3		6 A F D - D (西前沖2649-1、大西)
11-3		東前沖2483-2 (前田)	21-4		6 A F H - F (西加座2678, 2679-3、森下)
11-4		下 園2926-9 (吉木)	21-5		6 A G D - K (東前沖、渡部)
12-1	51	2 Aトレンチ	21-6		6 A C A - T (古里3269-2、中西)
12-2		2 Bトレンチ	21-7		6 A F E - F (東前沖2631-1、鈴木)
12-3		2 Cトレンチ	21-8		6 A E G - A (楽殿2909-3、大西)
12-4		2 Dトレンチ	21-9		6 A E D - R (藤林3218-3、宇田)
13-1		東加座2436-7 (浜口)	22-1		6 A G U
13-2		◇ 2436-4 (中村)	22-2		6 A G V
13-3		古 里3283 (村上)	22-3		6 A G W
13-4		楽 殿2916~2917 (松井)	23	54	6 A E L - B (下園)
13-5		御 館2974-1 (川本)	24		6 A G F - D (西加座)

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区		
25-1	54	6ADP-K (牛薬3029-1、三重土地ホ-ム)	37-12	56	6AFH-J (西加座2681-1・3・4、渋谷)		
25-2		6ACA-Y (古里3270、藤田)	37-13		6AGK-F (西加座2385-3、2386-3、竹内)		
25-3		6ADD-F (篠林3139-3、池田)	38		6ACD-S (塚山)		
25-4		6AER-H (牛薬3014、牛薬公民館)	39		6ABD-R・S・T (古里)		
25-5		6AGN-H (鍛冶山2392、丸山)	40		6AGH-L・M (東加座)		
25-6		6AFH-A (西加座2675-5、谷口)	41		6AGJ-J他 (斎宮地内)		
25-7		6AEK-V (下園2926-10、奥田)	42-1		6AEI-D・F (楽殿)		
25-8		6AFC-D (西前沖2064-5、山本)	42-2		6AEK-A・B (楽殿)		
25-9		6ACN-C (広頭3387-1、北出)	43-1		6ADC-C (出在家3235-2、永田)		
25-10		6AEV-A (鈴池339-1、永島)	43-2		6ADT-B (木葉山308-1、山本)		
25-11		6ACF-B (東裏364-1、沢)	43-3		6ACP-T (南裏241-1、辻)		
25-12		6AEE-Y (楽殿2892-3、山本)	43-4		6ADS-D (牛薬123-3、西山)		
25-13		6AEJ-E (西加座2766-1、山内)	43-5		6ADE-D (篠林3220-3、澄野)		
26-1		6AFR (中西)	43-6		6AGE (東前沖、町道側溝)		
26-2		6AEX~6ACQ (鈴池、木葉山、南裏)	43-7		6ABD-F (古里588-6、今西)		
26-3		6AEV・W・X (鈴池)	43-8		6ADQ-H (牛薬3025-2、大西)		
26-4		6ACR (木葉山、南裏)	44		6AFL-A・B (鍛冶山2759-1、他)		
27		6ACG-S・T (東裏)	45		6AEG-P・Q (楽殿2904-2、他)		
28		6AEO-D (柳原)	46		6AGN-C・D (鍛冶山2737-1、他)		
29		6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ	47		6ADJ-D・G他 (西加座、御前、宮ノ上、上園)		
30		55	6ABJ-M・X・W (中垣内)		48-1	58	6AGM-M (広頭3385、斎宮小)
31-1			6ADO-M (内山3038-13、岩見)		48-2		6ADP-Q (牛薬3033-1・2、吉田)
31-2			6ACP-I (南裏227-2、鈴木)		48-3		6ABL-M (中垣内434-6、西川)
31-3			6ABD-A (古里588-4、北畹)		48-4		6AGL-B (東前沖2480、倉田)
31-4			6ADQ-T (牛薬3018-2、百五銀行)		48-5		6AGD~6AFE (東前沖、町道側溝)
31-5			6ACC-G (塚山3338-3、水谷)		48-6		6AGC-A (西前沖3550-1、今西)
31-6			6ABO-X (古里576-1、池田)		48-7		6ADT-H (木葉山307、森西)
31-7			6AGI-L (東加座2427-1、竹内)		48-8		6ACL-E・F・G (東裏334-15、他)
31-8			6ACN-G (広頭3388-1・5・8・9、森)		48-9		6AEV-J (鈴池341-1、乾)
31-8	6AGD-L (北野2487-1、中川)		48-10	6AGT (牛薬、町道側溝)			
31-10	6ADM-O (内山3043-3、斎宮駅)		48-11	6ADP-E (鍛冶山2351-1、2352-1、柳原)			
31-11	6ADT-I (木葉山304-2、澄野)		48-12	6AFC-H (西前沖2604-8・9、清水)			
31-12	6ADT-J (木葉山304-7、宇田)		48-13	6ACM-O (東裏、斎宮小)			
32	6ACE-D・E・F (塚山)		48-14	6AET (牛薬、町道側溝)			
33	6ADE-C・D他 (篠林)		49	6ADI-D・U・V・W・X (上園3083、他)			
34	6ADE-F・G・H (西加座)		50	6ACH-H (東裏294、297、山本)			
35	6APE他 (西前沖)		51	6AFF-D (西加座2663-1・4、2664、轟下)			
36	56		6ABI-F (中垣内)	52	6AGF-D (西加座2703、他)		
37-1			6AFC-M (西前沖2064、日本経木)	53-1	59		6ACM-P (東裏284、体育館)
37-2			6ADQ-R (牛薬3021-2、野田)	53-2			6ACA-M (古里3280-2、中西)
37-3		6AFC-F (西前沖2604-6、神田)	53-3	6ABE (古里573-2、永納)			
37-4		6AFC-M (西前沖2604、日本経木)	53-4	6ACL-S (東裏271-1、田所)			
37-5		6AFC-G (西前沖2064-7、中村)	53-5	6ACR (木葉山97-5、田中)			
37-6		6ABD-A (古里588-2、北畹)	53-6	6AGC (鍛冶山、町道側溝)			
37-7		6AEC-M (苅干2861-2、斎王公民館)	53-7	6ADD-U (篠林3147-3、野呂)			
37-8		6ADR-P (木葉山128-8・13・14、富山)	53-8	6AGE-O (東前沖2470-2、上田)			
37-8		6AGK-E (東加座2355-1、竹内)	53-9	6ACS-O (木葉山95-2、浅尾)			
37-10		6AED-O (楽殿3217-1、渡部)	53-10	6ACA-R (古里3267-1、西川)			
37-11		6ADN-O (内山3043-3、斎宮駅)	53-11	6ADR-W (木葉山131-7、西村)			

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
53-12	59	6 ABL-K (中垣内464-2、沢)	70-10	62	6 AFD-B・D (西前沖2649-4、大西)
53-13		6 ADQ-L (牛業3022、辻)	70-11		6 AGO-H (鍛冶山2363-2、川合)
53-14		6 ACM-O (東裏287-3、体育庫)	70-12		6 ADD-F・G (篠林3158、長谷川)
53-15		6 AFK-C・D (西加座2721-1、鈴木)	70-13		6 AEC-N・G (苜干、佐藤)
54		6 AFE-N (西前沖2630、他)	70-14		6 ABL-R (中垣内459、北岡)
55		6 AEN-P (柳原、御館2785-1、他)	70-15		6 AFD-A (西前沖2644-1、山本)
56		6 ACH-S (東裏289-1、他)	70-16		6 ACB-A他 (町道塚山線拉幅)
57	6 AGF-H・I (東加座2441、他)	71	6 ABE (古里501、他)		
58-1	60	6 AFK-C・D (西加座2721-1、鈴木)	72-1	6 ABE (古里500、他)	
58-2		6 AFH-N (西加座2681-8、三村)	72-2	6 ABF (古里523、他)	
58-3		6 ACM-N (東裏3385-2、斎宮小)	72-3	6 ABF (古里551-2、他)	
58-4		6 ABL-A (中垣内4731-1、小家)	72-4	6 ABF (古里528-1、他)	
58-5		6 ADQ-Q (牛業、町道側溝)	73	6 AFF-B・C・E・G (西加座2663-5、他)	
58-6		6 ADR-V (木業山131-3、西山)	74-1	6 ABF (古里523、他)	
58-7		6 AGS-G (中西611、山路)	74-2	6 ABF (古里522、他)	
58-8		6 ABM-A (中垣内430-3他、近鉄)	74-3	6 ABE・F (古里524、他)	
59		6 ACJ-I (広瀬3379-1、他)	74-4	6 ABE (古里548-1、他)	
60		6 AGJ-B・D・G (東加座2450-1、他)	74-5	6 ABE (古里543、他)	
61		6 AFF-H・I・D (西加座2663-1、他)	75	6 AGF-C (西加座2702、他)	
62		6 AGI-J・K (東加座2425、他)	76-1	63	6 ADB-A~D (町道塚山線拉幅)
63		6 AFG-M・N (西加座2659-1、他)	76-2		6 ADE-F・G (篠林3158、長谷川)
64-1	61	6 ACO-H (牛業3395-1、トウカイ)	76-3		6 ABE (古里554、明和町)
64-2		6 AGL-F (東加座2435-1、大和谷)	76-4		6 ACK (東裏354-13、山崎)
64-3		6 ADD-A (篠林3136-1、山路)	76-5		6 AEE-W (楽殿577、岡田)
64-4		6 AGR-N (苗川2340、丸山)	76-6		6 ACB-A (塚山3276-1、今西)
64-5		6 ACM-R・Q・P (東裏3385-2、斎宮小)	76-7		6 ACM-M (広瀬3385-2、斎宮小)
64-6		6 ACK (東裏361-2、竹川自治会)	76-8		6 AFM-G (鍛冶山2736-3、近鉄)
64-7		6 AGI-G (東加座2435-2、大和谷)	76-9		6 ACQ (南裏144-1、田所)
64-8		6 AGR-J (苗川2341-6、山下)	76-10		6 ABD-U (古里579、池田建設)
64-9		6 ADQ-M (牛業、町道側溝)	76-11		6 ABE (古里554、明和町)
64-10		6 ACF-A (東裏365-1、樋口)	76-12		6 AEE (楽殿、町道下水管)
64-11		6 ACM-O (東裏3385-2、斎宮小)	76-13		6 ADD-K (篠林3143、中西)
64-12		6 ADE-B (篠林3162-3、江崎)	76-14	6 AEE-S (楽殿2878-3、山路)	
65-1		6 ACC-M (塚山3331-1)	76-15	6 ABF~6 ABH (中垣内、県道拉幅)	
65-2	6 AEG-S (楽殿2908-2、他)	76-16	6 AEK-B (下瀬2936-2、明和町)		
65-3	6 AEI-L・M (楽殿2917-4、他)	76-17	6 AEV-A (鈴池339-5、水島)		
66	6 AGC-C (東加座2437-1、他)	77	6 AGJ-D (東加座2453、他)		
67	6 ABF (古里523、他)	78	6 ADL (宮ノ前3054、他)		
68	6 ABF (古里502、他)	79	6 AGG-A・B (東加座2440、他)		
69	6 AGM-E~H (東加座2373、他)	80	6 AFG-F~I (西加座2696、他)		
70-1	62	6 ACC-X (塚山3325-1、江崎)	81-1	H 1	6 AEC~F (町道塚山線拉幅)
70-2		6 AEE-W (楽殿2875-2、岡田)	81-2		6 ABJ、6 ABK (古里、県道拉幅)
70-3		6 ADR-I (木業山129-5、大西)	81-3		6 ADS-M (木業山137、中川)
70-4		6 ACN-A・B・E・L (広瀬3389-8、林)	81-4		6 AED-L (楽殿2881-2、山本)
70-5		6 AEW-A (鈴池333-1、八田)	81-5		6 AFQ-C (中西597-2、水戸口)
70-6		6 ABL-S (中垣内430-6、奥山)	81-6		6 ADD-F (篠林313、池田)
70-7		6 AEE-T (楽殿577、浅尾)	81-7		6 ABL-U (中垣内430-7、川本)
70-8		6 AEU・6 AEX-A (牛業、鈴池、三重県)	81-8		6 ABJ (古里、明和町)
70-9		6 AEP-C・D (御館、榊原、近鉄)	81-9		6 ACF (中垣内、三重県)

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
81-10	1	6ADR-V(木葉山297、明和町)	102-1		6ADS(木葉山119-5 澄野)
81-11		6ACM-N(広頭3385-2、明和町)	102-2		6AED-J(楽殿2882-5 杉本)
81-12		6AED-A(篠林3225、中川)	102-3		6AAQ(花園663-1 中川)
81-13		6ACB(塚山3276-19他、明和町)	102-4		6ACF-A(東裏365-1 樋口)
81-14		6AED-F(楽殿2844-2、澄野)	102-5		6ABJ-D(中垣内493-6 川口)
81-15		6AED-U(楽殿2885-2、西山)	102-6		6AG(鍛冶山内 明和町)
81-16		6AG(北野3655-1、他)	102-7		6ACG-E(東裏318-1 川本)
82-1		6ADI-F-J(上園3095、他)	102-8		6AE(楽殿内 明和町)
82-2		6ADI-K-L(上園3100、他)	103		6AEQ-A(柳原2779-3)
83		6AFJ-C-F(西加座2770-3、他)	104		6AGT(笹川1048-1、他)
84-1		6AFJ-G(西加座2764-3)	105	6	6AFN(鍛冶山2758-1、他)
84-2		6AFH-G-H(西加座2679-1、他)	106-1		6AEW-J(鈴池338-1 森西)
85-1	2	6ABD~6ACD(古里、三重県)	106-2		6AEE-W(楽殿2891-3 向井)
85-2		6ACA-P(古里3279、松本)	106-3		6AFL他(鍛冶山内 明和町)
85-3		6ACJ-B-D(東裏、明和町)	106-4		6AEC-L(苜干2861 坂本)
85-4		6ABE(竹川573-1、永納)	106-5		6AGO(鍛冶山2362 青山)
85-5		6AED-U(楽殿2885-2、西山)	106-6		6ACC-B(塚山3340-4 田畑)
85-6		6AFH-B(西加座、明和町)	107		6ABI-O(中垣内414-1、他)
85-7		6ACB-C(塚山3276-3他、加藤)	108		6AEQ-C(柳原2779-2、他)
85-8		6ABI-N(中垣内427-1、小林)	109	7	6AFL-D-E(鍛冶山2763-1、他)
86		6AFH-F-G-H(西加座2679-1他)	110-1		6ACM-J(東裏262-3 齋宮土地改良区)
87		6ACE-N-Q-R(塚山3356他)	110-2		6AGR-O(笹川12345-3 竹内)
88		6AGN-C-D(鍛冶山2411-1他)	111-1		6ADM(内山内)
89-1	3	6ADM-O(内山3043-5、近鉄斎宮駅)	111-2		6ADK(上園内)
89-2		6AGI-M(東加座2432-2他、北村)	111-3		6ADL他(宮ノ前内)
89-3		6ADM-N-O(内山3060-4、近鉄斎宮駅)	112		6ACB-B(塚山3276-15、他)
90		6AFH-A-B(西加座2680他)	113-1	8	6ACI(広頭内)
91		6ABH-F(中垣内393、他)	113-2		6ACI(広頭内)
92		6AGN-A(鍛冶山2734-3)	114		6AEQ-E-F(柳原内)
93		6ADN(内山3045-12、他)	115-1		6ADK・6ADL(上園・宮ノ前内)
94		6AEM(御館2942)	115-2		6ADK(上園内)
95	4	6ADN(内山3046-17、他)	116-1		6ADG(篠林内他)
96-1		6AGM(東加座2374 丸山)	116-2		6ADM-A(内山)
96-2		6ADO(内山3068-3、他 明和町)	116-3		6ADI-Q(宮ノ前内)
96-3		6ACA-D(古里3260 清水)	116-4		6ADI-M-N(上園内)
96-4		6AFN(中西2749-1 本山)	116-5		6ADI(上園・篠林内)
96-5		6ADR-T(木葉山28-3 加藤)	117-1		6AEF(楽殿2894-4)
96-6		6ADD-D(篠林3138-1 藤井)	117-2		6ADF-A-B(篠林3155他)
97		6AEM(中垣内482、他)	117-3		6ABJ(中垣内内)
98		6AFM-C-E(鍛冶山2745、他)	117-4		6ADP(牛業内)
99	5	6ADN(内山3046-11、他)	117-5		6AFC-M(北野3553-1他)
100		6ABI-T(中垣内423)	117-6		6ACM-B(東裏266-6)
101		6ADG(篠林3194)			



第28图 寄宫跡地区表示



## 報告書抄録

ふりがな	しせきさいくあと へいせい8ねんどはつくちようさがいはう							
書名	史跡斎宮跡 平成8年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	駒田利治・野原宏司・上村安生・赤岩 操							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965-2-3800							
発行年月日	1997年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
さいくう かつらぎ 斎宮跡	たきぐんあひらちほろ 多気郡明和町斎宮他	2442	210	34° 31' 55" 34° 32' 30"	136° 36' 16" 136° 37' 37"	19960507 19961023	902	計画調査
第113次調査	さいくうあひらちほろ 斎宮字広頭					19961025 19970110	987	◇
第114次調査	さいくうあひらちほろ 斎宮字柳原					19960529 19960724	612	◇
第115次調査	さいくうあひらちほろ 斎宮字宮ノ前他					19960805 19961120	765	整備事前調査
第116次調査	さいくうあひらちほろ 斎宮字宮ノ前							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
斎宮跡	官衙							
第113次調査		平安後期	掘立柱建物・井戸・土坑溝	土師器・灰釉陶器・同模倣土師器碗	平安時代後期の区画施設			
第114次調査		奈良後期～平安前期	大型掘立柱建物・櫛列・土坑	円面硯・緑釉陶器・土師器・習書土器・須恵器・サイコロ形土器	斎宮跡方格地割の中核部を区画する櫛列・大型掘立柱建物			
第115次調査		平安前期	掘立柱建物・溝・井戸	土師器・須恵器・ヘラ描土器	方格地割北西隅部の区画施設			
第116次調査		平安後期	掘立柱建物・溝・井戸	土師器・灰釉陶器・緑釉大甕・鉢・青磁・白磁	方格地割北西隅部の外周区画施設			

# 圖 版



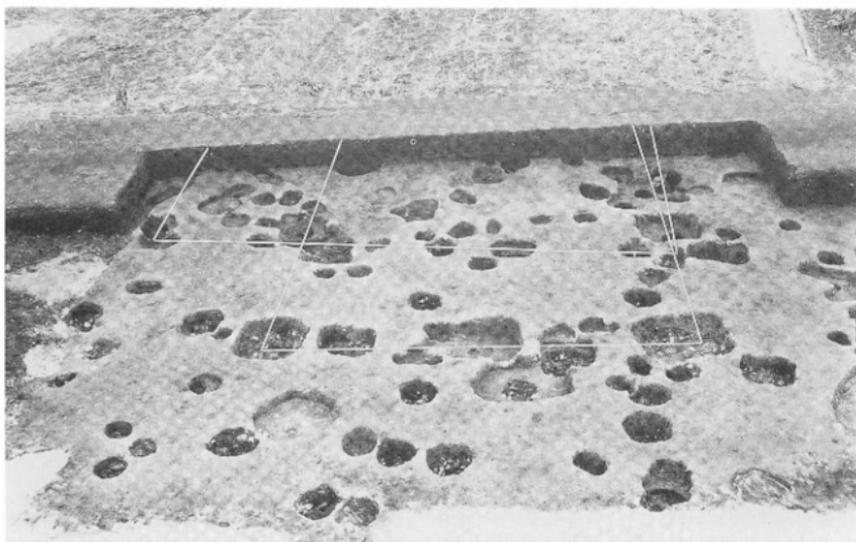
第113次調査区全景（北から）



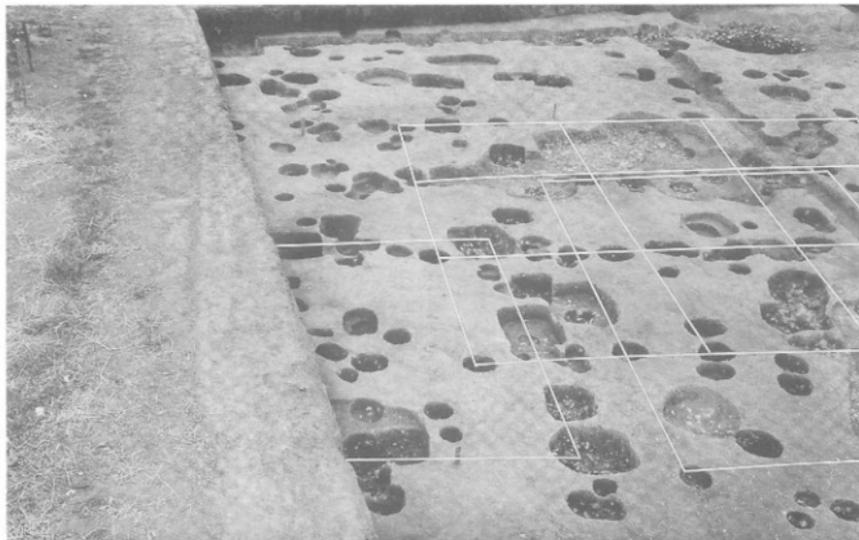
調査区全景（南から）



S B 7601・7602 (東から)



S B 7603・7604 (東から)



S B 7604・7605・7606 (南から)



S B 7607・7608 (南から)



S E 7600 (北から)



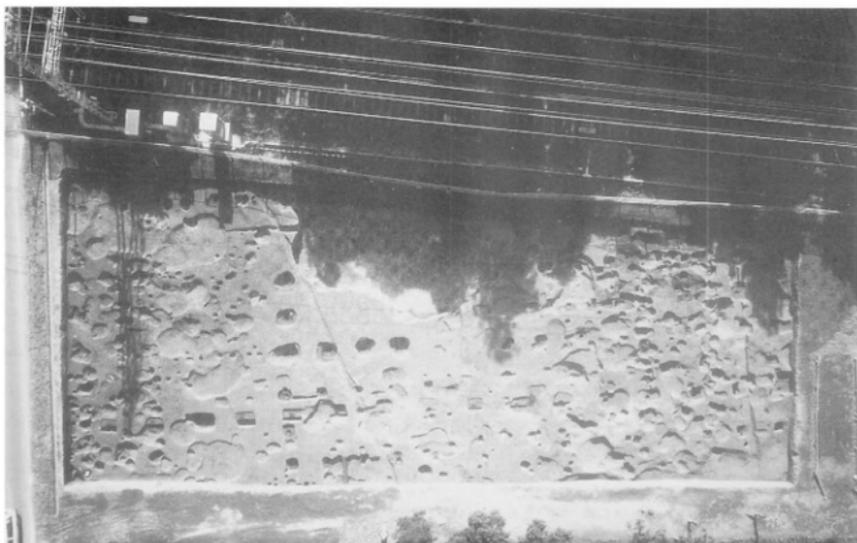
S E 7600 (西から)



S D 7610・7611・7612 (南から)



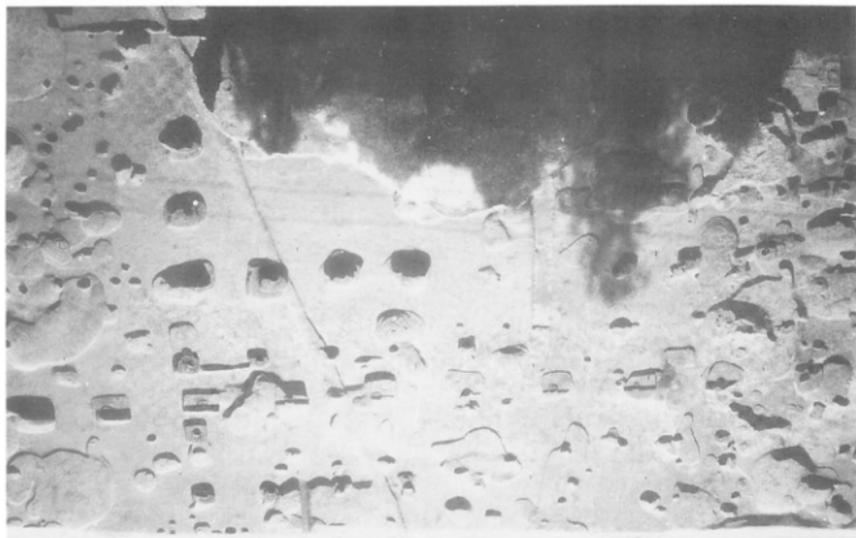
S D 0181 (西から)



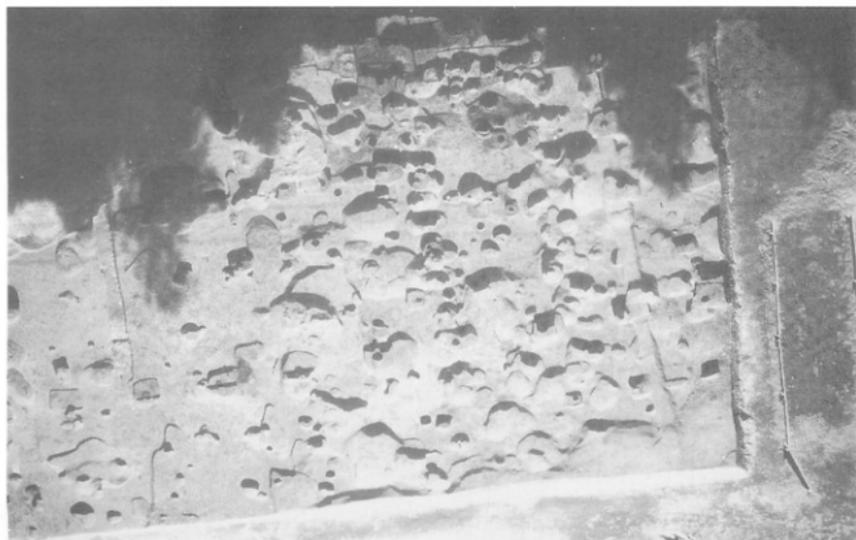
調査区全景（北上空から）



調査区全景（西上空から）



調査区中央付近（北上空から）



調査区西付近（北上空から）



調査区全景（西から）



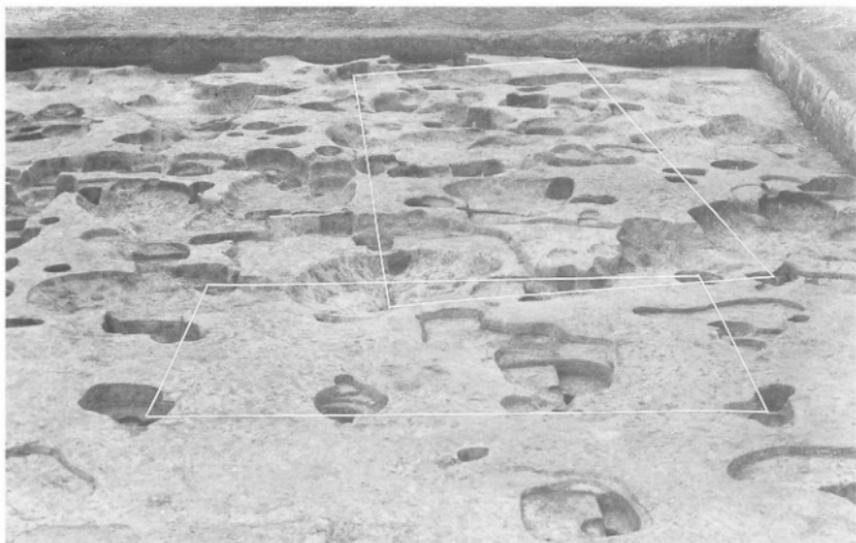
SA7000・SB7658～7660（西から）



SB7315・7644・7645・7649 (東から)



SB7646~7648 (北から)



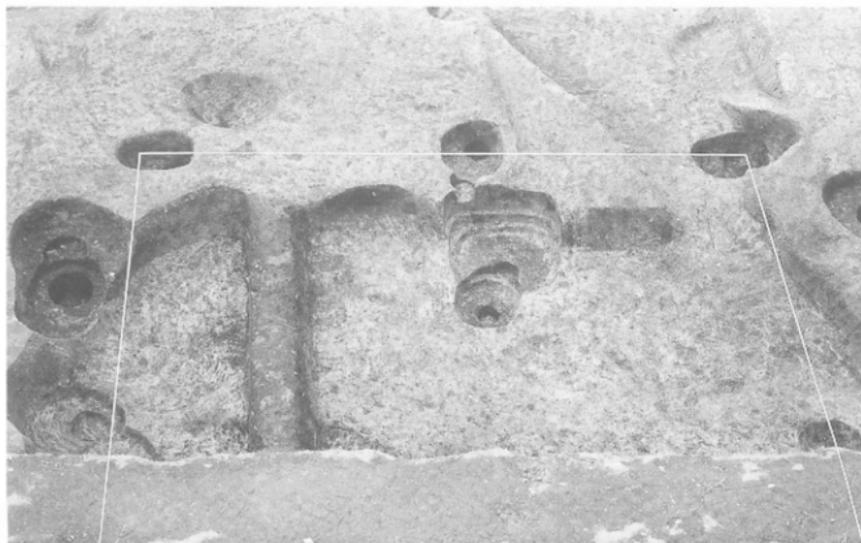
SB7310・7653 (東から)



SB7658~7660 (北から)



SB7654~7656 (東から)



SB7656・SK7650 (北から)



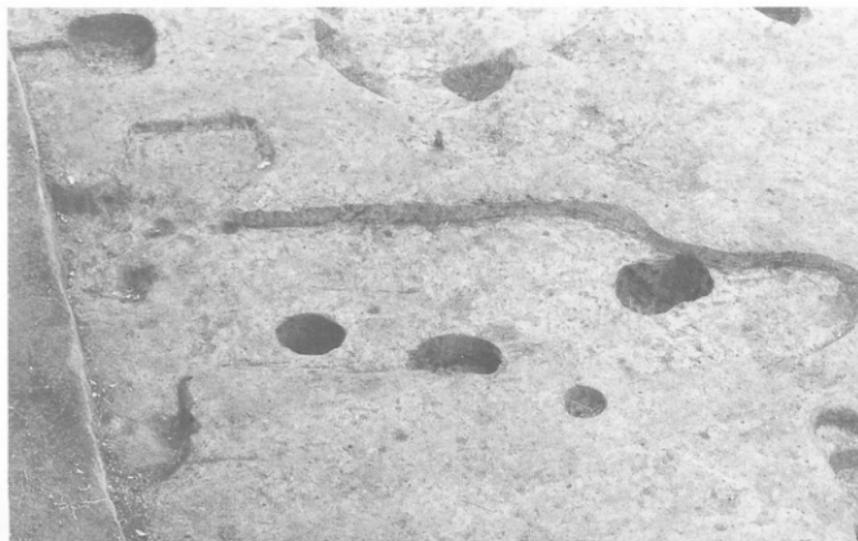
SB7641など調査区西端 掘立柱建物群（東から）



SB0575・7677～7681（北から）



SK7650 (南から)



SK7651・7652 (西から)



SK7664～7669・7676 (西から)



SB7682・7683・SK7670～7672・7684 (北から)



SB7648 柱掘形土器出土状況（北上から）



SK7632 土器出土状況（北から）



SK7651 土器出土状況（南から）



SK7685 土器出土状況（東から）



SK7666 土器出土状況（北から）



SK7670 土器出土状況（南から）



SA7000 柱掘形半截状況 (H21-P4 北から)



SA7000 柱掘形半截状況 (H21-P24 北から)



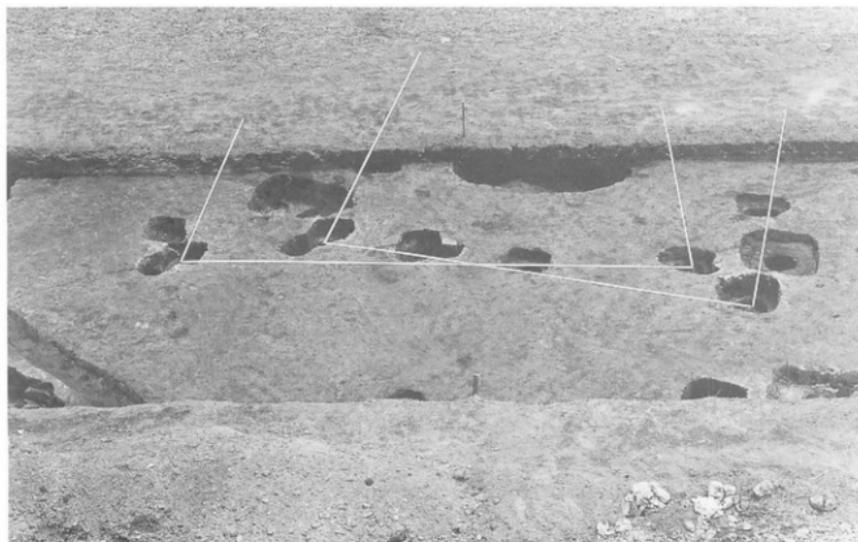
SA7000 柱掘形半截状況 (H26-P4 北から)



SA7000 柱掘形半截状況 (H28-P22 北から)



115-1次 Kトレンチ全景 (東から)



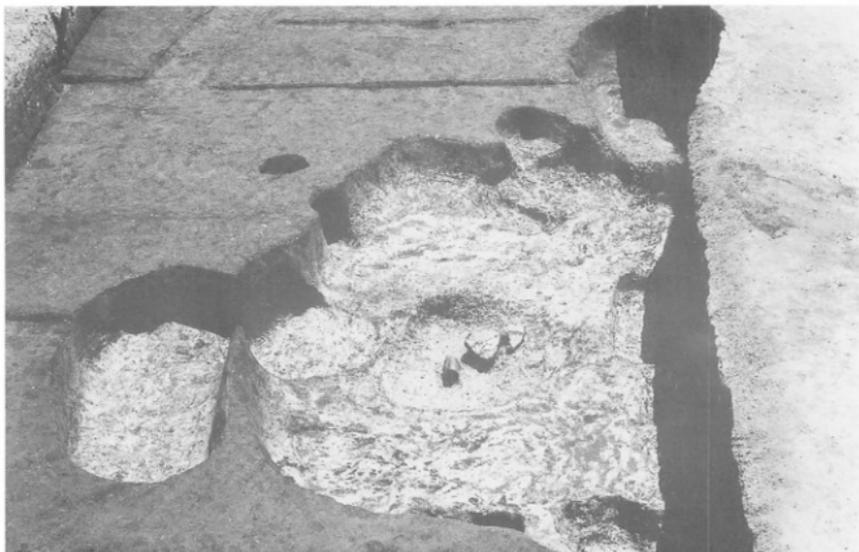
Kトレンチ SB7719・7720 (北から)



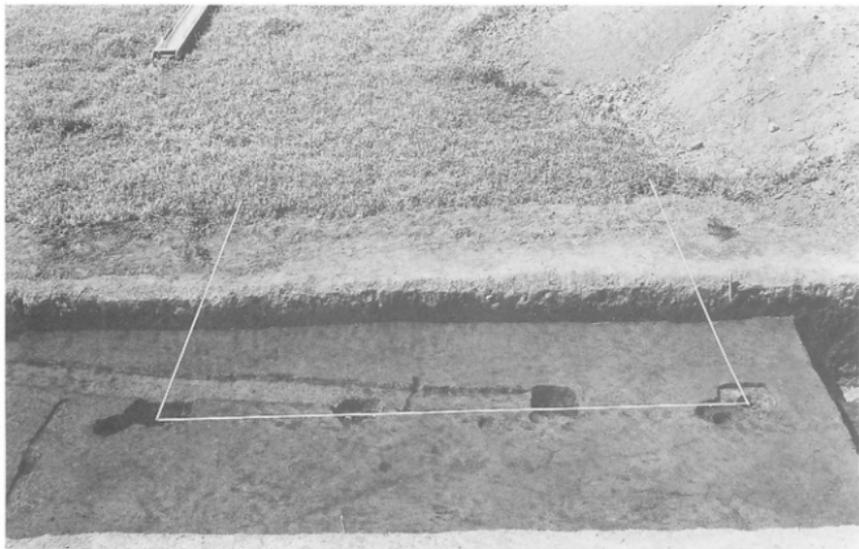
115-1次 Kトレンチ SD7470 (西から)



115-2次 Lトレンチ全景 (東から)



115-2次 Lトレンチ SB7465 (西から)



Lトレンチ SB7730 (南から)



116-1次 Mトレンチ全景（北から）



Mトレンチ SB0158・7745（南から）



116-1次 Mトレンチ SB7755 (西から)



Mトレンチ SK7750 土器出土状況 (東から)



116-1次 Mトレンチ SD7761・SF7760・SD7762 (東から)



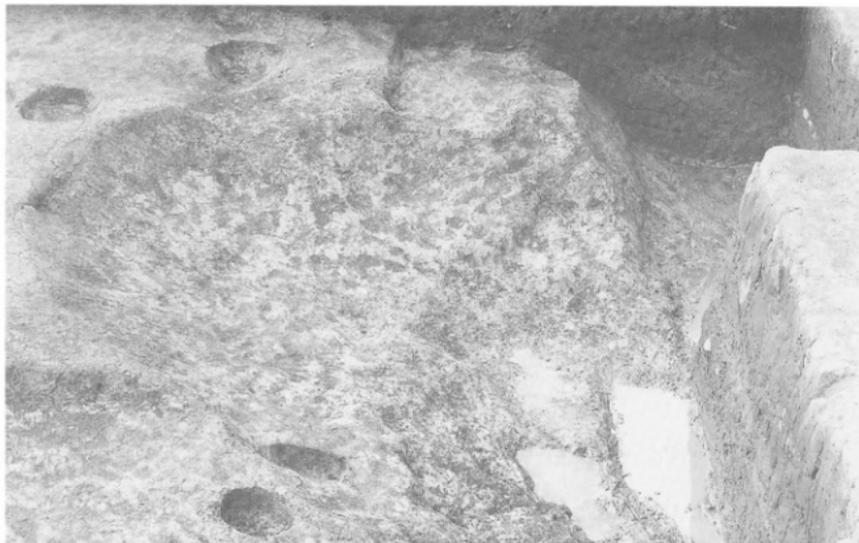
Mトレンチ SD7762・SF7760・SD7761 (北東から)



116-2次 Nトレンチ全景 (北から)



Nトレンチ SK7770 上層土器出土状況 (北から)



116-2次 Nトレンチ SK7770下層土器出土状況・SD7775（北から）



Nトレンチ SD7775 南壁面（北から）



116-3次 Oトレンチ全景 (北から)



Oトレンチ SD7776~7779 (西から)



116-3次 Oトレンチ SK7786 (東から)



116-4次 Pトレンチ全景 (南から)



116-4次 Pトレンチ SB7790 (北から)



Pトレンチ SE7794 (西から)



116-4次 Pトレンチ SK7795土器出土状況（南から）



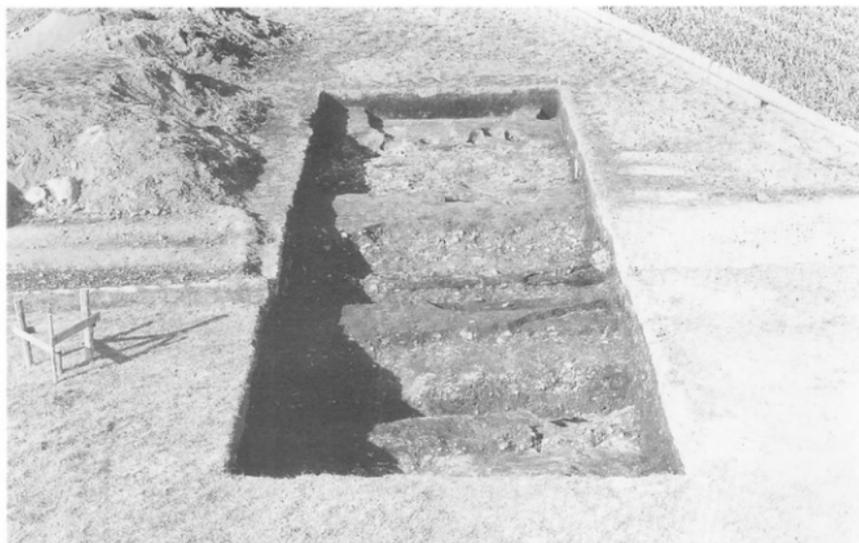
Pトレンチ SB7790・SK7795（西から）



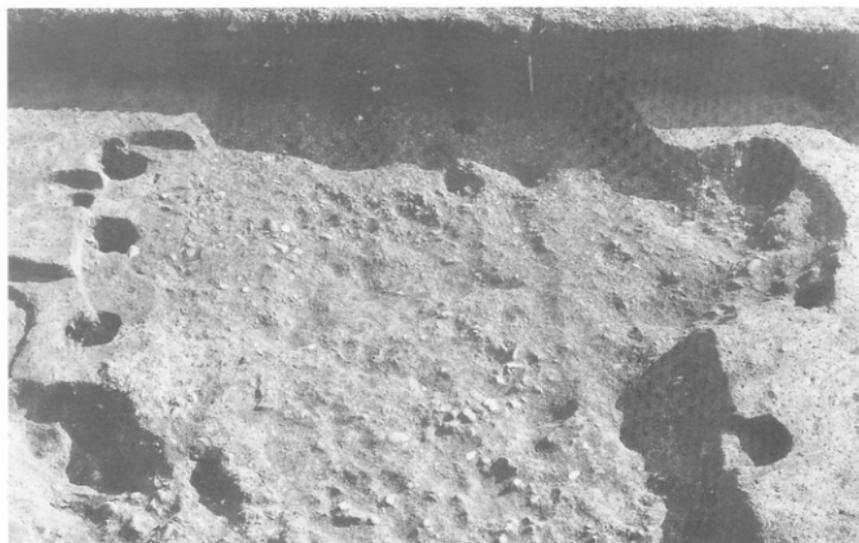
116-4次 Pトレンチ SD7791~7793 (東から)



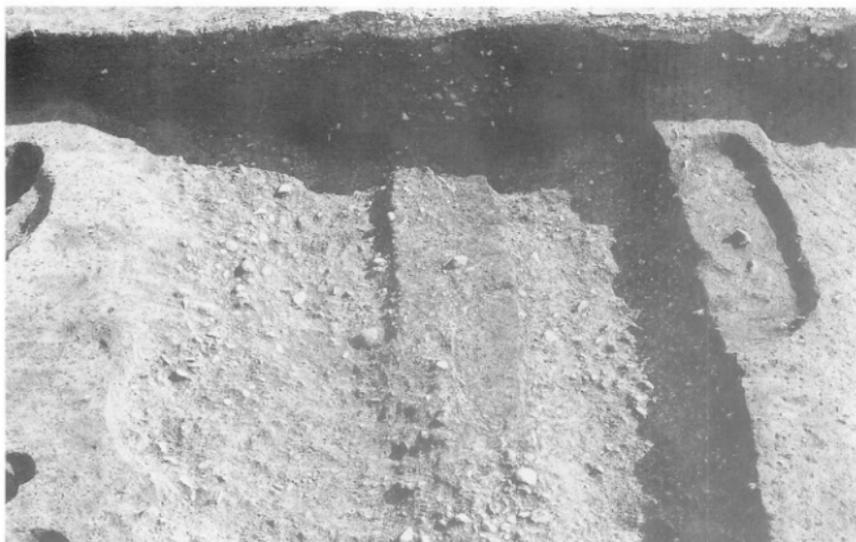
Pトレンチ SD7791~7793 (西から)



116-5次 Qトレンチ全景 (南から)



Qトレンチ SD7804 (西から)



116-5次 Qトレンチ SD7805・7806 (西から)



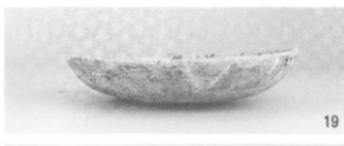
Qトレンチ SD7800・7792・7793 (西から)



1



2



19



3



4



20



7



8



21



11



12



13



15



23



17



18

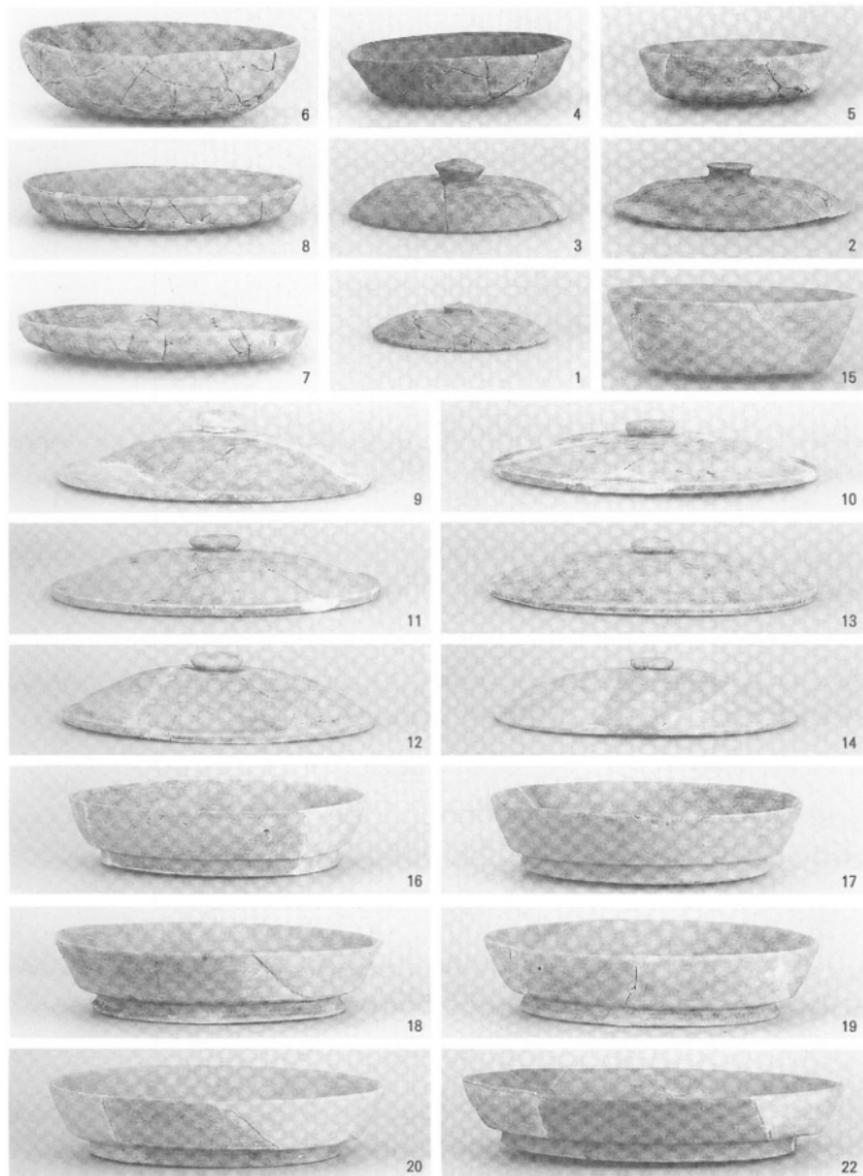


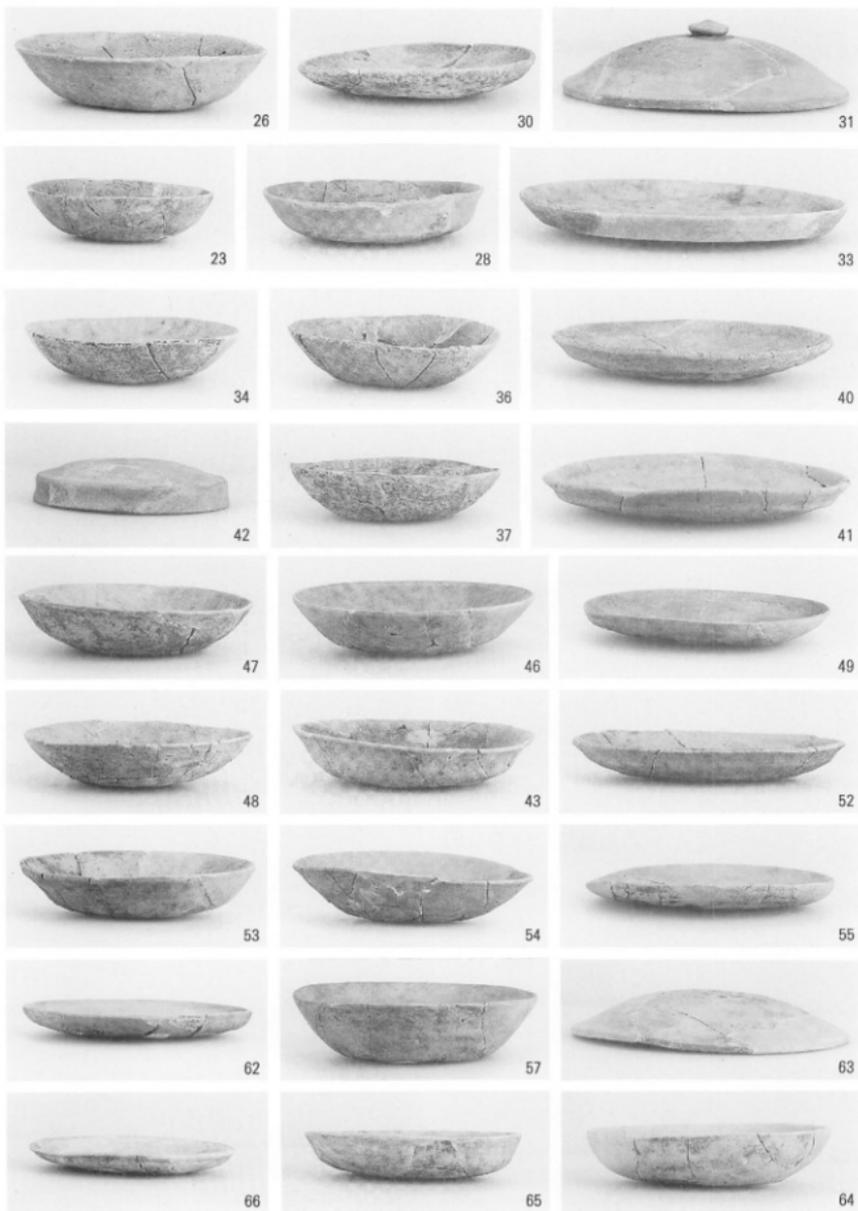
46



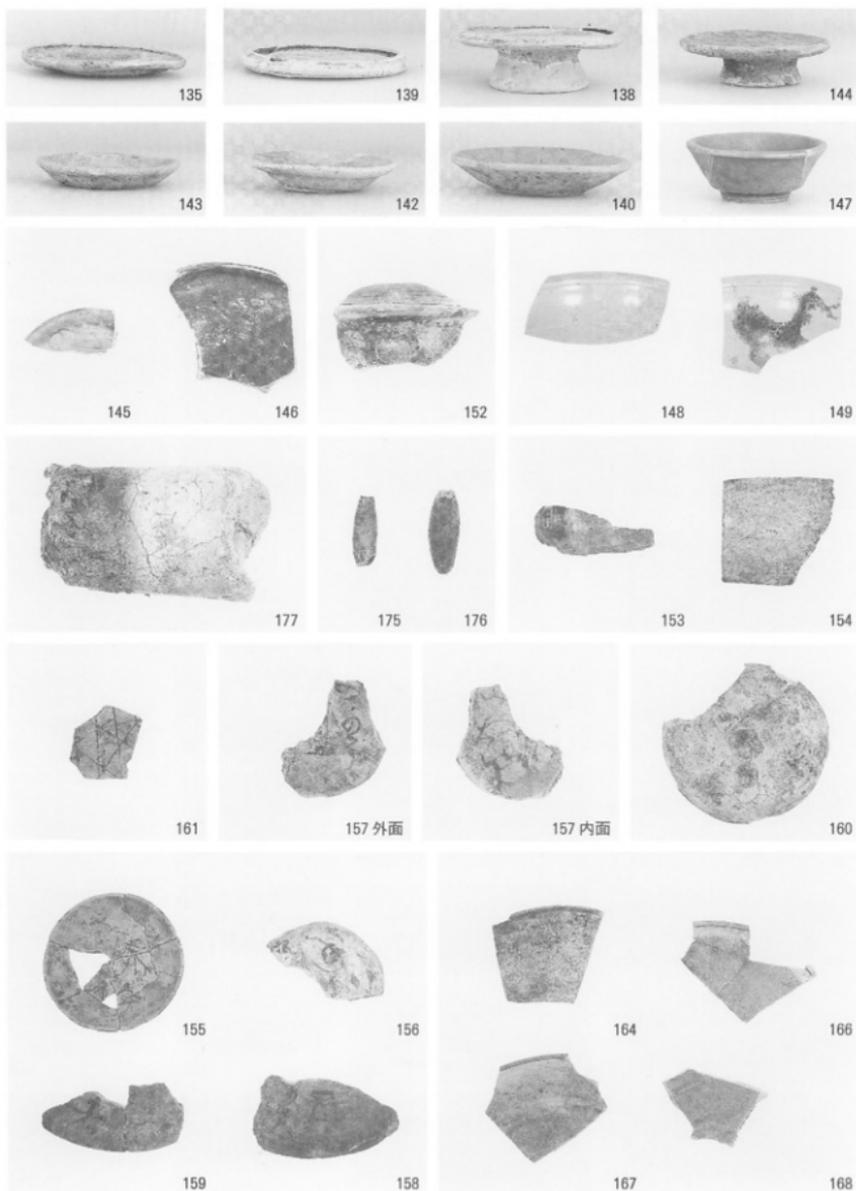
47

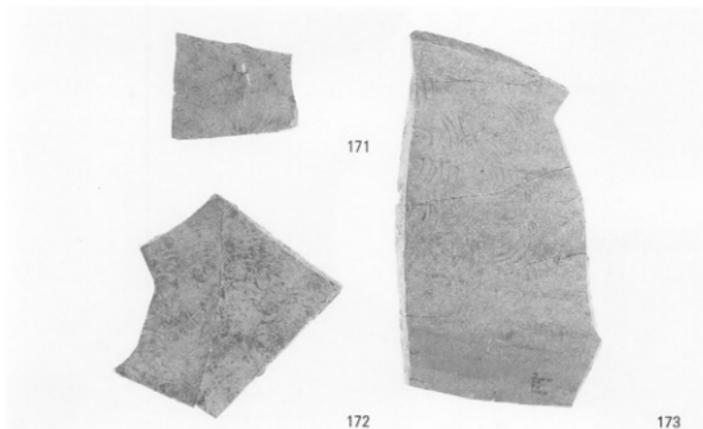
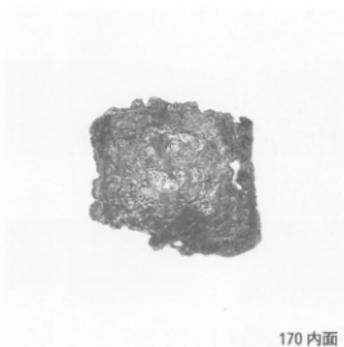
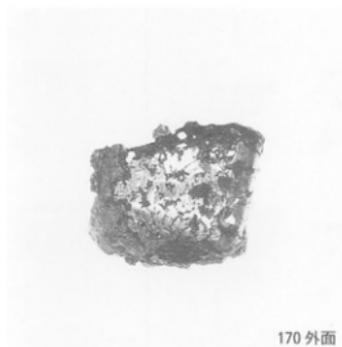
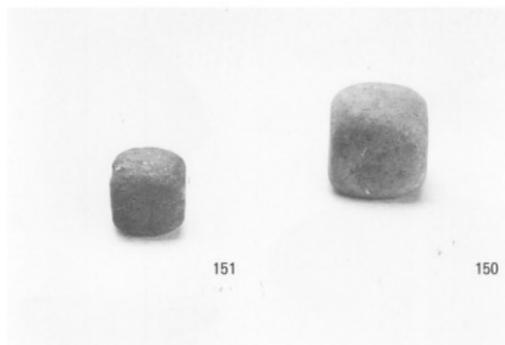




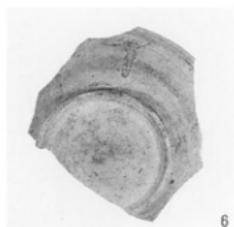


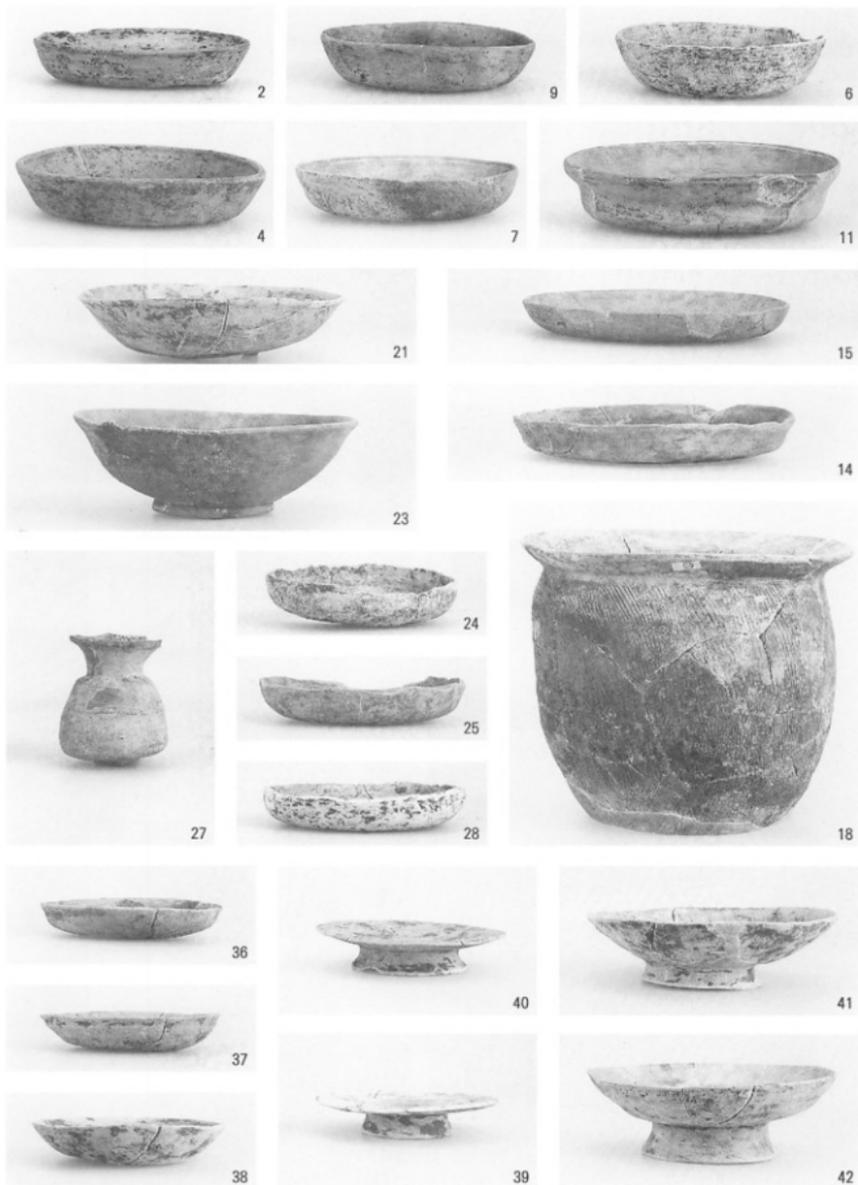






出 土 遺 物 (150・151・170は1:1)







---

史跡 齋宮跡

平成 8 年度

発掘調査概報

平成 9 年 3 月 31 日

編集発行 齋宮歴史博物館

印刷 光出版印刷株式会社

---